大廻小廻山城跡発掘調査報告

1989年3月

岡山市教育委員会

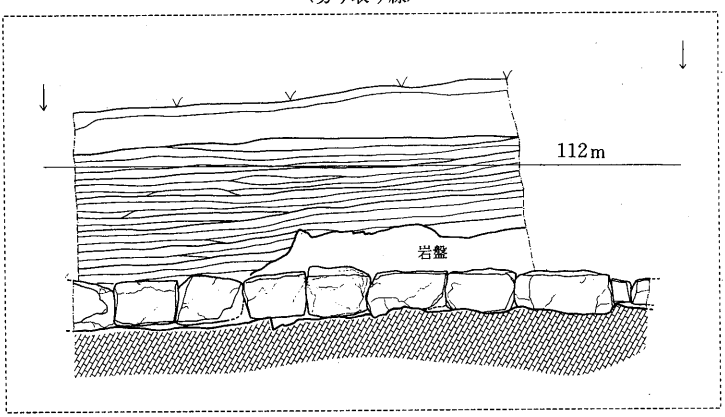
謹呈　和司古彦様

太宰徳尚

『大廻小廻山城跡発掘調査報告』正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	第20図	第1トレンチ石組	第4トレンチ石組
12	24	発掘調査	発掘地点
22	19	G・H地点	F・G地点
27	第11図注記	3　版筆盛土	3　版築盛土
27	〃	6　版等盛土	6　版築盛土
33	第16図中程	1tre	11tre
35	28	3・16のトレンチ	3・17のトレンチ
41	7	第1	第4
41	第20図	第1トレンチ	第4トレンチ
42	第21図注記	2　現在家	2　現民家
46	3	見せるな地山	見せる地山
89	10	第5・6トレンチ	第4・5トレンチ
(付図)袋		5．西中尾根先	5．西中央尾根先
77	第50図下	下図とさしかえ	

〈切り取り線〉



序

岡山市域は近年の広域合併に伴い吉備国の中心地を占めるようになり、各時代の多種多様な埋蔵文化財が数多く所在しており、その密度は全国的にも有数地の一つと思われます。こうした埋蔵文化財の保護保存は今日の都市開発や地域開発に伴って、宿命的な社会問題となり、文化財保護行政の中心的施策となっております。

岡山市教育委員会は、この数年来埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るため、各種の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大に対して保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意とりくんでいる次第であります。

此度発掘調査を実施致しました大廻小廻山城跡は、近年にその所在が岡山市教育委員会によって明らかになりました古代山城遺跡であります。この山城跡は確認以来注目を集めていましたが、所在地一帯での開発計画や土地利用計画が次々ともちあがり、遺跡の保護の案じられる情勢に立ち至って参りました。このため、岡山市教育委員会では遺跡の全貌と内容を把握する目的で文化庁・県教育委員会のご支援・ご指導のもとに5ケ年に亙って発掘調査を実施して参りました。

発掘調査につきましては、こうした巨大遺跡に対して経費や対象用地などの制約もありましたが、山城跡の全体と主要遺構の一部を確認することができ、全国に二十数ケ所しか所在しないこの種の遺跡でありますことが確実になりました。こうした成果は関係者各位のご指導・ご助勢の賜物であります。殊に、調査の実施にご理解をお願いしました地権者の方々や地域住民の皆様方を始め、調査担当者各位に対しまして心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果については、ご検討・ご批判を頂き、今後の課題となる大廻小廻山城跡の保存に資するとともに、少しでもその分野の調査研究に寄与できますならば幸いに存じます。

平成元年3月31日

岡山市教育委員会

教育長　奥　山　　桂

例　　言

1．この報告書は、岡山市教育委員会が昭和59・60・61・62・63年度の５ケ年に亙って実施した、岡山市草ケ部字小廻りに所在する大廻小廻山城跡の発掘調査に関するものである。

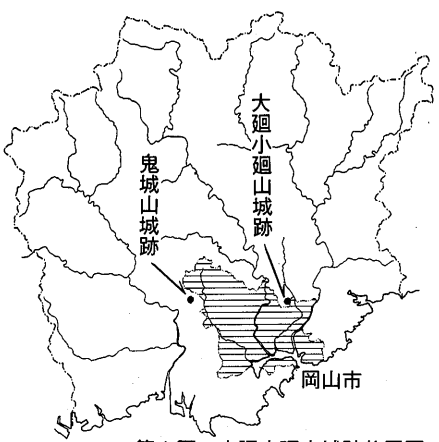
2．作成は、岡山市教育委員会社会教育部文化課が実施し、その執筆は第１章を出宮徳尚が、第２章を出宮・乗岡　実が、第３章を出宮・乗岡が、第４章を乗岡が、第５章を出宮が担当した。

3．遺物の整理と写真撮影、並びに遺構実測図と遺物実測図の浄写は乗岡が行い、編集には出宮と乗岡があたった。

4．高度値は、標準海抜高度を用いた。方位は、真北である。

5．第３章における各計測値は、外郭線に沿う方向を長さ、直交方向を幅とした。また、折の角度は総て内角で示した。

6．大廻小廻山城跡全体測量図は、本発掘調査の実施に際して国際航業株式会社に委託して1/1000の縮尺で作成した空中写真測量図によったものである。



第１図　大廻小廻山城跡位置図

目　　次

第1章　歴史的環境 …… 1

第2章　調査の経過 …… 7

第3章　遺　　構 …… 16

Ⅰ　分布調査の成果 …… 16

Ⅱ　発掘調査の成果 …… 21

1．発掘地点の配置 …… 21

2．北西端部（A地点） …… 22

3．北西谷頭部（B地点） …… 25

4．北中央尾根（C地点） …… 29

5．北谷頭部（D・E地点） …… 31

6．東谷の露出列石（F・G地点） …… 48

7．小廻山（H・I・J・K地点） …… 50

8．西中央尾根先（L地点） …… 69

9．［illegible］の木戸（M・N地点） …… 84

10．［illegible］の木戸（O地点） …… 94

Ⅲ　外郭線構造とその特徴 …… 119

第4章　遺　　物 …… 131

第5章　結　　語 …… 140

Ⅰ　城郭遺跡の考察 …… 140

Ⅱ　大廻小廻山城跡の保存と整備 …… 148

図　　版 …… 第1～第32

挿 図 目 次

第１図　大廻小廻山城跡位置図 …… 例言
第２図　砂川中流域遺跡地図 …… 2
第３図　奈良時代上道郡北東部行政区画図 …… 6
第４図　大廻小廻山城跡全体図 …… 19
第５図　調査地点　配置図 …… 21
第６図　Ａ地点　位置図 …… 22
第７図　Ａ地点　全体図 …… 23
第８図　Ａ地点　断面 …… 24
第９図　Ｂ地点　位置図 …… 25
第10図　Ｂ地点　全体図 …… 26
第11図　Ｂ地点　第１トレンチ　外郭線断面 …… 27
第12図　Ｂ地点　第１～５トレンチ …… 28
第13図　Ｃ地点　位置図 …… 29
第14図　Ｃ地点　全体図・断面 …… 30
第15図　北谷頭部の外郭線状況 …… 32
第16図　Ｄ地点　全体図 …… 33
第17図　Ｄ地点　第１トレンチ列石 …… 36
第18図　Ｄ地点　第２・３トレンチ列石 …… 37
第19図　Ｄ地点　第２・５トレンチ土層・外郭線断面 …… 39
第20図　Ｄ地点　第１トレンチ石組 …… 41
第21図　Ｄ地点　上段裾の溝断面 …… 42
第22図　Ｄ地点　第15トレンチ土壙 …… 43
第23図　Ｅ地点　全体図 …… 44
第24図　Ｅ地点　外郭線断面 …… 45
第25図　Ｅ地点　第１トレンチ土壙 …… 45
第26図　Ｅ地点　第３トレンチ …… 47
第27図　Ｆ・Ｇ地点　位置図 …… 48
第28図　Ｆ地点　露出列石 …… 49
第29図　Ｇ地点　露出列石 …… 49

第30図　小廻山外郭線状況 …… 51
第31図　小廻山外郭線断面 …… 53
第32図　H地点　全体図 …… 55
第33図　H地点　第1・2トレンチ列石 …… 56
第34図　H地点　第2・5トレンチ外郭線断面 …… 57
第35図　H地点　第3トレンチ列石 …… 58
第36図　H地点　第4トレンチ列石 …… 59
第37図　H地点　上段裾溝断面 …… 60
第38図　I地点　全体図 …… 61
第39図　I地点　第2トレンチ断面 …… 62
第40図　I地点　第3トレンチ土壙1 …… 63
第41図　J地点　全体図 …… 64
第42図　K地点　全体図 …… 65
第43図　K地点　第1トレンチ石組 …… 67
第44図　K地点　第1トレンチ土壙1 …… 68
第45図　L地点　外郭線状況 …… 70
第46図　L地点　外郭線断面 …… 71
第47図　L地点　全体図 …… 73
第48図　L地点　第2トレンチ列石 …… 74
第49図　L地点　第4・5トレンチ列石・断面 …… 75
第50図　L地点　第6トレンチ列石 …… 77
第51図　L地点　第6トレンチ外郭線断面 …… 77
第52図　L地点　第7・8トレンチ列石 …… 78
第53図　L地点　第9トレンチ列石と地山岩盤 …… 79
第54図　L地点　列石全体図 …… 81
第55図　二の木戸　外郭線状況 …… 84
第56図　二の木戸　全体図 …… 86
第57図　二の木戸　石塁　平面・前面石垣立面 …… 87
第58図　二の木戸　石塁　背面石垣立面・断面 …… 91
第59図　N地点　全体図 …… 93
第60図　一の木戸　外郭線状況 …… 94
第61図　一の木戸　全体図 …… 95

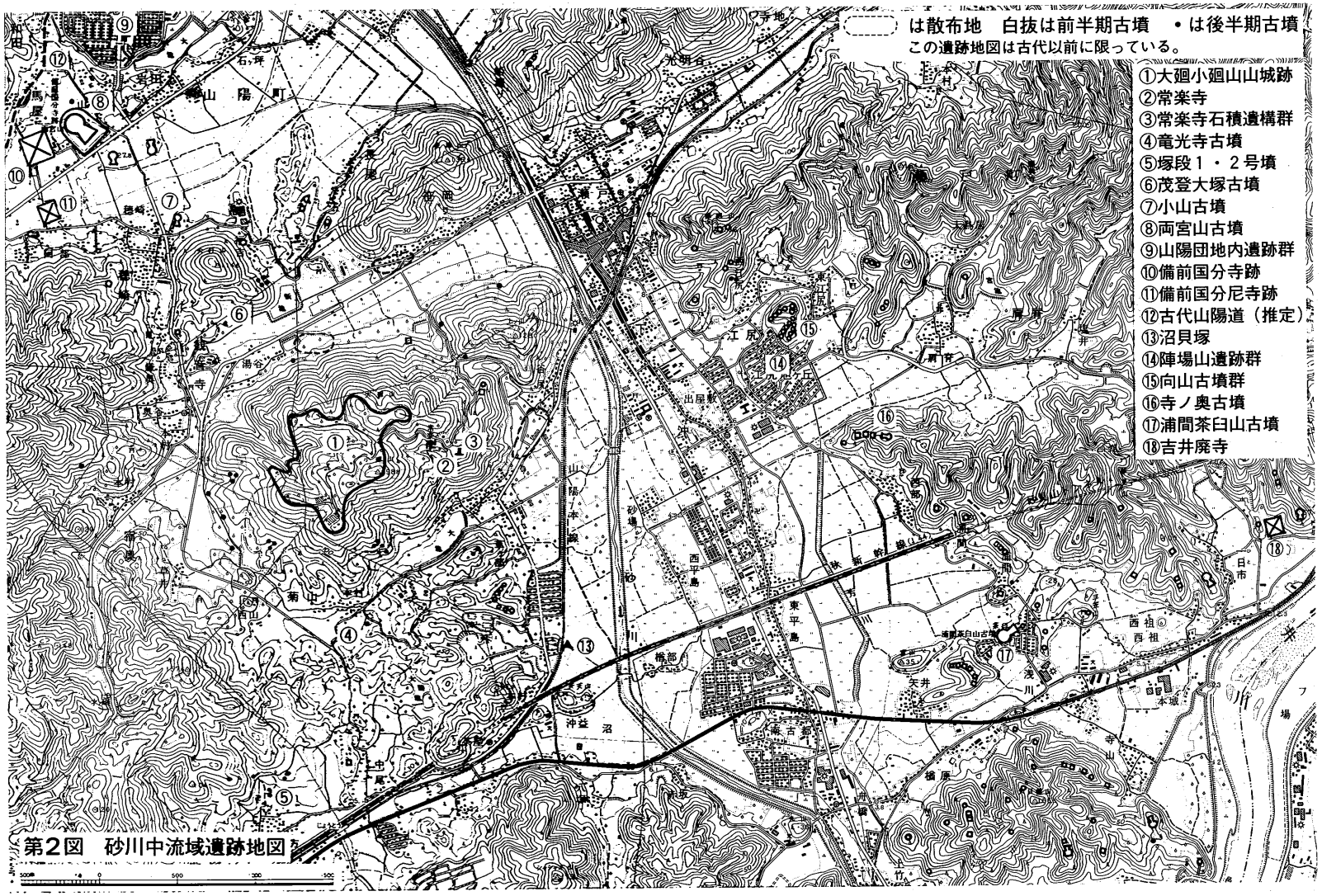
第62図　一の木戸　石墓　平面・前面石垣立面 …… 99
第63図　一の木戸　石墓　断面 …… 101
第64図　一の木戸　石墓　前面石垣南端列石移行部 …… 103
第65図　一の木戸　石墓　前面石垣折部立面 …… 104
第66図　一の木戸　石墓　背面石垣北端 …… 106
第67図　一の木戸　石墓　中央部平面 …… 108
第68図　一の木戸　石墓　吸水口と中央部背面石垣 …… 109
第69図　一の木戸　石墓　排水口 …… 110
第70図　一の木戸　石墓　通水溝断面 …… 111
第71図　一の木戸　石墓　背面石垣南端 …… 112
第72図　一の木戸　石墓土方流土断面 …… 113
第73図　一の木戸　石墓基礎岩盤地形復原 …… 113
第74図　一の木戸　北側土墓 …… 115
第75図　石材分布図 …… 128
第76図　B・E・I・J地点　出土遺物 …… 133
第77図　一の木戸　出土遺物 …… 136
第78図　大廻小廻山城跡周辺要図 …… 147
第79図　岡山市草ケ部字小廻り地籍図 …… 149

第1章　歴史的環境

大廻小廻山（おおめぐりこめぐりやま）城跡は、岡山市域の北東部の縁辺に位置する草ケ部地区の、大廻山と小廻山に亙って所在し、古代山城跡と判断されている遺跡である。この遺跡の名称については、所在地の字名の「小廻り」を採って小廻山城跡（址）[1]とするものや、所在山塊の山名である大廻山と小廻山を採って大廻山小廻山城跡とするもの、さらにこの山塊の東山腹に所在する古刹の常楽寺の山号である「築地山」に因んで築地山（ついぢさん）城跡[2]とする場合もある。岡山市教育委員会ではこの遺跡を埋蔵文化財分布調査に依って確認した際に、所在山塊の山名を採って大廻山小廻山城跡と呼称したが、各山名が同一山塊の別峰でしかないことから、現在は一山に纒めて大廻小廻山と呼称している。

この山城跡は、岡山平野の三大河川の内で東部を流れる吉井川と中央部の旭川との中間で、北から南の児島湾（当時は穴海）に流れる砂川の、中流域に広がる盆地の右岸沿いの半独立山塊である大廻山小廻山山塊（以下小廻山山塊とする）の頂部一帯に立地する。砂川水系は上流の川沿いに細長い盆地（旧赤坂郡南西部）が開け、この盆地の南に低丘陵を隔てて中流域の盆地が連なり、その南に丘陵を隔てて下流域の平野が続き、自然地形的に恰好の単位的地形を縦列的に形成している。こうした大廻小廻山城跡を取り巻く地理的条件を踏まえて、城跡の築城時期として提言をみている古墳時代中頃から白鳳時代までの時期に主眼を置いて、周辺各地の遺跡の形成と展開状態を展望しておきたい。

小廻山山塊の臨む砂川中流域の盆地　―現在の瀬戸町南西部から岡山市の平島及び楢原地区にかけての一帯は、現在でこそ砂川の両岸に広がる一面的な沖積平野の景観をなしているが、近代以前には悪水路の縦横に走る湿田地帯であり、古代以前には荒川である砂川の氾濫原が大半を占めていたと推定される。従って、古代以前のこの盆地は農業生産に適した地勢になく、東隣りの吉井川下流右岸域や西隣りの旭川下流左岸域の沖積平野に較べると、遙かに地理的条件面の劣る地域であったと考えられる。このため砂川中流域の盆地に伴う弥生時代の遺跡は、平野部分では現在までに全く確認されていないが、盆地北東縁辺の丘陵部では陣場山遺跡を始めとして弥生時代後期の墳丘墓の地区的形成が認められており、その山麓から前面の一帯にこの時期の本格的集落遺跡の所在が想定される。また、小廻山山塊の西側尾根の稜線直下で突線紐式袈裟襷文銅鐸が発見されており[3]、さらに山塊の北側に東から入り込んだ谷筋の南北両側の山麓で点々と弥生式土器の出土が知られており、弥生時代中期以降の集落の所在が想定される。しかし、盆地の中部以南の周辺丘陵部では、弥生時代の遺跡が現在まで確認されていない。



第2図　砂川中流域遺跡地図

古墳時代前半期に至ると、この盆地に伴う古墳は周辺丘陵上に点在的な築成や数基の小群をなして展開しており、総数約70基を数える。その分布状態は、前記の北東部の弥生時代墳丘墓形成地区を一つの集中地とし、東側から南東側の丘陵一帯にかけても汎地区的な散開した築成が認められる。前者の一角を占めた陣場山遺跡群は発掘調査が実施されており、この時期としては後葉の古墳を始め埋葬施設が明らかとなっている[4]。後者については、この盆地の東隣りの吉井川下流右岸域に伴う汎地域的な古墳の展開とに連帯性を見出すのが妥当であろう。一方、小廻山山塊の北側の谷筋を含めて、西側から南西側の丘陵一帯では一つの小古墳群と個別的築成の数基を数える程度で、極めて疎な状態である

これらの古墳は大多数が小型の円墳及び方墳であり、東側丘陵上の寺の奥山古墳1基だけが小型前方後円墳であって、多分に在地性の色濃いものであろう。なお、この盆地の南東側の、吉井川下流右岸域との境界的な位置にあたる低丘陵上に、前Ⅰ期前半の大型前方後円墳である浦間茶臼山古墳が所在しているが、その占地状況は後者の古墳の地域的な展開に属するものと判断される。

また、この時期の集落関連遺跡は確認されておらず、僅かに小廻山山塊東山麓で土師器片の散布の知られている程度であり、特に平地部分では皆目不明である。

古墳時代後半期におけるこの盆地での古墳の形成状況は、周辺の丘陵や谷頭部で点在的な築成や小群が数群確認されているに過ぎず、確認総数約40基を数える。その分布状態は、前半期に地区的群成をなした北東部では数基を数えるだけであり、また、東側から南東側の丘陵部でもほとんど確認されておらず、後者の状態は吉井川下流右岸域の分布状態（数基の所在）と軌を一にする感が強い。一方、西側では小廻山山塊と周辺にこの盆地としては集中化が認められ、現状で26基を数え（実数35基前後か）、これらの古墳は単独築成と数基の小群形成の2形態に分類でき、前者は比較的大型[5]の石室墳で、平地の近辺に立地する傾向にある。また、盆地の南側の山麓では、現在は1基の確認を見るだけであるが、字名の「八塚」から8基以上の小古墳群の所在が確実視でき、残存する横穴式石室の規模観から、この古墳群は準大型石室墳を中心にして中型や小型の石室墳が小さな谷（単位地区）を取り囲んで群成したものと推測される。

この盆地に於ける後半期古墳の築成主要地と見做せる小廻山山塊と周辺の古墳は、限られた地区（在地）性を反映する築成状況にしかなく、この盆地には巨石墳はおろか大型石室墳、さらには中型石室墳の群成や群集墳が認められない。従って、この盆地に伴う後半期古墳の形成状況は、単位的地域としての階層性を反映させるだけの様相を達成しえていないと評価され、有力在地勢力（所謂豪族層）の成長にはほど遠い観がある。

なお、この時期の集落関連遺跡はほとんど知られていないが、小廻山山塊の北側の谷筋向いの山麓に所在する玉井山相遺跡は発掘調査が行われ、この時期の竪穴式住居跡2棟が検出され

ている[6]。

白鳳時代から奈良時代にかけての遺跡は全く未確認であり、郡司層等の有力在地勢力のこの盆地からの育成は到底考えられない。また、小廻山山塊東山腹に所在する常楽寺は、天平勝宝元年（749）の開基伝承があるものの、その物証を欠き、岡山県南部で汎地方的に認められる平安時代後葉の創建で、中世に最盛期のある古代後期寺院[7]の一つと見るのが妥当であろう。ただし、この盆地の南西部から旭川下流左岸の北東縁辺部にかけての谷々で、鉄滓の散布が認められ、その一帯に製鉄遺跡の所在が想定され、あるいはその一部が古代の範疇に遡る可能性もあろう。さらに、古代には砂川上流域の盆地の南西部を通っていた山陽道は、中世には吉井川右岸の吉井から肩脊を経て砂川中流域の盆地の北部を横切り、次いで小廻山山塊の南山麓（草ケ部―菊山）を通って宿奥に至り、才の嶋の峠を越えて旭川下流左岸平野の北東部（宿―土田―四御神）に通じるルート[8]に変遷している。その変更の時期は定かでないが、源平盛衰記の関連記事を参照にすれば、古代末には小廻山山塊南山麓を山陽道が通っていたようである。

いずれにしても、この盆地における白鳳時代から平安時代にかけての遺跡は、極めて稀薄であり、在地性の顕示観に欠けている。

なお、小廻山山塊を中心にした周辺域で、直接的な古代朝鮮の渡来語源を想起させる地名は、少なくとも大字には見当たらず、小字でもほとんど抽出できず、僅かに「佐幸田（さこうだ）」「登無山（とうむやま）」「延山（とうやま）」等が可能性を指摘できる程度である。観念的次元で記せば、小廻山山塊東端の峰（上ノ山）の南山麓に所在する武部神社は、大廻小廻山山城の所在地の郷名「日下（草部）郷」と相俟って注目される。

砂川中流域の盆地は律令制下の行政区画では上道郡の北東域に位置し、その北東部が肩脊郷（766年に藤野郡に編入替え）、南東部が那紀郷、南西部が居都郷の各々一部に、北西部が日下郷の全域に当たり、日下郷が単位的地域としての盆地の主要部を占めている。小廻山山塊は日下郷域のほぼ中央部に位置し、この単位的地域では要衝といえよう。

以上の砂川中流域の盆地での遺跡の形成状況は、周辺の単位的地域に較べると明らかに劣勢である。北隣りの砂川上流の旧赤坂郡南西域の盆地は、弥生時代中期以降古墳時代まで継承発展的な遺跡の形成と展開を示し、盆地南西部の東高月遺跡群の一角が県営団地造成に伴って発掘調査され、濃密な遺跡の一端が判明している[9]。この盆地に伴う前半期古墳は350基前後と推定され、盆地南西部には楯形周濠を伴う全長190ｍの両宮山古墳を始めとした、大型や中型の前方後円墳の非在地的な集合的築成が認められる。また、後半期古墳は量的には前半期に劣る

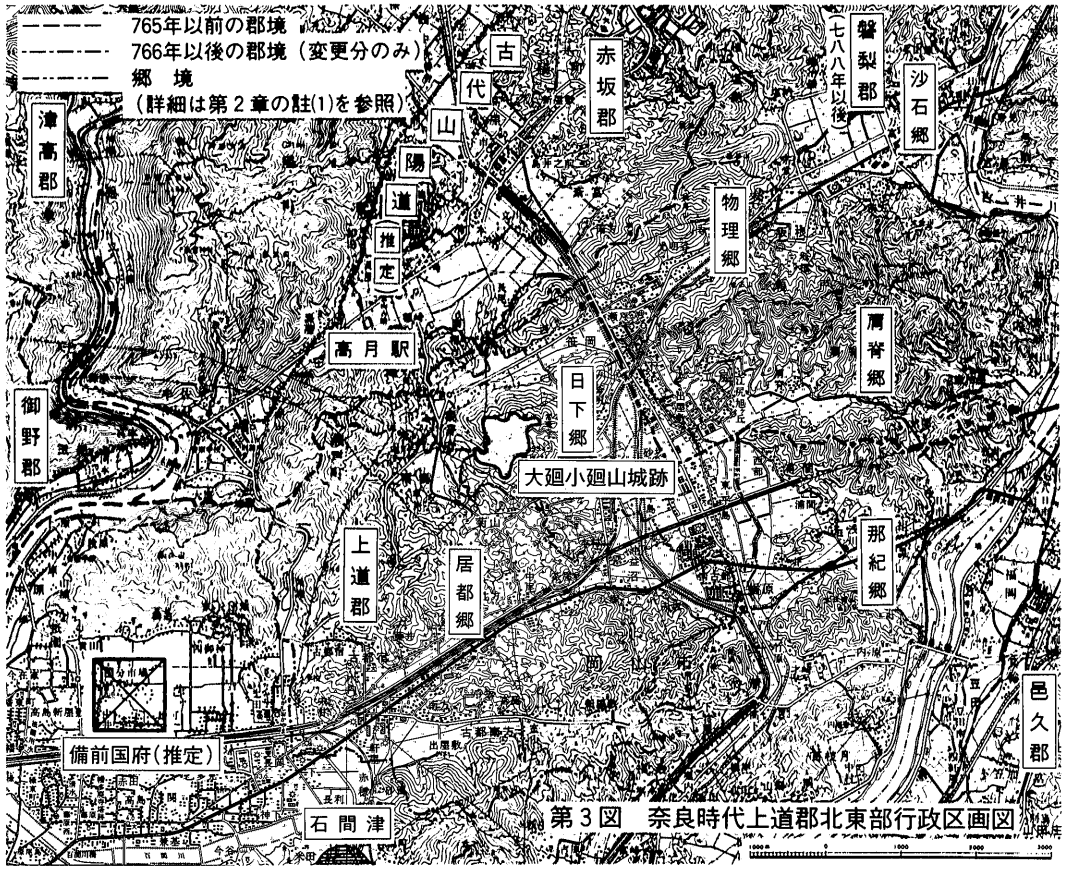
ものの、盆地南西部の巨石墳の牟佐大塚古墳や、大型石室墳の岩田14号墳を始め、この時期の普遍的な展開を達成している。さらに、奈良時代に至ると山陽道が盆地の東部から南西部へ通り、南西部の隘路には高月駅が設置されており、またこの地区には備前国分寺と同尼寺も建立されている。しかし、氏寺は未確認である。この盆地南西部と大廻小廻山城跡との間は低丘陵が隔てているものの指呼の間にあり、城跡の防禦正面はこの地区を指向する配置性を示している。

南東隣りの吉井川下流右岸の単位的地域は、弥生時代の平地の遺跡こそ不明であるが墳丘墓も認められ、古墳時代初頭の大型前方後円墳である浦間茶臼山古墳を筆頭にした大小6基の前方後円墳、前方後方墳を始め、約50基の前半期古墳が汎地域的な展開を示している。しかし、後半期古墳は現状では確実なものが1基も確認されておらず、異様な転換状況といえよう。奈良時代に至ると、この地域の北東部の山麓に氏寺と推定される吉井廃寺（官衙の可能性もある）が所在している。

南隣りの砂川下流沖積平野の単位的地域は、吉井川最下流右岸域の一体となって後者の河口付近をなす。この地域は3個体分の銅鐸を出土した百枝月遺跡を始め、弥生時代中期以降の遺跡が点々と所在し、4基の小型の前方後円墳・前方後方墳を始めとした約70基の前半期古墳が地区的群成をなして、汎地域的に展開している。後半期古墳は約15基の確認を見ており、量的には激減状態を示すが、巨石墳の西宮大塚古墳を始めとして大型や中型の石室墳の個別的築成が各地で確認されている。奈良時代の遺跡については判然としていない。

西隣りの旭川下流左岸沖積平野の単位的地域は、縄文時代晩期以降古代全般を通しての不断の遺跡形成地であり、各時代の表徴的遺跡を数多く輩出しており、所謂吉備勢力の最有力構成員の一つと評価されている。前半期古墳は最古の古墳の一つとされる備前車塚古墳や、全長165mの金蔵山古墳を含む大型前方後円墳4基の系統的展開を中心として、陶汰された汎地域的形成状況を展開している。後半期古墳は巨石墳の唐人塚古墳を頂点として、この時期の全様相を示す築成状態にあり、60基を越す出色の群集墳の達成も認められる。さらに、白鳳・奈良時代に4ケ寺もの氏寺の建立を果し、平野の中央には備前国府[119]が所在している。山城を構える戦略的要衝の地域は、まさにこの地域を置いては他にないであろう。ちなみに、大廻小廻山城跡と備前国府の距離は直線間で6km、径路間で8kmを測り、間に竜の口山山塊が横たわり、両者は直結的な位置関係とはいいがたい。（出宮徳尚）

註(1) 荒木誠一「城址と戦跡」『赤磐郡誌』　赤磐郡教育会
(2) 高橋　護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117　ニュー・サイエンス社1976
(3) 木村幹夫「弥生時代」『上道町史』　岡山市役所　1973



第３図　奈良時代上道郡北東部行政区画図

ただし、同書は扁平紐六区袈裟襷式とする。なお、地元での聞取り調査によれば、さらに別の銅鐸らしいものが出土していたとのことである。

(4)　福田正継「陣場山遺跡群」『岡山県史・考古資料』　岡山県　1986

(5)　横穴式石室全般を通しての規模観からは中型の部類である。

(6)　松本和男・山磨康平「玉井山相遺跡・茂登大塚古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』17　岡山県教育委員会　1987

(7)　拙稿「古代後期寺院」『岡山県の考古学』　吉川弘文館　1987

(8)　荒木誠一「後世の山陽道」以下註(1)に同じ

(9)　神原英朗『用木山古墳群』　山陽町教育委員会　1980

(10)　備前国府跡の位置は物証的に確定している訳でなく、現況地形と地名を主たる根拠にしての考察であるため、府域の想定について諸説の提言をみている。しかし、岡山市国府市場を中心とすることには諸説とも一致している。

第2章　調査の経過

大廻小廻山城跡が古代山城遺跡の視点で見られるようになったのは最近のことで、地元にはそうした特異な遺跡としての記憶が全く残っておらず、また、多くの神籠石系山城跡に認められる「キ（城）」音を含む別称の例にも欠けている。しかし、小廻山山塊の南東山腹に所在する古刹の常楽寺の山号「築地山」は、山城跡の遺構的特徴に由来したと今日的観点では判断され、曲りなりにも一つの伝承が残っていたことになる。この伝承は常楽寺の隆盛に伴って逆転してしまい、山頂の特異な遺構を常楽寺の宗教施設（霊場等）とする観点を結果として招来させている。江戸時代から大正時代にかけての地誌類や郷土関係の史書類も、古代山城の伝承や観点を全く掲げていない。

〔再確認に至る経緯〕

大廻小廻山城跡は律令制下の備前国上道郡日下郷の半独立山塊頂部に所在し、この郷は東に律令制下の磐梨郡[1]、北に赤坂郡と2郡に境界を接しており、上道郡全域からみれば北縁中程の要衝を占めている。この城跡の古代山城であったことの伝承や口碑は地元に残っていないものの、城跡を光背的な中心山峰とする常楽寺は山号を「築地山」と称している。この古刹は天平勝宝元（749）年の開基伝承をもち、また、山頂の遺構を空海の構築した霊場の「台輪」とする寺伝もあるが、第1章に記述している様に平安時代後葉の開基と見るのが妥当であろう。山号の「築地山」の由来は、山頂部において開基時期に視認できた土塁の囲繞状態をこの山の特質に見立て、その遺構の凝定的熟語である「築地」を山号に冠したものと推測され、そうであれば、開基時期には山頂にかつて城郭施設の所在していたことを示す城名や呼称が、ほとんど絶えていたと見做すことができよう。しかし、神籠石系山城跡の多くが廃絶後に神社や寺院の用地に転用されている状況を勘案すれば、大廻小廻山城跡もそれらと同一状況といえる。

現在の常楽寺の境内は近世以降の古地状態を踏襲しているが、地元に伝わる小廻山山塊の18世紀初[2]の古絵図には城跡が黒線で囲繞してあって「築地山小廻り端筋」の注書を付けており、内部に塔頭名の地名が記入してあり、また、城跡内では多数の室町時代の線刻石仏が出土しているうえに、亀状石積も確認される。従って、山城跡は土塁に囲繞された特別地として常楽寺の宗教施設の主要地に中世まで使用されていたと判断でき、近世以降も常楽寺の持山として継承されていたことは、同寺に伝わる羽柴秀吉の制札や近世文書の禁制[3]から明らかである。ちなみに、1580（天正10）年の中国の役で備中国へ赴く羽柴秀吉は小廻山山塊の南1.5kmの亀山城を宿陣としていたことから、秀吉が小廻の内を廻っていたとの口碑も伝わっている。

江戸時代を通して常楽寺の持山であった大廻小廻山城跡一帯は、経緯が未調査であるが、明治時代に国有林となり、以後戦後の開拓地となるまで継承されており、土塁上肩部に沿って今も国有林の境界標柱が認められる。敗戦後の「土地の農業上の利用を増進」を掲げた国家政策により、小廻山山塊頂部一帯が開拓事業地となり、1946（昭和21）年頃から入植者が国有林一帯を分割して購入して開墾に着手した。このため大廻小廻山城跡はほとんどが民有地や小廻開拓農業協同組合の所有地となった。

大廻小廻山城跡を最初に古代山城の遺跡と見立てたのは荒木誠一で、同氏はこの城跡に積極的関心を寄せ、著作の『赤磐郡誌』（1940年刊）に他郡内の遺跡に拘らず小廻城址を項目として取り上げて、天智期の朝鮮式山城の可能性を強く主張している。[4] この提言は今日的観点では正鵠を射ていたが、何故か同時期は言うに及ばず戦後に至っても、学界はもとより地元研究者からも無視されていた。

大廻小廻山城跡の古代山城遺跡の可能性を再提起したのは、当時の岡山県総合文化センター郷土資料室の長光徳和であった。同氏は近世史の研究者であったが、古代にも関心を寄せて、特に高月遺跡群に興味を持ち関連資料を集める過程で、先に記した小廻山山塊の古絵図に触れていたこともあって、赤磐郡誌の小廻城址の記事に注目し、我々考古学関係者達に古代山城跡の所在を強く訴えた。同氏の主催する古代吉備国を語る会の1969年3月16日の例会に参加した筆者等は、氏の教唆に依って大廻山小廻山の山頂の開拓農地に行き、丁度果樹園と山林の地目境界となっていた三の木戸石塁の下半部を確認し、その石積の神籠石系山城跡の水門石塁との類似性から、この遺跡もその一種と判断した。この結果から、同氏と筆者等は大廻山小廻山山頂部が神籠石系山城と確信したが、城跡全域からみれば極一部だけの確認であったため、仲間内での話題の域を出る評価とはならず、また、所在地が上道町域でということもあって本格的な踏査を行なうまでには至らなかった。

大廻小廻山城跡が神籠石系山城として全面的な確認がなされたのは、上道町が1971（昭和46）年4月に岡山市へ合併されてからである。合併直前から小廻山山塊頂部一帯は当時の列島改造論の煽りを受けて開発計画が立案されており、1973（昭和48）年頃から開発に向けての本格的動きとなりだしたため、岡山市教育委員会は当該地区の埋蔵文化財分布調査を同年12月から実施し、文化課担当職員[5]が山塊全域を踏査して、大廻山から小廻山にかけて3箇所の石塁を伴って囲繞する土塁線の全周や各峰々の段築跡を確認し、神籠石系山城跡の所在が判明した。また、周辺部で古絵図では経塚とする石積遺構群や、古墳等の遺跡をも確認している。岡山市教育委員会による大廻山小廻山での古代山城遺跡の確認は、岡山県教育委員会文化課の高橋護氏が総社市奥坂で神籠石系山城の鬼城山城跡を1970（昭和45）年に確認していたことと相俟って、考

古学研究者や学界の注目する所となり、坪井清足氏を始めとした専門研究者諸氏の現地検証を経て、衆目の認める所となった。

小廻山山塊における開発計画はこの時期からの岡山県の開発抑制施策や、山頂一帯の開拓農地の農政サイドからの保護、さらには文化財保護法への対処等々の諸々の要因が重なったためか、その後沈静化に向い立消えとなった。こうした状況の下、文化庁の田村晃一氏や伸野浩氏（いずれも当時）、さらには古代山城に造詣の深い黒板昌夫氏等の現地視察が重なり、この城跡の重要性を文化庁段階も認識する所となって行った。そして、重要遺跡の候補としての申請も行なわれた。

〔調査に至る経過〕

大廻小廻山城跡を巡る情勢は神籠石系山城の確認以後、一応の現状維持の状態で推移して行なったが、1980（昭和55）年頃から地権者の高齢化に伴う離農状況が生じ、城跡内の農地の転売や山林部分の処分が進み、山林部分の新たな地権者となった地元企業等による利用計画が立案されるに至った。このため、岡山市教育委員会は当事者にこの城跡の重要性を訴えて保存への協力を要請したが、城跡は遺跡としての内容が必ずしも判然としない状態もあり、一般の方々の理解を得たうえで保存の協力を得るには限界があった。1983（昭和58）年に大廻小廻山城跡内一の木戸の谷筋を買収していた地場産業の株式会社から、産業廃棄物処理場としてのこの土地の利用計画について、非公式ながら岡山市教育委員会へその実施の打診がなされた。岡山市教育委員会はこの遺跡の重要性を同社に訴えるとともに現状保存への協力を要請したが、非公式な打診は岡山県教育委員会、さらには文化庁をも絡めた問題に発展して行った。

こうした大廻小廻山城跡を巡る状勢の変化と保存問題を内在した行政的対応の文化庁段階への波及により、遺跡確認の発掘調査が文化庁の国庫補助事業で1984（昭和59）年度から実施されることになった。文化庁のこうした方針を受けて、岡山市教育委員会は城跡の確認調査を「大廻小廻山城跡緊急調査」事業として、一応５ケ年を目処にトレンチ方式の発掘調査を実施することにした。調査は、農地への影響を考慮して冬期を実施時期としている。

大廻小廻山城跡の発掘調査は文化財保護法第98条の２第１項の規定に基づく発掘とし、岡山市教育委員会が直接施行し、社会教育部文化課が所管課となり、文化財係が担当した。発掘調査の実施にあたって、岡山市教育委員会は専門研究者に「大廻小廻山城跡発掘調査対策委員」を委嘱し、委員の指導や教示を得て調査の万全を期している。発掘調査に先立ち、各年度毎に岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に「埋蔵文化財発掘通知」が提出されており、初年度のそれは昭和60年１月22日付けである。

以上の経緯に基づき、大廻小廻山発掘調査は1984（昭和59）年度から1988（昭和63）年度ま

での５ケ年度に亙って実施され、最終年度に調査期間全体の発掘調査報告書が作成された。

発掘調査組織

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長　奥山　桂	
発掘調査対策委員	稲田孝司（岡山大学文学部助教授）	
	鎌木義昌（岡山理科大学教授）	
	葛原克人（岡山県史編纂室主幹・現岡山県古代吉備文化財センター調査二課長）	
	近藤義郎（岡山大学文学部教授）	
	坪井清足（奈良国立文化財研究所長・現大阪文化財センター理事長）	
	西川　宏（山陽学園教諭）	
	西原礼之助（岡山市文化財保護審議会会長）	
	間壁忠彦（倉敷考古館長）	
	水内昌康（岡山市文化財保護審議会委員）	
	横山浩一（九州大学文学部教授）　　（五十音順）	
発掘調査担当者	岡山市教育委員会文化課長	山本　勇（S.61年度迄）
		八木正春（S.62年度から）
	岡山市教育委員会文化課主幹	三宅輝次（S.62年度から）
	岡山市教育委員会文化課長補佐	内藤昇之助（S.59年度）
		三宅輝次（S.60・61年度）
		角谷　勉（S.62年度）
（調査員）	岡山市教育委員会文化課文化財係長	出宮徳尚
（調査員）	岡山市教育委員会文化課学芸員	乗岡　実（現文化財保護主事）
発掘調査補助員	宮原文隆（岡山大学生・当時）	高橋伸二（立正大学大学院生）

発掘調査作業員	石原完治	大森登代四	大森虎治	岡本四郎	岡本孝志
（全調査期間中）	岡本　剛	黒田敦夫	黒田成也	高橋正義	田中　實
	谷　誠人	長田鶴夫	南葉正章	福池寿芳	藤原　明

水内高尚	吉原忠義			(五十音順)
岡本里子	奥山美代子	工藤祥子	黒田ヨシ子	小坂みよ子
下本千栄	田中由美子	花房公子	日原信子	福池みどり
松本靖子	水内玉恵			(五十音順)

発掘調査事務員　岡崎順子　近藤真佐子　乗岡美佐子

調査にあたり、文化庁の岡本東三調査官（昭和59年度）・佐久間　豊技官（昭和60年度）・河原純之主任調査官（昭和61・63年度）・山崎信二調査官（昭和62年度）の諸氏には現地視察のうえ、多大のご指導・ご助言を頂いた。また、岡山県教育委員会文化課等の文化財担当職員の方々や、岡山県内外の多くの研究者の方々も現地来訪をして下さり、諸々のご教示やご助言を頂いた。

発掘調査の実施に際しては、城跡のほとんどが民有地ということもあって、地権者の大森虎治・田中實・石原完治・下本敬蔵・下本幸典・井上猛・宍戸清の各氏と、平林金属株式会社のご理解とご協力を頂いている。さらに、城跡内にお住みの大森虎治・田中實・下本敬蔵の各氏には、施設の使用を始め諸々の便宜に預った。また、地元の小廻町内会長大森虎治氏を始め、遺跡が赤磐郡瀬戸町に跨っているため同町教育委員会社会教育課や、同町の歴史同好会の岡本要氏等の方々の諸々のご支援を頂いた。

大廻小廻山城発掘調査の実施にあたって、ご指導・ご教示とご協力・ご助勢を頂いた多くの方々に、調査の終了に際して深謝の意を表する次第である。

発掘調査報告書は、最終年度の昭和63年度の発掘作業終了後に、調査員が作成にあたった。

〔調査経過〕

此の度の発掘調査は、神籠石系山城の一つである大廻小廻山城跡の遺構の内容を把握することにあり、広大な遺跡に対し僅かなトレンチをもって５ケ年に亙って追求したもので、正に目隠しをして象を撫でた感が強い。そのうえに、現状の農地や宅地の使用状況から、意図する地点へのトレンチの設定が必ずしも出来なかったこともあって、検出した遺構も偏った嫌いが強く、追求し得ていない城郭遺構の部分を多く残す結果となっている。５ケ年に亙る調査の経過及び実施状況は次のとおりである。

◦昭和59年度　経費5,000,000円（国補助2,500,000円・県補助833,000円・市費1,667,000円）
発掘面積60㎡、城跡一帯の空中写真測量を主にして一部の発掘

◦昭和60年度　経費4,000,000円（国補助2,000,000円・市費2,000,000円）　発掘面積350㎡
◦昭和61年度　経費4,000,000円（国補助2,000,000円・市費2,000,000円）　発掘面積350㎡
◦昭和62年度　経費4,500,000円（国補助2,250,000円・市費2,250,000円）　発掘面積350㎡
◦昭和63年度　経費2,500,000円（国補助1,250,000円・市費1,250,000円）　発掘面積100㎡
報告書の作成　（出宮徳尚）

◎昭和59年度　（Ｂ・Ｃ地点）

発掘調査は、昭和60年２月５日に開始した。本年度は予算の大半を航空測量に充てるため発掘面積は狭いが、城跡北西部の外郭線上の二ケ所を調査することになった。これに先立つ２月１日、第１回目の対策委員会が開催され、城跡の現状や考古学的諸問題、また具体的な発掘調査の方針などが議論された。土地境界の関係から調査地点は、Ｂ・Ｃ二つの地点とも神籠石状列石の予想される壁面上方の平坦部に限定され、そこでの調査主眼は外郭線の上部構造、特に防柵等の施設の有無確認である。先ずＡ地点に設定したトレンチでは、土段盛土の上面で扁平な石材数個が確認されその配列から礎石ではないかとの予想が立てられた。ここは谷頭に当たり城門があっても不思議ではない。その配列性を追求するため更にトレンチを拡大したが断定に至らないまま２月上旬を費やした。東の尾根上のＣ地点には２月15日に着手した。ここでは草刈りによって外郭線の見事な折れが認められたが、トレンチでは遺構らしきものは認められなかった。月末からはＢ地点に戻り盛土の断ち割り作業に入り、先の石群は盛土中の補強石の可能性が強くなった。調査の大詰を迎えた２月26日には岡本調査官が現地指導、また３月１日には第２回目の対策委員会が行なわれた。以後の日程は主として記録・埋め戻し作業に費やし、３月16日調査を終了した。なお、航空測量とこれに伴う現地作業も併行して行なわれた。

◎昭和60年度　（Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｈ地点）

調査は昭和60年12月２日に開始した。本年度は、神籠石状の列石を含め外郭線の一般構造を総合的に究明するために、四ケ所に発掘調査を設定する事とした。先ず、Ａ地点の土段上平坦部にトレンチを設定したが、上部構造を示す遺構は検出されなかった。次に、Ｂ地点の前年トレンチの東に新たにトレンチを設定し、ここで須恵器が出土し城跡の年代決定に期待がかかったが、前年同様の石群は検出されなかった。更に、北谷頭部にＤ地点を設定した。ここは、現状で土段が途切れ城門の可能性のある所で、先ずこの途切れ部にトレンチを設定した。まもなく、神籠石状列石が検出され城門は否定されたが、列石の存在が確定的になったばかりか、それが見事な折部に当たっていた。この列石を西に追及して新たなトレンチを設定し、その前面には柱穴がない事、またその背後には版築層があり、しかもそれが列石を覆い隠している事など重要な知見が確認された。一方、段上のトレンチでは遺構は検出されない。この辺りは外郭

線の保存が良好で二段構造がよく観察され、できるだけ広範囲に平板測量を実施する事とした。年内の作業は12月26日で終え、１月８日から再開した。新たに上方に拡張した段上部のトレンチでは溝を検出した。１月16日に第１回目の対策委員会が開催され、神籠石の新たな形態について議論された。１月27日には佐久間技官の現地指導があったほか、市議会文教委員会などの視察も相次いだ。Ｂ地点ではさらに前年度検出の石群の性格を究明するため隣接地を調査したが、いよいよ盛土中の石の可能性が強くなった。１月末から西に回りＨ地点の調査を開始した。下段壁面で、やはり盛土に覆われた列石を確認、さらに列石を南に追ってトレンチを設定した。段上のトレンチでは、Ｄ地点と同じく外郭線に沿う溝を確認した。また、その北に隣接するＧ地点では畑中に露出する新たな列石も確認。Ｈ地点では盛土保存と土地保全のため盛土の断ち割りは行なわない事とし、Ｄ地点のみの断ち割りを行なった。２月13日対策委員会が開催され、以後は細部確認・記録・埋め戻し作業にあたり、３月12日調査を終了した。

◎昭和61年度　（Ｄ・Ｅ・Ｈ・Ｉ地点）

調査は昭和61年12月１日に開始した。本年も外郭線の一般構造を究明する事を目的とし、先ずＤ地点の上段上にトレンチを設定、また上段裾の溝を追及するため小トレンチを順次設定した。その結果、上段上では時期性格不明の土壙が検出され、また溝もその走行の状況を把握することができた。北に隣接する急斜面部のＥ地点にもトレンチを設定した。ここでは、上段平坦部で溝が確認された。上段上方では土壙を検出し、柱穴の可能性も考え、その延長を追及するため北にトレンチを設定したが、柵列の確認には至らなかった。また、上段構造が変換する場所に設定したトレンチでは集石遺構などを確認し、この部位での溝の走行を追及するため、順次小トレンチを設定した。年内の作業は12月25日までで、新年７日から再開した。Ｈ地点に移り、下段斜面の列石を確認、その前面の柱穴列の有無を徹底的に究明するため列石に沿って長いトレンチを設定したが、やはり柱穴は確認されなかった。１月13日には第１回目の対策委員会が吹雪の中行なわれ、同28日には河原主任調査官の現地指導を仰いだ。複雑な段構造を示す小廻山の山頂にかけて順次トレンチを設定し、前年検出した溝の延長を確認したほか、Ｉ地点の山頂部のトレンチでは須恵器壺などが出土し、建物跡の検出が期待されたが、性格不明の土壙の検出に留まった。２月４日には第２回目の対策委員会が持たれ、以降は各トレンチの最終確認・記録・埋め戻し作業を専らとし、現地作業は２月20日に終了した。なお、外郭線構造を巨視的に見る必要性を痛感し、全期間中を通じ調査地点周辺の草刈りと平板測量を実施した。

◎昭和62年度　（一の木戸・二の木戸・Ｎ地点）

本年度は、待望の水門部の調査で、昭和62年12月１日に調査を開始した。先ず、一の木戸の石垣を中心に草刈りを行ない、北には土塁状の地形があり、東の谷斜面に平坦部がある事などを確認した。発掘は先ずこの北の土塁状部を横断するトレンチを設定し、盛土に覆われた列石

を検出した。更に石垣寄りの現山道沿にトレンチを設定した。ここは現状では石垣列石線が途切れ城門の可能性があるが、それに直交する列石や柱穴などは確認されない。石垣の背後には無数の角石が詰められ、それは石垣の最も高い谷中央部に設定したトレンチでも確認された。併せて石垣前面の転石・流土の除去も行ない、中央部で横穴式石室の羨門風の石積部を確認、排水口の可能性も考えられたが内には他部同様の角石が充満し判然としなかった。石垣の南でもトレンチを設定し、石垣から神籠石状列石への移行を確認した。年内の作業を12月25日で終え、新年6日に再開した。新たに石垣上方の平坦部にトレンチを設定、表土下は締まった土で、石垣背後の盛土かとの観測が持たれた（結果的には流土）。また、東の斜面中の平坦部にもトレンチを設けたが、まもなく地山に到達した。1月20日、第1回目の対策委員会が行なわれ、確定に至っていなかった一の木戸の断面構造や通水溝・城門の有無などが議論された。23日に至り、北の山道に沿うトレンチ拡張部と谷中央部のトレンチの掘り下げ部で、露出石垣と背面する新たな石垣を確認し、ここに石塁構造が明らかとなった。背面石垣の南縁を確認するため予想位置にトレンチを設定しこれを突き止めたが、谷中央部のトレンチでは石垣の基部が山側に飛び出している事が判明したものの、流水と転石に阻まれ掘り下げが難航した。

ひとまず一の木戸を離れ、調査はN地点に移った。ここは国分寺方面の眺望が良く望楼的施設を期待したが検出には至らなかった。2月6日からは二の木戸に着手した。現在露出している石垣の中央部は、土地境界の関係で掘り下げを行なわず、神籠石状列石との連続を確認するに留め、調査の主眼を背面石垣の確認に注いだ。その結果、ほぼ予想位置で背面石垣を検出した。2月15日から3月1日までは、作業員を休みとし、二つの石塁の実測作業に専念した。2月17日には山崎調査官の現地指導を仰ぎ、3月4日には第2回目の対策委員会が開かれた。この頃は、新聞報道を受けて見学者が特に絶えなかった。調査は二の木戸背面石垣をさらに追及し、トンネル状暗渠がない事と通水を考慮した背面石垣の基礎構造を確認するに至った。両石塁の実測がほぼ終了した3月14日二の木戸の埋め戻し作業を開始するとともに、流水と狭い空間に悩まされながらも未解決の一の木戸背面石垣中央の張り出し部の追及を行ない、これが吸水口である事を確認し、さらに前面石垣の問題部分内の角石を除去し、これが正に排水口である事を確認した。以後、記録作業の続きと埋め戻しを行ない3月28日に調査を終了した。

◎昭和63年度　　（J・K・L地点）

昭和63年12月1日に開始した調査はL地点から取りかかった。ここは、外郭線が大きく北西に張り出した要衝で、また現状で土段が一部抉れて、城門の可能性が考えられた。先ずこの抉部にトレンチを設定したが、列石の延長が確認され城門の可能性はなくなった。この地点の北と南は外郭線の大きな折に当るため、この一定区間における構築状況の詳細確認を次の主眼とした。南北の折部や稜線上で列石を確認し、地山・盛土・列石の諸関係を観察、さらに列石の



市議会文教委員会による視察

調査作業風景



平面上の微妙な折や立面での傾斜変換点などを追及するため、順次小トレンチを設定した。また段上や列石前面の平坦部などにもトレンチを設定したが、防柵などの上部構造の確認には至らなかった。この地点の記録作業をほぼ終え、調査地点を小廻山へと移した。日程の関係上12月25日から翌１月17日までは作業員の正月休みとしたが、その間改めて城跡全体の踏査などを行なった。再開後は、先ずＫ地点で露出する石組を中心にトレンチを設定した。この石組前面は城内に向かってコの字に引いた格好で段が造成されているため、城門の可能性も考え、その正面部で列石の確認を試みたが、列石は途切れていなかった。石組のすぐ西では、同様の石組を期待したが、集石土壙を検出した。Ｊ地点の一部トレンチが掘り上がった１月24日、最後の対策委員会が開催され、外郭線を主体とした５年間の調査を踏まえた考古学的諸問題や史跡指定・整備の問題などが討議され、同26日には河原主任調査官の現地指導を仰いだ。山頂平坦部のＪ地点は、建物跡確認の期待が大きかったが、ついに検出には至らなかった。記録・埋め戻し作業を終え２月15日、５年間に及ぶ発掘調査の幕を閉じた。（乗岡　実）

註(1)　日下郷の東隣りの上道郡物理郷・同肩脊郷、さらに東の同沙石郷の３郷は、766（天平神護２）年に藤野郡（後に和気郡）に編入され、ついで788（延暦７）年の磐梨郡の新設に伴って同郡域となった。

(2)　長光徳和「中世の宗教文化」『上道町史』岡山市役所　1973

(3)　註(2)

(4)　荒木誠一「城址と戦跡」『赤磐郡誌』赤磐郡教育会　1940

(5)　文化課主事　出宮徳尚　同　根木　修

第3章　遺　構

大廻小廻山城跡は神籠石系山城として確認されたのが15年前であり、それまでに古代山城遺跡の提言もあったが、考古学的観点での全域的調査が戦前は言うに及ばず戦後も行なわれていなかった。1973（昭和48）年に岡山市教育委員会の実施した埋蔵文化財分布調査が最初の本格的な現地調査であり、その後の継承発展的な踏査の積み重ねで、城跡全体と各箇所の遺構の遺存状態がより詳細に判明して来たものである。その一方で、城跡内は農地に使用されており、城跡確認後も耕地の改良が施され続けているため、遺構を含む一部の地形の変更が生じている。本調査報告書は発掘調査成果を主体とするものであるが、遺跡全体に対して発掘自体が限られた部分であるうえに、確認以後の地形変更もあり、分布調査で確認した遺構も、この城跡を語るに欠かせない部分を占めている。このため、本章では分布調査の成果と発掘調査の成果を、各々の調査毎に記述することにしたい。

Ⅰ　分　布　調　査　の　成　果

大廻小廻山城跡に対して古代山城遺跡の観点を持ったのは、第2章で触れているように荒木誠一であり、同氏は1930（昭和5）～35（同10）年にかけて『改修赤磐郡誌』の編纂と執筆に専従していたので、この城跡の現地踏査はこの間と判断できる。同氏は城跡の現状を「数峰を取り囲んで築地がある」「築地の径は約9町」「三の木戸は今明瞭でないが、他の二箇処には石垣を残して居る」「(一の木戸(筆者加筆)は中程より）北に24尺延び、南に19尺続く。高さは最高8尺で、両端は次第に低い。村では之れをだいわ（台輪）(筆者加筆)と云って居る。(中略) 塁の切り割り面の幅が、24尺である。」「三の木戸の上に、稍々広い平地がある、此の辺を赤井と云ひ、又馬いこひ場とも云うが、此の小廻全体が国有林で、生え茂って居る為、実測は甚だ困難」と報じている。また、「小廻は、数峰を取り入れて、其の中腹を鉢巻形に土居を造り、西方のは甚だしく垂れ、谷3箇処には、木戸と称す処を残し、巨石を以って築いた石垣（中略)、木戸と、そうして水門口とを兼ねた物であろう。尚ほ土塁を築く為めには、其の内側の土を採って、其の址が平坦となり、廣さは数間に餘る処もある。又築地は圍郭一線のみでなく、尚ほ内部に、一二線の土塁址がある。」[1]と観察を加えたうえで、朝鮮式の山城の可能性を強く提起していた。

さて、1973（昭和48）年12月から翌年1月にかけて岡山市教育委員会の実施したこの山塊の埋蔵文化財分布調査では、小廻山（三角点所在地）山頂から北の鞍部を越えて峰続きの大廻山の東の峰を回って、この山の稜線沿いに西方に延びて西の峰から谷に下り、3ケ所の谷を取り込んで小廻山の南の峰を巡って一周する、総延長約3.5kmの外郭線全周が確認された。外郭線

の構造は基本的には外側だけに斜面を造り出す土段造成で、３ケ所の谷渡りの箇所が石塁（現状は石垣）構築になり、石塁の両側や鞍部の一部に土塁築成が認められた。土段は山頂や稜線の頂部を外してその外側直下の斜面（山腹）に山寄せ状に設置してあり、山腹斜面の上（稜線）側を削平して下（裾）側に盛った、所謂山腹の切り盛り造成の構造で、本質的には土段上部の平坦面の形成を意図していると判断される。また、設置位置と不可分の結果であるが、全周的に平坦部の上方傾向（稜線）側がさらに人為的な傾斜面を構成することになり、その上端肩部から上側が稜線頂部付近の緩斜面と相俟って上段の平坦部をなし、基本的には２段築成の形状を呈している。従って、外郭施設は２段築成の土段構造と見ることが出来る。土段は現況で下段が平坦部の幅1.5～３ｍ、外側斜面の垂直比高1.5～２ｍ、同俯角約30度、上段側斜面の垂直比高２～2.5ｍ、同仰角約30度を測り、平坦部が地形に即して狭広をなす。この外郭施設は大廻山の東西に連なる峰と小廻山の北東から南西側、さらにその南端の峰から三の木戸石塁を経て一の木戸に至る間の、ほぼ外郭線全周に亙って良好に遺存していたが、一部がその後の農地改良で埋没している。

内外両側とも完全な立ち上り状態（所謂かまぼこ状）をなす土塁は、現況で上部平坦面の幅２～2.7ｍ、外側斜面の垂直比高1.1～1.5ｍ、同俯角27～37度、内側斜面の垂直比高0.7～0.9ｍ、同俯角20～23度を測り、一の木戸石塁北側約15ｍの間、二の木戸石塁西側約５ｍの間、三の木戸石塁北西側約30ｍの間、及び三の木戸石塁の東背後稜線（鞍部）の東側で南北約10ｍの間で確認できた。特に三の木戸石塁北西側の土塁は、分布調査時には樹木繁茂で識別困難であったが、その後に一帯が畑地造成で伐開されたために明瞭に視認されたもので、所謂かまぼこ状の土塁線の延びが良好に遺存し、石塁構築箇所と稜線の土段造成箇所との間を継ぐ土塁の築成箇所の状態を観察できる絶好の遺構であった。しかし、畑地造成に伴って間もなく削平された。なお、土塁築成箇所は、原則として土段築成箇所のような２段築成の外郭構造となっていない。

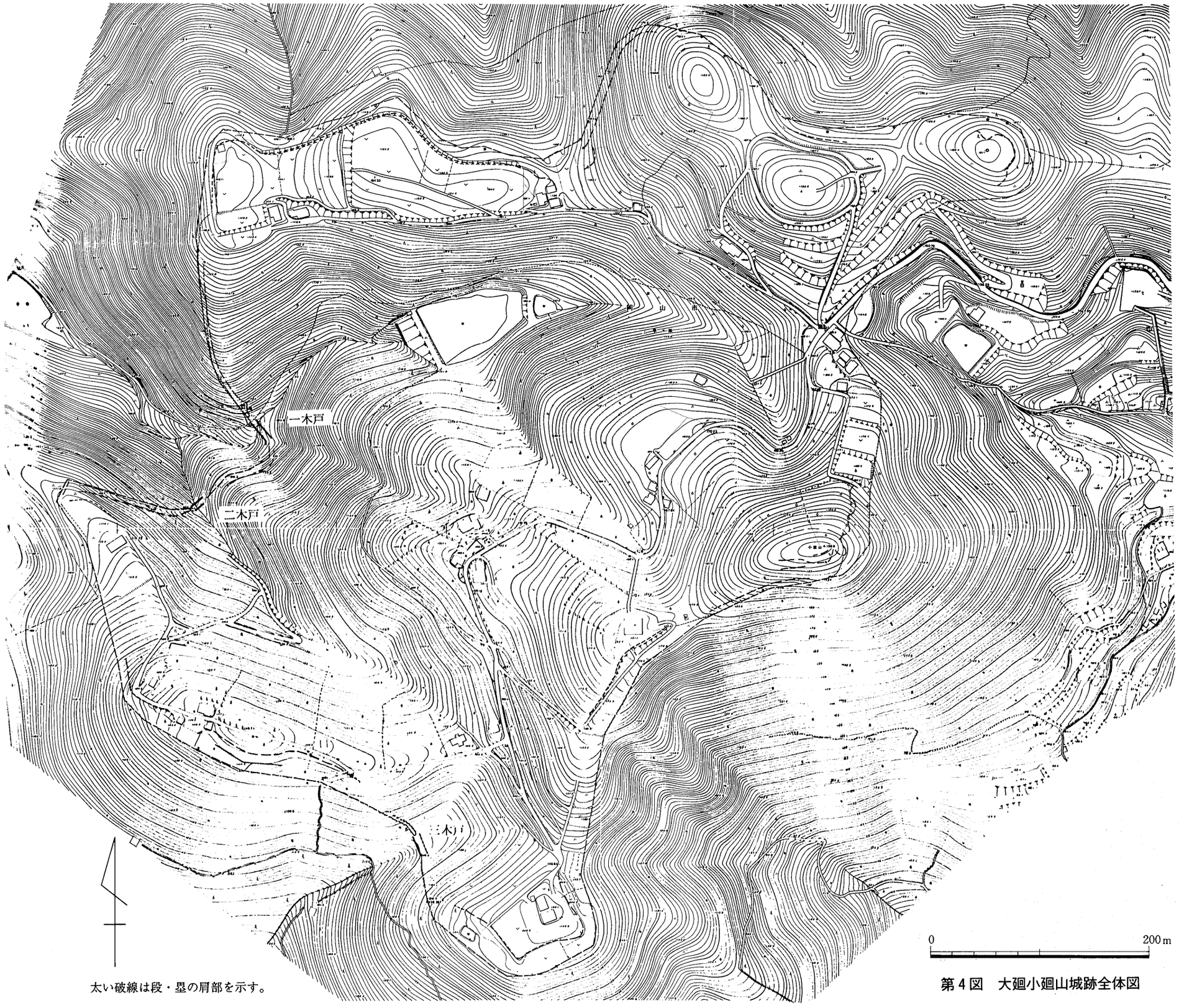
３ケ所の石塁は外郭線が谷筋を横断する箇所に構築されている水門石塁で、分布調査での確認時点では半壊と半埋没の遺存状態であり、全貌の観察ができなく、３ケ所とも明確な通水孔の確認ができず、それらしい石積箇所の識別のできたのは一の木戸石塁だけであった。一の木戸石塁は外側が大型粗割石材の整層野面積みの構築になり、現況で遺存状態の良い南西側で４段積みが認められ、全長（正面幅）27ｍ、高さ1.8ｍを測り、内側に幅広い控積みがあってその上部に土塁の一部が遺存していた。二の木戸石塁は外側に大型粗割石材の１～２の石積みが確認される半埋没状態で、全長13ｍ、高さ約１ｍを測る。三の木戸石塁は開墾に伴う破損が著しく、僅かに外側の基底部の大型石材が断続的に一段確認できただけであり、全長25ｍ、高さ1ｍを測る。ちなみに、三の木戸石塁は開墾前には内側が方形の窪地の形状をなしており、そこから開墾時にねずみ色の土器が出土したとの言質を地権者から得ている。

なお、小廻山山頂部は小判形状のやや広い平坦面の造成が認められ、その東側から南側にかけて囲む2段築成の土段の外部構造と相俟って3段築成をなし、城郭上部構築施設の設置箇所の有力候補地である。しかし、享保8（1723）年の紀年銘のある雨乞い標柱石が立っており、常楽寺の宗教施設設置場所の可能性も強い。また、大廻山の東端の峰頂部にも広い平坦面が認められるが、古絵図に阿弥陀院の記載があり、塔頭の跡が確実であるが、先行して城跡の造成地の可能性もある。さらに、1969（昭和44）年に当地の古代山城の可能性を求めて訪れた時に、小廻山北西側中腹のほぼ平坦な尾根上（一の木戸の谷奥の上）で、開拓入植時の家屋建築の宅地造成に伴って平らな石の並びが見付かり、その一つを家屋の靴脱石にしているとの言質を得ているが、その後に確認の機会を得ていない。

以上が分布調査時に把握した大廻小廻山城跡の遺構の概要であるが、城門遺構については確認できず、一の木戸石塁北側の土塁切断箇所が第一候補地に挙げられるが、この位置は最近まで山塊の西側の村々から常楽寺への主要参道の径路に重なり、その切断が旧来からの道筋なのか参道開削の結果なのか判然とせず、発掘調査でも門跡の確証が得られなかった。また、発掘D地点の鞍部で二箇所の土段切断箇所が認められたが、発掘調査の結果この切断も後世の常楽寺への参道であることが判明している。可能性とすれば、大廻山と小廻山の鞍部も地形的には候補地であるが、開拓地への進入道の開削で調査が不可能である。ただし、三の木戸石塁は谷頭の直下への構築であり、水門を構えて水利の確保を図るには抱谷面積が狭いうえに、外郭線が石塁の南側の峰を突出して取り囲む必然性に欠けると判断でき、石塁を構えてそのように外郭線を配置したのは、三の木戸石塁を水門施設ではなくて城門施設として構築したと判断するのが妥当ではなかろうか。

なお、分布調査後、1981（昭和56）年2月に山塊の東山麓から開拓農地への進入道（県道）の改修工事に伴って、大廻山と小廻山との鞍部の北東寄りの県道側法面で、土段外側裾部に埋設されている角石の一段小口積の列石が発見され、この山城跡は外郭外側末端に列石を伴う神籠石系山城そのものであることが判明した。列石の上部では上半部に互層状土層、下半部に鋼（はがね）土状粘質土層が識別でき、土段築成状態も観察できる事例となった。また、発掘調査中に地権者から一の木戸石塁の谷奥で南西山腹に沿って所在する列石を教えて頂き、一帯で数箇所の石組を確認できたが、これらの石組が城跡関連遺構か否かの確認の発掘を及ぼすまでには至らなかった。

大廻小廻山城跡の地籍（第79図）での扱いは、囲繞土段の内側全域と小廻山の北東側山腹の一部及び東谷頭の一部が、岡山市草ケ部字小廻りとなっており、枝番の設定状態から見て、か



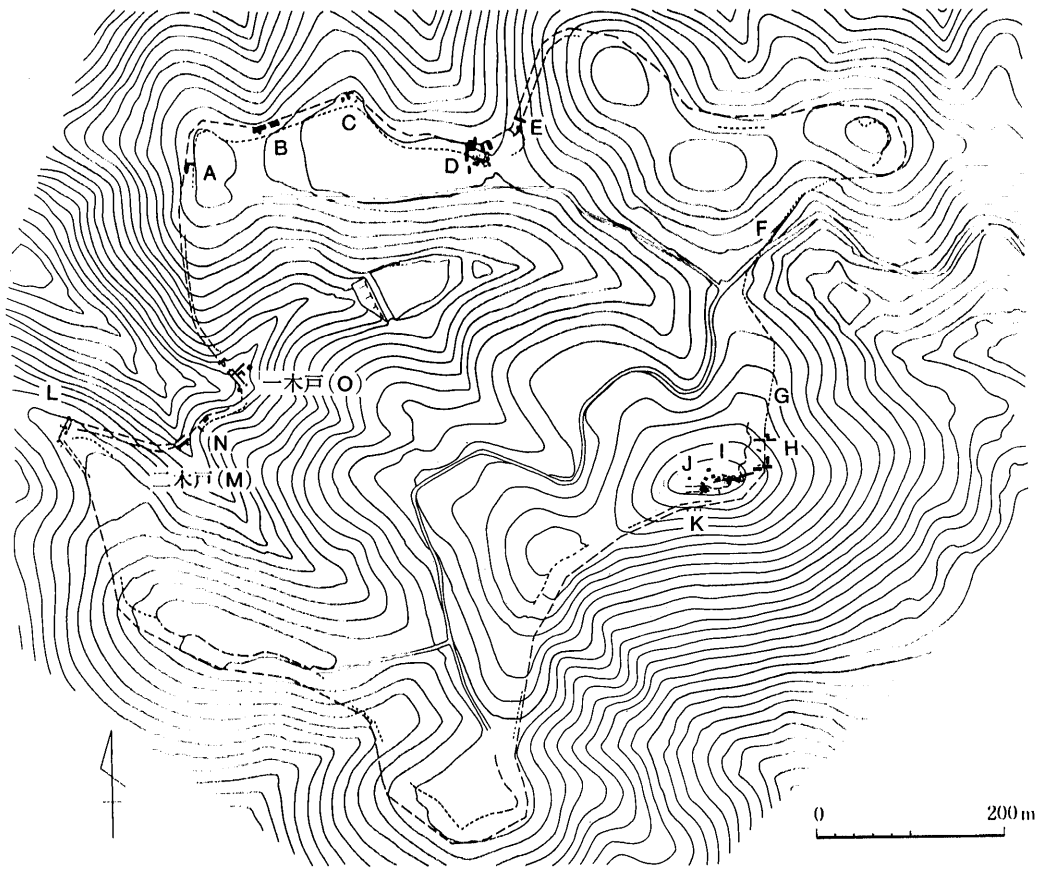
太い破線は段・塁の肩部を示す。

第4図　大廻小廻山城跡全体図

つては字小廻り1815番地１筆で国有林であったと判断される。小廻りの字境は小廻山北東側山腹と東谷頭を除いて、原則的に囲繞土段の上部平坦面肩部が境界線となっており、現在も旧国有林境界石が遺存している。大廻山の東の峰から西回りで一の木戸石塁と二の木戸石塁を経て西尾根の南西部までの字境は、大字境であるとともに市境でもあり、岡山県赤磐郡瀬戸町笹岡並びに観音寺と隣地をなす。従って、この一帯では土段外側面が瀬戸町域に含まれ、厳密にいうならば大廻小廻山城跡の一部は瀬戸町にも及んでいることになる。　（出宮徳尚）

Ⅱ 発 掘 調 査 の 成 果

1．発掘地点の配置



第５図　調査地点　配置図　　黒塗はトレンチ

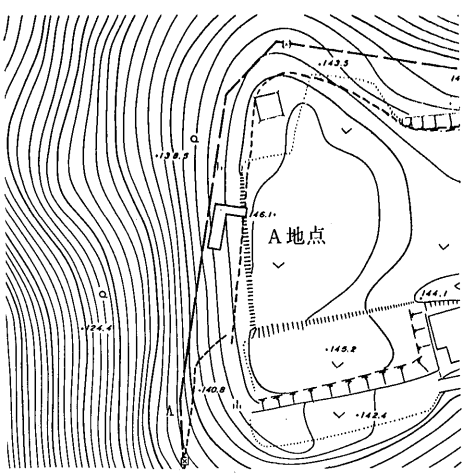
五ケ年、面積にして1210㎡に及ぶ発掘調査は、総て城跡の外郭線に沿う位置を対象としたものである。これは、現在地表で確認される遺構が外郭線に限定され、また神籠石系山城の名が示す様に、外郭線の列石やその線上の水門はこの種の遺跡の最も特徴的な遺構であり、先ずその有無・状況を確認する事が、遺跡の種類および範囲を捉えるのに有効と考えた事が大きい。また、現実的に、城内域が漠として広大で、城内施設が予想される位置には、現在家屋が建ちまた耕作が行なわれていたり、既に開墾による削平が及んでいたりする場所が多く、諸条件の中で、有望な調査地を選定し難いといった事も逆に影響している。外郭線は、急斜面への移行部に位置することが多く、また歴史的にもこれが土地境界となり、その表示物として保護され、平坦部からの耕作が及んでいなかったり、開墾が及んでいても手開墾による小規模なものに留まっている場合が多く、古い時代の改変も予想されるが全体的には遺存状況が良好である。およそ発掘対象地は、土地所有者の御協力もあり、その外郭線の内でもかなり遺存度の良い場所と言える。こうした外郭線の調査は、列石部に限定することなく、出来るかぎりその前後を調査し、外郭線の全体的構造、結果的には確認されなかったが、特に柵列や建物址といった上部構造物の確認に努め、さらに発掘区周辺の地形測量調査に力を注いだのである。

こうした発掘調査は、城跡の北中・西部、南東部、中西部の８個所13地点におよぶ。各地点にはアルファベットを付して呼び、以下、北西端部のＡ地点から、外郭線を右回りに辿りながら記述を行なう。これは、各地点の調査が単年度で完結しないものが多く、調査順序も規則性がないため、年度ごとの記述では煩雑であるので、各トレンチ名を含めて整理しなおした結果である。なお、現状で列石が露出しているＧ・Ｈ地点も実測作業を行ったので含めて記す。

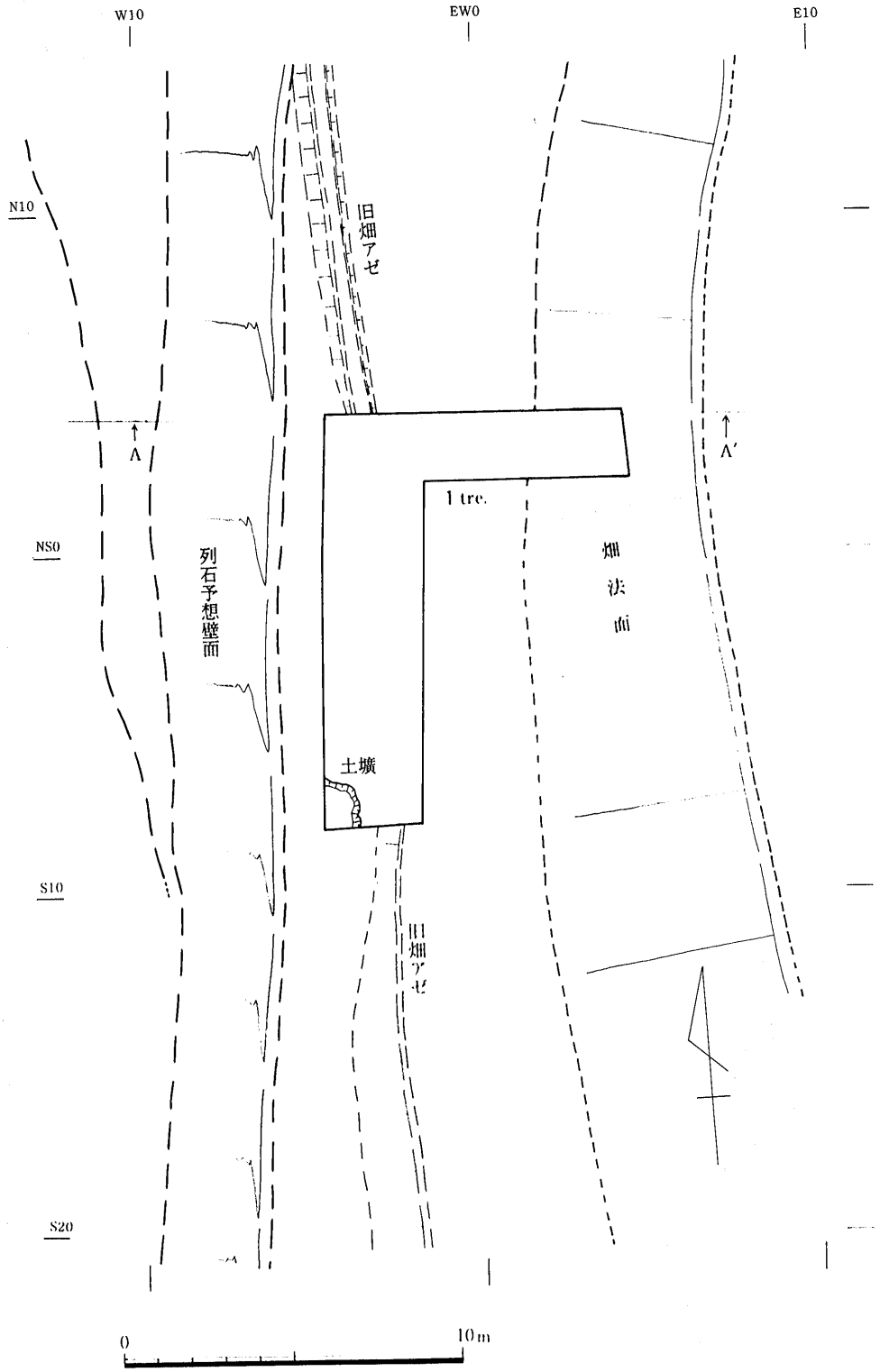
２．北西端部（Ａ地点）

⑴位置と外郭線の状況（第６図）

ここは、城跡を南東に向き手足を大きく広げたムササビに例えた場合、その左足先にあたり、雑木がなければ一の木戸・二の木戸のある谷入口や国分寺方面の眺望が良好である。正確な調査位置は城跡の北西端部から40ｍ程南に位置し、外郭線の外は瀬戸町観音寺字築地山坂に属する。この辺りの外郭線は、南の一の木戸から再び城外に向かって張りだし、約17度の急斜面を上り切った所で、西へ落ちる傾斜の変換点を辿りながら、調査位置



第６図　Ａ地点　位置図

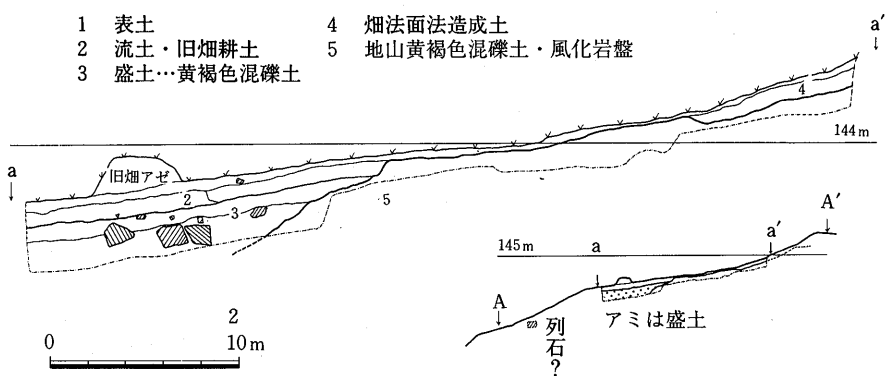

W10
EW0
E10
N10
NS0
S10
S20
旧畑アゼ
A
A'
1 tre.
列石予想壁面
畑法面
土壙
旧畑アゼ
0
10m

第7図　A地点　全体図

を経て北西端部に至る。そこでは大きく二回、いずれも内角130度程の折を描き、東に進路を取ってB地点に至る。本地点では、列石の予想される壁面の高さが2.0m程あり、その前面は幅1.5m程の平坦部がある。壁面上方は幅7～8mの平坦部となり、そのさらに上方は、重機によって押し出された高さ2mの畑法面となっている。この上の畑面は現在かなり平坦であるが、地権者の証言と周囲の地形からして、本来から平坦とみられ、造成された畑法面に段が埋め込まれ、他地点でしばしば認められるような、二段構造の外郭線であった可能性が強い。外郭線の外は25度の急斜面である。トレンチは、こうした外郭線の下段平坦部に設定した。ここは、かつての畑耕作が及んでそのアゼが認められるが、大きな改変の痕跡はない。なお、列石予想部は、土地境界の関係で発掘を行なっていない。

(2)発掘成果（第7・8図、図版第6上）

表土・流土・旧畑耕土を除去すると、谷側では盛土に到達した。盛土は、地山に近い黄褐色で、無秩序に大きな礫を含み、版築によっているものではなく、むしろ地山を掻きならしたニュアンスのもので、しかも段肩部からの距離からすれば他地点に比べて薄いといえる。山側の地山は平坦面と斜交する節理構造を残す岩盤・風化土が認められ、全体として平坦部の造成が主に地山の削り出しによっている状況が窮える。おそらく、外郭線の設計位置に対し、地山が高かった結果であろう。ただし、他地点の例からして、列石付近は、版築盛土によっているものとみられる。平坦部の上方は、畑法面保護のためトレンチはその裾部にしか及んでいないが、現法面に沿った地山傾斜が僅かに読み取れ、先に述べた平坦部幅の妥当性と二段構造の可能性を支持している。トレンチ内では、上部構造を示す遺構の検出に努めたが、確認する事は出来なかった。ただ、南西角部で、深さ30cm程の土壙を検出した。埋土は、周囲の盛土に対し極僅か汚れるだけのもので、盛土中のブロックもしくは木根跡の可能性もある不明瞭なものである。

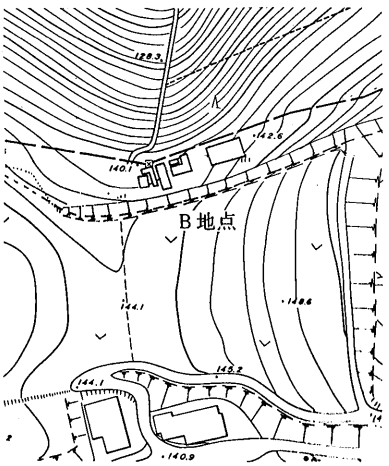


第8図　A地点　断面

3．北西谷頭部（B地点）

①位置と外郭線の状況（第9図）

先に述べた北西端部から東へ60m程の谷頭部、標高140m付近に位置する。この辺りの外郭線も、稜線からやや下がった急斜面への変換部を辿り、ここで谷頭の地形に沿って内角205度程で内に折れている。列石の予想される壁面の高さは2.1m、その前面は僅かに平坦地が認められ、壁面上方は幅8m程の平坦部となっている。さらに上方はA地点と同じく畑造成法面で、上段が埋没している可能性が強い。外郭線の外は瀬戸町観音寺字水呑場に属し、僅かに湧水するその谷筋は約12度の傾斜を示し、現在これに沿って観音寺からの小径が取り付いている。発掘調査は、ここでも下段平坦部に限定される。トレンチは合計6つ設定した。

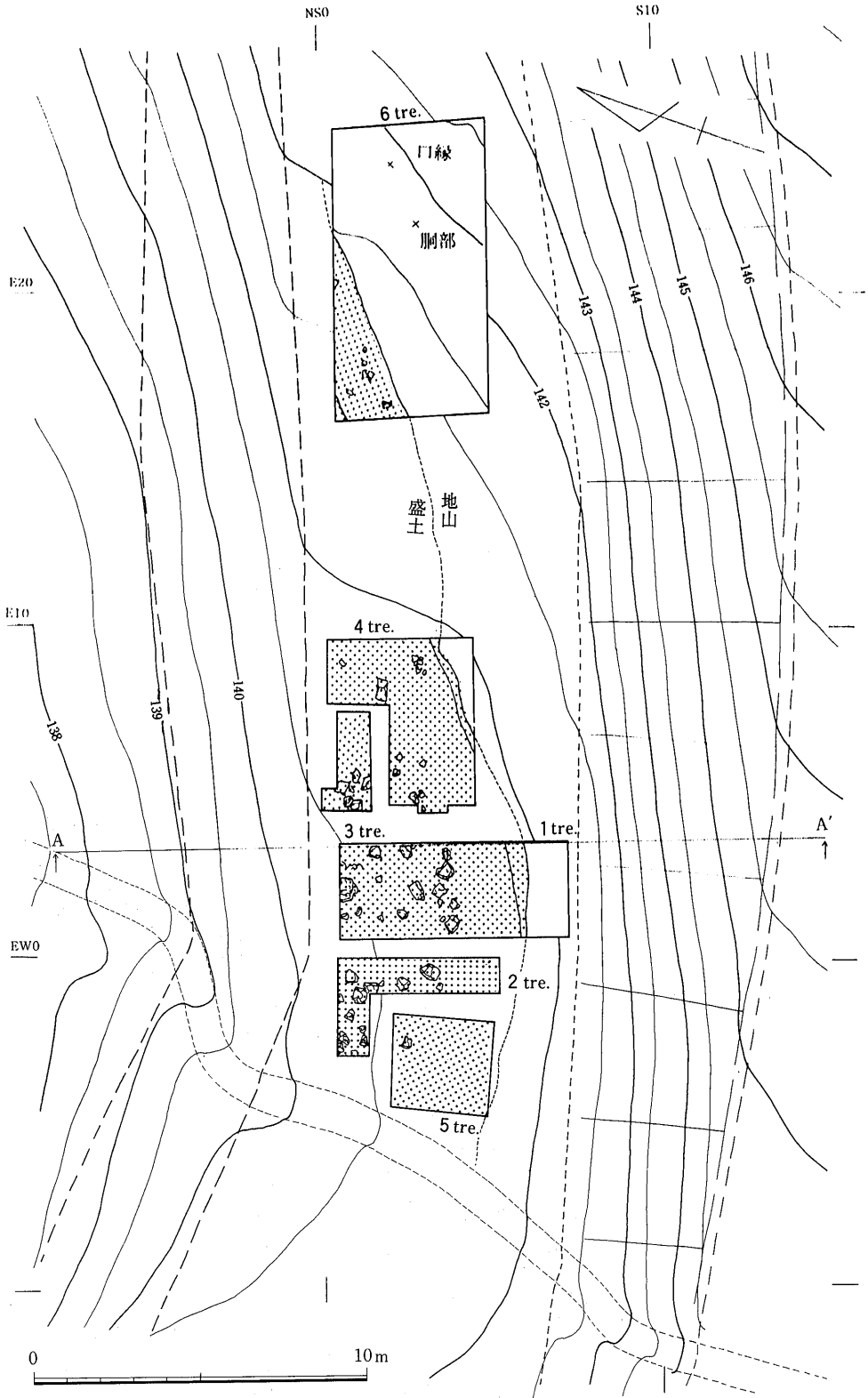


第9図　B地点　位置図

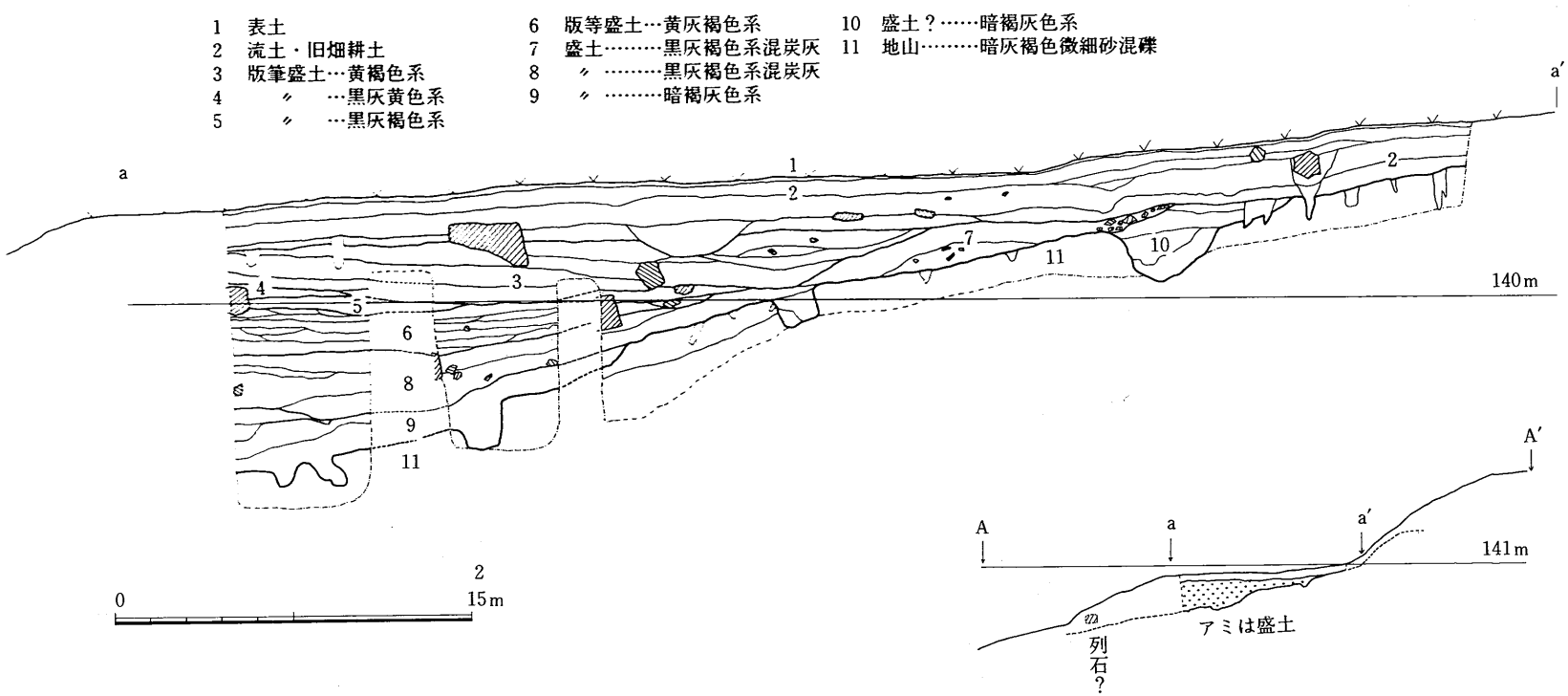
②発掘成果（第10図、図版第6下・7上）

a）第1～5トレンチ（第11・12図）

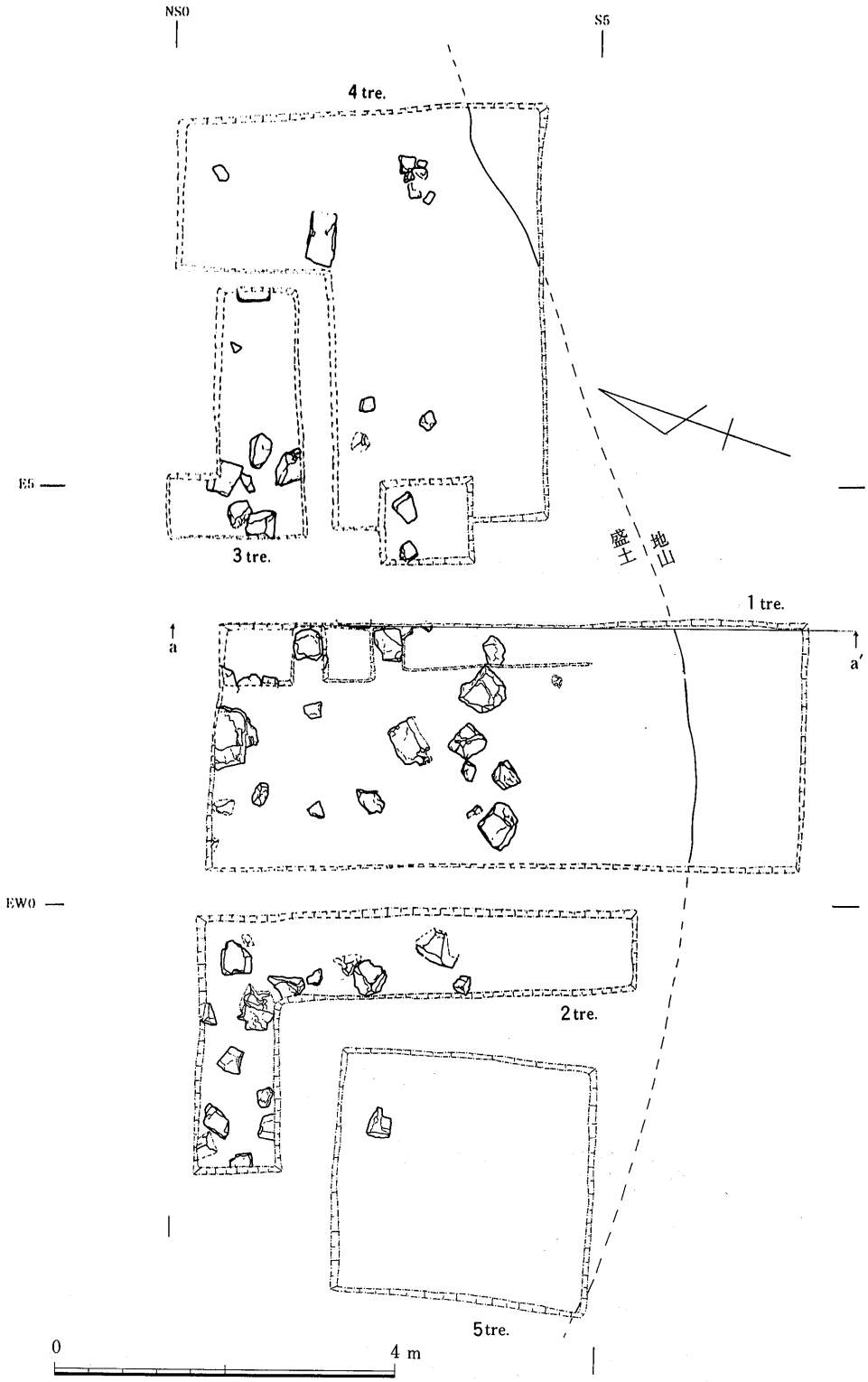
より谷頭に近いこれらのトレンチでは、旧畑耕土の下にほぼ全面にわたって盛土を検出した。第1、4、5トレンチでは、山側盛土端を平面で確認し、東の第6トレンチに比べ平坦部幅はさほど変わらないのに対し、肩部からの盛土幅が谷頭部ではより広い状況が観察される。外郭線の設計位置に対し、地山が低かったこの位置は、段造成を盛土に負う所が大きかった結果と判断される。平面では、第1トレンチのセクションでは肩部から6.6m、列石予想位置からほぼ10mまで盛土がおよび、以上1～2mを地山削平としている。厚さは1.1m以上。盛土下の地山は、約18度の傾斜を示し、先ず斜面下方で地山に類するならし土的土層（9層）が認められる。そのうえに全体にわたって黒灰色土（7、8層）が堆積している。これは上の版築部に比べて混礫が少なく、炭灰を顕著に含んでいる。細別は可能であるが、細かい単位のタタキは行っていない。その厚さと状況から見て、築城前の表土ではなく意識的に調合あるいは採取されたものと見られる。この土層により、版築盛土を開始する水平面が造成される。この土層の山側端部には、地山攪乱の掘り込み状（10層）のものが確認され、遺構としては判然としないが、場所からして盛土工程に関わるものの可能性もある。ただし、黒灰色盛土がかぶる事から、オープンな遺構ではありえない。版築（3～6層）は盛土部でも城外寄りに限定される。つまり版築は列石予想位置から約8m幅である。版築の素材は基本的に黄褐色の混細礫土で、土質から見て周囲で採集されたものである。これに黒灰色の有機質土層が混ざる。単位は細かい所


NS0
S10
E20
E10
EW0
6 tre.
口縁
胴部
盛土
地山
4 tre.
3 tre.
1 tre.
2 tre.
5 tre.
A
A'
138
139
140
142
143
144
145
146
0
10m

第10図　B地点　全体図



第11図　B地点　第1トレンチ　外郭線断面



第12図　B地点　第1～5トレンチ

で厚さ4㎝。版築層には、最大70×60㎝大の方形もしくは扁平な石材が多量に含まれている。こうした石材は、無秩序に混入するのではなく、レベルはその深部にも及ぶ一方、検出面付近の版築上部を中心とし、しかも上部平滑面を版築単位の傾斜つまり、ほぼ水平に配するものが多い。このため、当初は礎石の可能性を考えその配置を追及したが、第12図に示される様に、ほぼ否定される。むしろ、盛土肥厚部における版築工法と一体となった補強石材のあり方を示すものであろう。各トレンチでは精査したが、上部構造を示す遺構は確認されなかった。

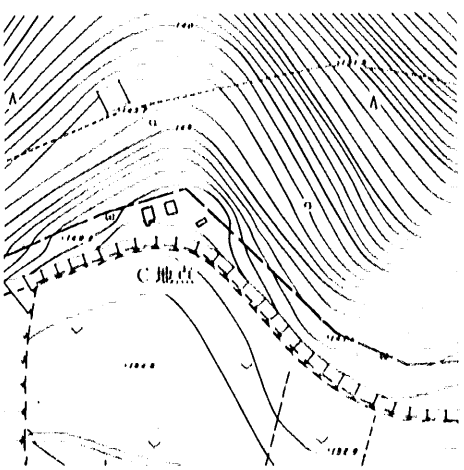
b）第6トレンチ（第10図）

西のトレンチと異なり、畑耕作の形跡はない。表土下には20㎝程の流土が堆積し、その下層は20㎝大の礫が多く、そこから須恵器短頸壺（第76図－1）の口縁と胴部片が近接して出土した。原位置は保ってないとみられるが、段上面にほぼ接し、段造成後の比較的早い段階の極近接地からの転落とみられる。また、この須恵器が何らかの形で放棄されて以降の、この部分の大きな削平などは考えにくい様に思われる。素焼土器細片も出土した。流土下では、盛土を確認したが北西部に限定され地山が高い。隅部で版築を確認した。やや大きめの礫を混えるが、その状況は規則性がなく、盛土の厚さに呼応した石材混合状況の差が読み取れる。

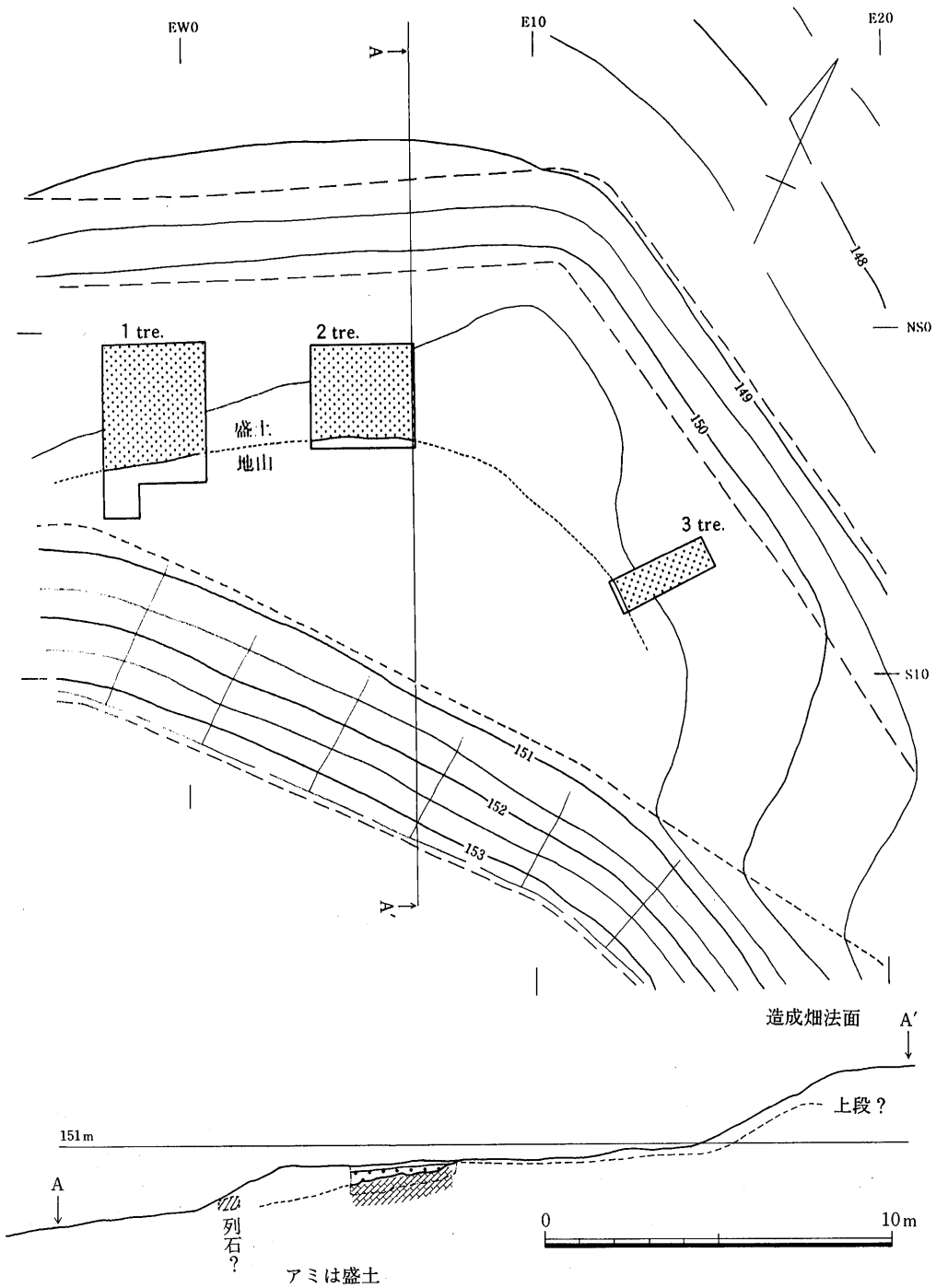
4．北中央尾根（C地点）

(1)位置と外郭線の状況（第13図）

ここは、B地点から外郭線が一直線に約7度の傾斜で緩やかに上り詰め、北に張りだした尾根上にあたる。この稜線で120度のしのぎ折れをし、ほぼ同様の傾斜で下がっていく。次の谷頭では200度と210度の二つの折れを描き（図版第8上）D地点に向かう。稜線上にある本地点では、列石の予想される壁面高は1.4mと低く、その前面は平坦となっている。壁面上の平坦部は、折部の内側で最も幅広く現状で12mを測り、極めて平坦かつ水平である。この幅は、東西に傾斜を持ちながら7m程にまで減じていく。平坦部の上は、AB地点同様の畑法面が続き、やはり本来の段（上段壁面）が埋め込まれている可能性が強い。外郭線の外は瀬戸町観音寺字先郷地に属し、尾根稜線に沿って12度程の傾斜がしばらく続く。



第13図　C地点　位置図



第14図　C地点　全体図・断面

2)発掘成果（第14図、図版第７下）

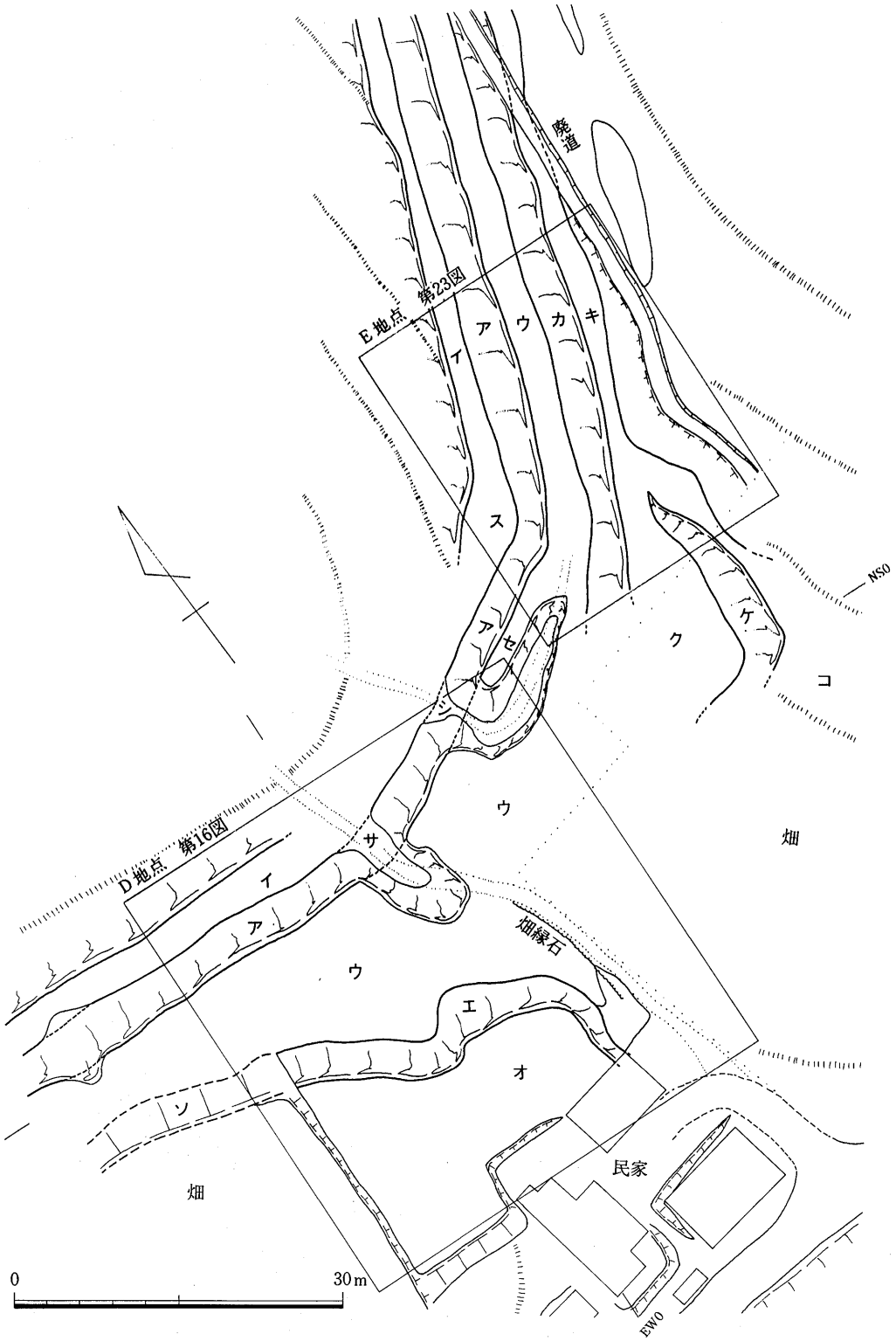
段上平坦部の肩部寄りに設定した３つのトレンチでは、表土下まもなく盛土面と地山面を確認した。盛土は、トレンチ内に限っていえば、稜線に最も近い第２トレンチで厚さ40cmと薄く、第３トレンチでは80cmと厚くなり、旧地形に即した厚さを示している。これは、周辺の地山に類する暗黄褐色の混礫土で、版築層や黒灰色の有機質土は確認されない。地山は、一部風化が進むものの、平坦面に斜交する摂理構造を持った砂質ホルンフェルスの岩盤である。全体的にみれば、旧地形が高かったこの位置では、平坦面造成の多くを岩盤をも含めた地山の削平に負っているといえる。この地点は、北方への眺望が良い事から、望楼的施設の検出を期待したが、上部構造を示す遺構は確認されなかった。

5．北谷頭部

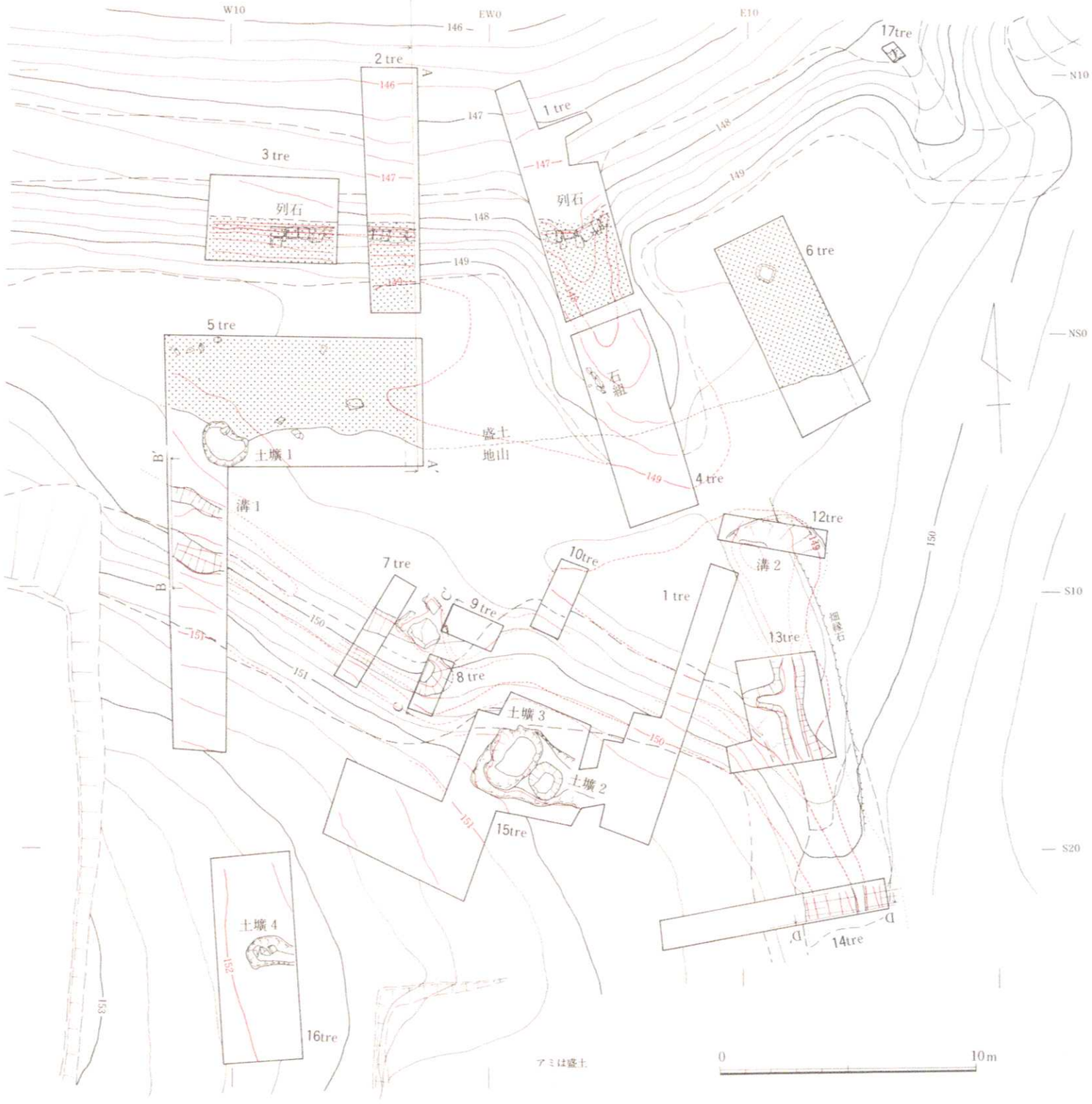
1)位置と外郭線の状況（第15図）

外郭線が、Ｃ地点から谷頭と僅かな稜を経て、等高線に沿いながら内に向かい最も奥まった標高150～60ｍの位置である。ここは、外郭線の遺存が良好である。列石を有する壁面(ア)は、1.5～1.8ｍの高さを持ち、２度程の傾斜で緩やかに降りながら、西から進入する。(サ)の地点に至り、205度の角度で折れを描く。この位置は、城内に向かって長さ12ｍ、幅６ｍの大きさで大きく抉れている。当初城門の可能性を考えたが、調査の結果否定された。その後15ｍ程ほぼ水平に(シ)の地点に至る。ここは、谷筋の中軸線上で、同様に大きく抉れるが、やはり後世のものであった。壁面はここで傾斜を12度程に変え(ス)まで上り222度で折れる。先の折からは、その裾部の水平距離で33ｍの距離を測る。以後、約85ｍはほぼ一直線に、再び城外に向かって張りだしながら、12度程の傾斜で続いている。この傾斜は外郭線の伝う傾斜としては急な方である。中央部でやや不明瞭となるが、この壁面の前面には平坦部が認められる。その幅は、南の緩斜面部で広く４ｍ、北の急斜面部で狭く２ｍ内外を測る。

壁面上方の平坦部以上の状況は、緩斜面部のＤ地点と急斜面部のＥ地点で大きく異なる。Ｄ地点では、平坦部(ウ)は広く水平に近く、その幅は西が７ｍ程に対し、鞍部にかけて18ｍないしはそれ以上にまで広がる。これは、その上の上段構造が関係している。Ｄ地点の西でＡ地点来の重機造成の畑法面(ソ)は終り、正にその延長線に高さ1.3ｍ程の上段壁面(エ)が露われる。このことは、以西の地点で上段構造を想定した事と符合している。その壁面は露出端から15ｍは緩やかに城内に向かって広がり、そこで角を持ちほぼ直角に今度は外へ折れる。３ｍ程突出し、また角を持って内に向かう。つまり、懐の広い下段平坦部とその側部に突出した上段平坦部(オ)が形成されている。上段平坦部は下段程平坦ではないが、そのうちに稜線を含んでいる。鞍部を隔てた東の対面部にも、Ｅ地点南の状況も勘案して同様の構造が予想されるが、そこは



第15図　北谷頭部の外郭線状況


W10
EW0
E10
N10
NS0
S10
S20
2 tre
1 tre
3 tre
17tre
6 tre
5 tre
4 tre
12tre
10tre
7 tre
9 tre
8 tre
1 tre
13tre
15tre
14tre
16tre
列石
石組
土壙 1
土壙 2
土壙 3
土壙 4
溝 1
溝 2
盛土
地山
146
147
148
149
150
151
152
153
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
0
10m
アミは盛土

第16図　D地点　全体図

開墾による削平がおよび判然としない。なお、稜線をはさんで城内側には、民家所有者の証言等から同様の段壁面は想定し難い。

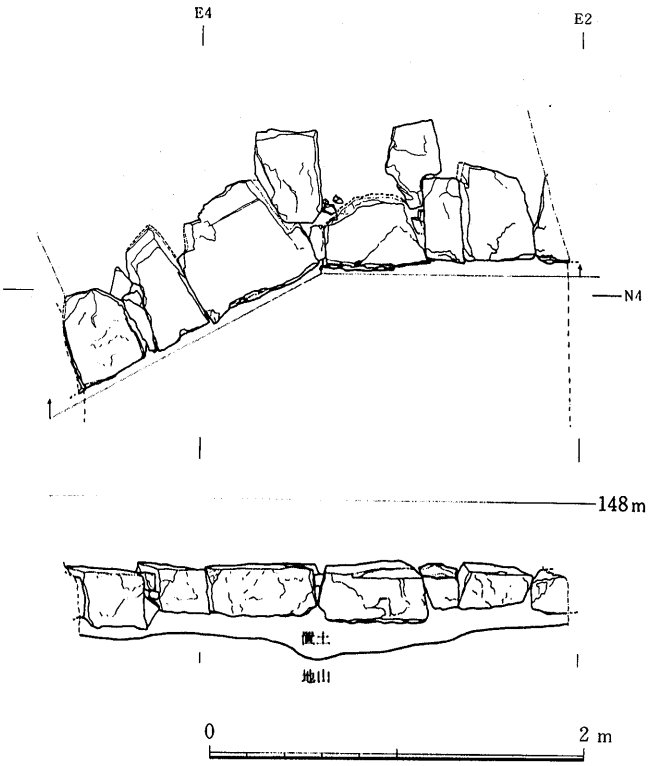
東のE地点では、下段平坦部は狭く幅約3mで一律である。この上には高さ1.3mの上段壁面(カ)、幅2.4mの上段平坦部(キ)、さらに山腹斜面へと続いている。これらの平坦部や壁面は、予想される列石や下段肩部と平面・傾斜とも総て平行し、前面の平坦部をも含めて、整った階段構造を呈している。その合計は、幅約15m、高さ5mを測る。こうした構造は、例えば上段は下段と無関係な改変であったり、本来は1段で段上平坦面のレベルが上段の位置にあり、下段はその後の崩落によって生じたものとは考えにくい状況である。また、D地点では比較的平坦な地形の稜線からやや下がった位置に下段平坦部を造成した結果、地山削平の山側端に必然的に段が形成され、自然地形の稜線上平坦部とあいまって上段構造が形成される色彩が強いのに対し、ここでは明らかに意識的に上段平坦部を作り出している点では重要である。実は、緩斜面部のD地点における構造と急斜面部のE地点の構造は、外郭線の各所で見られる基本構造の二つの類型である。E地点の南では、上段平坦部が幅7.5m程度まで急激に広くなり(ク)そこで新たな壁面(ケ)が始まって高さ1.5m程にまで次第に高くなる。これは18m程下がって西へ折れる。その後は開墾のため不明瞭となるが、おそらくD地点同様の上段構造を示すものとみられる。一方、北からの壁面(カ)は次第に平坦部に埋没する。つまり、ここは上段構造の変換部で、上段壁面がそのまま連続しない状況が窺える。なお、(セ)は見かけ上土塁を示すが後世の改変の結果である。二つの抉部は、下の集落から常楽寺などへの道が通っていたという。また、E地点では階段構造を横切る道跡が確認され、その上にも若干の改変痕が認められる。土地所有者の証言と現状からすれば、国有林以後の面的改変は、オ・ウ・キ以北には一切及んでいない。外郭線の外は瀬戸町観音寺字郷地に属し、谷筋に沿って約17度の傾斜がしばらく続く。

②D地点の発掘成果（第16図、図版第8下～11下）

トレンチは大小17に及び、列石と背後の盛土、下段平坦部、上段裾、上段平坦部の各部に対するものである。

a）列石（第17・18図）

列石は下段壁面にあり、後述する様に版築盛土に覆われている。ここでは、先ず列石自体の構造について記述する。列石は第1・2・3・16のトレンチで検出した。第1トレンチは西側の抉部に設定したもので、当初は城門施設も予想したが、列石は途切れることなく検出された。そこは、205度の角度を持つ見事な折部である。長さ20～64cm、奥行40～60cmと、大きさはやや不揃であるが、総て上面の平滑な方形もしくは長方形の石材を、基本的には1段1列に並べたものである。長方形のものは、小口を外に向け、全体として特に外縁上角を入念に揃えてい

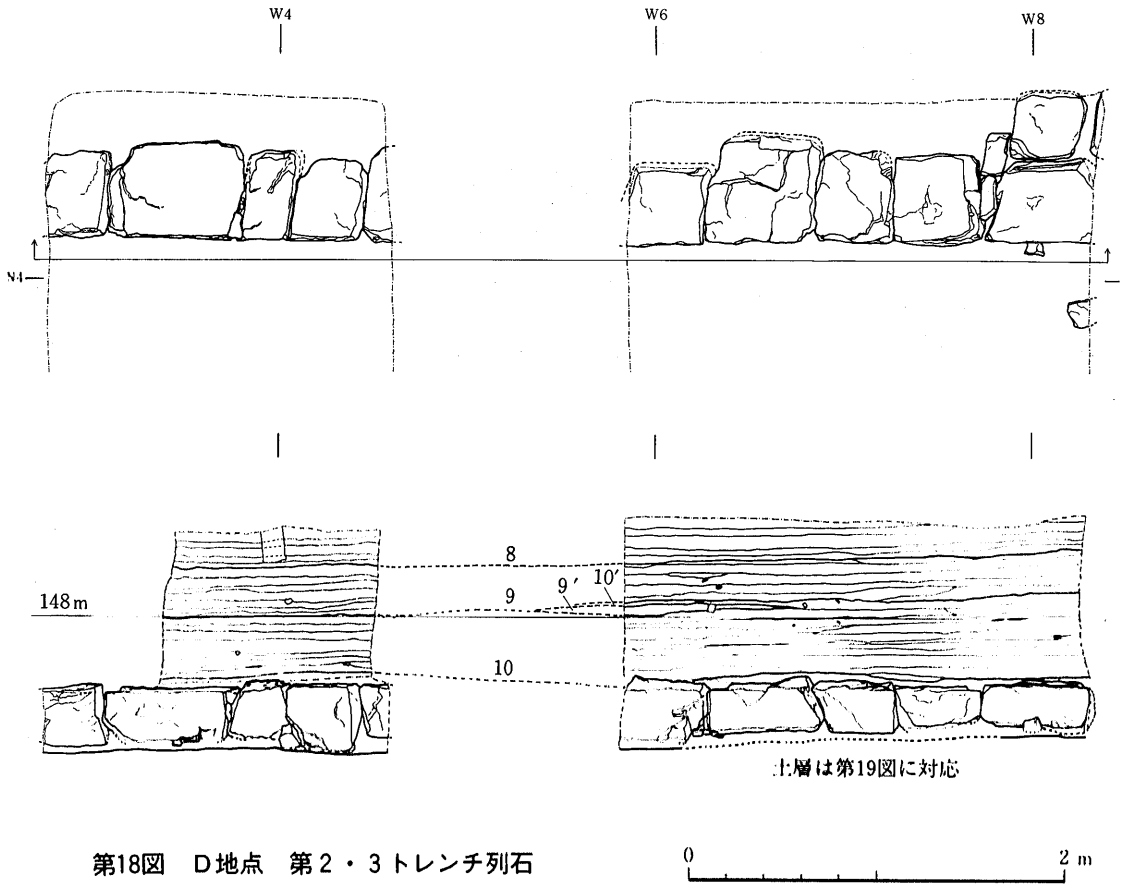


第17図　D地点　第1トレンチ列石

る。石材の厚さは、20から30cmで、石材下に置土を施す事によって調節しながら、立面的にも外縁上角を丁寧に揃えている。その傾斜は、ほぼ水平である。地山との間の置土は暗褐色の混礫土で、厚さ5～20cmを測る。列石前面を中心に石材間の隙間には小石が詰められるほか、折の背後では本体石材にがっちり咬ました控の石材が二個認められる。石材は、総て砂質ホルンフェルスで、一部に自然風化面を残す割石材である。第2、3トレンチでは、その西延長の直線部を検出した。長さ25cmから65cm、奥行40cmから60cmの主に方形の石材を、平面・立面とも外縁肩を揃え、1段1列に寝かせ置いたもので、やはり隙間詰石や地山との間の置土を伴っている。第3トレンチでは背後の控え石材を確認した。その上面は列石本体と揃え、西にもう一石確実に存在し、付近には大きめの詰石も施される。東の折部またはその控え石材から11.5m程の位置で、この間隔が作業単位を示す可能性も考えられるが、その内容は明確に捉え難い。ただ、その前面、列石縁から30cmの地山上に20cm大の石があり、これが盛土壁面端部にあたることから、関連性が注目される。また、列石は、立面に示される石材間の重なりから、一貫して西に向かって置かれていった可能性が指摘出来るが、物理的には逆目に置くことも可能で断定は出来ない。各トレンチの、列石直上の盛土面、前面の置土・地山面で精査したが、九州の神籠石を中心に検出される様な柱穴は確認されなかった。東の抉部の第17トレンチは、ここでの列石の有無を確認するためのもので、腐植土直下にその延長を確認し、城門の可能性が否定された。

b）列石背後の盛土（第18・19図）

盛土は、その素材の色彩の鮮明さもあって、全地点の内で最も克明に観察される。列石に平行する壁面と、直交する壁面で観察した。先ず、直交方向の構造を見ると、斜面上方は旧表土が確認されないこと、壁面前面に現状でも確認される平坦部があることから、列石・盛土に



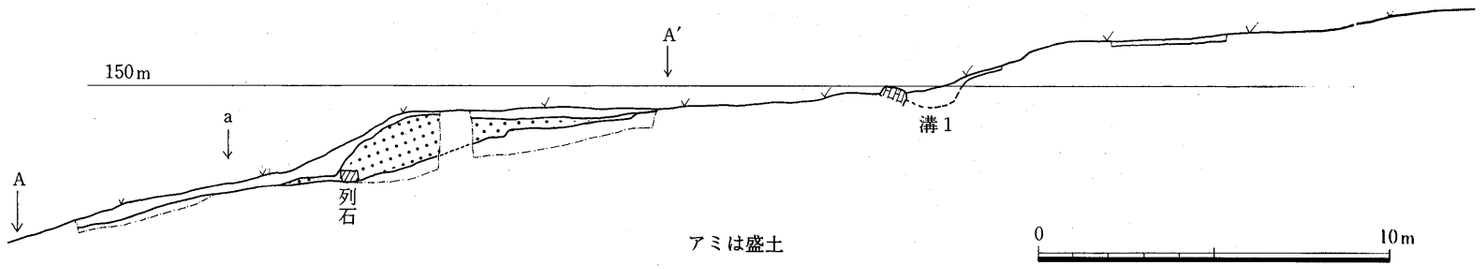
第18図　D地点　第２・３トレンチ列石

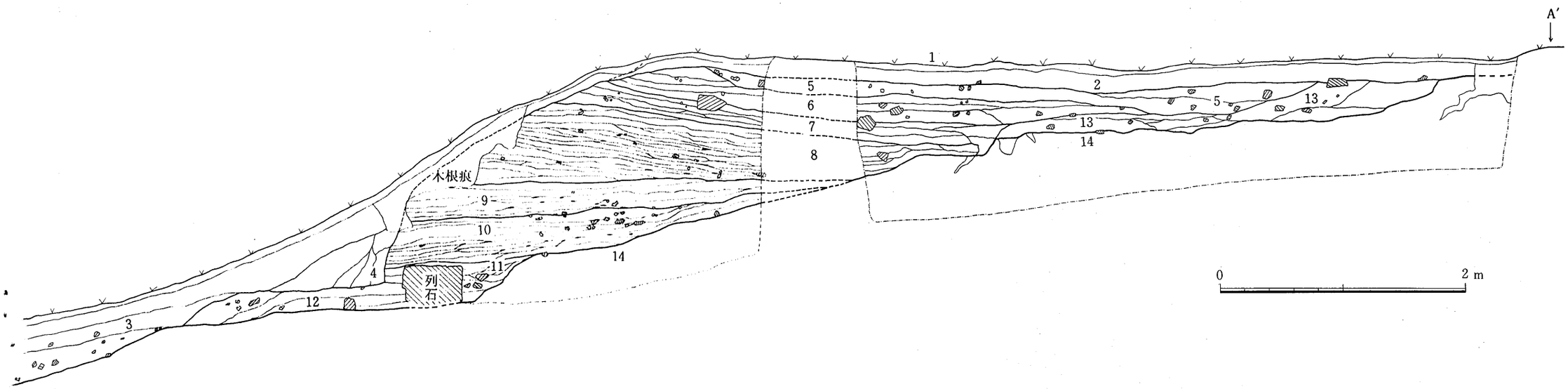
先行する地山成形が予想される。さらに、壁面前面平坦部の上部が幅2.5ｍに渡ってより水平な状態に削られている。この平坦部の山側に、先述の置土を伴いながら、列石が構築されている。列石前面には、列石を半ばまで埋める暗黄褐色の混細礫層(12)があり版築層とも思える程よく締まっている。列石背面と地山壁面の間には暗褐灰色の版築層(11)が認められる。これには、おそらく固めの意味で混合された10cm以下の石が認められる。その上には、暗褐黒灰色の版築層(10)が認められる。この層は灰や炭粒を顕著に含み、気泡の含有状況から水で練って調合された可能性がある。厚さは、谷側で35cmを測り山側にむけて次第に薄くなるが、これは各細別層とも列石上面に沿って、つまり水平に堆積しているためである。注目すべきことに、こうした版築層は列石を完全に覆い隠している。いずれの断面でも、列石外縁の外方15～25cmまで確実に及んでいる。一方、上方の盛土端付近の地山上にも、黒褐色の有機質土層(13)が認め

られる。細別は可能であるが、版築層ではない。上に版築盛土が乗り、その厚さと状況から盛土前の旧表土とは考えられず、版築層(10)と同質の素材を用いた盛土である。暗褐黒灰色の版築の上には、列石側厚さ25cm黄白灰色の版築層(9)がやはり水平に堆積している。その上には、暗褐灰黄色の版築層(8)があるが、これは各単位とも次第に外側を高く盛る傾向があり、その上面の傾斜は10度程を測る。従って、内側の厚さに対して外側の厚さ(65cm)の差が下層以上に顕著でくさび形を呈している。その上には、同様の傾向を持つ黄褐灰色の版築層(7)が認められる。この層までの版築の単位は細かく、いずれも厚さ3～8cmを測る。この単位は、上下に比べ僅かな色調の差と含まれる細礫の流れ、礫や灰炭の含有比などで区別され、各大別層の内において、同様の特徴を持つ細別層が反復して見られる互層構造を示している。手バチによる掘り下げ時には極めて固く、そうした単位ごとに肌別れするといった状況が窺えた。こうした細かい版築が認められるのは、盛土部でもその外方に限定される。それは、列石前面の壁面から長さにして5.0mの範囲である。その内側端部では、版築層が若干掘り込み風に乱れる状況が観察され、作業工程に関わるものとも思えるが、遺構としては判然としない。外側に僅かに高くなった細かい版築と内側の黒褐色土の間の窪みを埋める様な格好で、黄褐灰色土(6)と黄灰色土(5)が堆積している。これも、良く締まり、単位はやや粗いが版築層で崩落土の可能性はない。その上に黄褐色の混細礫層(2)が認められるが、これは土質からみて上からの流土というより、植物根によって攪乱された版築層そのものである。下段壁面に接して三角形に、黄褐色土(4)が認められ、比較的締まっているがブロック土的で、外被版築というよりはむしろ版築の初期崩落土と判断される。その下方には、暗黄褐色の流土(3)が堆積している。その下層中第2トレンチの下段壁面付近で直径25cm程の焼土と灰炭を伴う焚火跡を確認した。

下段の断面構造を全体としてみると、第2・5トレンチでは下段壁面の高さは1.7mを測り、盛土はその背後8.5mに及び、さらにその上8m程は地山削平による造成で段上平坦部を作りだしている。この平坦部は、6、7層の傾斜に示される様に肩部にかけて極僅か高くなる傾向があり、内に対しての肩部の比高が本来もっとあった可能性もあるが、このことはかえって、現存する版築層に連続する築地状の壁を肩部に復原するには否定的要素とみられ、むしろ一定の土量における壁面高確保の有効性と壁面保持のための工夫とみることもできる。本来の壁面傾斜については木根などがおよび明確ではないが、その下部の現状で見る限り、70～80度を測り、かなり急な壁面が復原される。その際、肩部は現状から1～1.5m谷側に復原される。版築の素材は、その土質から見て基本的に付近の地山から採集された可能性が強いが、10・13層は外から搬入もしくは調合されたと考えられ、また9層は本調査地点の内には求められない。

列石に平行する土層観察は、第2・3トレンチで行なった。観察壁面は列石外縁から70cm引いた位置で、控え石材にかかっている。直交壁面に対応する各版築層が認められるが、各単位





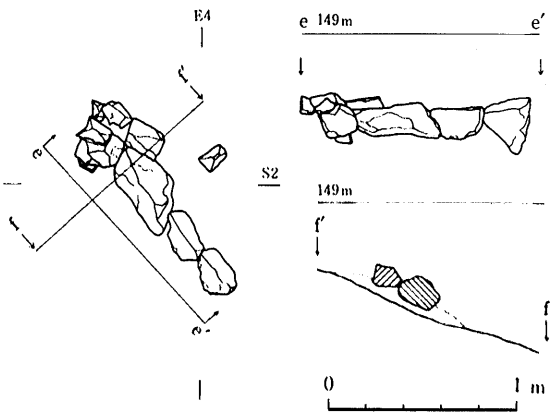
1　現表土
2　植物根攪乱土…黄褐色混細礫
3　流土…暗黄褐色微細砂混礫
4　初期崩落土……黄灰色系
5　版築盛土…黄灰色系
6　〃　…黄褐灰色系
7　〃　…暗黄褐灰色系
8　版築盛土…暗褐灰黄色系
9　〃　…黄白灰色系
10　〃　…暗褐黒灰色系
11　〃　…暗褐灰色系
12　列石前面置土…暗黄褐色系
13　版築下盛土……黒褐色系
14　地山……暗褐黄色微細砂混礫

第19図　D地点　第2・5トレンチ土層・外郭線断面

層は列石上面に沿って、つまり見事に水平に盛られている。控え石材部を含めて、列石に沿う方向での盛土群の単位を示す不整合的な変換部は確認されない。また第３トレンチの東では大別層の境界部での１単位の上下が逆転する状況が観察され、少なくともこの間では、一連の工程として盛土が行なわれていった状況が窺われる。

ｃ）下段平坦部（第16・20図）

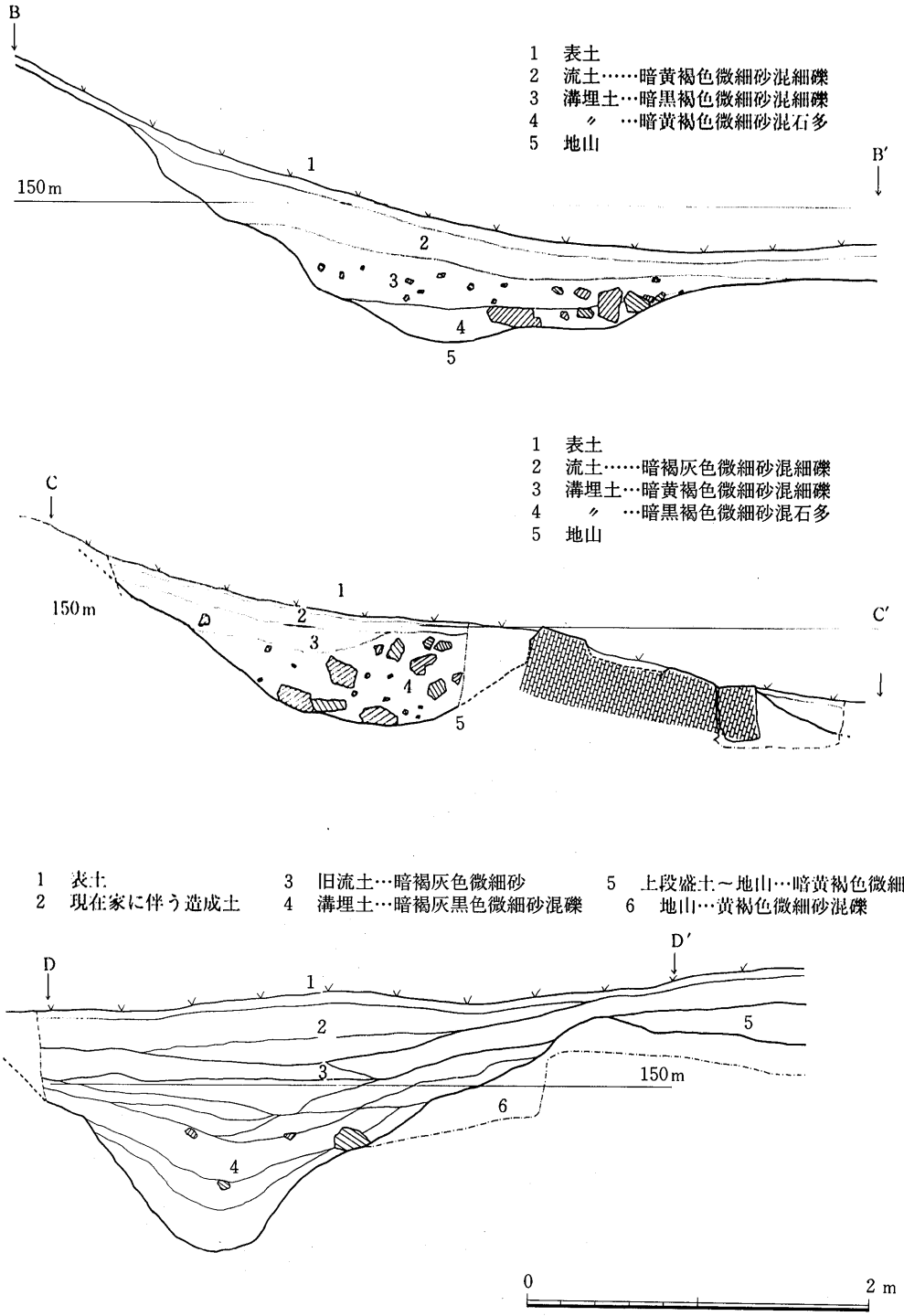
第４・５・６トレンチでは、下段平坦部を面的に調査した。第１トレンチは抉の底部にあたり、流土下に直接地山が検出されたが、本来はその北半に盛土が存在したものと思われる。抉部の西側法面で全長1.2ｍの石組が検出された。その方向は北5.3ｍの列石と斜交し、むしろ抉の長軸に沿っている。１段１列であるが石材は小さく雑な作りで、地山との間隙に流土状の土層が認められる。以上のことから、この石組は城跡と無関係の抉に伴う護岸と判断される。第５トレンチでは、盛土と地山削平部との境界を平面で確認した。盛土上部には若干石材が含まれるが、ここではＢ地点の様に顕著な量でない。その盛土を僅かに切る東西1.8ｍ、南北1.7ｍの不整形の土壙１を検出した。深さは15cm程で、平坦な底部の片隅が焼け、炭灰を伴っていた。火床ではあるが、共伴遺物もなく時期性格不明である。第６トレンチでも盛土・地山の境界を平面で確認した。盛土の幅は想定される本来の壁面（列石）から約10ｍで、西のトレンチとほぼ同様である。検出した土壙はかつて南に広がっていたブドウ棚に伴うものである。



第20図　Ｄ地点　第１トレンチ石組

ｄ）上段裾の溝（第16・21図）

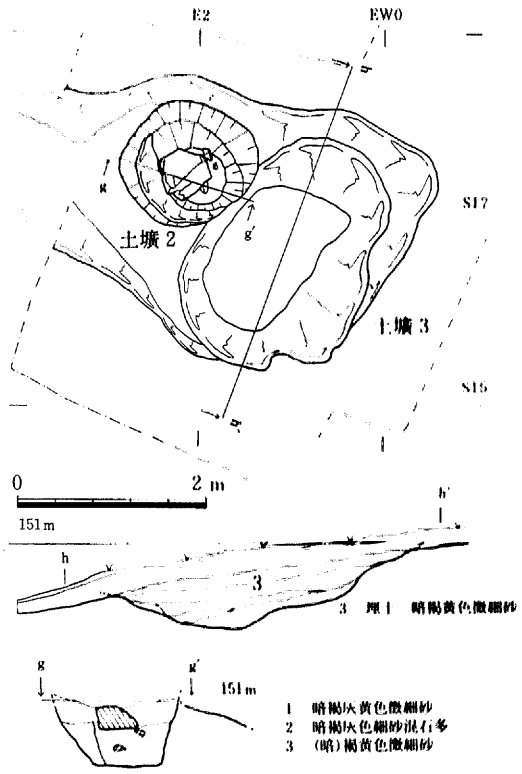
下段平坦部の山側端で２本の溝を検出した。溝１は上段壁面に沿って、西から続くもので上段の隅部(第８トレンチ)で終り、そこでの谷側肩は地山の岩盤である。下段平坦部からの深さは34～45cm、上段肩部から1.6ｍ内外を測る。溝底のレベルは、西の第５トレンチが東の第８トレンチ部より25cm程低い。埋土は、暗黒灰褐色の有機質の多い微細砂で、直上上段の露岩に由来すると見られる20cm大の石を顕著に含み、一気あるいは連続的に埋まった状況が窺える。共伴遺物はない。その東の上段裾部では第９・10・11トレンチとも溝は確認されず、地山削り出しの上段壁面だけが続いている。一帯の壁面傾斜は、現状で20～28度を測る。溝２はその東



第21図　上段裾の溝断面

の鞍部に沿うものである。一端は第12トレンチ付近にあり、ここでは幅４ｍで、周囲の平坦部より50cm程低い大きな窪み状をしている。南に下って第13トレンチでは西から上段壁面が迫って幅1.4ｍの溝状となり、必然的に深さを増していく。また、壁面に沿う短い枝溝が合流する。さらに南の第14トレンチでは、稜線も近く、西の上段壁面をそのまま壁面とする深さ1.3ｍのＶ字溝となり、そのまま稜線を抜けることはまず間違いない。溝底のレベルは、北の第12トレンチに比べ第14トレンチが、25cm程高いが、仮に水がたまるとすれば、下段盛土を越えて北に流れる前に南に抜ける構造である。埋土は、有機分を顕著に含んだ暗褐灰黒色の混礫微細砂で、遺物は一切検出されなかった。

従って、この２本の溝の時期は断定出来ないが、有機質埋土の状況からすれば、一見漠と新しそうな印象を持つものである。一方、その位置からすれば外郭線に本来伴うものの可能性も指摘出来る。つまり、二つの溝とも上段壁面を強く意識した位置であり、逆に第14トレンチ部はともかくとして、現状での上段壁がこの溝の掘削によって生じたとは考えにくい状況である。また、この溝の機能を考えるとき、直ちに思い浮べるのは、地山削り出しである上段壁面を伝う雨水を受け止め、下方の版築盛土部の流失を未然に食い止める役割りである。最も流水が集まり易く雨水に弱い内折部の背面に窪みを作り、溜り水を水門のある谷に流す役割が理解される。この様に考えるなら、仮に後世のものとしても、下段部の維持を目的とした遺構である可能性が強い様に思われる。



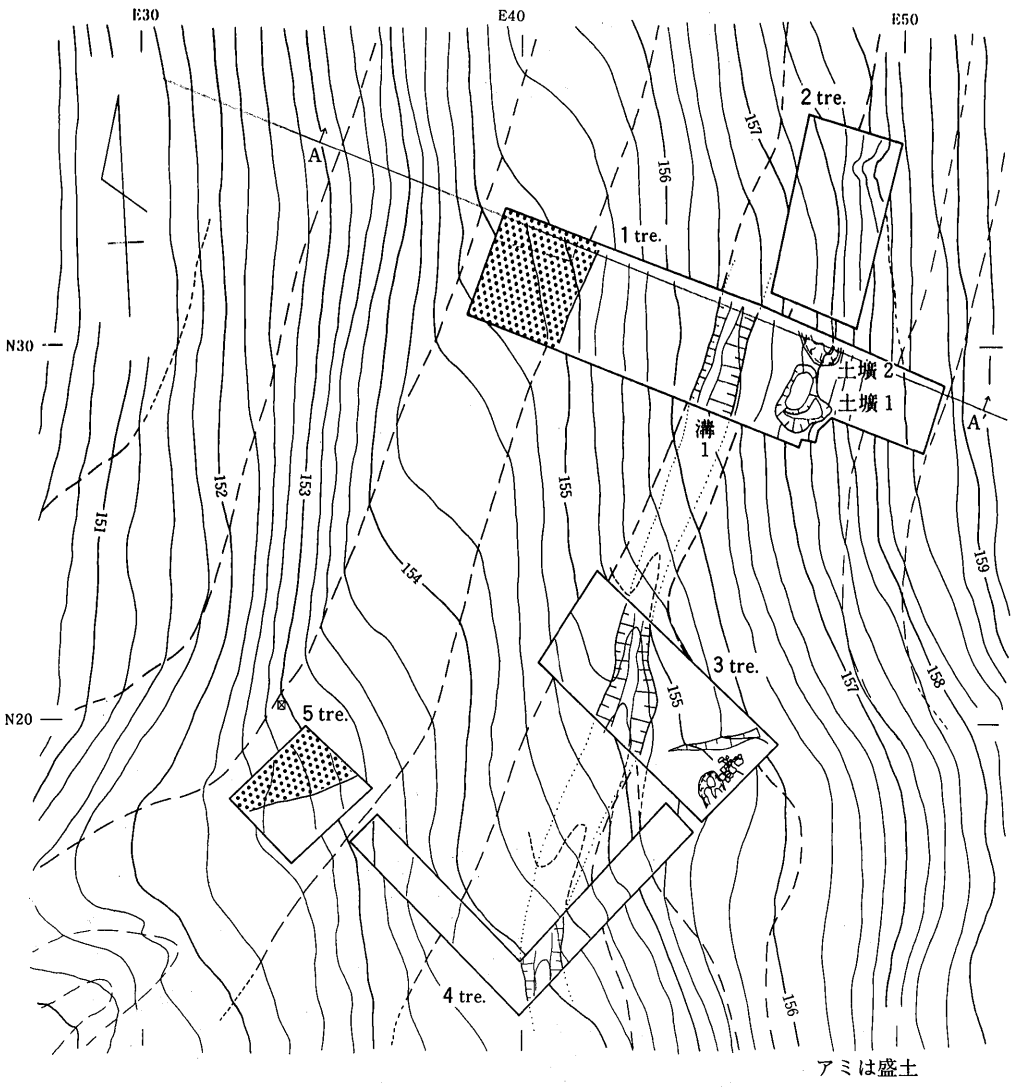
第22図　D地点　第15トレンチ土壙

ｅ）上段平坦部（第16・22図）

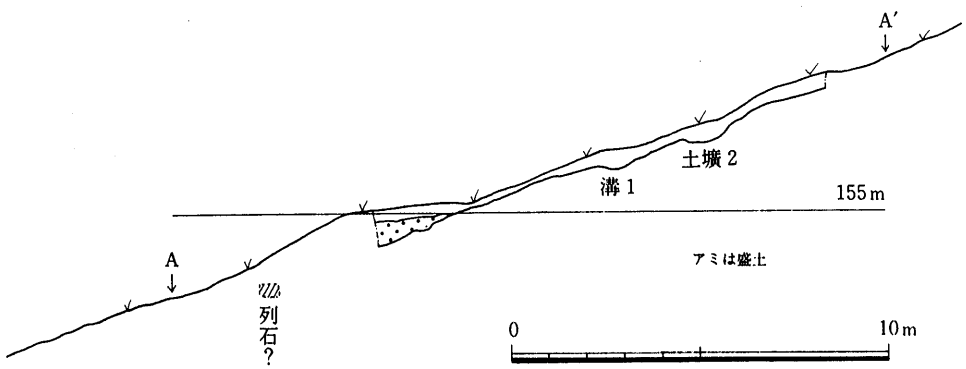
上段平坦部は基本的に地山面である。下段程は平坦ではなく自然地形そのものとの観もあるが、第５・15トレンチ間では平坦面に斜交する節理方向を持った風化岩層があり人為的な地山削平も若干予想されるほか、第14トレンチでは確実な地山上に25cm程の厚さでやや汚れた地山類似土が確認され、地山そのものである可能性と共に、平坦部成形時のならし土的盛土の可能性がある。なお、これは南の現民家に伴う僅かな

造成土とは明らかに区別される。第15トレンチでは2基の土壙が確認された。土壙2は、直径1.2m、深さ0.8mを測り、土壙3を切っている可能性が強い。中央部の埋土下層で鉄滓が一点出土し、上層には石材を伴っている。埋土下層の壁面側の汚れは少なく、形状と共に一見大きな柱穴を思わせるが、少なくとも東4.5mの内には続かず、またそれ以上の柱間をとると西へ延びる可能性は薄い。土壙3は、南北2.9m、東西1.9m、深さ0.8mを測り、埋土は地山攪乱の暗褐黄色の混細礫土で、共伴遺物はない。いずれも時期性格不明の遺構である。また、関係は不明であるがこれら土壙の掘り方とは別に、一帯が浅い土壙状に20cm程窪んでいる。第16トレンチの土壙4は、先のものと異なり、地山が僅かに汚れる程度で浅く、木根跡の可能性すらある不明瞭なものである。

(3)E地点の発掘成果（第23図）



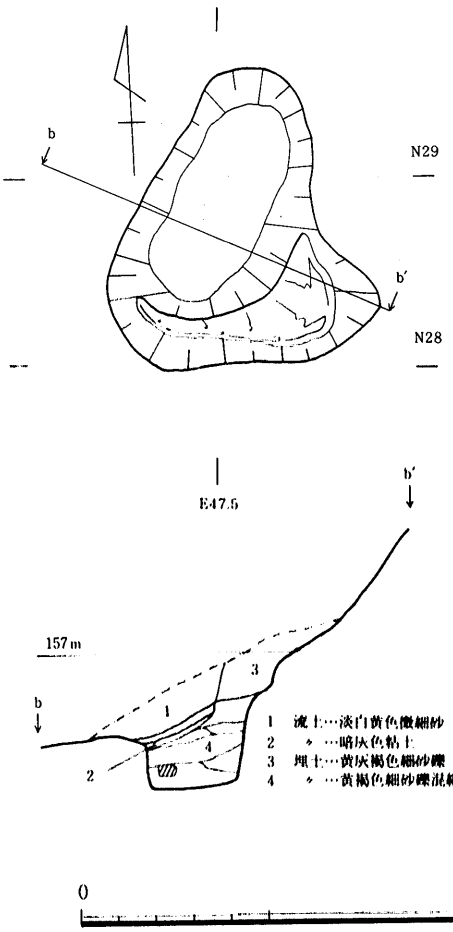
第23図　E地点　全体図



第24図　E地点　外郭線断面

a）第1・2・5トレンチ（第23・24・25図）

第1トレンチは下段平坦部から上段上方の斜面にかけて設定した。下段平坦部では、表土下まもなく盛土を検出した。この盛土は、基本的に黄褐色の混細礫土による版築で、地山上の最下層は、有機質が多く暗灰色で版築によらない盛土が厚さ15cm程認められる。検出平面での地山との境界は上段裾にあり、下段平坦部がすべて盛土によって造成されていることになる。一方、上段壁面以上の外郭線は、総て地山削り出しである。検出した上段壁面の傾斜は25度を示す。上段平坦部も狭いが、その肩部に沿って溝1を検出した。現状で幅約1m、深さ15cmを測るが、平坦面の流失あるいは肩部の後退が多分に考えられる。埋土は、地山に類する淡褐黄色の混細礫土である。上段平坦部の直上斜面では土壙を検出した。土壙1は主体部の幅0.9m、長さ1.7mの外郭線に沿って長い楕円形で、山側が浅い段状に張りだしている。深さは、山側で75cmを測り、埋土下層は黄褐色の混細礫土で僅かながら一様に炭粒を含み良く締まっている。上層は締まりのない流土で、その下部にこ

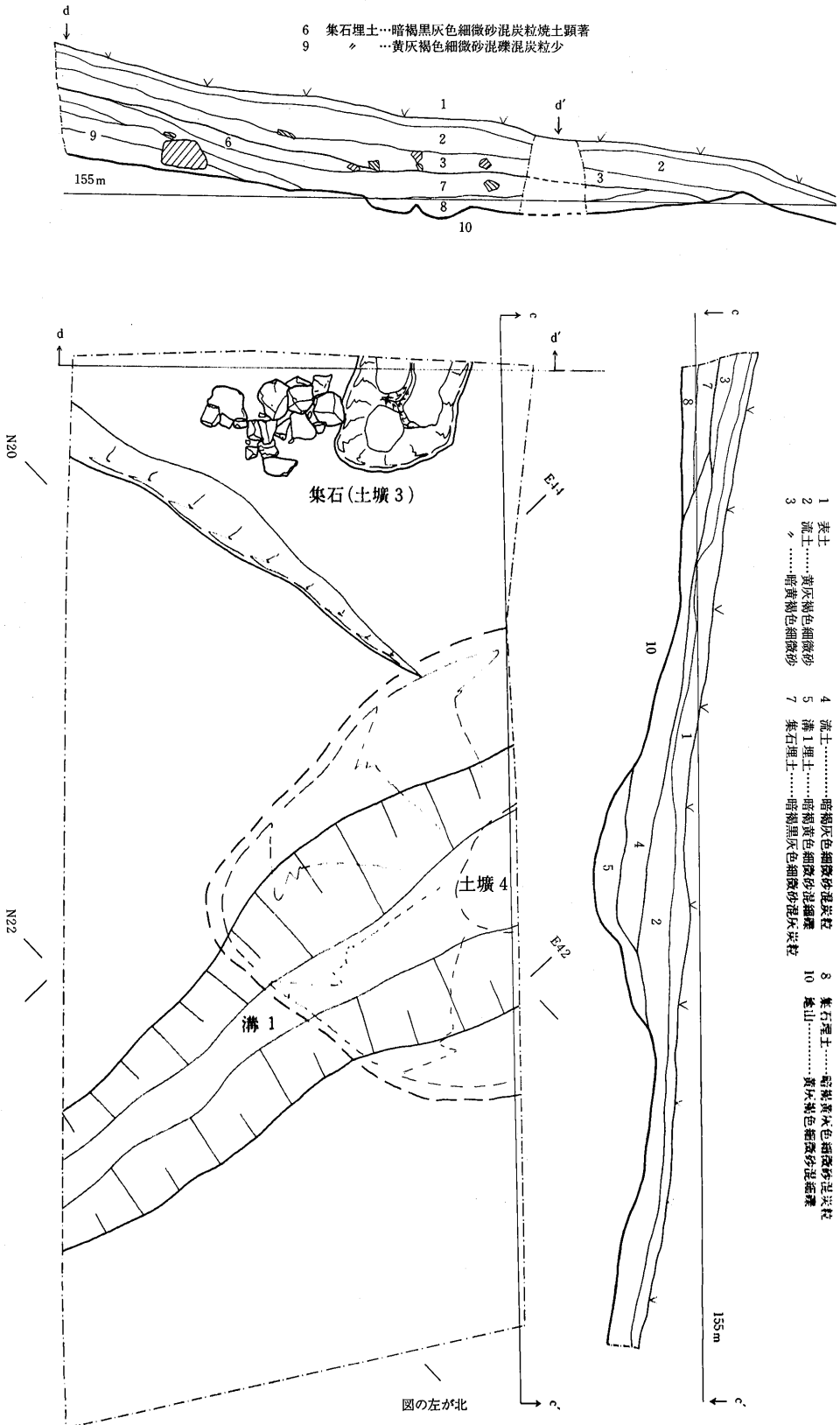


第25図　E地点　第1トレンチ土壙1

の部位が水溜となって形成されたとみられる粘質シルト層が認められる。確実な柱跡は確認されないが外郭線に沿う柵列の下部構造の可能性があるため、その北延長に第2トレンチを設定したが、そこでは遺構は確認されず、一部に露岩を見せるな地山が続くのみである。なお、土壙2は、浅く土壙1に比べ不明瞭なもので、むしろ木根跡の可能性もある。土壙の上方は地山斜面が続くが、トレンチの上端には後世の道跡がかかっている。第5トレンチは折部直上の下段平坦部に設定したものである。柵列があれば柱穴が必要な位置であるが、トレンチの内には確認されなかった。盛土と地山の平面上の境はここでは上段裾よりやや外に引いた位置で、やはり版築の下に暗灰色盛土が認められる。

b）第3・4トレンチ（第23・26図、図版第12上）

第3トレンチは上段平坦部上の上段構造変換部に設定した。平坦部の最も奥まった斜面裾では集石遺構（土壙3）を確認した。まずここでは、本来平坦な地山の山側を深く削り、かなり水平に近い面が造成されている。その範囲は、トレンチ外に及ぶため不確定であるが北側端部の一部と見られる10cm以下の段を確認した。この平坦部には、西に深さ10cm以下で浅く不定型な掘り込みがあり、その東に集石が認められる。各石は20cm以下の割石もしくは自然石で、ほぼ地山面に接している。石の及ぶ範囲は東西90cm、南北60cmないしはそれ以上で、石の間隔もつまり、無作為に投げ込んだ結果とは思われない。また、各石とも焼けた形跡等は確認されない。この平坦部は、暗褐黒灰色土で埋まっている。その埋土の及ぶ範囲は広く、造成平坦部端の段を越えて西2.5mに間で及んでいる。厚さはトレンチ北東隅が最も厚く75cmを測り、これを頂点とする扇状地状に薄くなる。灰・炭・焼土を顕著に含み、内には純炭層に近い間層もあり、古代の枠内とも思える素焼き土器の細片を伴っている。この土層は、北東斜面からの流入もしくは南に続く平坦部からの掻きだしによって徐々に堆積したと見られるが、西の掘り込み周辺下層に焼土が多いことから、ここに簡単な炉があり根こそぎ整理された結果の可能性もある。その西には、浅い窪み状の土壙4がある。埋土の特に南部は先の土壙3の埋土に近似し、それを切っているかあるいは一連のものとして形成されたとみられるやや不明瞭な遺構である。その北部の埋土上層付近、つまり土壙3の埋土とは明らかに別土質の部分（逆に後述の溝1の埋土上層の可能性もある）で平安時代後期の須恵質土器碗（第76図－2）が出土した。その土壙4に切られるか、あるいは土壙3の埋土に覆われる形で、第1トレンチから続く溝1の延長を確認した。ここでは、第1トレンチの上段肩の延長よりはやや城内に引いた位置で、新たに始まる壁に接している。深さ30cm程で、埋土は暗褐黄色の混細礫土である。その延長を確認するため第4トレンチを設定したが、新たに始まった壁面裾にあたる位置で検出し、その後城内に向かって延びる方向性を示している。ここでの埋土は、下層が暗黄褐色であるのに対し、上層は炭粒を顕著に含んだ暗褐灰色で、上方の土壙3・4の埋土に由来する可能性がある。



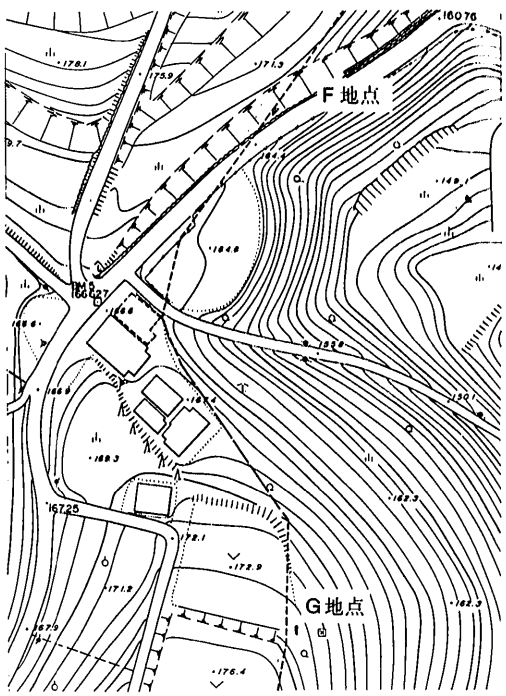
第26図　E地点　第3トレンチ

さて、この溝1は、第1トレンチでは上段平坦部にあり、これも版築盛土の流失を防ぐものと考えれば、理にかなった位置といえる。その延長第3トレンチ部は先に記した様に上段構造の変換部に位置し、ここで新たに始まる壁とはD地点での上段壁面に相当する可能性がある。そうすれば、この溝は段を横切ることなく上段から下段に降り、溝の位置においてもD地点に対応する状況に変換した格好となる。この様に考えれば、埋土の状況つまり埋積過程は異なっても、本来はD地点と一連のものとして計画的に掘削された可能性も考えられる。また、土壙4の位置以下の埋土上層の状況からすれば、明らかに溝は土壙3の埋土形成に先行し、しかも溝が埋まり切る前に土壙3の埋土堆積がなされた可能性があり注目されるが、土壙3の時期性格ともただちには決し難い。須恵質土器片は、いずれにしても溝と重なった位置からの出土であり、仮に土器の示す時期にこの位置に堆積したとすれば溝の時期は平安後期以前ということになり、またその時点ではなおこの部位が窪んでいた状況が想定されなくもないが、結局不確定要素が多すぎ溝の時期を細かく特定する材料にはなりえないであろう。

6．東谷の露出列石

(1)位置と外郭線の状況（第27図）

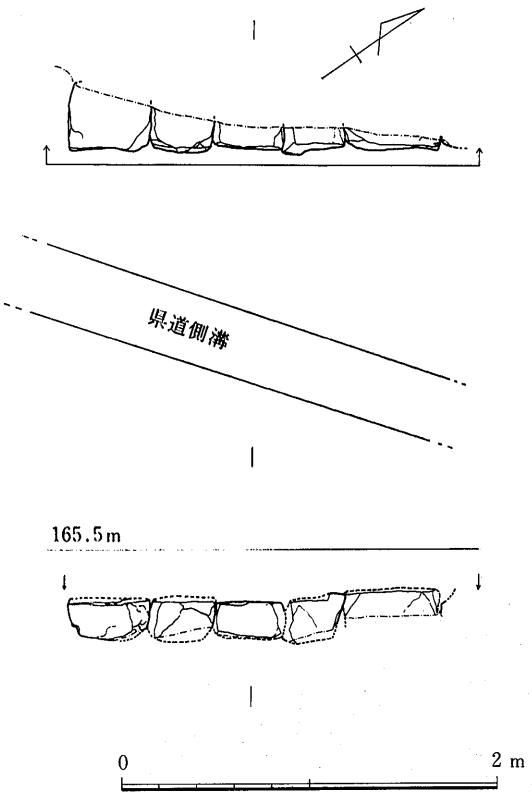
外郭線は城外に向かって大きく突き出した格好で大廻山の東ピークの頂上部を取り巻き、再び城内に向かいつつ急斜面を降り、城跡東側中央の谷の谷頭に至る。この谷に面する一帯は、本城跡の外郭線の内でも、最も改変の大きな個所で、現状で下段平坦部と壁面を確認出来ない部分を唯一含んでいる。こうした改変の結果、列石が露出している地点が2か所ある。一つは、F地点とした県道北法面で、発掘調査前から確認されていたものである。現在、北東約60mの位置には選果場があるが、そこは谷頭の最も奥まった所で城門も予想される。もう一か所のG地点はそこから90m程南、小廻山に向かってた再び昇りだした位置で、重機によって階段造成された畑の東縁となっている。



第27図　F・G地点　位置図

②F地点の露出列石（第28図、図版第5下）

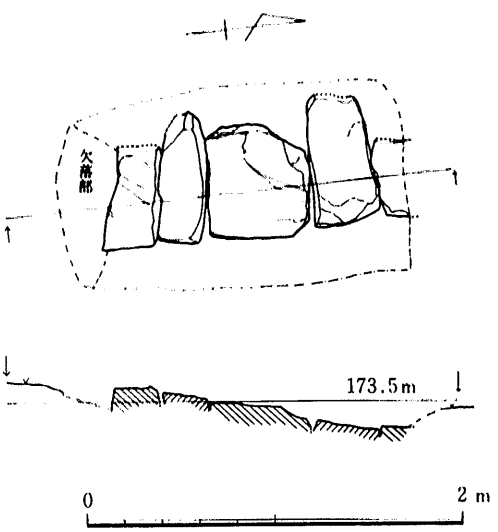
6石程が露出している。谷側の外縁上角を、平面立面とも揃え、直線を作りだしている。各石の長さは30～50cm、背後が版築盛土に覆われているが、幅もこれに近いとみられ、厚さはいずれも20cm程である。各石は比較的大きさが揃い、また本城跡の列石の内ではやや小形めの石材といえる。やはり自然面を複数面に残す割石材である。石種は、南から3石目が砂質ホルンフェルスで、他は花崗斑岩である。立面観での傾斜は、南からの3石がほぼ水平、北が8度程で、異種石材の入るこの位置が立面観での微妙な折れにあたっている可能性もある。いずれにしてもかなり緩やかな傾斜で、北へは、さらに大きな傾斜変換点を経て、急斜面を昇るものと見られる。また、城門の候補地でもある南へは、かなり長距離に渡って、水平が持続する状況が窺える。



第28図　F地点　露出列石

③G地点の露出列石（第29図、図版第12下）

南は現状で欠落するが、その位置には攪乱土が認められ、本来は石材があったものとみられる。各石の長さは25～54cm、奥行60～70cmである。ここでの特徴は、他に比べ列石の奥行が広く、細長い石材の小口面を外に向け直線を作りだしていること。また、外縁面やこれに対向する城内側の小口面が自然面を残すのに対し、両側面が割石面で、長方形で大きく扁平な石材を横割した状況が顕著に窺われる点である。石種は北端がホルンフェルス、他が花崗斑岩である。なお、立面傾斜は10度程を測る。



第29図　G地点　露出列石

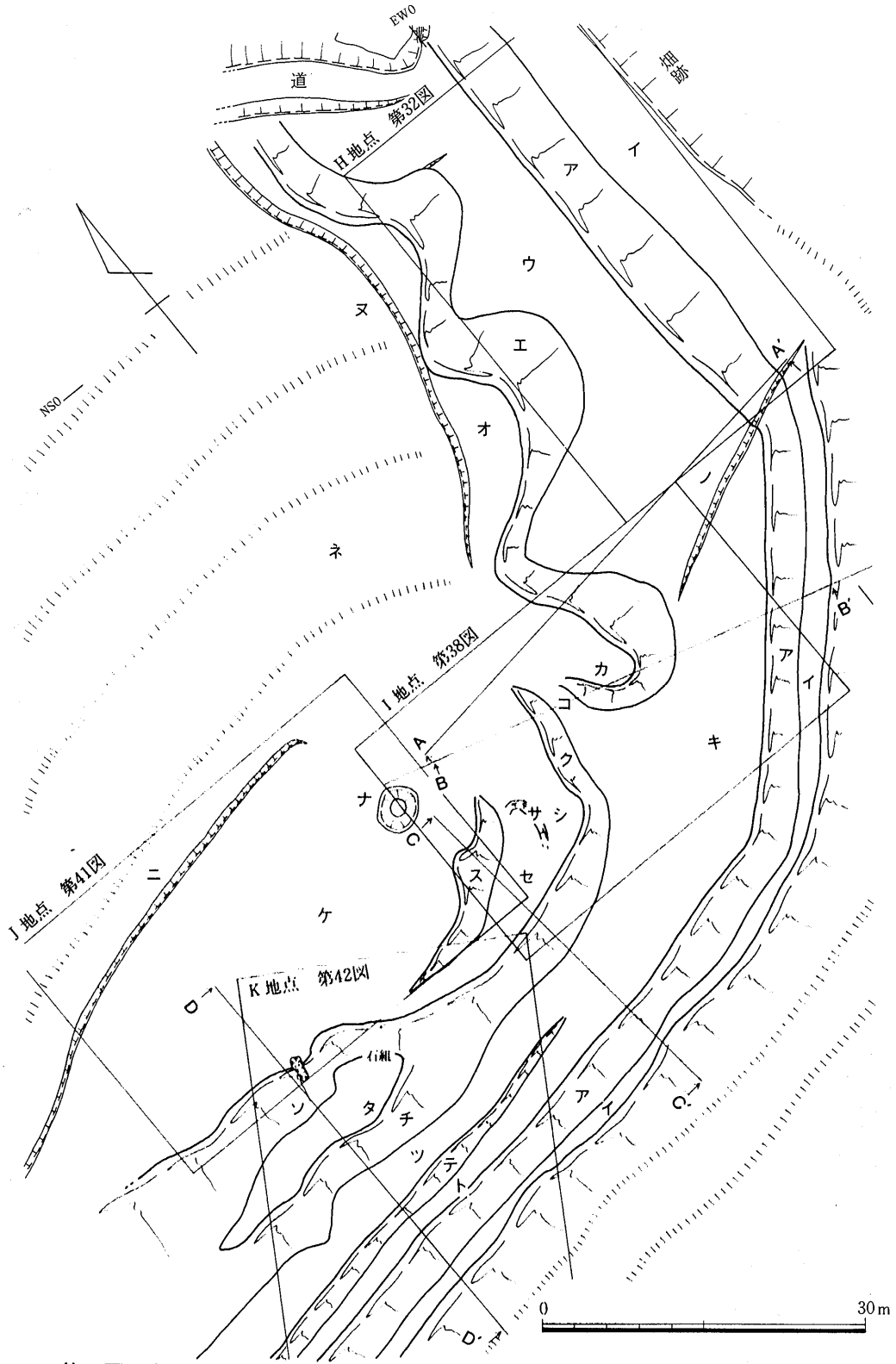
7．小 廻 山

⑴位置と外郭線の状況（第30・31図）

G地点から外郭線はほぼ一直線に昇り、標高182m付近まで来ると階段造成畑も途切れる。造成畑南の沿道を境として、小廻山山頂一帯にかけては重機が入った形跡もなく、外郭線の遺存は良好である。先ず、列石の施される下段壁面(ア)をみると、一帯での高さは現状で2.0m内外とほぼ一定である。北の造成道の端から42mは、ほぼ一直線に、10度の傾斜で昇る。ここで、140度で折れ、同様の傾斜で20m程行って弱い稜線上に出て、しばらくほぼ水平に進み再び降りだす位置に南の折れがある。この折の角度はやはり140度程で、現状での壁面裾を測点として東の折から44mの平面距離を測る。その後20m程は２度程で緩やかに下がり、そこで傾斜の変換点を持って７度の傾斜で引き続き直線を描きながら降りていく。その傾斜の変換点付近が、小廻山山頂点に最も近い位置で、約32mの距離を測る。つまり、この壁面は頂上から外にやや下がった位置を通過し、大きく２つの折を描きながら頂上部を取り巻く格好になる。この壁面の前面には、平坦部(イ)が認められる。その幅は、東の直線部にあたるH地点では、現状で6.5m程を測るが、耕作痕が認められて本来以上に広げられた可能性があり、その下方にも明らかに後世の畑段が認められる。一方、南東と南の直線部は無開墾で、壁面に平行する幅1.5m～2mの整った犬走状のテラスが観察される。下段壁面の上には下段平坦部が広がり、これを含めて上方には複雑な段構造が認められ、その状況も場所によって変化する。

東のH地点では下段平坦部(ウ)は、必然的に下段壁面と同じ傾斜を持ち、その幅は7.0mから22.5mと振幅を持っている。これは、その上の上段構造の変化によるものである。上段壁面(エ)は、高さ1.5～2.5mで、下段肩の直線に対し45度程の角度を持って城外に張りだし、隅角を持ってまた城内に引くという状況を繰り返している。つまりここでも、D地点同様、懐の深い下段平坦面とその側部に突き出す上段平坦部(オ)が造成されている。上段平坦部の大半は現在畑(ネ)となっており、本来の肩部から少し内に引いた位置に畑の東を画する低い段(ヌ)が認められる。また、下段平坦部も一部が耕作され、その南端にも浅い段(ノ)が認められる。

南東部のI地点付近では、下段平坦部は南の折の北上方一帯(キ)で極めて平坦かつ水平となる。付近が弱い稜線上に当たることも関係するとみられるが、その範囲はおよそ長さ25m、幅10mを測る。上段壁面(エ)は、この上方で次第に高さを減じ、大きく内に折れ不明瞭となる。また、西からは対応する壁面(ク)が延び、やはり内に折れ高さを減じて行く。つまり、ここ(コ)は下段平坦部が大きく内側に窪んだ、あるいは下段から最上段の頂上平坦部(ケ)に至る通路状の地形を呈している。仮に、通路に例えれば間口10m、奥の通路部の幅2.3mを測る。またその結果、東側に幅12m、高さ外側1.8m、同内側0.5m足らずの短く扁平な土塁状の地形(カ)を認めることができる。通路状部の西では、H地点での上段壁面に相当する(ク)の壁面と頂上平



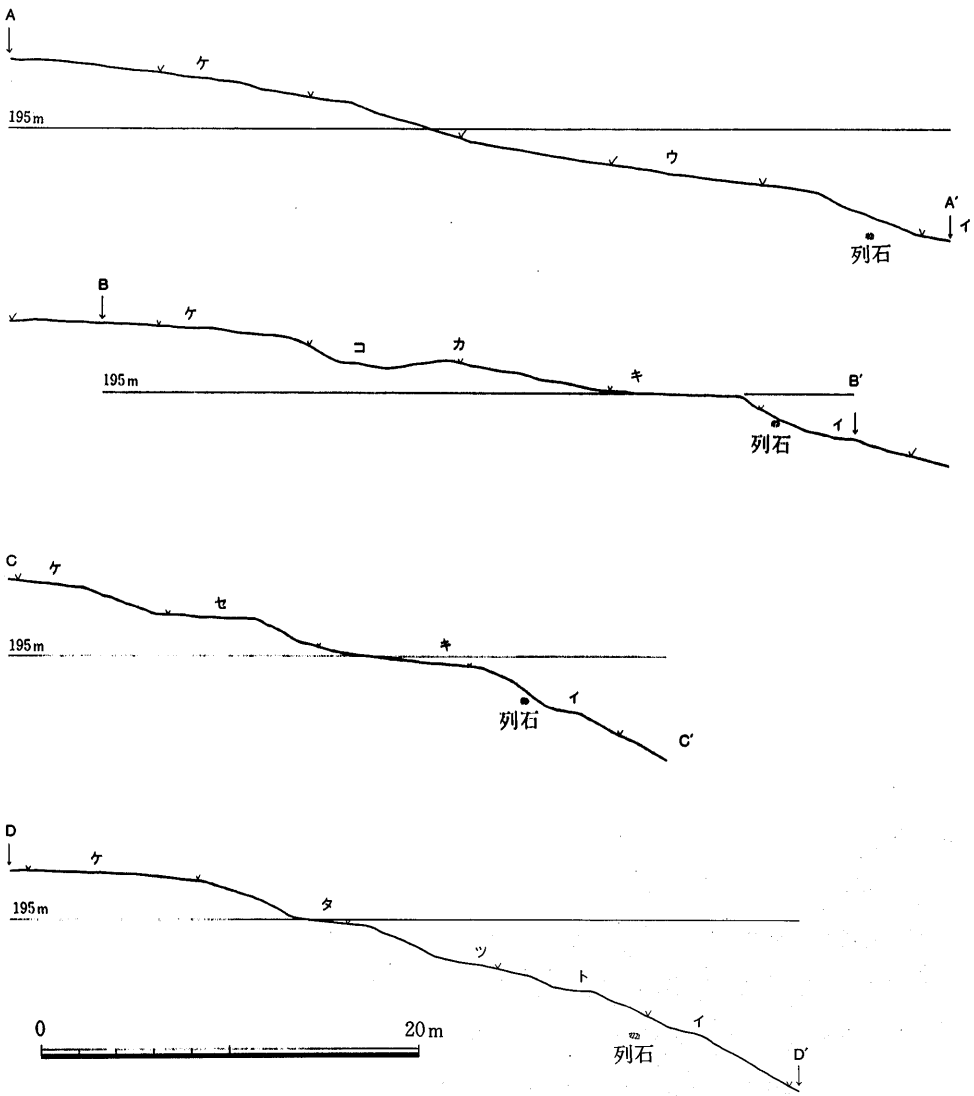
第30図　小廻山外郭線状況

坦部(ケ)の間に別の平坦面(セ)が認められ、背後に長さ20m、高さ最大1.3mの壁面(ス)がある。これは東西に次第に高さを減じ、平坦部(セ)は頂上平坦部(ケ)と通路状に繋がる。特に東部では、(ク)の壁面と背中合わせの傾斜(サ)が認められ、その間は幅2.5mの断面かまぼこ状の地形(シ)を呈し、小規模ながらすぐ東の状況を繰り返している。

I地点北西部とJ地点は、小廻山山頂平坦部(ケ)で、標高199.0mを測る山頂点の東に三角点と享保八年銘の八大龍王の碑がある。三角点付近から尾根筋に沿って西45m程は4度以下の傾斜で、その稜線をはさんだ南北約18mの範囲は極めて平坦な地形となっている。頂上点には大きな攪乱壙(ナ)があるが、松根油を採取した跡である。北に開墾に伴う低い段(ニ)があり、以北に耕作痕が認められる。なお、ここは城内最高所で、また城跡が最も南東に張りだした位置で、樹木がなければ360度の眺望が良好である。北は、遠く那岐山を望み、眼下には備前国分寺や古代山陽道駅想定地のある山陽盆地高月一帯、また足下に一の木戸のある谷を中心に城内各所を見下ろす。東は古代山陽道の通過する和気町方面の谷や熊山、南は内海に通じる湿原が広がっていたとみられる現砂川流域の一帯を眼下に、遙かに小豆島や四国五剣山、南西は古代の津が想定される百間川の河口付近、また遠く児島を見渡す位置である。

山頂平坦部南のK地点では、下段平坦部(キ)の延長、外郭線の降下が急になる辺りで新たに段(テ)が始まり、下段肩部と平行しながら、西に向かって徐々に1m内外にまで高さを増し、上段壁面としての体裁を整えていく。この様にして区切られた下段平坦部(ト)は、幅2m程を測る。上段壁面の上には上段平坦面(ツ)があり、おのずから、東の下段平坦面(キ)と通路状に連なっている。その山側端は、東の(ク)から連続する斜面(チ)であるが、これが内へ2.0m程くびれて、(ツ)の幅が5m程に広がる個所がある。その上方、頂上平坦部との間に平坦部(タ)がある。これは、東西の長さが25m、幅4mで、東西は斜面で閉じ込まれている。やや不明瞭ながら、下の(ツ)の平坦部のくびれと合わせ二段に渡って城内にコの字に引いた格好で平坦部が造成されている様にも観察される。この(タ)の平坦部の北東最奥部には、石組が露出している。なお、上の壁面(ソ)の高さは1.5m～2.0m、下の壁面(チ)の高さは1.7mを測る。K地点のさらに西は、頂上平坦部の肩が自然地形の中に埋没し、上下二段(ア・テ)の段構造、つまりE地点と同様の外郭線構造となってしばらく続いている。

以上の様に小廻山山頂付近では、明らかに後世の開墾によるものを別として、複雑な段構造が確認されるが、各部位の断面構造（第31図)を改めてみれば、東直線部では2段、南東部では基本的に3段、南部では4段を数える。下段壁面裾から最上平坦部肩までの、比高は4mから8mとばらつきがあるが、その幅は、H地点では上段くびれ部を機械的に結ぶ線を基準とすれば、どの位置でも24～26mを測りほぼ一定である。また、各部位での最上段壁上角は、稜線からおよそ数メートル外に引いた位置にあたり、以下の段や平坦面は総て城外に向いて認めら



第31図　小廻山外郭線断面　　カタカナは平坦部のみ

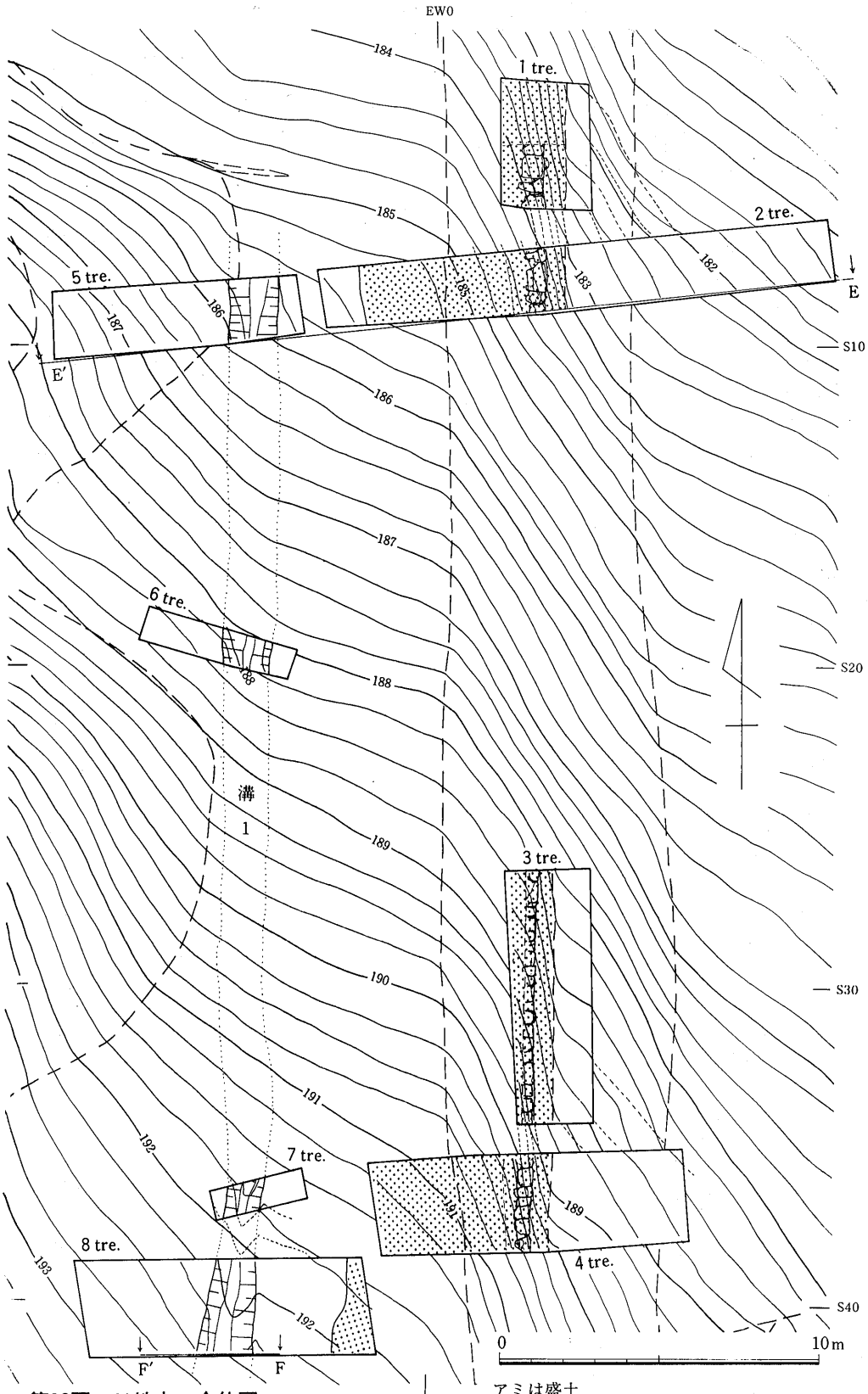
れる。

こうした段の造成経緯については、神籠石状列石の伴う下段はともかく、その全部についてまた細部に至るまで城跡に伴うものとして断定することはできない。それは、八大龍王碑の存在が象徴している様に、後世の改変も十分に予想されるからである。しかし、以下の様に発掘調査の成果をも踏まえて整理すれば、その細部においては後世の改変が及んでいたとしても、大局においては本来的なものである可能性が指摘される。先ず、国有林以後の手開墾は、H地点の(ノ)以北と(ニ)・(ヌ)にはさまれた一帯にのみ認められるが、開墾部においてさえ、各段は未開墾部から連続的に確認可能で、逆に開墾に伴う段が明瞭でしかもそれは規模の点で遙かに小規模であり、開墾当時からの地権者の証言からも、新しい開墾に伴って形成された可能性は完全に否定される。これと同様に、こうした段の造成が極めて大掛かりなものであることからすれば、古い時代の耕作程度の改変によるものの可能性も考えにくく、またその構造も段畑にしては不合理であり、発掘によっても国有林以前の耕土は確認されない。次に例えば常楽寺関係の中近世の建物建造に関わる可能性であるが、確かに古代末以降の遺物が散布しているとはいえ、大掛かりな建物が存在したにしては少量で、瓦も一点も出土しない。また、各平坦部の調査でもそれらしい遺構はなく、建物が仮にあったとしても小規模なものと考えられる。しかも、稜線上に基壇を形づくる格好にしては城内を向く側の段はなく、またあったものが開墾で飛ばされたとも考えにくい。その一方、ここでの最大の改変行為は、下段の造成そのものであり、各段は下段にきれいに平行しない部分もあるとはいえ、全体として造成の及んだ幅は、先述の通り下段壁面を基準に一定で、一連の計画造成である可能性を示唆する。また、こうした構造が他の古代山城で確認されてないとはいえ、段が総て城外に向き、防御を主眼とする外郭線構造の一部と考えるのに十分であり、中世山城の郭構造にも通ずる複雑な段群構造も、防衛戦術上評価できる。しかも、その構成要素はこの地点だけではなく、城内各所で反復して認められるものである。また、発掘の結果、少なくとも（エ・ク・ソ・チ）の各壁面は総て地山削り出しであることが判明した。つまり、独立した段造成であれば、山側を削り谷側に埋めるのが簡便であるが、ここでは認められず、残土がもっと大掛かりに動いた状況が窺われ、その使途としては下段の版築盛土に用いられたと考えるのが、いちばん自然な理解のしかたであり、発掘された版築の状況もこう考えることと矛盾しない。

②H地点の発掘成果（第32図）

ａ）第１・２トレンチ列石と版築盛土（第33･34図、図版第13）

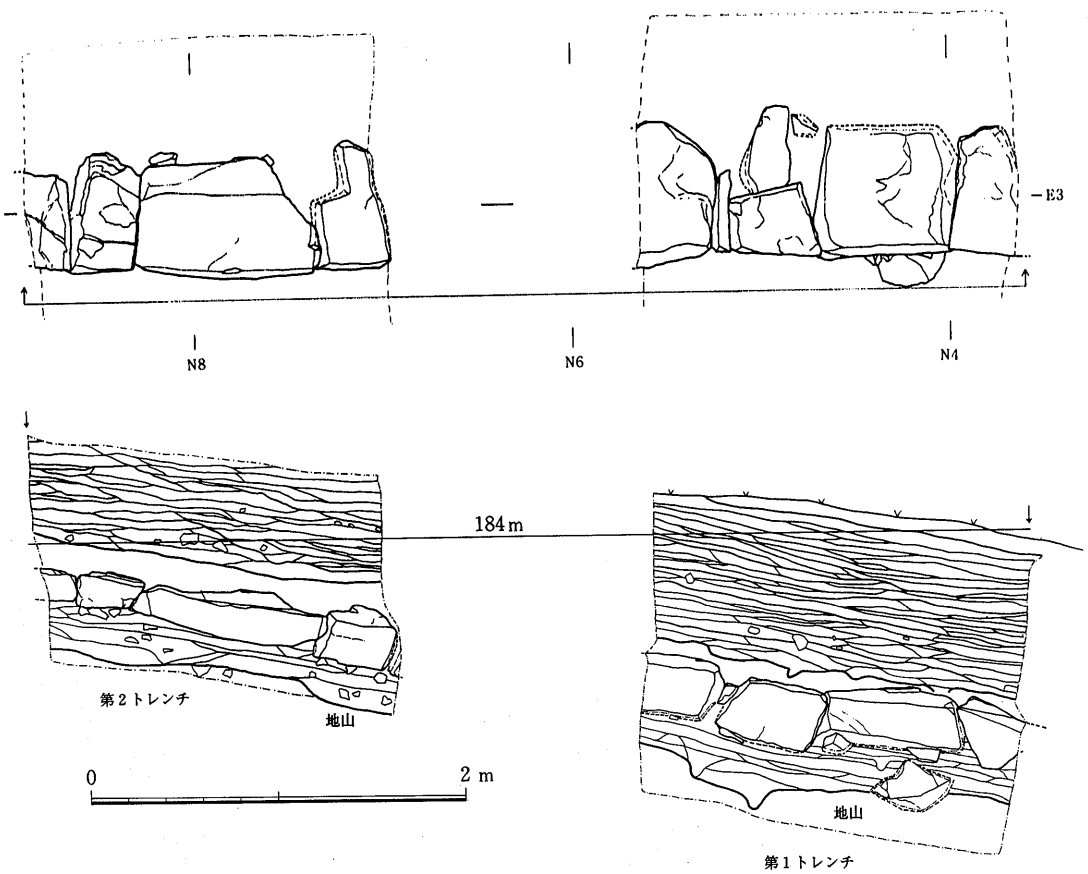
ここでの列石は、各石の長さ40～100cm、奥行40～75cm、厚さ20～35cmで、大きさ、形状、小口の向きなどは不揃であるが、小形石材の背後には控えもあり、列石幅としては概して70cmと一定している。石材は、一部に自然面を残す割石である。石材下には、厚さ15～20cmの置土



アミは盛土

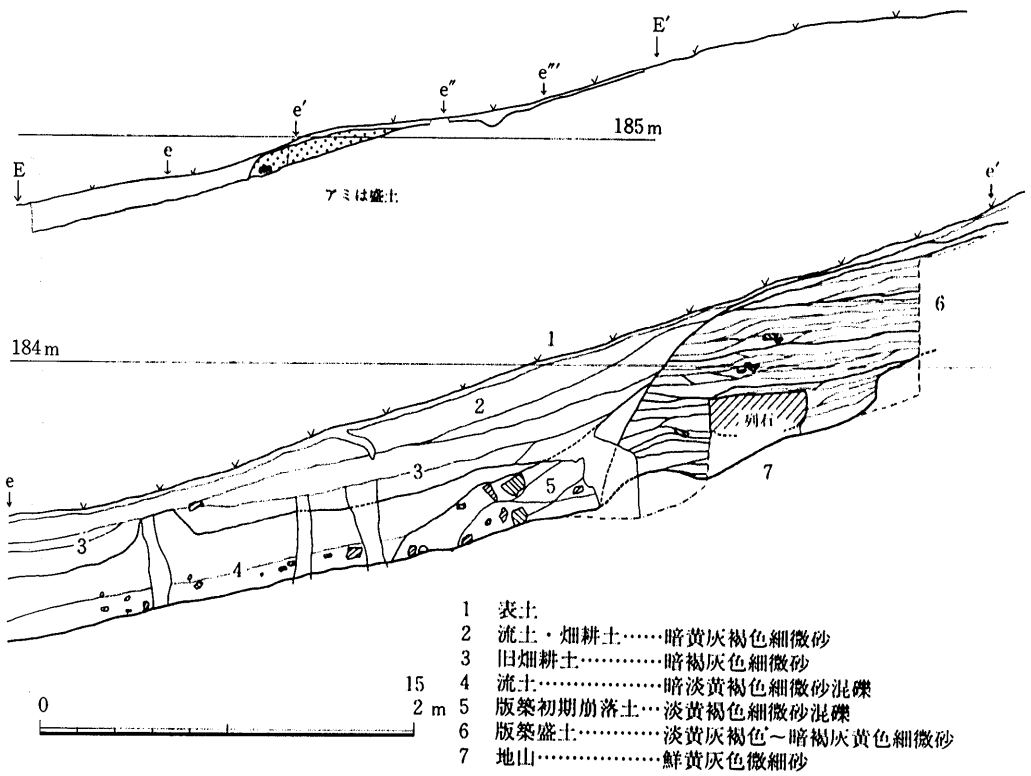
第32図　H地点　全体図

を伴い、外縁上角を平面立面ともに揃えている。置土は、上の版築と同様の暗黄褐色土で、良く締まりタタキによっている可能性がある。この置土の厚さは、城跡の内では厚い方である。列石の立面での傾斜は、10度であるが、最北の石はさらに傾いている。図示していないが、その北１ｍの下段壁面の検出に留めた場所で僅かに顔を覗かす列石上角部を確認し、それへの連続状況からして、この石から北は傾斜を変え、15度となることが判明している。その傾斜変換の一端を担う南側石材に関して、注目すべき状況が観察される。この石の直下には地山上に40cm大の石材が置かれ、他部から連続する置土が施された後に小石が咬まされ、これを基礎に本体石材が置かれるという特に入念な基礎構造を示している。また、石材上面の奥全面と一部側面にかけて、黒色有機物質が付着していた。さらに、石材の重なり具合からみれば、先ずこの石が置かれ、その後、上下方向に石材が置かれて行った可能性が指摘される。つまりこの石は、厳密に位置を定めた工程上の基準で、目印に顔料が塗られた可能性がある。なお、各石材の種類は花崗岩斑岩６に対しホルンフェルスが２の割りで一見無秩序に混在している。

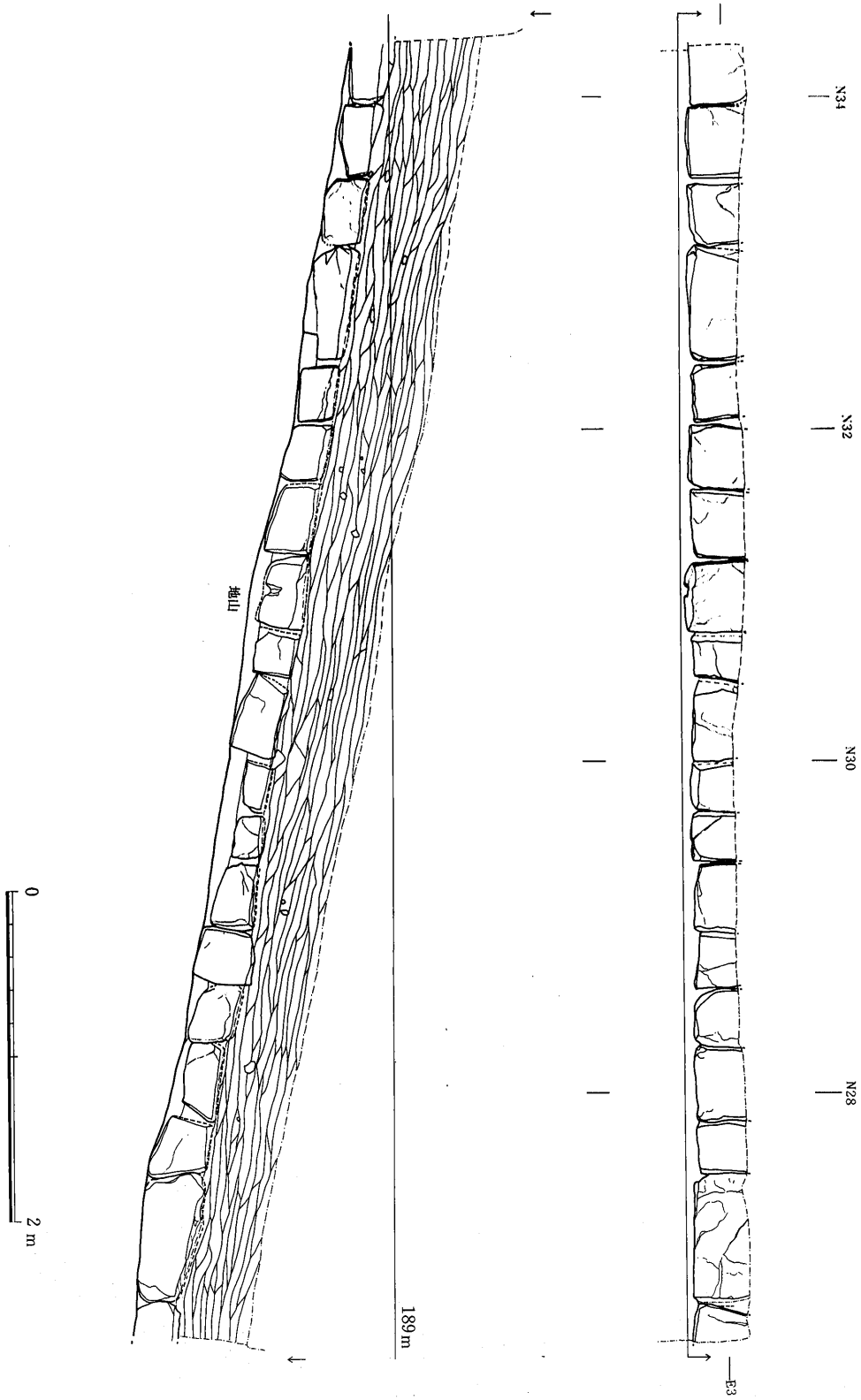


第33図　H地点　第１・２トレンチ列石

外郭線の構築に当たっては、先ず地山整形が行なわれた様で、特に列石構築部は幅１ｍ、谷側深さ0.2ｍ程の溝状窪みが認められる。先述の列石下の置土は、この溝を半ばまで埋めるといった関係になる。列石構築に続き版築盛土が行なわれるが、ここでも版築は、列石を覆込んでおり、本来の下段壁面裾は列石外縁の外方40～50cmに求められる。第２トレンチ上方では盛上の山側端部を確認し、盛土幅は約６ｍを測る。壁面の傾斜角は、その下部で最大70度程を確認した。高さは、第34図下の図では見かけ上１ｍ程となるが、現状での下段平坦部肩との比高は２ｍ余りあり、本来の肩部が流失し平面的に大きく後退した状況が窺われる。版築盛土は、概して暗黄灰褐色系の混細礫土で、土質からして付近の地山に由来するとみられ、良く締まっている。Ｄ地点の様に各大別層が鮮やかな色彩差を持つものではなく、大別層間の境界も不明瞭である。ただ大まかには、下層は有機質分が多い暗褐灰色系土、上層は黄白～灰褐色系土が主体で、中層は両者が入り乱れている。こうした大別層の内において明・暗、褐・灰・黄の強弱の点などで微妙な差を持った単位が互層構造を作りだしている。各単位の厚さは２～５cmを測りＤ地点よりやや細かい。列石に沿う方向での断面では、こうした版築の各単位が、水平ではなく列石上面の傾斜に平行し、しかも一連のものとして行われている状況が読み取れる。



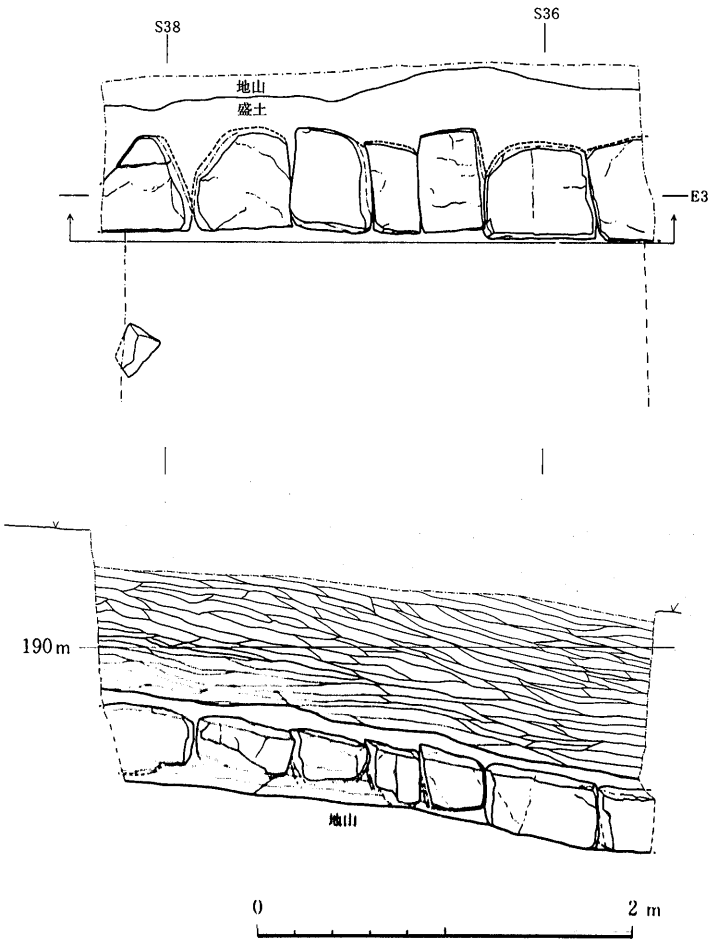
第34図　Ｈ地点　第２・５トレンチ　外郭線断面



第35図　H地点　第3トレンチ列石

b）第３・４トレンチの列石と版築盛土（第35･36図、図版第14･15上）

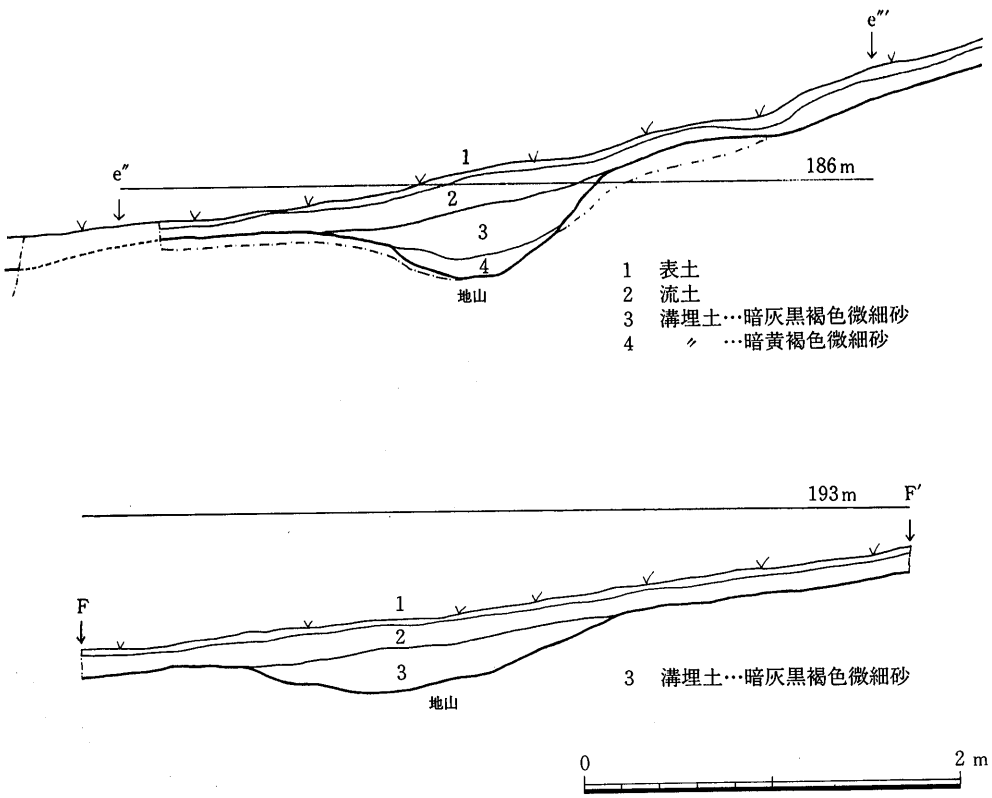
列石を構成する各石材は、長さ30～75cm、奥行第４トレンチでみる限り50cm内外、厚さ18～35cmの直方体で、多面に自然面を残すものもある。石材はやや小形であるが、大きさや形態のばらつきが少なく、その配列はやや隙間があるとはいえ歯状に整い、下のトレンチと好対照である。隙間の詰石はここでは確認されない。やはり外縁上角を揃え、きれいな直線を作る。グリッドラインに重ねてみれば、平面的には下のトレンチの列石から正に一直線であることが判かる。立面での傾斜は、同じく10度を測るが、これは間に最低二つの傾斜変換点と急傾斜部を想定する必要がある。列石下の置土は薄く、厚い石材は地山に接している。石種は、第３トレンチの北から２番目がホルンフェルスで、他は総て花崗斑岩である。第３トレンチの北から９・13・14番目の石材の一部自然面は風化が進み、火を受けている可能性がある。断面図は示していないが、ここでも列石は幅1.6m、谷側深さ20cmの溝内に構築されている。やはり、版築層に覆い隠されるが、第４トレンチではその壁面位置の地山上に25cm大の石材が認められる。第３トレンチ設定の趣旨は、他遺跡で確認される列石前面の柱穴の有無を長さ８mの距離にわたって連続的に精査して確認することであったが、鮮明黄褐色の明確な地山面が広がるのみである。盛土の平面幅は6.5mで、版築の素材や状況と合わせ下のトレンチと大差ない。なお、列石に沿う第３トレンチの断面は、列石を半分かけた位置であるが、各版築単位は列石上面にきれいに平行する。また、盛土工程の平面的な区切りは確認されず、一連のものとして盛土がなされた状況が窺える。



第36図　H地点　第４トレンチ列石

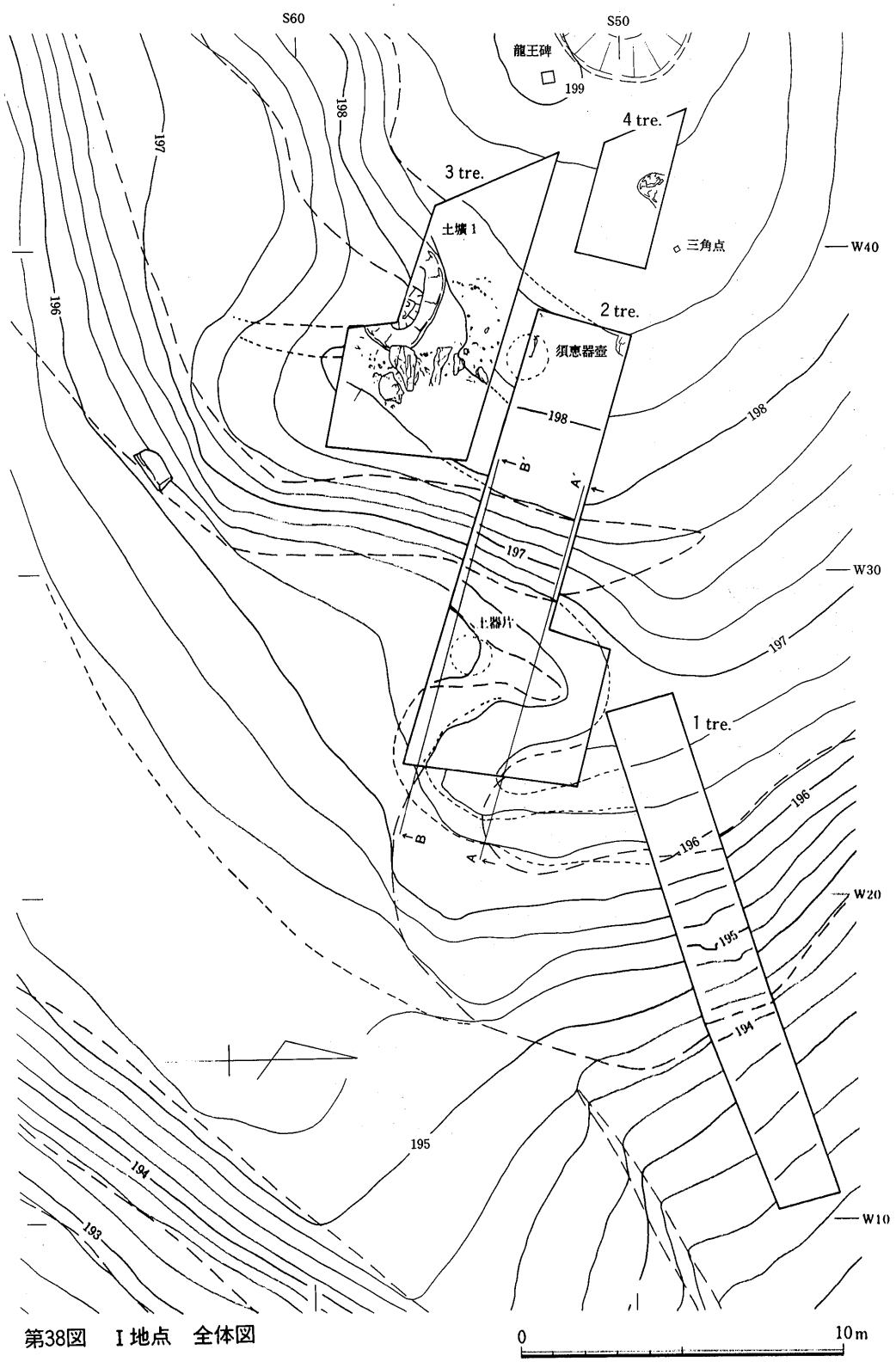
C）下段平坦部（第32・37図、図版第15下・16上）

下段平坦部の山側盛土端から上方は、地山削り出しで、盛土部から連続する傾斜を持って上段壁面に突き当たる。山側盛土端と上段壁面の間で溝1を検出した。走行は、下段肩部と平行し、その中軸は、その現状肩からほぼ9m、盛土端から3m余り山側で、上段壁面の突出部では裾にあたる位置である。幅は1～2m、深さは第5トレンチ山側で0.5m、第8トレンチ山側で0.3mを測る。南が浅いのは、南側の開墾時の段に示される耕作による削平の結果とみられる。埋土は、暗灰黒色の有機質分の多い流土層で遺物は確認されなかった。埋土の感触からすれば一見新しそうな印象を受けるが、地権者の証言から少なくとも国有林以後の畑溝などではない。むしろ、位置からすれば、下方の版築盛土の流失防止のためと考えるのが自然ではある。なお、本来外郭線に伴うとした場合、この溝と下段壁面の間に本来もっと高い版築つまり土塁があり、その内縁を画するものであったと考える事については、埋土が盛土壁面前面の崩落土と大きく異なり、西上方からの流土のみで埋まっているとみられることから否定的である。第5トレンチは上段壁面にも及び、これも地山削り出しの造成であることが判明した。

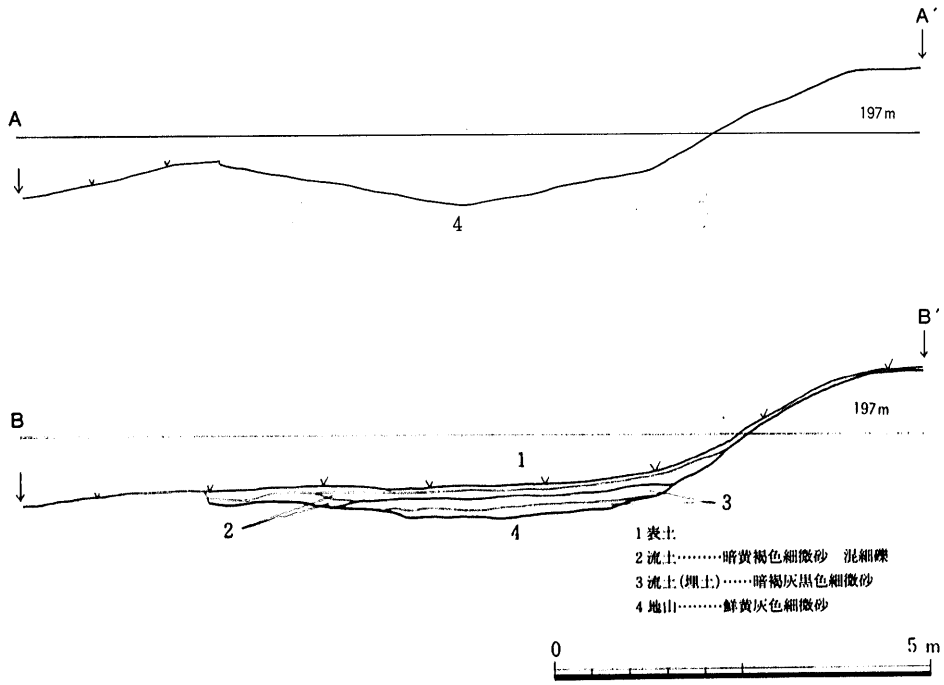


第37図　H地点　上段裾溝断面

③ Ⅰ地点の発掘成果（第38図）



第38図　Ⅰ地点　全体図



第39図　Ⅰ地点　第２トレンチ断面

ａ）第１トレンチ（第38図、図版第16下）

下段平坦部山寄りから、この位置での上段にあたる土塁状地形の頂部にかけて設定した。表土下まもなく、その全面に、鮮黄褐色で一部に未風化の岩質を残す地山を検出した。この土塁状地形も地山削り出しである。検出した外側壁面の高さは２ｍ、傾斜角20度を測る。

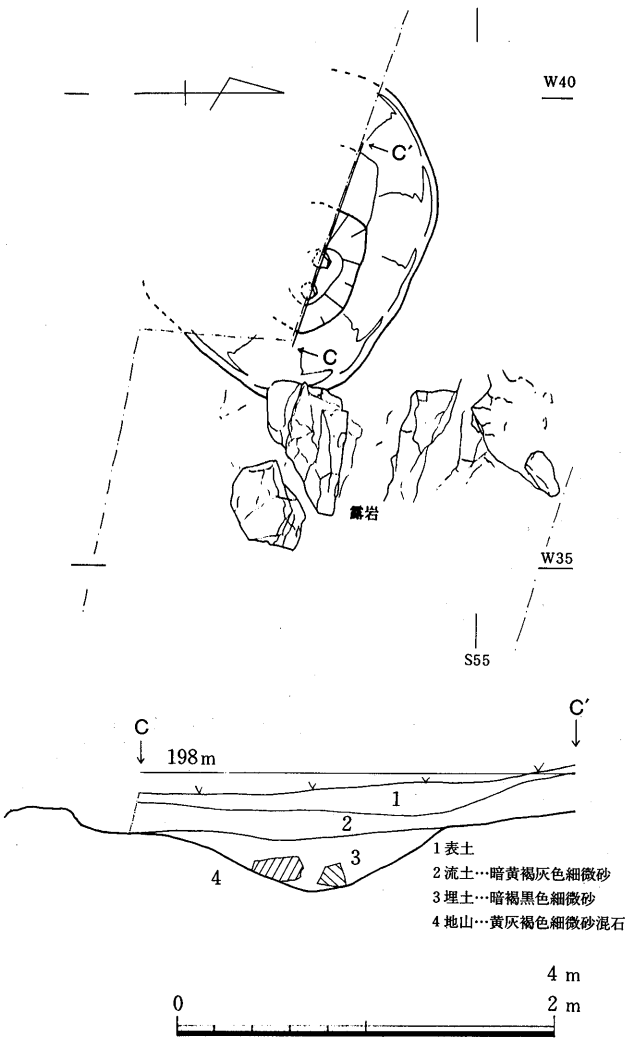
ｂ）第２トレンチ東半（第38・39図、図版第17上）

南の下段平坦部から続く通路状窪部にあたる。窪には、厚さ40cmの流土が埋積し、その下層の地山直上、第38図の破線を中心に須恵器壺（第76図－６）や素焼土器細片が出土した。いずれも原位置を保っておらず、頂上平坦部からの流入とみられるが、ここでは中近世遺物は混ざらない。流土下では全面地山を検出したが、遺構は検出されない。底部はトレンチ南で幅2.8ｍ程の面を持ち、北に僅かずつ上がりながら狭くなる傾向があるが、そこはもう頂上平坦部の東縁と言っても差し支えない。この底面と東の土塁状地形頂部との比高はトレンチに沿う横断方向で最大0.6ｍを測る。西の壁面も全面地山削り出しである。高さは1.3ｍ、傾斜角は平均30度で基部の一部は40度の急傾斜となる。

Ｃ）第２トレンチ西半、第３・４トレンチ（第38・40図、図版第17図下）

頂上平坦部でも、表土下すぐに地山を検出した。地山は、鮮黄褐色を呈し、特に第３トレンチを中心に未風化の岩質を含んでいる。地山と表土間には植物根による地山攪乱層が厚さ10cm

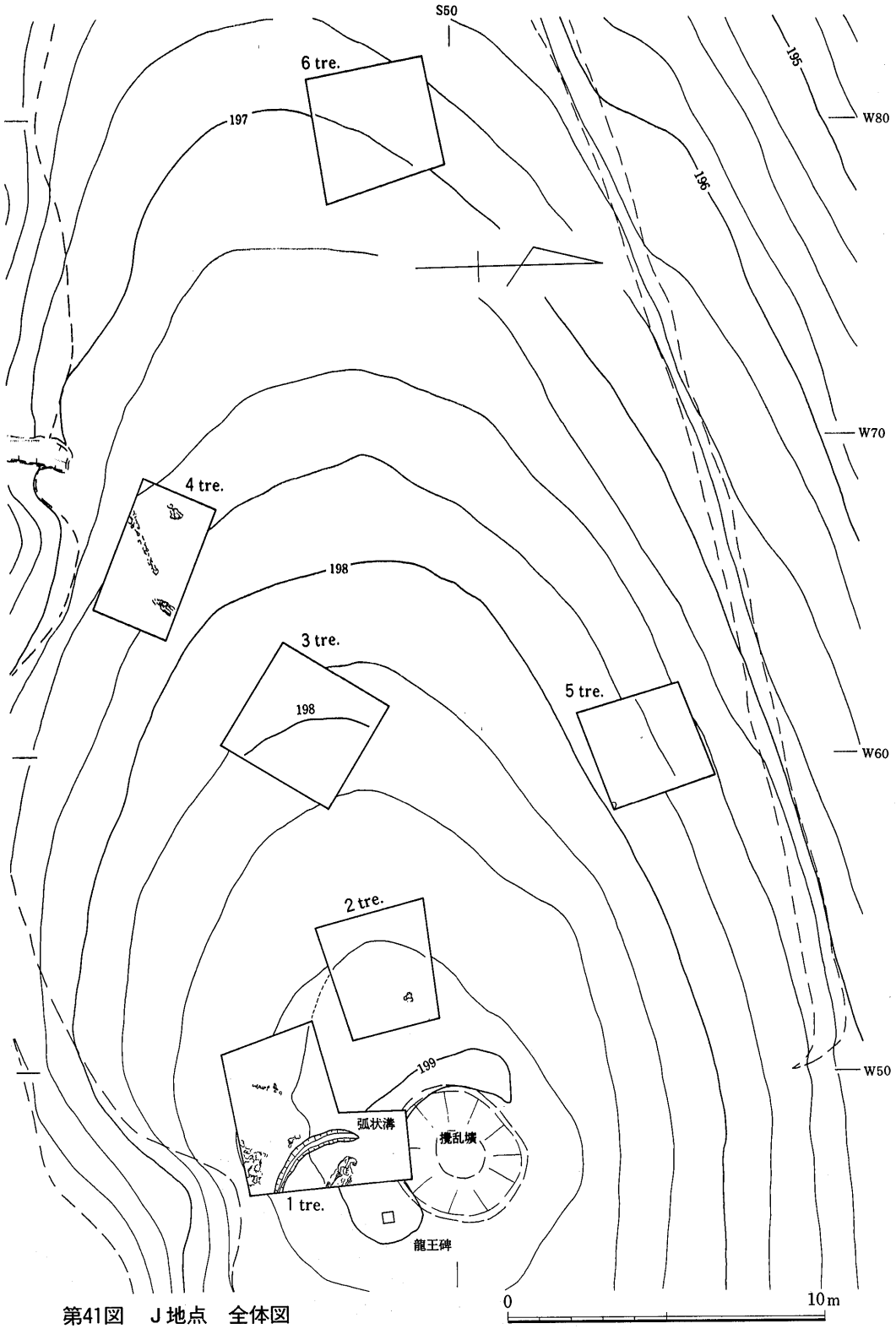
程認められ、そこから古代から近世に至る遺物が出土した。第2トレンチの破線位置では、ほぼ完形に復原できる須恵器壺（第76図－5）の破片が集中していた。この個体の破片のうち少量はトレンチ下方の窪部にも及んでいる。また近接して須恵器坏蓋（第76図－4）や別の須恵器壺片（第76図－7）なども検出され、全体として城跡との関連を偲ばせる。また、各トレンチで古代末・中世の土器片（第76図－3・8）が少量確認されるほか、龍王碑前面の第4トレンチを中心に近世遺物が出土した。精査にかかわらず、須恵器出土位置付近では、遺構は確認できなかった。第3トレンチの南端では土壙1を検出した。ここは、頂上平坦部へ至る通路状部にあたる。東西1.8m、深さ0.4mを測り、南側は未検出であるが、このまま下方へ抜ける可能性もある。埋土は灰とみられる有機分を顕著に含んだ暗褐灰黒色土で、底面付近に20～30cm大の石材を伴っている。共伴遺物はない。この他、第4トレンチで浅い窪みを検出したが、遺構としては極めて不明瞭のものである。



第40図　Ⅰ地点　第3トレンチ土壙1

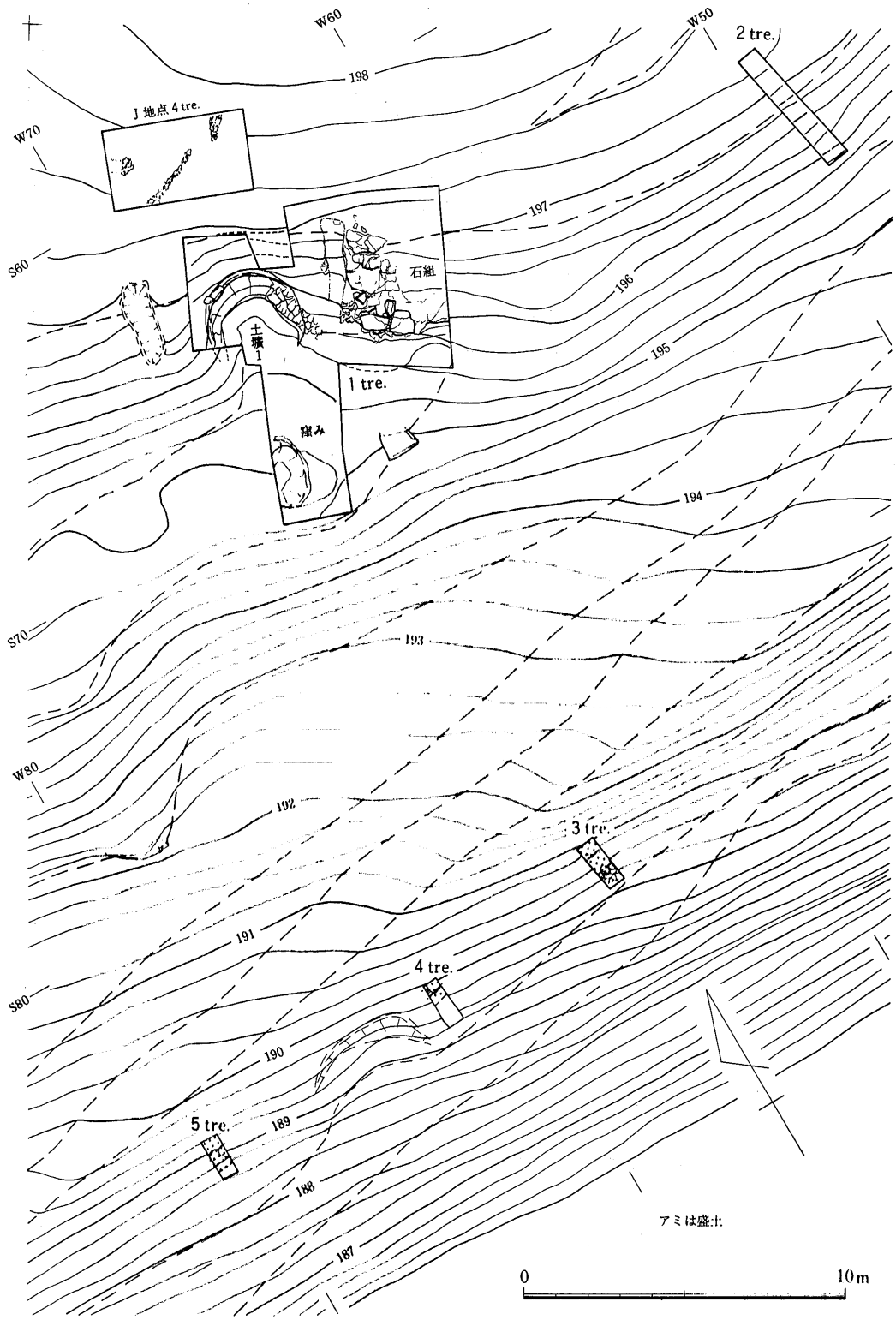
④ **J地点の発掘成果**（第41図、図版第18上）

建物跡の検出に最も期待のかかった地点であったが、各トレンチとも、表土下まもなく、鮮黄褐色で一部に未風化の岩質をみせる明瞭な地山を検出しただけで、そうした遺構は確認できなかった。ただ、第1トレンチでは、幅40cm、深さ10cmあまりの弧状溝を検出した。埋土は、地山攪乱土的な暗黄褐色混礫土で、排水溝的なニュアンスを持つが、時期性格とも不明である。なお、第2トレンチの表土下で、一個体分の中世土器（第76図－9）が出土した。


S50
6 tre.
197
195
W80
196
W70
4 tre.
198
3 tre.
198
5 tre.
W60
2 tre.
199
W50
弧状溝
攪乱壊
1 tre.
龍王碑
0
10m

第41図　J地点　全体図

⑤K地点の発掘成果（第42図）



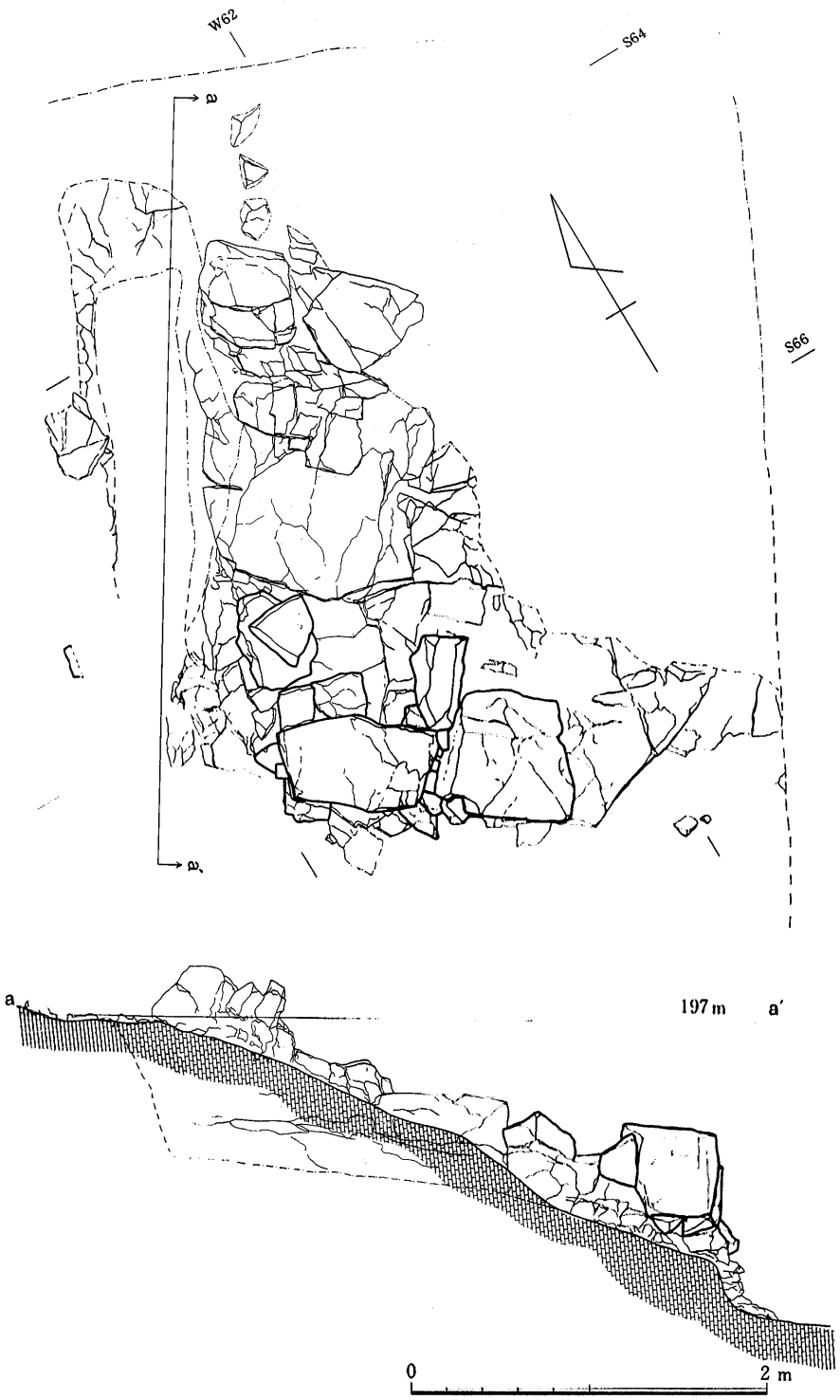
第42図　K地点　全体図

a）第1トレンチ石組（第43図、図版第18下）

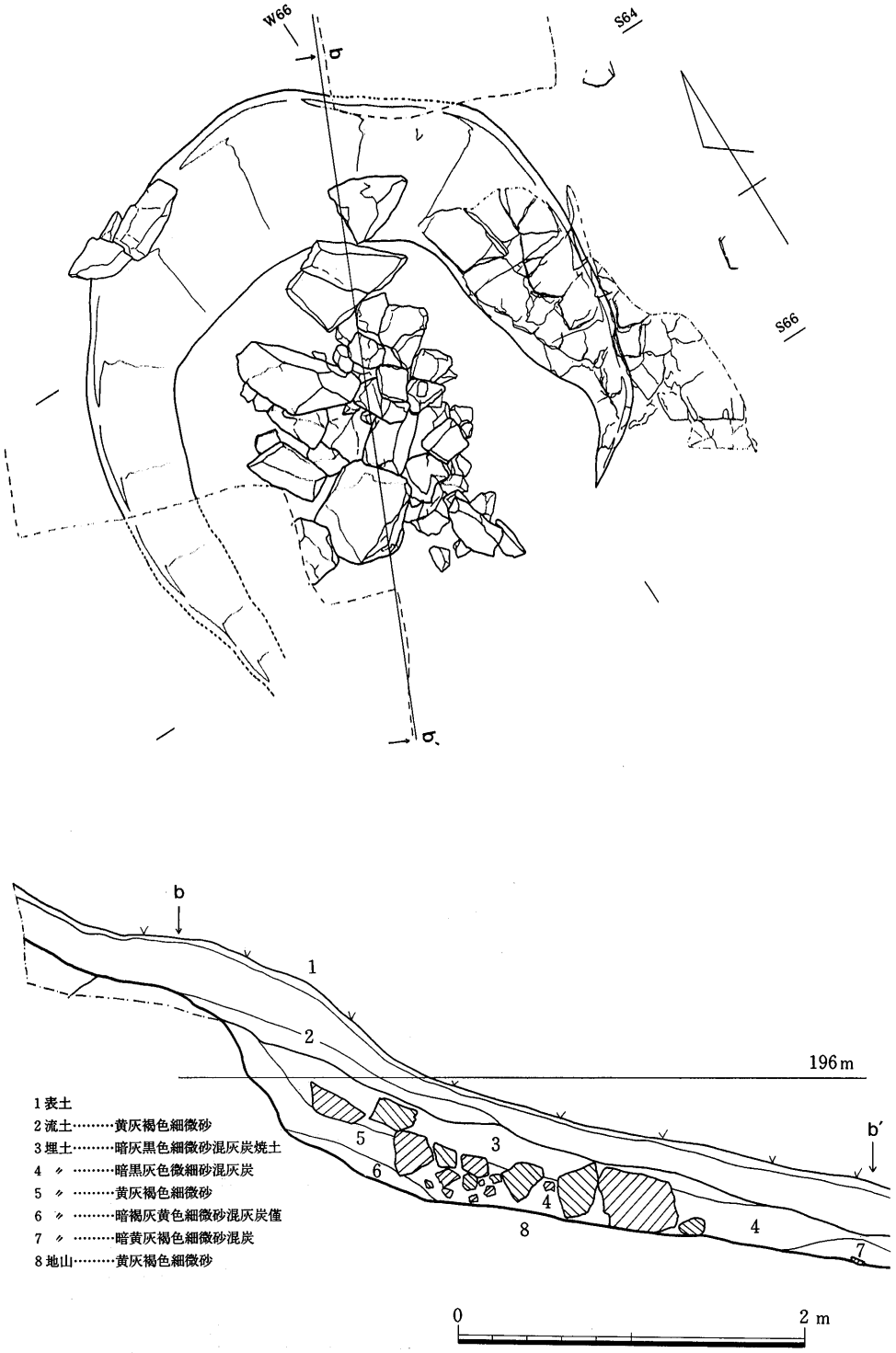
3段目平坦部の北東部約6mは、西に比べさらに2m程内にコの字状に引いた格好になり、その東半分に石組が露出していた。発掘の結果、石組背後の流土下で岩盤を検出し、石組は露岩を巧みにとり込んで構築されたものである事が判明した。岩盤露出部は、等高線に直交する長さ4.0mの西縁に対し、南縁は長さ3m余りで、これを二辺とする直角三角形状に認められる。比高は最大2.0mを測り、南辺に沿って40cm程の段を明らかに人為的に削りだしている。この段に面を揃えて、長さ80cm、奥行50～70cm、高さ50～60cmの自石が2個配され、長さ1.6m、高さ1mの垂直壁を造りだし、同時に西辺の南端にも自石一個分の垂直壁が形成される。自石と岩盤の隙間には20cm大の咬ませ石を伴い壁面としての体裁を整えるほか、石組背後の岩盤斜面との間にも50cm大以下の裏込め石材が数個確認される。石材は総て岩盤と同じホルンフェルス。全体とすれば、石組壁と露岩があいまって、約2.5m四方もしくはそれ以上の踊場的な平坦部が石組の上に形成されることになる。なお、石組の東はトレンチ内で途切れるが、前面の平坦部も東へ続かないこと、長距離にわたる石組であれば他部でも確認されてしかるべきであることなどから、石組の延長を東に復原する事は否定的である。また、西にも同様な石組やその延長は復原しにくい状況である。石組の西では、西壁に平行し頂上平坦部に至る通路の検出を期待したが、付近と同傾斜の地山壁面であり、柱穴等の遺構も確認されなかった。自石使用の点からすれば城跡に伴う可能性が考えられるとはいえ、時期・性格とも断定し難い遺構である。

b）第1トレンチ土壙1（第42・44図、図版第19上）

石組の西では、2m程の間隙をおいて土壙1を検出した。平坦部の折れ込み部において、石組と対面する位置にあたる。東西長3m、山側深さ1.2mを測るが、南の斜面下方に向けて深さを減じ、そのまま平坦部に抜けている。東部では岩盤を切り込んでいる。埋土は、暗灰黒色系土で炭灰を顕著に含み、少量焼土も認められるが、直径2m程の底面そのものは焼けていない。埋土下層を中心に大小の石材が高密度で堆積し、内には地山に接するものもある。埋土は堆積状況からして上方から流入した可能性が高く、石材もまた上から投げ込まれた可能性がある。もっとも、先述の様に、直上のJ地点第4トレンチでは遺構は確認されない。土壙前面の平坦部の地山上では、土壙の埋土層がそのまま堆積し、これによって埋まる深さ15cm程の窪みを検出した。遺物は、土壙埋土やその連続層では一切確認できなかったが、平坦部の上層流土で近世のものとみられる土器細片などが少量出土した。この土壙は石組とともに、前面平坦部の造成と同時期かそれ以後のものといえる。また配置や土壙埋土類似土が石組東の岩盤直上にも堆積することから、両者の直接的関連も考えられなくはないが、結局、時期・性格は不明とせざるをえない。



第43図　K地点　第1トレンチ石組



第44図　K地点　第1トレンチ　土壙1

c）第2トレンチ（第42図）

頂上平坦部の1段下の平坦部から下方段斜面に設定した。表土下まもなく全面に地山を検出し、この段も地山削り出しによっていることが判明した。また、第1トレンチの石組と同レベルの位置であるが、トレンチの周辺の現地表を含めその痕跡はない。

d）第3・4・5トレンチ列石（第42図）

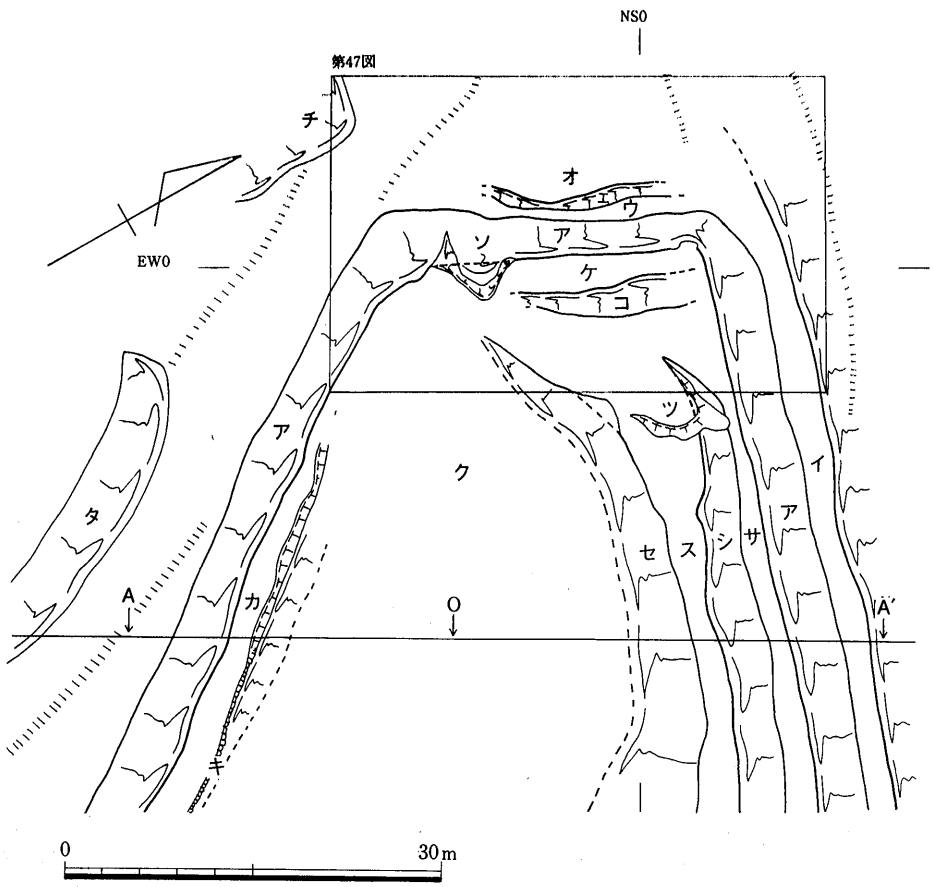
石組のある段とその下の段が、コの字に内に引くような状況が観察されたため、鬼ノ城の様な階段構造の城門の可能性を想定し、その是非を確認するために設定した。発掘の結果、各トレンチで、現状での下段肩と平行しほぼ一直線に延びる列石と、これを覆う版築盛土を確認した。列石の途切れや極端な折は確認されず、下段壁面も東西からそのままの高さと傾斜を持って連続する状況が確定し、城門の可能性はまずなくなった。なお、このトレンチ間の列石外縁上角の描く線は平面的には厳密な直線ではなく、第4・5トレンチ間には177度程の微妙な折れが想定される。また、立面傾斜は8度と5度で、やはり傾斜変換点が予想される。また、最も盛土遺存が良好な第3トレンチでは、壁面裾が列石外縁の外50cmに求められ、その位置で岩盤を削って、外に低い10cm程の段をつけている状況が確認された。盛土壁面下部の傾斜は、現状で50度余りを測る。各トレンチとも版築そのものの状況はH地点と同様である。

8．西中央尾根先

①位置と外郭線の状況（第45・46図）

三の木戸から急斜面を上がった外郭線は再び高原状地形の縁に出て、200m程は西に進路を取り、ここで二回にわたって大きく折れ、北に進路を変えて尾根に沿いながら降下する。最初の100m程は10度程の傾斜であるが、以後尾根は極端な舌状となり、緩い傾斜となってさらに100m程行って尾根筋を横断する。城跡が最も西に張り出す標高110m内外のこの位置が、本地点である。列石の施される壁面（ア）は、本地点の南東端で200度程で西に折れた後、58m程は一直線に6度の傾斜で緩やかに降りる。この区間の西側（図版第19下）では、本城跡の現状で確認される盛土壁面の高さの内最高で、2.5～3.3mを測る。さて壁面は、次に113度で大きく折れ、一気に尾根稜線を横切る。稜線横断部の壁面は、稜線にかけその高さを1m程にまで減じ、それを越えた後は再び高くなる。この区間南寄りの（ソ）の位置では壁面が抉れ、城門の可能性を考え発掘を行なったが、後世の改変であった。南の折から約29mの地点で103度で再び大きく折れる。この折は、本城跡の外郭線の内で最も急角度のもので、先の南の折がこれに次いでいる。この折の後は、尾根上平坦部の縁を伝わず、二の木戸のすぐ西まで105m程は城内に向かって一直線に斜面を降りる。この区間の本地点内での壁面高は2.0m、伝う傾斜は10度を測る。この壁面前後の外郭線の状況は、南の直線部、尾根横断部、北直線部で異なっている。

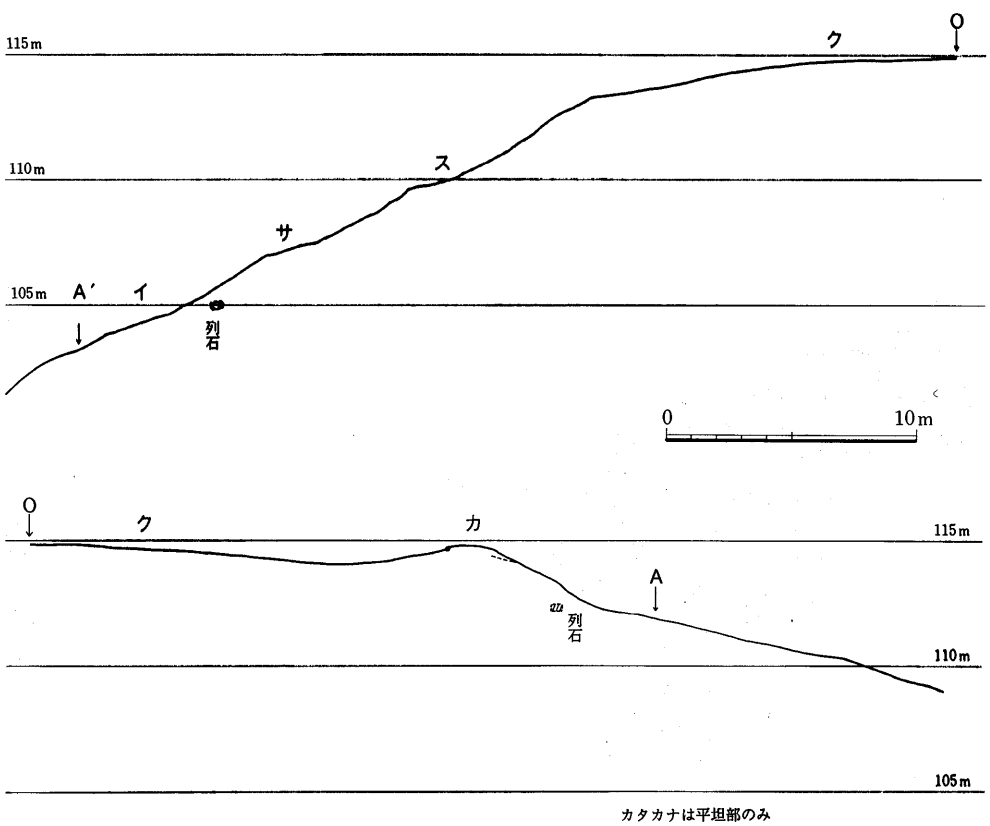
南の直線部では、壁面(ア)の前面は、比較的平坦であるが明確な幅を持った犬走り状のテラスとしては確認されない。壁面から数メートル引いて大きな抉れ(タ・チ)が認められるが、おそらく後世の土取に伴うものであろう。この方向での外郭線の外は瀬戸町観音寺字大平に属し、しばらくは17度程の傾斜が続いている。この区間の東側壁面上には、壁面肩と2.5～3.0mの距離を置いて背中合わせに石垣(キ)があり、結果的に土塁状地形(カ)となっている。この石垣は小石を数段積んだもので、高さ最大50cmを測るが、状況と土地所有者の証言から背後の平坦部(ク)での近年の畑耕作に伴うものである。従って、この土塁状地形も後世の改変の結果の可能性があるが、石垣からさらに内に3m程の位置に裾状の別の傾斜変換点が認められること、この位置では上段構造が本来的にも無かった可能性が強いこともあって、もともと土塁が存在した可能性もある。その際の内側での現高は0.7m程となる。一方、西側の壁面上は水平地形となっている。尾根上平坦部(ク)は国有林以後手開墾で耕作されていたが、近年その稜線以北を中心に重機が入っている。稜線の一部では岩盤が露出しているが、現状と所有者の証言からして、大きな掘削を伴うものではなく、むしろ表土をかき均す程度のものである。



第45図　L地点　外郭線状況

このときの押し土は主に北に向けられているが、西の平坦部一帯でも、本来の地表と明確に分離できる状態で、僅かずつ認められる。これには30～50cm大の礎石状の石材を顕著に含む。その大半の石種はこの屋根では産出しない花崗斑岩であり、明らかに人為的にもたらされたものである。従って、この位置上方の程近い位置には、時期はともかく、例えば礎石建物といった遺構が存在した可能性が強い。

尾根横断部では、稜線付近の壁面(ア)の前面に、深さ20cm程と極僅かであるが掘り割り状の窪み(ウ)が認められた。その西外、稜線に沿って50m程は4度程の傾斜を持ち、これと稜線をはさむ20m程の範囲はあたかも道路状の平坦地となっている。さらにその先は、ほぼ同様の尾根頂幅とゆるやかな傾斜を維持しつつ鞍部を経て標高110m程のピークに出る。下段壁面から約200m距離をおいたこの位置が真の意味での尾根先端で、以遠は急傾斜となる。さて、壁面上平坦部は、南部が水平に近いのに対し、北部は6度程で北に傾く。北部では、東側城内に対して30cm程壁面頂部が高く、極めて扁平ではあるが断面かまぼこ状の地形(ケ)を呈している。強いていえばその幅は7.5m程となる。なお、この地形は、平坦部背面に重機が入った結果形成されたものではない。



第46図　L地点　外郭線断面

北の直線部では、壁面(ア)前面に、平行するきれいな犬走り状のテラス(イ)が認められ、幅2～3mを測る。外郭線の外方は瀬戸町観音寺字築山坂に属し、30度あまりの急傾斜となっている。壁面上には、幅2m内外の下段平坦部(サ)が認められる。上段壁面(シ)は、東部では高さ2m、傾斜角30度を測るが、西へ次第に高さを減じ、内折れする様に断面かまぼこ状地形背後の平坦部に解消する。つまり、下段平坦部は尾根上平坦部と通路状に結ばれる格好となる。なお、下段平坦部の西端付近に重機による押し土(ツ)が認められるが、造成前の地表面は明らかであり、壁面の解消も重機によるものではありえない。上段壁面の上には、上段平坦面(ス)が認められる。幅は2～3mを測るが西に広くなり、やはり断面かまぼこ状地形の背後平坦面に抜け、尾根上平坦部に結ばれている。この様に北の直線部は、E地点やK地点西方と同様の状況を示し、下段壁面から上段平坦部山側縁間の比高5.0m、幅12m内外を測る。この階段構造は二の木戸のすぐ西まで同様の規模で続くが、城跡を通じたこの種の外郭線構造の内では、最も遺存が良好で、また上段壁面の確認高が最も高い部分である。なお、上段平坦部の上の斜面(セ)は重機による造成法面であるが、少なくとも裾は本来の斜面端に一致している模様である。また、尾根上平坦部（ク）は、現況と地権者の証言から本来的にかなり平坦であったことは間違いなく、北側の現在の肩の位置から内に引いた位置に、ほぼ平行する肩状の地形が埋め込まれているとみられ、本地点は、北に対しては3段構造として捉えられる可能性が強い。

②L地点の発掘成果（第47図）

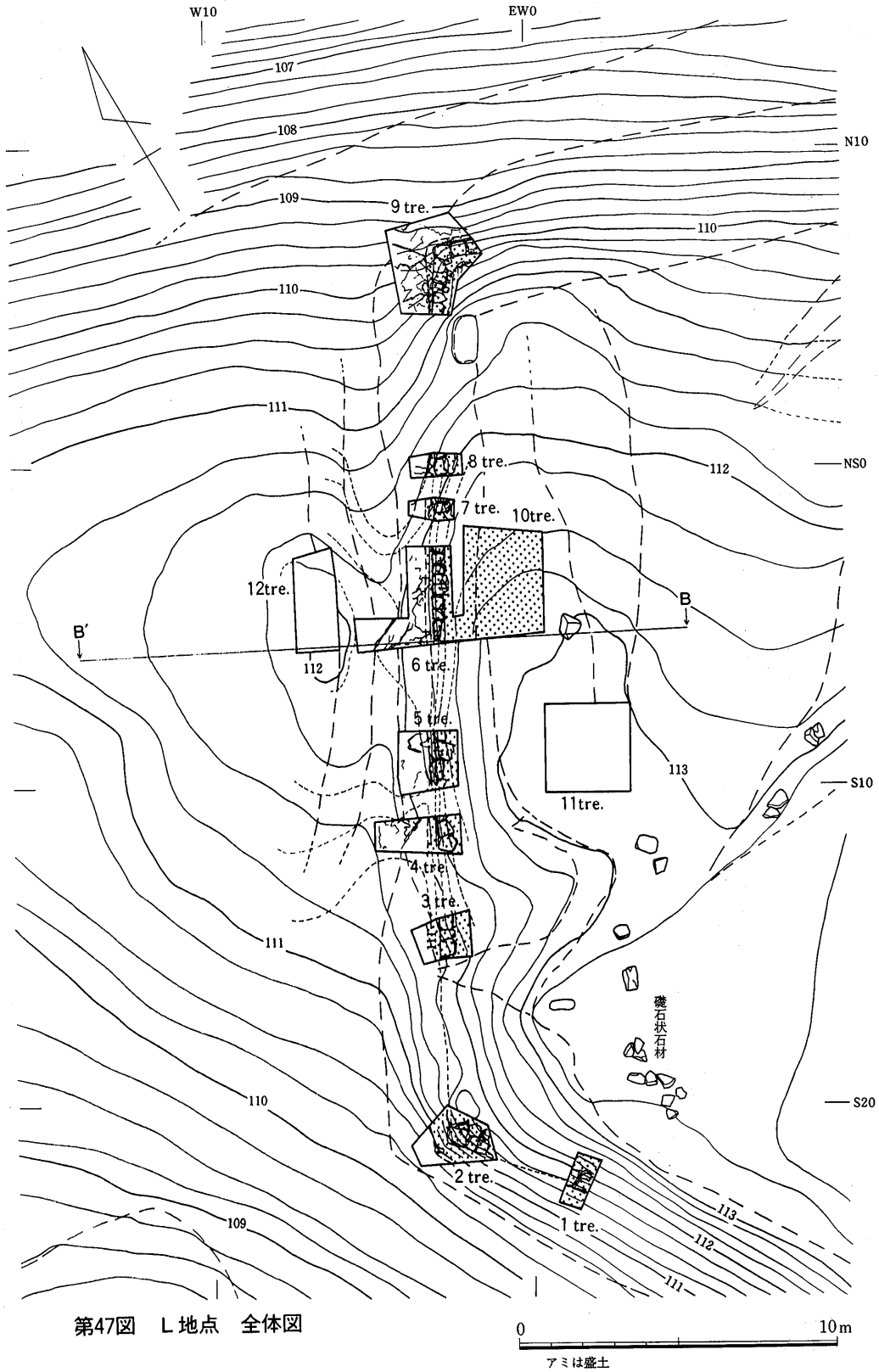
12のトレンチを設定した。この内第1～9トレンチは列石や盛土の詳細を確認するため、折れや傾斜変換点などを追って順次設定していたものである。先ずこれらのトレンチに特有の状況を述べ、次にこの区間全体に渡る構築状況を整理する。その他のトレンチは最後に記す。

a）第1トレンチ（第54図、図版第20上）

南の直線部に設定したもので、列石は2石分検出した。東の石材は小形であるが、背後に控え積みがあり、列石幅としては60cm余り、厚さは35cmを測り、土質の地山にほぼ接している。列石は盛土に対してかなり深く、列石外縁では直上45cmの位置に盛土上面が求められ、本来の壁面裾は列石外面から50cm以上のトレンチ外にある。このことは、恐らく、背後の盛土が他部よりもかなり高いことと関係している。つまり列石前面の地山から、現地表肩部までの比高は3.0mを測る。なお、確認した壁面傾斜は50度内外である。

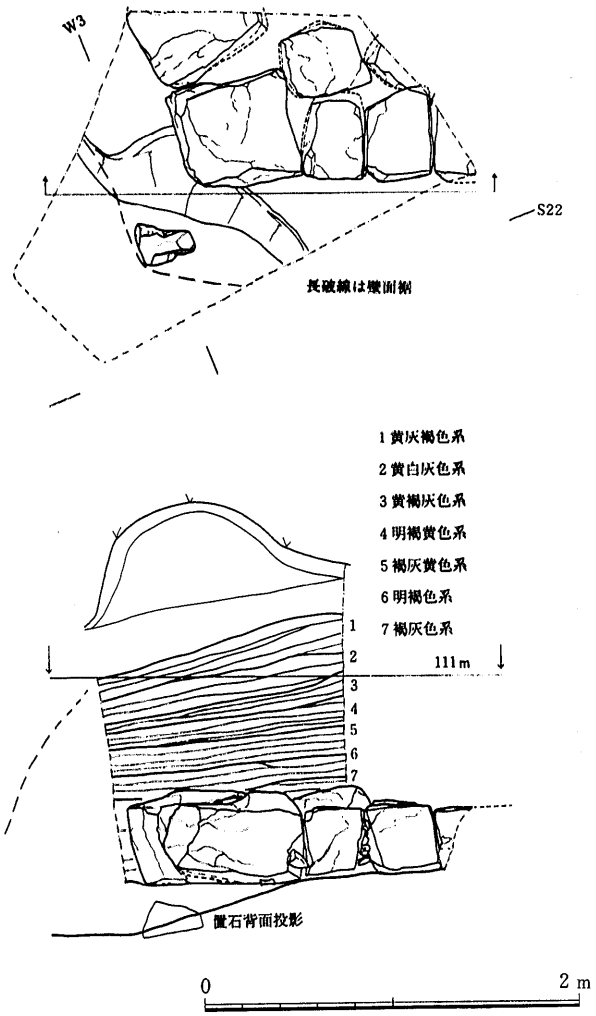
b）第2トレンチ（第48図、図版第20下・21上）

南の折部に設定したもので、列石外縁上角は、113度を描いている。南直線部方向には、2石におよぶ控石材が認められ、列石幅が80cm余りとかなり広くなっている。尾根横断部方向には控石材がない可能性が強いが、石材が大きく列石幅は65cmである。各石材の厚さは40～50cm


W10
EW0
N10
NS0
S10
S20
107
108
109
110
111
112
113
9 tre.
8 tre.
7 tre.
10tre.
12tre.
6 tre.
5 tre.
4 tre.
3 tre.
2 tre.
1 tre.
11tre.
B
B′
礎石状石材
0
10m
アミは盛土

第47図　L地点　全体図

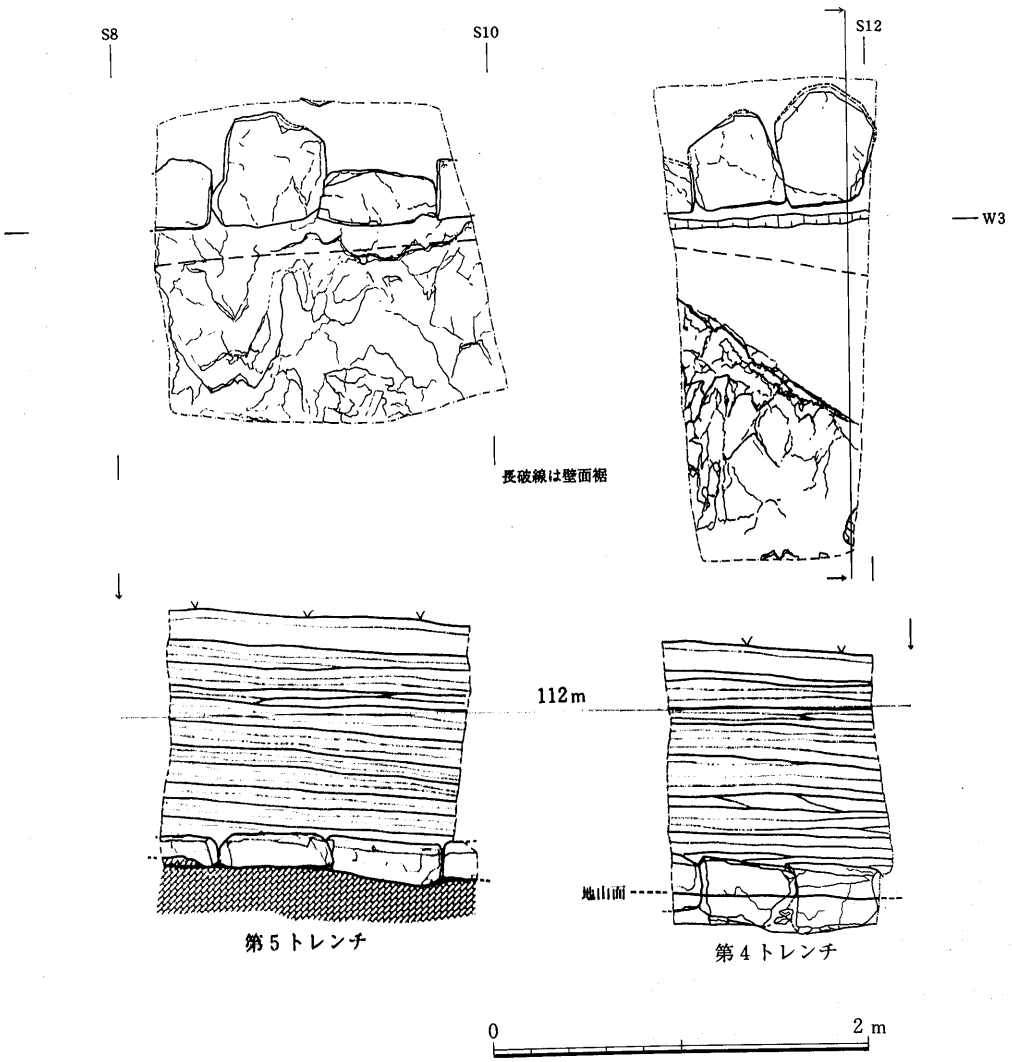
とかなり厚い。角の石材は、双方の外縁面と上面が自然面であるのに対し、残りの側面に明瞭な切断面を残し、従ってやや丸みを持った外縁上角の稜を、両方向とも隣の石材に揃えている。各石材は、僅かな置土を伴いながらも、土質の地山にほぼ接している。角の石材の隅部直下から外方に向けては、石材接地面から25cm程の段差を持って地山が削平されている。これは、列石前面の平坦部造成に関わるものとみられる。その底面地山に接して、20cm×30cmの石材が確認された。この石材の外縁角は、列石角から50cmの位置で、その両外側縁は、列石のそれと平行する。こうした状況から、この石材はおそらく意図的に置かれたものであるが、その位置は正に検出した壁面隅部の裾にあたる位置であり、盛土施行時の目印的なものとみられる。この石の下には、掘り込み等は確認されない。なお、地山削平の段は、盛土によってきれいに覆い隠されることになる。盛土の高さは、列石前面の地山と背後の壁面頂を測点として、3.2mを測る。

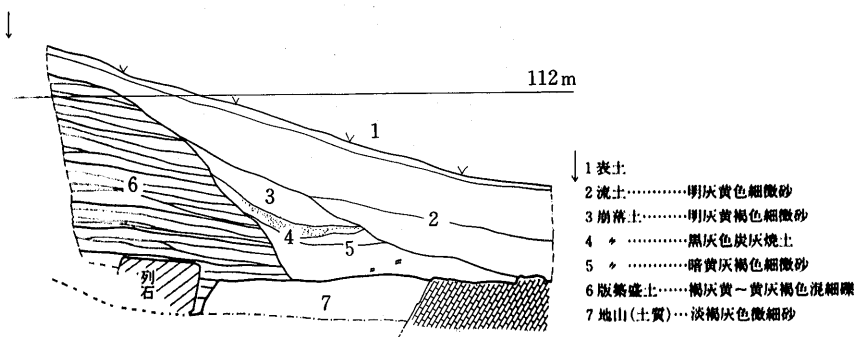


第48図　L地点　第2トレンチ列石

c）第3トレンチ（第54図）

壁面抉部に設定したトレンチであるが、列石は途切れず城門は否定された。3石分を確認したが、控の石材はない。各石材の奥行は50cm程で揃っている一方、石材の厚さは40cmとかなり厚いもの、また底部がとがっているものがあり、こうした石材間のばらつきを厚さ20cm以下の置土でうまく調節し上面を揃える。一部の隙間には詰石も認められる。ここでは列石は、幅90cm、谷側深さ30cmで土質の地山に掘られた溝内に構築されている。列石は溝の谷側壁面に寄り、列石外面と溝壁面の間隔は10cmに過ぎず、また盛土が仮に無いとしても列石外側面は上部10cmしか溝から飛び出さない。その10cmも版築盛土に覆われ、検出した壁面裾は溝の縁からさらに20cm外にある。





第49図　L地点　第4・5トレンチ列石・断面

d）第4トレンチ（第49図）

3石分を確認した。各石材の奥行は65～30cm、厚さ40～25cmで、ともに尾根稜線に向けて減少する。隙間には詰石が認められる。地山岩盤が南から次第に列石が近づくが、トレンチ内では列石は依然土質の地山上にある。第3トレンチ同様の溝内に構築されているが、深さは15cmと浅くなっている。検出した盛土壁面裾は、列石外縁から20～40cmの位置にあり、尾根稜線に向けて次第に列石に近づく傾向がある。壁面前面の初期崩落土中には、黒灰色を呈し顕著な炭灰と若干の焼土を含む層が認められる。遺物は確認されないが、山城からそう遠くない時期にすぐ上方で焚火などが行われた状況が窺われる。

e）第5トレンチ（第49図）

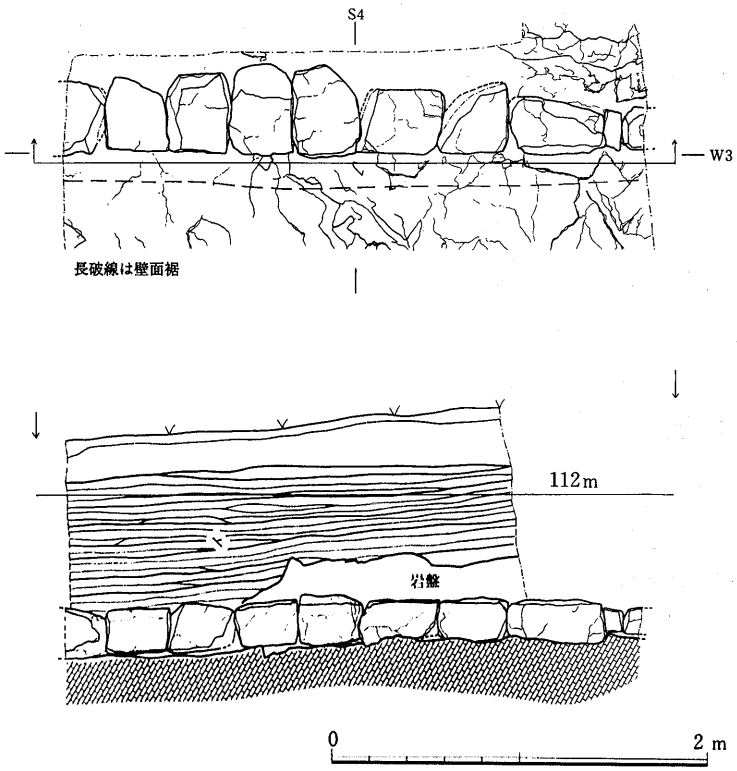
各石材は長さ45cm内外に対し、奥行は45～15cmと不揃で、長方形の小形石材の長辺を外縁に用いるものがある。一方、各石材の厚さは20cm足らずと薄く、また揃っている。こうした石材は、地山岩盤の上にほとんど置土を伴わずに置かれている。列石の直下から前面の岩盤は比較的平坦で、列石の構築に先立ち岩盤整形が行なわれたとみられるが、南のトレンチでみられた様な溝は、トレンチ間の恐らく地山質の変わる位置で解消している。ところで、南から2番目の石材は、平面的には179度という極めて微妙なしかし確実な折れにあたり、また立面観での傾斜変換点でもある。しかし、この石材の背後でも、盛土工程を平面的に区切る様な盛土の不整合状況は確認されず、各版築単位は互いに列石上面の傾斜に平行しながらも、連続的に移行しているといえる。

f）第6トレンチ（第50・51図、図版第21下）

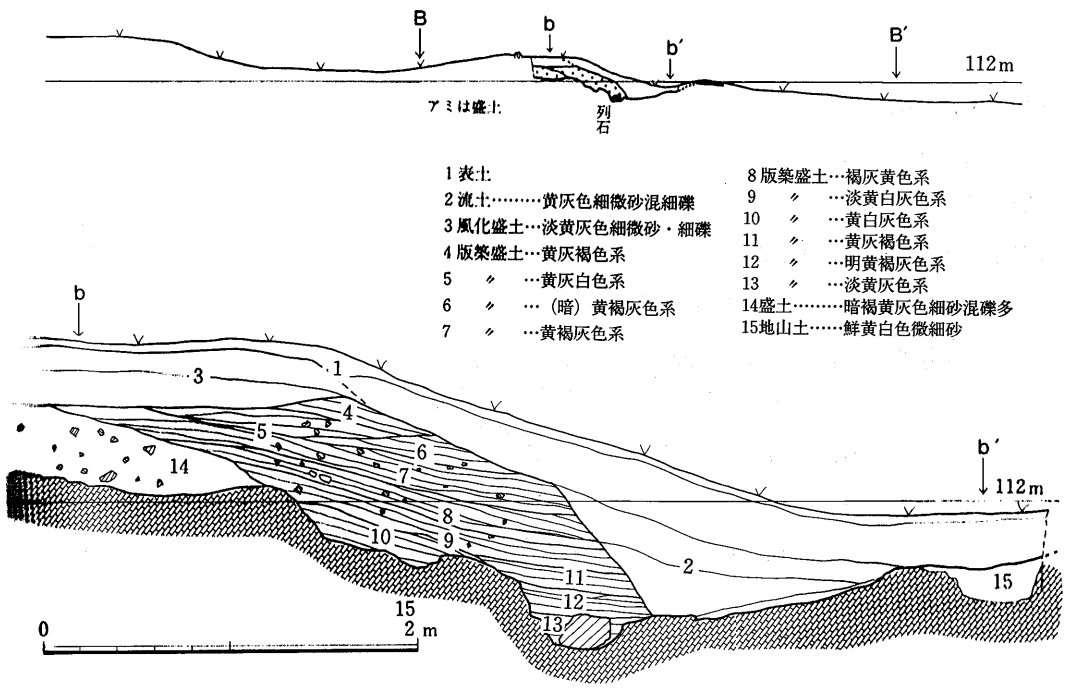
稜線上に設定したトレンチである。北から7石までの各石材は、長さ35cm内外、奥行40～50cmと比較的大きさが揃い、小口を外縁に向けるものが多い。8石目はそれらと同大ながら、長辺を外縁に向け、9石目は詰石的なものとして捉えるとしても、10石目は未掘部を残しつつもかなり小形で、列石幅が30cm以下と狭くなっている。各石材の厚さは、24cm程で第5トレンチよりやや厚いが、南の2石は16cm未満と極端に薄い。南側のこうした状況は、地山岩盤に対してかなり無理をして列石が構築されていることの影響とみられる。すなわち、北から3石目付辺までは、列石背後から前面にかけて断面L字状に岩盤が平坦に整形されてその上に各石材が置かれているのに対し、その南特にトレンチ南壁付近では、岩盤を抉って溝が掘られ、その底に列石が構築される格好となる。この溝は、大きくみれば谷側肩が列石外縁から3mの位置にある幅4.8m、谷側深さ0.65mで、盛土に覆われない列石前方が背後に比べより平滑に整えられている。細かくみれば、この溝は列石位置のみが更に窪む二段掘りで、その深部溝の幅は65cm、深さは山側40cm、谷側で20cmを測る。他に比べ小さい列石石材は、この深部溝内に完全に納まっている。また、溝を大きくみた場合の谷側肩に対して列石上面の高さは50cm程低く、仮に盛土

が存在しないとしても、列石が城外側から見渡せる状況には程遠い。

列石の上方斜面、断面かまぼこ状地形の芯部となる位置の岩盤上には暗褐黄灰色の盛土が厚さ40cm程堆積する。これは版築層ではなく多量の礫を無造作に伴い、その状況から岩盤掘削整形時の残土を中心としたものの可能性が高い。その上には版築盛土が認められるるが、傾斜下方では厚くまた岩盤に直接乗り、深



第50図　L地点　第6トレンチ列石

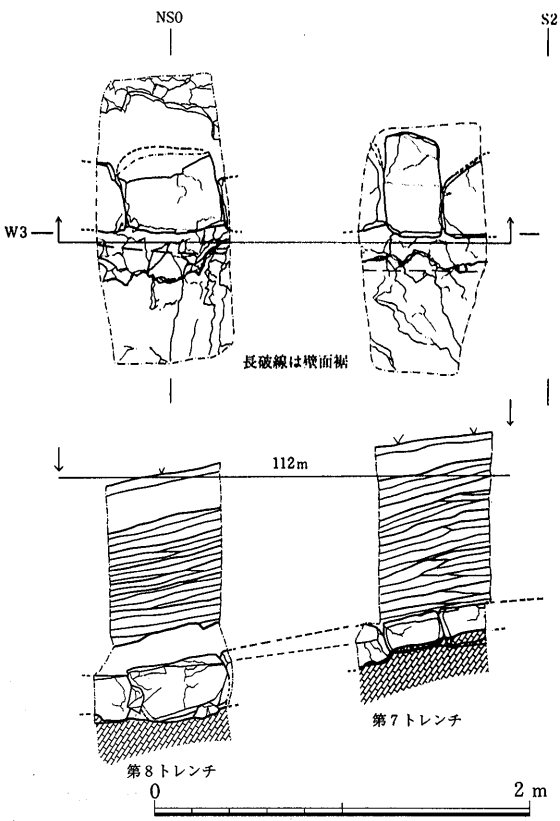


第51図　L地点　第6トレンチ外郭線断面

部溝と列石石材の間隔を含め一連に積まれている。各版築単位の横断方向の傾斜は、下層は岩盤傾斜に規制されて外側に傾くが、内でも下方の列石付近では列石上面の傾斜に沿って緩い。全体的には上層程緩く、次第に水平に近づいてくる。頂部の版築上には厚さ30cm程の淡黄灰色土が認められるが、これは流土や別質の盛土ではなく、むしろ一連の版築盛土であり、植物根等による攪乱が及び細かな単位が読み取りにくいだけとみられる。従って、断面かまぼこ状地形は、トレンチが及んでいない内側斜面の状況は不詳ながら、少なくとも頂部平坦面一杯は版築盛土によって形成されていることになる。城外側壁面は、裾位置が列石外縁から20cmで、その下部傾斜は55度、高さは頂部の風化部を含めて1.4mを測る。

g）第7・8トレンチ（第52図）

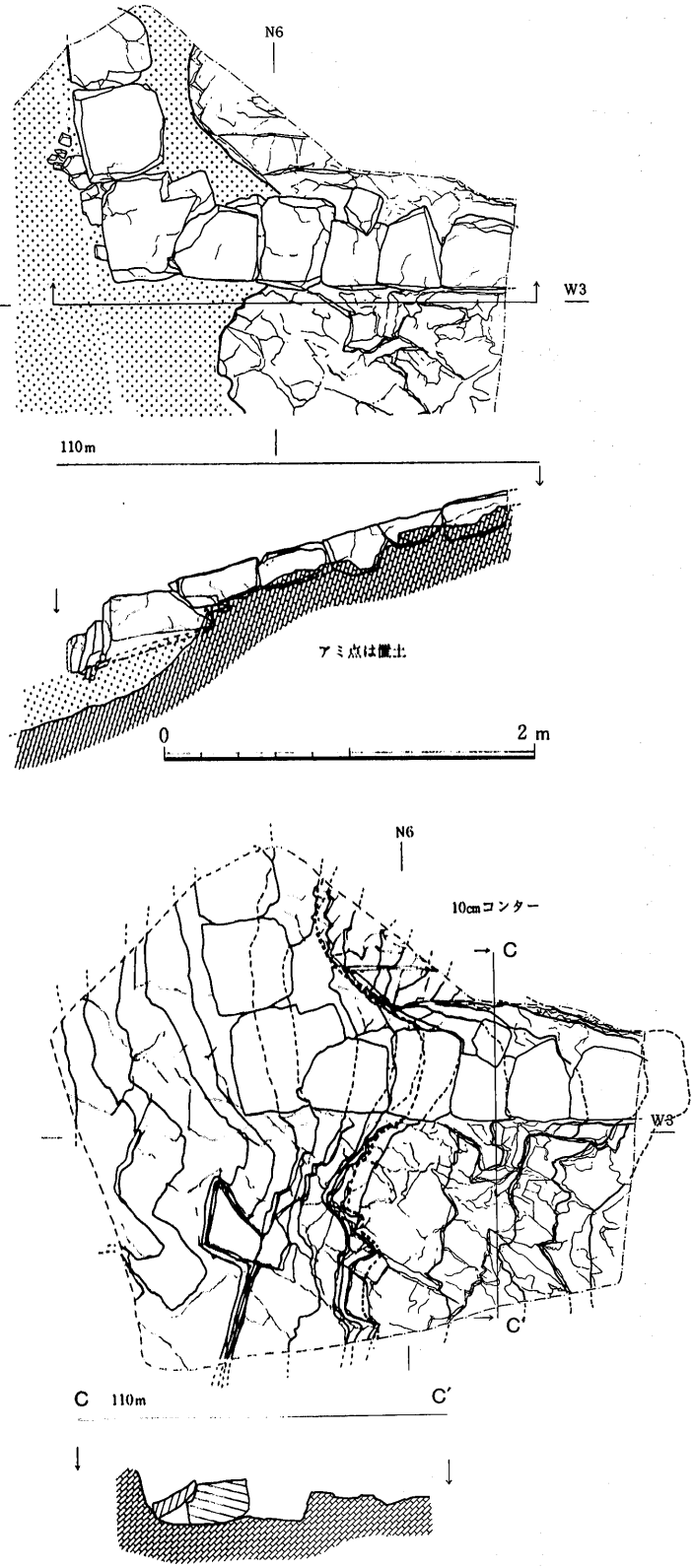
石材の大きさは長さ30～55cm、奥行は30～55cmで、第6トレンチ北部に比べて一回り大きなものが混ざっている。列石は、大きくみれば引き続き岩盤掘削の溝底に構築されるが、その底部の内で細かくみれば、第7トレンチでは谷側深さ数センチの浅い溝内、第8トレンチでは列石前面は平坦で断面L字状に整形された岩盤上である。ここでも、列石下の置土はほとんどない。各石材の厚さは、16～28cmで斜面下方の第8トレンチの方が厚い。第7トレンチの南と中央の石材の間は、立面観での傾斜変換点にあたる。また、このトレンチ北端の石材と中央の石材の外縁上角は6cmの段が認められる。一方、内縁上角の傾斜は連続的で、北端石材は外に傾くことになる。列石上面の横断面が水平ではなく外に傾く傾向は，第8トレンチの中央の石材まで連続している。こうした段差や石材の傾きは、本城跡の列石の内では稀なことである。列石背後の縦断方向での版築単位の傾斜は、列石上面の傾斜に平行し、傾斜変換点においては異なる傾斜のものが交錯しがらも一連となっている。



第52図　L地点　第7・8トレンチ列石

h）第９トレンチ（第53図、図版第22）

北の折部にあたる。石材の大きさは、概して長さ35～50cm、奥行35～50cm、厚さ20～30cmと比較的大きさが整い、方形に近いものであるが、隅角のものは60×55cm、厚さ30cmとやや大きい。この石材は、その一角をそのまま用いて103度の折をつくりだす。ここは立面でも傾斜変換点にあたり、石材上面の傾斜は明らかに北辺側の並びを優先している。その南の石材は隅の石材に覆い被さり、確実に後続して置かれたことが判る。この２石の接合面の形状は、斜面上方の石材の重さを受けたとき、隅部の南の石材は上に捲れ上がることになり、本来好ましくない置き方で、現実にこうしたずれが若干起こっている。もっとも、隅の石材に本来かかる力を吸収し隅部の石材のズレを防ぐというもっと高度な見通しの結果とみれなくもない。いずれにせよ、この部分を含めた石材間の微妙な重なりや、隅部石材上面の傾斜などからして、石材は東から隅部を経て南



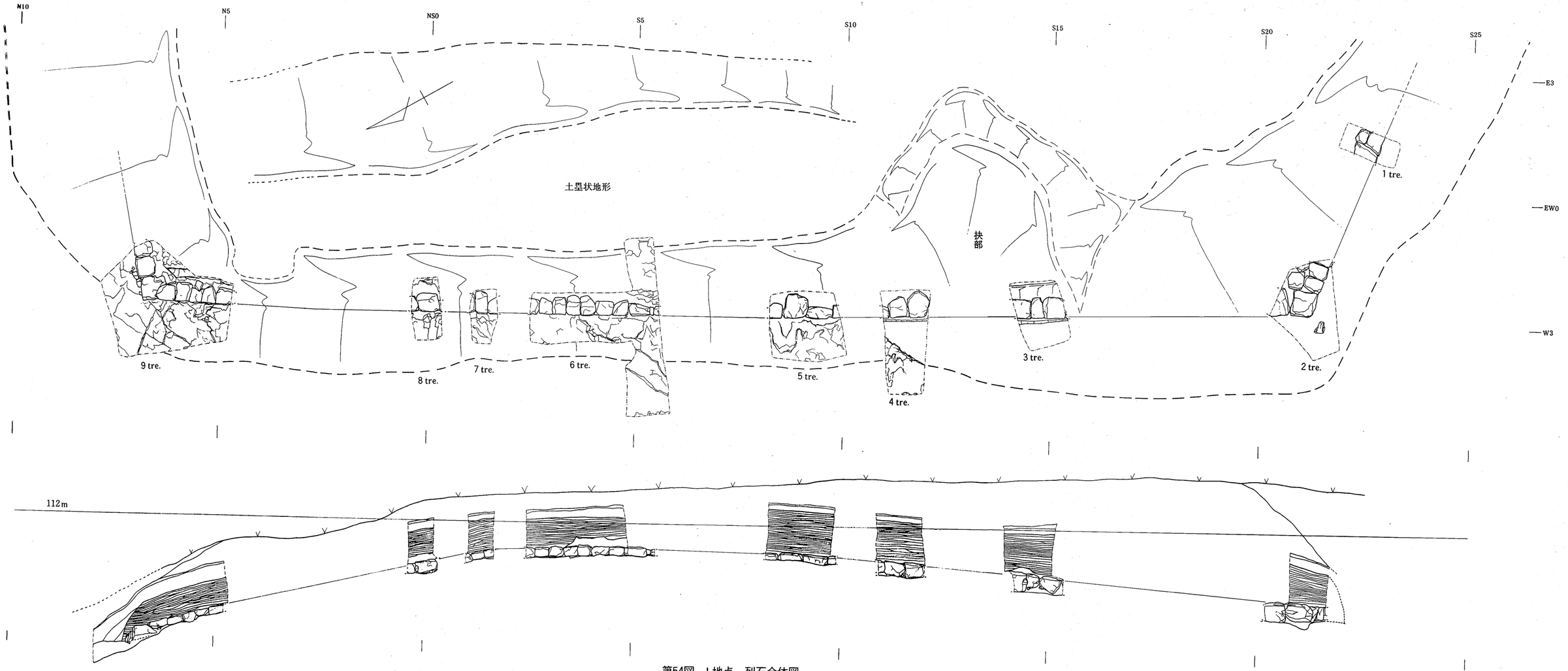
第53図　L地点　第９トレンチ列石と地山岩盤

へ、つまり下方から上へ順番に置かれていったものとみられる。南から4番目までの石材は、列石より一回り大きく底面が平坦な岩盤整形の溝内に、極僅かの置土を伴いつつ置かれている。この溝の幅は60～90cm、深さは山側に深く30cm、谷側では最大15cmを測る。南から3石目の石材には、岩盤溝の壁面との間に25cm大の盤状石材が咬まされている。一方、南から4石目以北では、地山岩盤との間に伴う置土は、25cm程にまで急激に厚くなり、そのまま列石前面の平坦部を造成し、厚さは50cmにまで達する。この置土は、灰褐黄色の細微砂に10cm大以下の石や礫が多量に混ざるもので、締まりはない。あくまでも地山ではなく、一旦岩盤整形が行なわれた後、周囲の地山掘削時の残土を掻き均した程度のものとみられる。なお、置土のほか、南から4・5番目の石材下の岩盤との間には、咬ませ石を伴っている。版築盛土は、ここでも完全に列石を覆うが、その壁面裾は南部では列石外縁から15cm内外の岩盤上、北では30cm内外の置土上にある。壁面は、確認高2.5mを測り、本来折部に稜を持っていた可能性が強いが、流失が著しく、そうした状況を十分に確認することはできなかった。なお、各版築単位は、折部背後においても、傾斜を列石に従いつつ連続的である。

ｉ）列石全体構造（第54図）

本地点での列石は、その状況を目まぐるしく変化させ、城跡屈指の縮図的存在である。先ず列石外縁上角の描く線をみると、第1・2トレンチ間は平面的には直線で、西に向かって2度の傾斜で下がっている。第2トレンチの113度の折角から第5トレンチの南から2番目の石材までは平面的に直線で6度の傾斜で上っている。ここで、平面的には179度で折れ、傾斜も以北は2度となる。この変換点は、南の折角から平面で11.8mを測る位置である。平面的には、ここから第8・9トレンチ間に予想される177度程の折れまでは一直線である。立面的には、ここから第6トレンチの南から2～3石目まで、つまり南の折角から16.3m程の位置まで緩やかに上り詰め、その北3石程の間は完全に水平となる。その後、第7トレンチまでは僅かに1度程の傾斜で下り、そこに傾斜変換点を持って、以後12度程の急傾斜で南の折角に至っている。北の折角で、平面的に102度で折れ、傾斜も9度とやや緩くなって東に続いている。総合的にみて、南と北の折角線は平面で28.1mを測るが、実際に列石の描く斜距離の合計は28.4mで、この間は平面的に大きく見れば一直線であるが、2個所の微妙な折れがあり、僅かに尾根に沿って下方に膨らんでいるといえる。立面的には尾根上平坦部の肩に明確な2個所、さらに稜線の南北に微妙で不明瞭な2個所の傾斜変換点が指摘できる。

列石の構築場所は、第1・2トレンチは平坦な土質の地山上であるのに対し、第3・4トレンチは土質の地山に掘られた溝内、以北第9トレンチ南までは岩盤上でしばしば溝内、9トレンチ北部は厚い置土上となっている。置土を伴うのは本来地山が低い位置とみられるのに対し、地山上特に溝内に構築されるのは、本来地山が高く大きな改変には困難が予想される位置であ



第54図　L地点　列石全体図

る。また、岩盤の本来の稜線は第6トレンチ南壁付近であるのに対し、列石の最高位はこれより北にずれていることなどからしても、列石は自然地形に完全に追随しながら構築されるのではなく、平面的・立面的に直線を描く列石の計画位置がひとたび設定されれば、文字通り岩をも通して、これを貫徹していった状況を如実に示している。なお、地山整形は、この列石位置の溝を含めてさらに前後に広がっている。特に尾根上では幅5m程の溝状に整形されており、列石の納まる溝はこの溝底からさらに穿たれた格好になる。したがって、地山整形溝の最深部は列石位置であるが、盛土壁面構築後は、その裾を最深部とする深さ最大50cmの浅い掘割状地形を呈していたことになり、流土で埋まり切っていないその状況が先述のとおり現地表からも観察される。この溝は、そのものが戦術上の機能を持つというよりは、一定の盛土量に対しより高い壁面を作りだすための工法上の工夫と言えそうであるが、結果的には城外側の溝縁と壁面上平坦部の比高が現状で80cm程にすぎないという状況を生み出している。

石材の厚さは、尾根稜線付近の岩盤上で薄い。これは、列石上面を計画位置に揃えるにあたって、岩盤掘削の労苦を少しでも軽減させた代償に薄い石材を用いることによってつじつまを合わせた結果とみることができる。また一方では、石材が薄く列石幅の狭い部分は背後の版築盛土の高さが低く、逆に盛土の高い南部は石材が厚く、控石材もあって列石幅が広いという、盛土高との相関も指摘される。

背後の版築盛土は、大局的には褐黄灰色細微砂の混礫層で、固く締まっている。明暗、鮮淡、灰褐黄の強弱などの微弱な色調差や、混礫の多少などから厚さ10～20cmの大別層に分けられ、全体として同様の特徴を持つものが反復して見られる互層構造を呈している。内でもより下層では、有機分を含み暗褐灰色系の土層が多いといえるが、含有される有機分の比率や下層への集中状況は、D・H・K地点に比べて顕著でない。こうした大別層は、さらに微妙な色調の差や混礫の流れなどから厚さ4～5cm平均の細別層に分層され、これがタタキの単位を示すものとみられる。列石平行方向の断面では、各単位の傾斜は見事に列石上面と平行し、しかもこの区間を通じ連続的に一連の工程として盛り上げられた状況が窺われる。

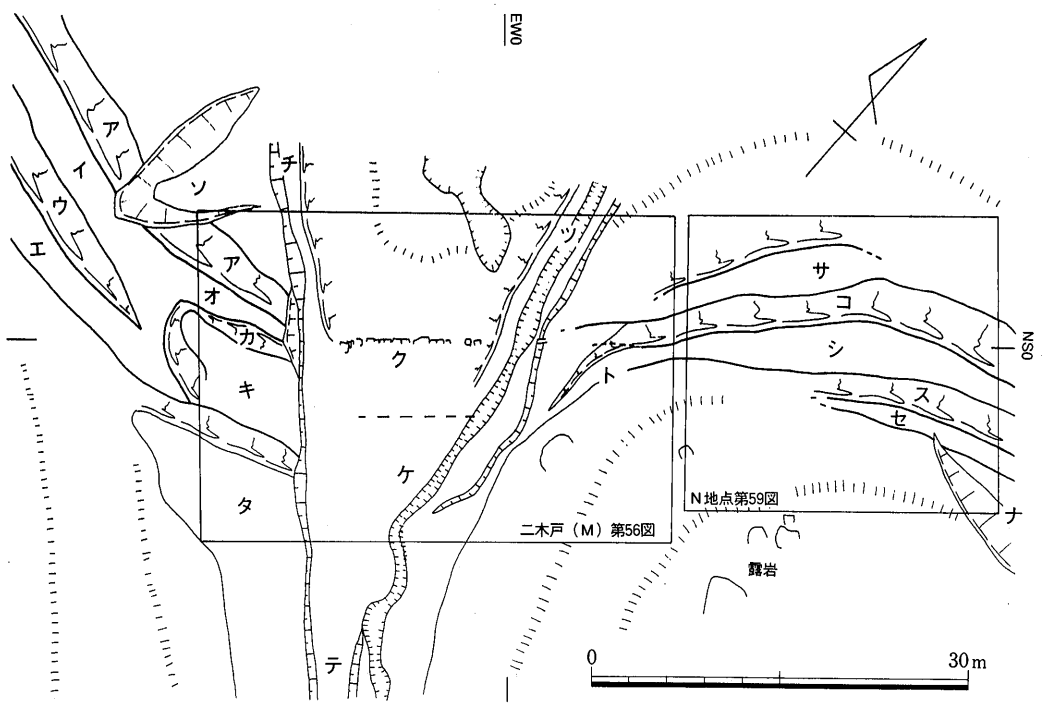
j）10・11・12トレンチ（第47図）

列石を有する壁面の上方平坦部と壁面前面の掘割状地形の肩部に設定した。表土下まもなく第10トレンチでは盛土、第11・12トレンチでは土質であるが石を多く含む地山面を検出した。尾根横断部は、壁面が低いにもかかわらず、位置的には戦略上の要衝とみられるため、柵列等の検出をどの地点にも増して期待したが、各トレンチともに検出できなかった。なお、第11トレンチでは時期不明の掘り方を伴わない小規模な焚火跡を一基確認した。

9．二　の　木　戸

①位置と外郭面の状況（第55図）

外郭線は、L地点の北折部から、城内に向かいつつ10度程の傾斜で下がり、120mの地点で谷を渡る。ここが、二の木戸である。列石を有する壁面(ア)は、L地点の北折部から100mは一直線で、(ソ)の位置に至り205度程度で折れる。この間、この下段壁面は2.0m内外の高さを保ち、背後に平行する上段(ウ・エ)を伴い、全体幅約12mの整った二段構造の外郭線となっている。その折部(ソ)の壁面付近は、後世の土取跡とみられる大きな抉りが認められる。上段壁面(ウ)は、下段の折に関わらずそのまま直線に延びるが、1.5m程あった高さを次第に減じ、平坦面に解消する。下段構造はそのままの高さを維持するのに対し、(ソ)の折部の6m以西からは下段平坦部延長の城内側にも低い落ち(カ)が認められ、基底部幅6m、頂部最大幅2mの土塁状となる。土塁状といっても、上下二段の平坦部と連なる平坦部に東から浅い窪み(キ)を掘削した結果というニュアンスのものであり、窪みの山側端と谷側壁面裾を測点とすれば、全体幅12mで以西から一定である。窪みの西北端には1.5m大の巨石が露出し、自然岩の可能性が強いが、窪み掘削時に意図的に削り残されたものの可能性がある。また窪みの城内側には、平坦部(タ)が認められるが、その形状と改変の規模からして、後世の畑の類と判断される。



第55図　二の木戸　外郭線状況

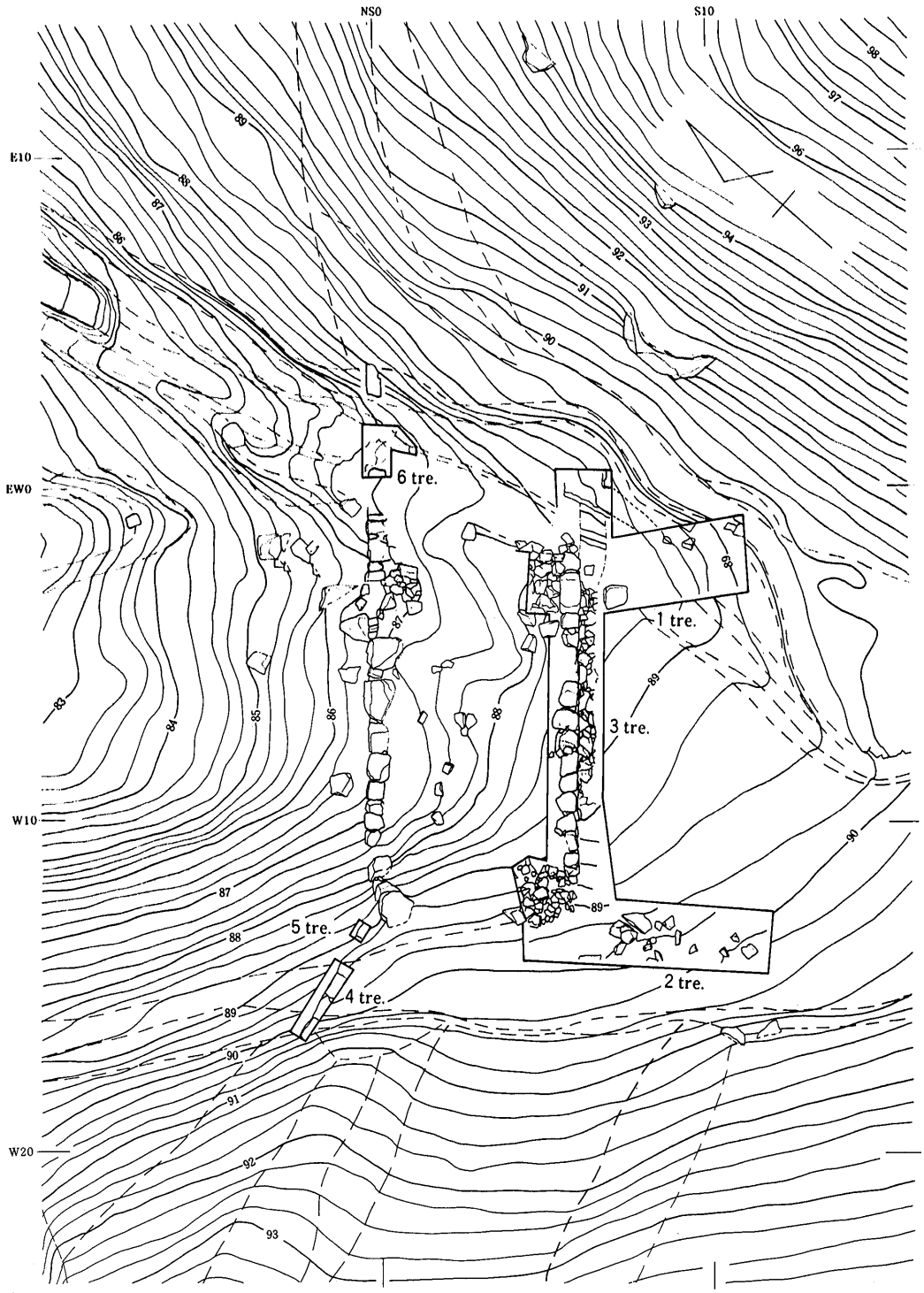
土塁状地形の東は、廃道(チ)に切られているが、列石線は、ここで210度で折れる。先の西の折からは約20mの位置である。その東側延長部分の13m程は露出する巨石使用の石垣(ク)となっており、これが二の木戸と呼ばれているものの本体である。現状では、石垣背後の谷底(ケ)は平坦で、傾斜も石垣前面に比べて緩く、発掘で確認された背面石垣は完全に埋没していた。この谷底平坦部は、上流に向かって次第に狭くなって、露出石垣から30mの位置では幅6m程となる。谷筋に沿って南から幅3m程の道(テ)が延び、ここで谷筋の東西に分岐する。木戸の北はいずれも廃道であるが、本道は東(ツ)のもので石垣東部を横断し、かつては一の木戸からの谷川を恐らく橋で渡り、その谷を通じる常楽寺への道と合流していたと見られる。この間の谷側法面には、一部で護岸の石垣が認められるが、その積み方・石材の大きさなどは石塁石垣や列石とは明らかに異なり、まず後世のものといえる。二の木戸を横切る現谷川は、平時にも少量の流水があるが、露出石垣の背面15m程の位置で伏流水となり、その前面20m程で再び地表に現われる。これは、調査によって明らかになった石塁の排水構造がなお機能している結果である。なお増水時の現みずみちは、東の廃道面を深く刻み込んでいる。石垣の前面は、瀬戸町観音寺字寺僧に属し、17度程の傾斜で60m程下った谷川は一の木戸からの谷川と落合う。石垣の東で、石垣列石線は190度程で折れ、列石を内蔵する壁面(コ)へと続くが、一帯では外郭線の流失が総じて激しく、西側の様な土塁状地形や段構造は観察されない。なお、東方の段上平坦面(シ)から続く狭く不明瞭な平坦部(ト)が確認されるが、壁面から離れて城内側に折れ込み、流失後に通路として用いられた結果と判断される。

列石を有する壁面(コ)は石垣東の折から27m程で小さな尾根稜線に達し、ここで145度程で折れる。この付近（N地点）の壁面高は、2.0m程で、前面には幅最大4.0mの平坦部(サ)が認められ、稜線に沿って下方は23度の傾斜が続く。壁面上の平坦部(シ)は稜線位置で最も広く幅4.5mを測る。尾根稜の東では外郭線の外は40度近い急斜面となり、壁面前面の平坦部は流失のためか不明瞭となるが、城内側には列石を有する壁面に平行する上段(ス・セ)が認められる。現状での下段平坦部幅は1.5m程、上段壁面高1.3m内外、上段平坦部幅最大4.5mを測るが、各肩部はかなりの流失が予想される。ただ全体的には、下段壁面裾から上段山側裾までの合計幅は11.5～12.0m、合計高4.5～5.0mで、二の木戸以西と等しいといえる。なお、こうした外郭線の内側、特に尾根筋付近にはホルンフェルスの巨岩が多く露出している。

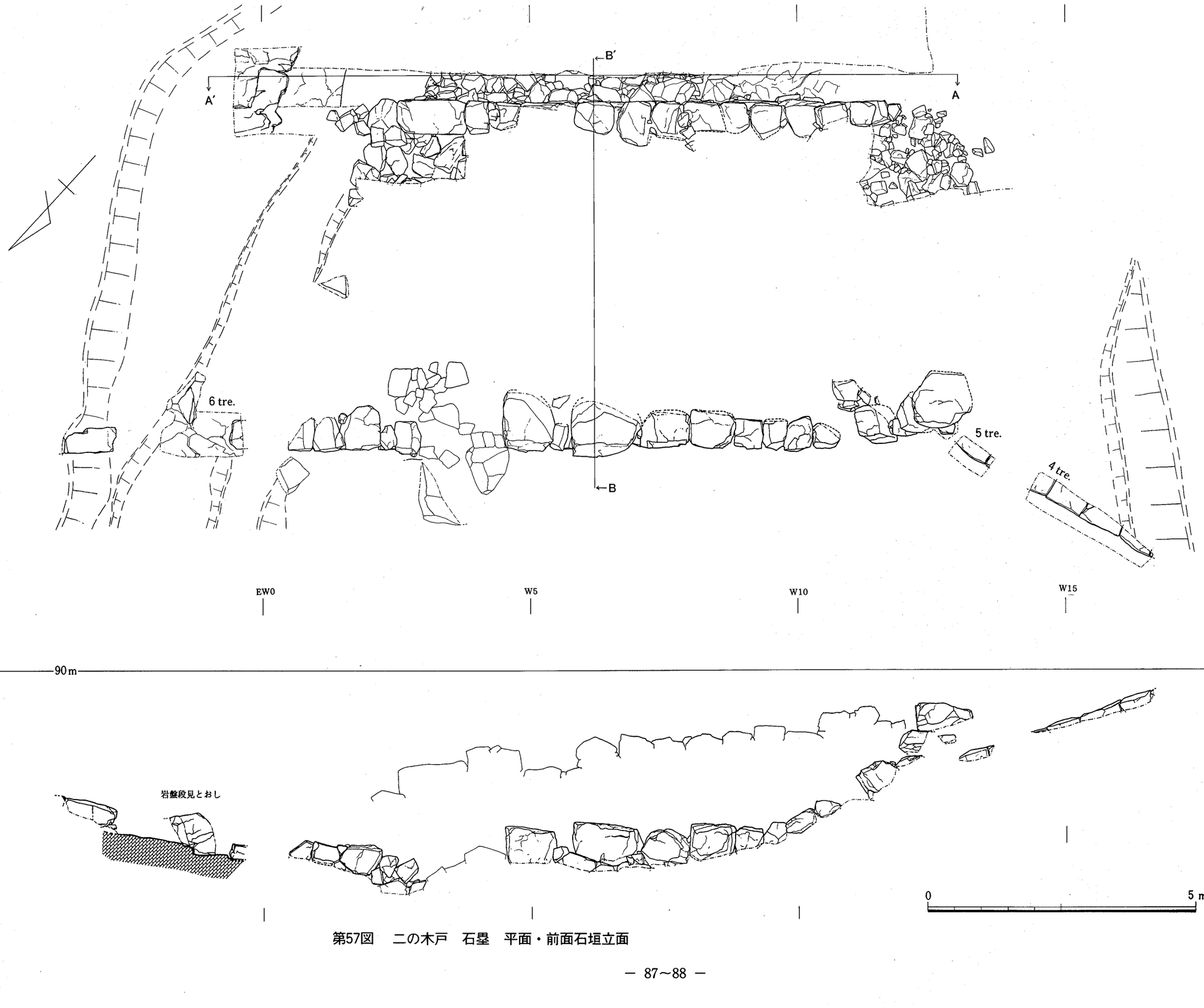
②二の木戸（M地点）の発掘調査（第56図）

ａ）二の木戸石塁の全体像（第57図、図版第23上）

従来二の木戸と呼ばれてきた遺構は、城外に向き露出する石垣で、調査の結果神籠石状列石から連続するものであることが確認された。石垣中央部はその下部が流土・転石で埋没してい



第56図　二の木戸　全体図



第57図　二の木戸　石塁　平面・前面石垣立面

るが、土地境界の関係上発掘を行なわず、現況での実測に留めた。現況での石垣長は12.7ｍを測るが、後述の様に本来の長さは若干変動する可能性がある。その前面石垣に対し山側で背中合わせに平行し、城内を向く背面石垣を流土下で新たに確認した。背面石垣の確認長は10.0ｍ、同高1.3ｍを測る。両石垣間と背面石垣の下部では、無数の角石が堆積する。前面石垣外縁と背面石垣外縁の平面距離は6.5ｍを測り、全体とすればこれを幅とする石塁構造となるが、その上部は大きく流失しているといえる。石塁の主軸はＮ－48°－Ｅを測るが、以下の記述では便宜上東西と見立てる。石塁に用いられている石材は、列石部を含めて総てが地山岩盤と同じ砂質ホルンフェルスである。

ｂ）前面石垣（第57図、図版第24上）

第５・６トレンチは、前面石垣から西側の神籠石状列石への連続を確認するために設定した。この位置は、廃道が及び城門跡の確認も期待したが、列石は途切れることなく前面石垣に続き、しかも列石上面は16度程の傾斜を持っており、城門の可能性は否定された。ここでの列石は、各石とも長さが70cm前後で比較的揃い、となりの石材とがっちり咬まされ隙間がほとんどない点が特徴的である。第４トレンチでは列石上面を覆う版築盛土が最大厚さ20cm遺存しており、列石上の盛土壁面が後世の道によって大きく削平された状況が窺える。

この列石が、前面石垣に取り付くのは210度の折となっている位置である。現状では、前面石垣西縁は３段の石材が確認され、その最上部の石材は、基部の折角からさらに70cm程西にそのままの直線で延びている。しかし、これらの石材は不自然に西に傾いており、本来はもっと折角に近い位置を縁として垂直に近く積まれていたものが、背後の盛土が道によって削平された影響でズレ込んだものと判断される。折角の西辺、列石上方には、小石材が盛土に包まれた状況で確認される。したがって、ここに小規模な控え積み的石積があった可能性があるが、逆に巨石使用の本格的石垣は復原し難く、石垣壁は基本的には折角を境に土壁に移行していたものとみられる。立面的に列石が取り付くのは、列石上面の傾斜からみて、上から３段目で現在露出する石材の直下に想定される４段目の石材である。このことは、東隣りでその４段目に相当する石材が確認できる事実とも整合している。列石が取り付く４段目の石材が、前面石垣基底の石材とみられ、結局この石垣西縁部は、現在４段積み高さ1.6ｍ程を測ることになる。

前面石垣の中央部は、現況では一見列石状に観察されるが、大半を露出する石材の多くは主として２段目の石材とみられる。各石材の大きさは、最大長さ1.2ｍ、幅1.1ｍ、厚さ0.8ｍで、列石部と比べれば大形で極端に部厚い。背面石垣と比べても全体的に大形といえる。また、本石垣の内では、谷中央部で大きく、脇部は小さくなる傾向が指摘される。恐らく谷部では石垣高が脇部より高かった結果であろう。石垣中央部の本来の高さは、本石垣の遺存最高レベルからして、石垣上縁が水平であったと仮定した場合、少なくとも現状より2.1ｍ程高く、総高は３ｍ

余りになると予想される。各石材の面は荒割面に野面が混じる。積み方は、未掘のため不明な点が多いが、平面的には、正方形に近い各石材の長辺で石垣面を作りだす傾向がある。立面的には、横メジを通す成層積みの傾向があるが、石垣全体に一律なものではなく、メジを塞ぐ格好の石材も指摘できる。なお、石材の隙間には詰石も施されている。

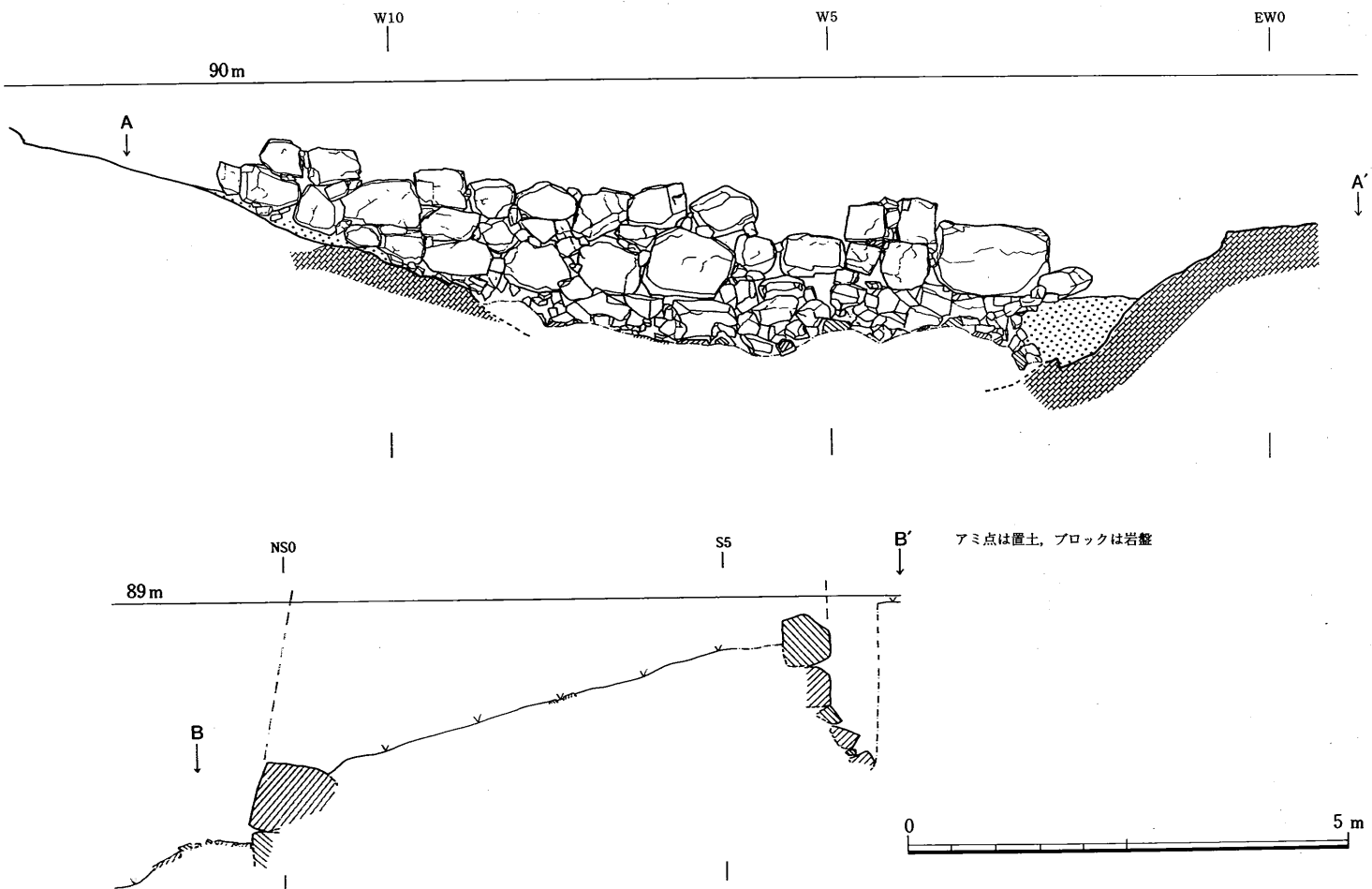
東の廃道の東法面には、石垣外縁の延長線に沿って長さ90cm、幅45cm、厚さ40cmの石材が露出し、地山岩盤と石材の間には厚さ10cm未満の置土が認められる。その東隣には版築盛土に覆われた別の石材が続いていることが辛うじて確認され、露出する石材の東は確実に列石部といえる。第6トレンチ流土下では、石垣列石線に沿って岩盤上に置かれた石材を確認したが、東の石材との間2.1mは石材が欠落している。この欠落部は、現在のみずみちに当り、両端部の石材の状況などからして、本来繋っていた石材が流失した結果とみられる。この欠落が城跡本来のもので城門を想定するには、「通路部」が狭く、石塁と斜交し、「入口」正面に高さ80cmの岩盤による段が立ちはだかることなど、否定的要素が多い。欠落部背後の岩盤段は、石材設置部の岩盤を平坦にカットした際形成されたものと理解される。

第6トレンチの西方では、東の列石から連続的な基底部石材が岩盤上に想定され、露出する成層積みの3石材は2段目とみられる。このことから西折角（本来の石垣の西端か）から一直線に12.0mの位置までは確実に複数段積といえる。一方、その東から廃道法面の露出石材の間は、現状では確認されないが、二段以上の石材があった可能性もある部分で、最も長くみた場合石垣の復原全長は16.1mとなる。

c）背面石垣（第58図、図版第23下）

確認全長10.0mの背面石垣は、西端・東端とも前面石垣端の対称点より中寄りに求められる。この確認端は本来の端部と断定できる状況ではなく、例えば、西はその対称点まで、東は岩盤壁に突き当たる位置まで延びていた可能性はある。ただ、その復原延長は精々3m程度とみられ、石垣または連続する列石が東西の谷斜面にまで長く及んでいた状況は認め難い。

石垣本体の基礎は、谷中央部では無数の角石、側部では岩盤もしくは置土である。角石堆は石垣に添って長さ8.5m認められるが、石垣前面への面的広がりは不確定である。岩盤上に直接積まれ、先行して堆積土石の除去、岩盤整形が行なわれたものとみられる。堆積の厚さは側部で薄く、谷中央部では0.8m以上、完掘すれば1.3m程度にまで達するものと思われる。互いにがっちり咬まされた空石積み、深部は現在も隙間に土砂を含まない状態である。石材は、一辺70cm大から人頭大を中心とし、谷中央部程大きなものが目立ち、割石材とみられるものと転石をそのまま用いた様なものもある。石垣の基礎であると同時に、谷水を石垣の手前で伏流水として石塁下に通水するための施設とみられる。なお、石垣前面で原位置を保った角石は、ほぼ石垣本体最下段以下のレベルに限定され、石垣面に立掛けた状況は確認されない。谷側部に



第58図　二の木戸　石塁　背面石垣立面・断面

限って認められる置土は、暗黄灰色の細微砂で、角石層の縁部及び地山を覆う格好で、東側で厚さ80cm、西側では厚さ10cm内外を測る。

石垣本体に用いられている石材は、長さ1.3m、高さ0.8mのものを最大、長さ0.7m前後、高さ0.4～0.5mのものを中心とし、直方体もしくは立方体状を呈する。石材面は、石垣面側を中心に荒割面が目立つが、他の方向は野面も多い。積み方は、最大3段で、成層積の傾向があり、隙間には詰め石が咬まされている。ただ、細かくみると一律に横メジが通る構造ではなく、むしろきれいな横メジが通るところは少ない。W3.8m、W4.8m、(W7.9m)、W9.0m、W9.7mライン付近では縦メジが通っている。縦メジ間を単位に、横メジがきれいに通る所があり、全体的にメジはT字を倒した形に通る傾向がある。ところで、縦メジ線の内、前二者は東に、後二者は西に傾き、石垣は両側部から積み始められ、谷中央の逆台形の窪みを埋める格好で完成された状況が窺われる。また、谷中央部W7mラインを中心とする2段目の3石材は上下面が水平ではなく傾くという他部にはない状況を示している。この様な状況は、石垣構築の工程や力学的配慮を反映するものとみられるが、谷中央部の石垣が崩落し、二次的に積み直された結果の可能性も残る。なお、石垣の断面は、上段程僅かに石塁内側に引く傾向がある。

谷中央部での本来の石垣高は断定できないが、成層性や遺存最高点のレベルを参考すればさらに一石分50cm程高く、4段積みの可能性も考えられる。なお、背面石垣の遺存最高点のレベルは前面石垣のそれとほぼ同じである。したがって、これらの部位が本来高を保っているとすれば、岩盤や積出面のレベル差に関わらず、両石垣の上縁はほぼ同レベルに揃い、共に4段積みであった可能性が指摘できる。

背面石垣にはトンネル状の通水溝は認められないが、この谷の水量からして、排水構造は先述の角石層だけで事足りたものとみられる。通水溝が発掘限界下の角石層深部に構築されている可能性が全くない訳ではないが、一の木戸通水溝の状況からすれば、考えにくい。

第1・2トレンチの石塁後方では流土下に地山面を検出した。土質中に一部未風化の岩質を散在させるもので、構築時に谷底堆積物の除去と掘削によって露出させられた面とみられる。石塁背面石垣を底辺とし、谷上方に突き出した窪地が形成されていたことになるが、石塁の構造からしてこの窪地に水が満々と蓄えられていたという状況は想定し難い。

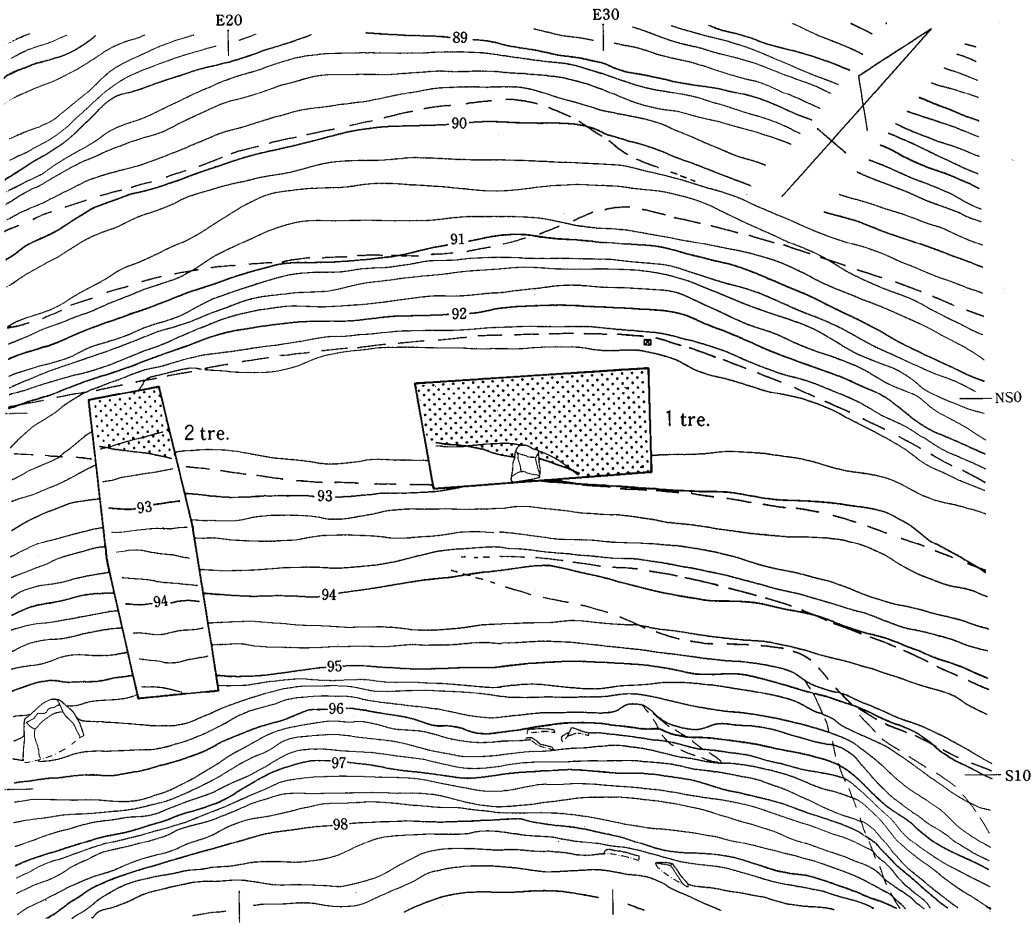
d）石垣間の構造（第57図）

第1・2トレンチの石垣間で角石層を検出した。長辺40cm程度の割石・転石利用材で、これも基本的には土砂を含まない純石層である。部分的な確認に留まっているが、一の木戸の例からしても、二つの石垣の間には同様の状況で石材が充満しているものとみられる。こうした角石堆を覆うのは、厚さ10～数十cmの流土であり、第2トレンチの背面石垣延長部を含め、人為的な盛土とみられるものは確認されない。ただ、角石堆上部自体が流失していることからして、

盛土が本来あったことを否定する根拠とはならず、むしろ西側の土塁状地形との連続性からすれば、少なくとも厚さ数十センチの盛土が石塁上部にあった可能性が指摘される。

3)N地点の発掘成果（第59図、図版第24下）

一、二の木戸の中間に位置し、共通の谷入口を見渡せる位置にあたるため、見張台的施設を期待し、下段平坦部を中心に二つのトレンチを設定した。いずれも薄い流土下で、地山削平部と盛土部の境界線を確認したものの、上部構造物に関わる遺構は確認することができなかった。

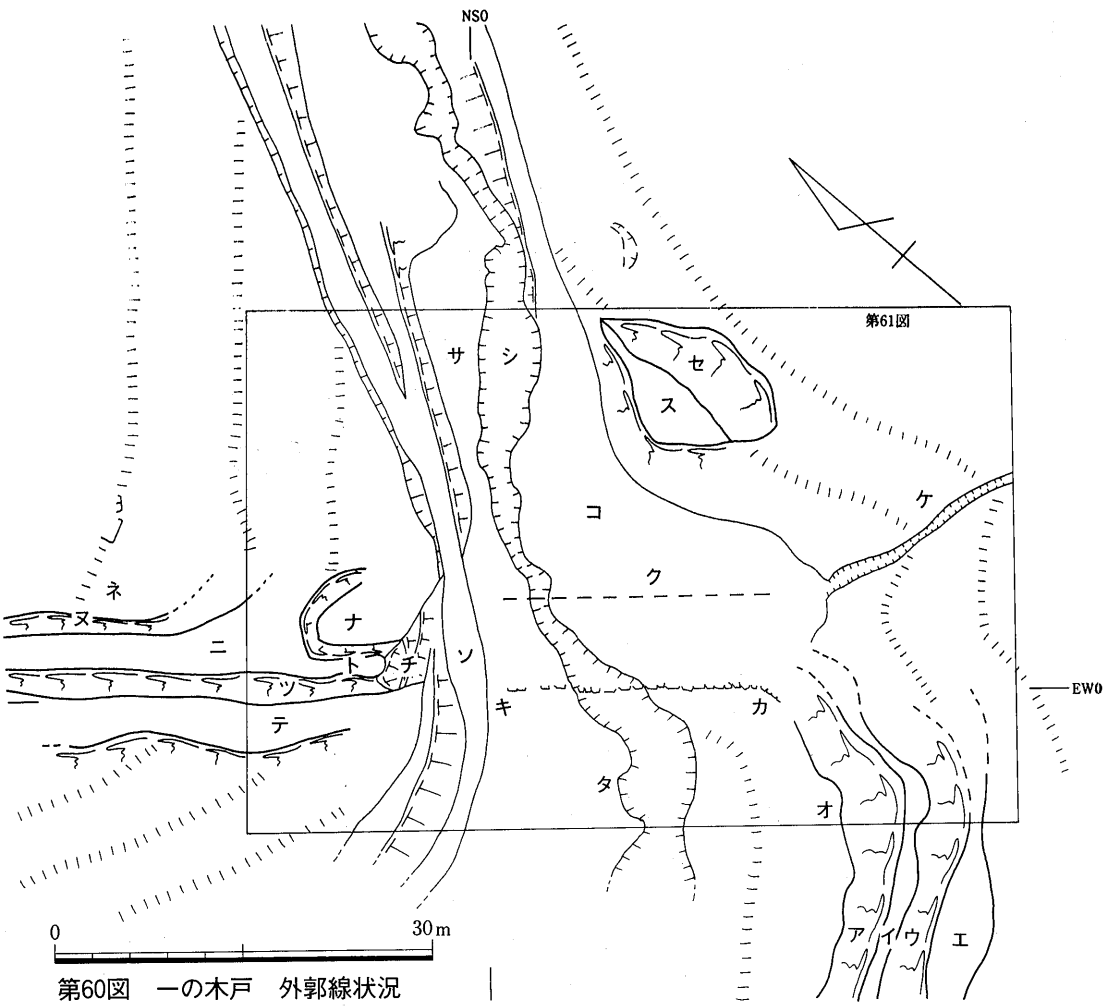


第59図　N地点　全体図　アミは盛土

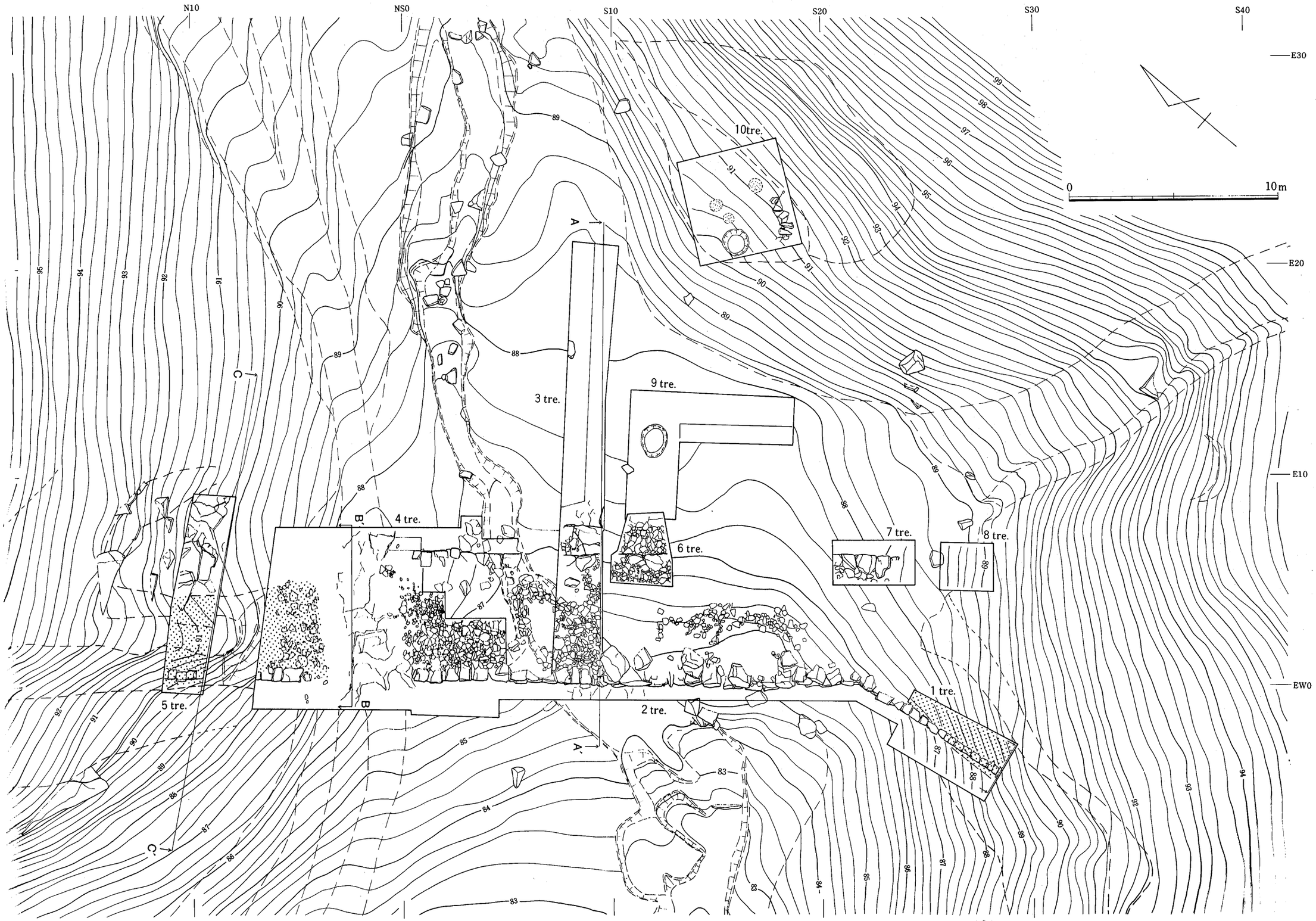
10. 一　の　木　戸

①位置と外郭線の状況（第60・61図）

N地点の稜線上の折部から40cm程の間、列石を内包する下段壁面(ア)は、ほぼ等高線に沿って走行し、内に190度程の鈍い折を二つ経て、(オ)の折に至る。この間、壁面外方は40度近い急傾斜で、壁面裾が不明瞭な個所もあるが、およそ壁面高は2.0～2.3mといえる。壁面上方には、ほぼ平行して、下段平坦部(イ)、上段壁面(ウ)、上段平坦部(エ)が認められる。現状では、下段平坦部の幅は1m内外と他地点に比べて極端に狭く、また上段壁面は高さ1m余り、上段平坦部幅1.5～4.5mを測るが、測点とした肩部などは激しい流失によって、本来の位置からかなり移動しているものとみられる。ただ、外郭線総体とすれば、下段壁裾と上段平坦部山側裾を測点として、全体幅は11～12m、合計高は4.5～5.0mとほぼ一定している。



第60図　一の木戸　外郭線状況



第61図　一の木戸　全体図

（オ）の折から北の下段壁面は、35度程の急傾斜で15ｍ程下り（カ）の折に至る。この間中程で、壁面に覆われていた列石はしだいに露出し、（カ）の折の手前２ｍ程に至っては城外を向いて露出する複数段の石積（石垣）に移行する。一方、この区間の下段壁面以上は、南から連続的な段構造もしくは土塁状構造が存在していたものとみられるが、急峻な傾斜による流失のためか、現状では構造を明確に捉え難い。

（カ）の折から（キ）までの間約21ｍは、外郭線の谷渡り部にあたり、城外を向く石垣が一直線に延び、北側の一部を除いて以前から露出していた。（カ）の南の石垣部も含め、従来「一の木戸」と呼ばれてきたものの本体である。発掘の結果、この区間の城内側には背中合わせに平行する背面石垣（ク）があり、全体として両石垣を幅とする石塁構造の存在が判明したが、発掘前は、前面石垣以外の石塁構造は埋没し、前面石垣による壁面の上方には、幅約20ｍ、奥行15ｍの規模、大小の転石をみる緩傾斜の谷底平坦面（コ）が認められるのみであった。

この平坦面つまり石塁の背後に取り付く谷筋は、南東及び北東から延びている。南東からのもの（ケ）は、城跡の中央に向かって延びる尾根先の斜面を刻み、谷筋の傾斜は左右の山腹同様に極めて急で、この付近での底面幅４ｍ足らずの小さな谷である。現況では、みずみち痕が認められるが平時にはほとんど流水がない。一方、北東から延びるものは遙かに規模が大きく、本城跡内最大にして中央を占める谷筋で、この辺りから上方の現溜池付近までの谷筋は７度程の比較的緩やかな傾斜となっている。先述の平坦面（コ）の上方から前面石垣の背後35ｍ程の位置までは、傾斜がややきつくなるものの幅12ｍ程の広い谷底面（サ）がさらに続き、以後は谷底幅が急に狭くなる。石塁の砂留め効果に起因する谷埋積の影響が、この位置まで及んだ結果とみられる。現在のみずみち（シ）は、これら流土堆積によって形成された谷底平坦面を、幅２ｍ内外、深さ0.2～0.6ｍに渡って蛇行しながら刻み、平時でもかなりの流水がある。この流水は背面石垣埋没位置の上方数メートルの所で伏流水となり、前面石垣の基部前面から再び地上に出る。これは、石塁下部構造が通水性に富んだもので、これがなお機能している結果である。ただ、増水時のみずみちは、背面石垣の北寄りで石垣頂部の石材を洗い、石塁土塗通過しつつ石垣間に充填された角石層を段状に抉り、前面石垣のほぼ中央を滝となって落ちることから、石塁の崩壊を今日進める主因となっている。

この谷の北縁には、現在、幅２ｍ程の道（ソ）が通っている。これは、本山塊の北西山麓の瀬戸町観音寺から谷伝いに進み、F地点南の鞍部を越えて、常楽寺さらには南東山麓の草ケ部に抜けるもので、以前は小廻り地区、つまり城内域に入る主道であった。この道は、石塁の北縁をほぼ直角に横切り、石垣列石線が途切れる状況が観察されることから、この位置で城門の存在も予想されたが、発掘の結果、城門を裏付ける状況は認められなかった。

北東から延びる谷と南東から延びる谷に挟まれた石塁背後の山腹斜面は、およそ35度内外の

急斜面であるが、これに閉じ込まれる格好で平坦部(ス)が認められる。この平坦部は、現在の谷底平坦部(コ)から高さにして２ｍ程上がった位置にあり、南北長は13ｍ、東西幅は最大４ｍ程で南北に向かって減少し、下方に向かって突き出した三角形を呈している。この背後には、周囲よりさらに急な斜面部(セ)が認められ、平坦部の造成に伴う山側の削平痕とみられる。

石塁前方の谷底平坦部(タ)は、幅15ｍ内外を測るが、下方はやや狭くなっていく。現みずみちは、蛇行しながらこの谷底面を深く刻み、80ｍほど下った位置で、二つ木戸からの谷と合流する。谷筋の傾斜は、200ｍ程下方までは10度足らずを示す。なお、石塁の前方は瀬戸町観音寺字寺僧に属している。

石塁の北方は、道(ソ)の造成に伴うとみられる崖状の法面(チ)があり、その内の前面石垣の延長線上に、列石石材２個が原位置で僅かに露出していた。以北は、この列石延長を内蔵する壁面(ツ)が、引き続き直線を描きながら長さ50ｍ程続く。壁面高は1.5ｍ程で、その伝う傾斜は22度内外を測る。壁面の前面には幅３～４ｍの平坦部(テ)が認められる。

壁面(ツ)上には、道(ソ)の北縁からの長さ11ｍ、幅２ｍ足らず平坦面(ト)があり、その背後には深さ0.5ｍ程の窪み(ナ)がある。つまり、城内側の壁面は低いながらも、基底部幅５ｍもしくは７ｍの土塁状の地形が認められる。窪み底面の最大幅は、５ｍで上方に向けて狭くなるが、その上縁にはホルンフェルスの巨岩が露出しているほか、底面にも露岩が認められ、この窪みが岩盤の掘削によって形成されている状況が窺える。なお城外を向く壁面(ツ)裾と窪みの山側肩部との距離は11ｍ程となり、石塁南の外郭線幅と大差ない。

窪み(ナ)の北では、壁面上平坦部(ニ)は、窪みを取り巻く様に広いが、北に向かって幅３ｍまで狭くなり、以後一定する。この平坦部の上方には、高さ50㎝未満の段(ヌ)が辛うじて確認され、その上に平坦部(ネ)がある。この平坦部の山側端も自然地形に埋没し判然としないが、北部での下段壁面裾から上段平坦部肩までの距離は７ｍ足らずで一定し、計測不能の上段平坦部幅を考慮すれば、外郭線幅は石塁南部と大差ないといえる。

外郭線は、このままの状況でＡ地点のすぐ南まで続いている。石塁の北方一帯は、本山城の内で、外郭線が等高線に最も逆らって構築された部分である。

②一の木戸（Ｏ地点）の発掘成果（第61図）

ａ）一の木戸石塁の全体像（第62・63図、図版第25）

石塁の本体部は、城外を向く前面石垣と城内を向く背面石垣によって画され、両石垣間には土砂を交えない無数の角石が充填されている。石塁南端部付近を除き、二つの石垣はきれいに平行し、その部分での両者の外縁間の距離、つまり石塁の基本幅は6.1～6.2ｍを測る。また、石塁の主軸は、便宜上南北と見立て記述するが、正確にはＮ－40°－Ｗを示す。

N5 N0 S5 S10 S15 S20 S25

E5

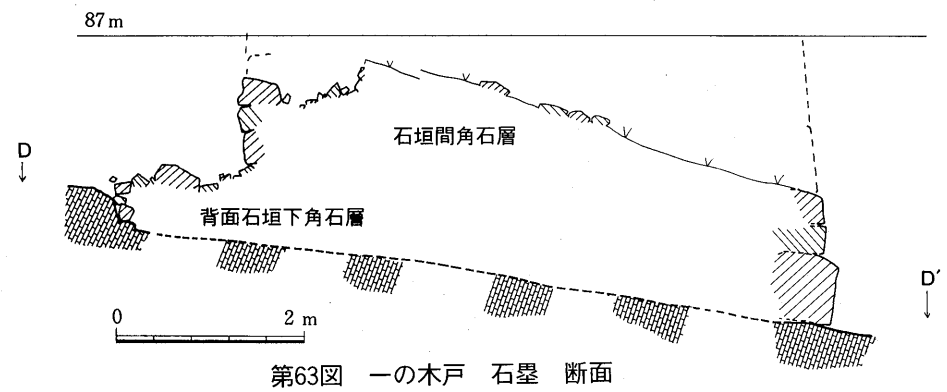
EW0

89m

アミは石垣下置土

0 5m

第62図　一の木戸　石塁　平面・前面石垣立面



第63図　一の木戸　石塁　断面

前面石垣は本来から露出していたとみられるが、各部の最下段の石材などは流土や大小の転石に覆われており、ほぼ全面に渡って掘り下げを実施した。石垣南端の最下段は神籠石状列石から連続している。北端は、現状では石材を岩盤に当てて一旦途切れているが、その延長線上に欠落部をおいて、やはり列石に続いている。現状での北端から、南へ21.3mは一直線、ここで207度の折部を持ち、さらに1.7mは複数段の石積みが認められる。一方、今回新たに確認した背面石垣も、本来は露出していたとみられるが、調査前は流土に埋没し、中央部、北端部、南端部についてのみ掘り下げを行なった。検出したその北端は、前面石垣の現北端の対称位置にあり、南端はここから前面石垣折部の対称点をそのまま一直線に突き抜けて、23.3mの所にある。この南端は、ほぼ、前面石垣南端から石塁主軸に対しての垂線上にあり、石塁の長さとしてはこの背面石垣長を充てることができる。ただ、背面石垣南端を除けば、現状での各石垣端部は本来からの端部と断定するには至らず、本来の石塁長は若干長くなる可能性もある。

現状での石塁の高さは、前面石垣の最高部で2.4m、背面石垣側の最高部で1.7mを測り、石塁の断面形は台形ぎみの方形とみられるが、石塁上部はかなり流失した模様である。石塁中央の基部には、石塁主軸に対して72度で斜交するトンネル状通水溝が構築されている。その排水口は前面石垣面にあるが、吸水口は背面石垣面からさらに東上流に突き出した位置に構築されている。背面石垣の基礎には角石層や置土、通水溝石材が認められるが、これをも含めて総体とすれば、石塁は砂質ホルンフェルスの岩盤上に築かれているといえる。なお、確認した石材は、列石と石垣本体とも、野面を一部に残す粗割材で、後者には完全な野面材も含まれる。また、取り付き部の盛土混入の角石や石塁石垣間の角石は割石を中心としつつ自然の転石状態のものもある。石種はほとんどが砂質ホルンフェルスで、背面石垣中央部の一部で花崗岩系のものが極僅か認められる。次に、石塁各部の詳細について記述を行なう。

b）前面石垣南端から列石移行部（第64図）

第1トレンチの南端では、列石は盛土壁面の裾にあり、しかも盛土に全面が覆い隠され、列石の構築された位置や状況は外郭線の一般部分と同様といえる。そこでの列石は上幅65cmの岩盤整形溝の底に置かれ、背後の盛土壁面は暗黄褐色系の単位の細かな版築層からなり、高さ1.5mを測る。トレンチ南端から10石目までの列石は、各石の平均長40cm、厚さ15cm内外で、本城跡の列石石材の内では小形の部類である。この間、立面的には19度の傾斜で降り、現状では7石目以北から次第に盛土壁面に顔を覗かせ、ついに前面を露出させる。一方、10・11石間を境として以北、石垣までの2.5m間の石材は、平面的にも立面的にも北から連続する直線を描くが、石材は急激に大きくなる。つまり、平均長は50cm、厚さは30～35cmを測り、その差は特に厚さの点で著しい。この部分の背後は、依然盛土であるが、長辺20cm程の角石が混入され、その点でも以北とは異なった状況が認められる。

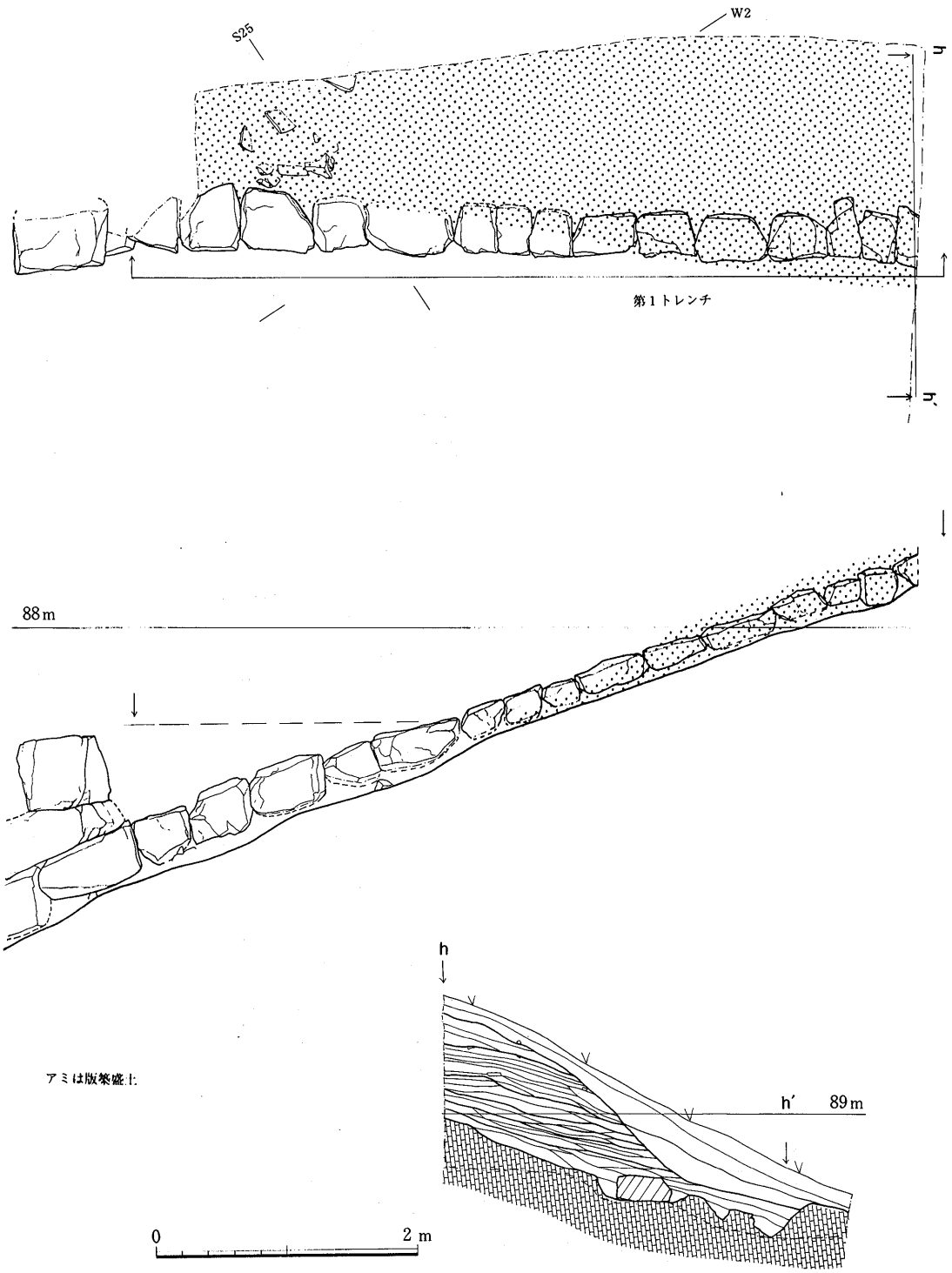
確認される前面石垣端は、現状で3段積みである。この内、列石が取り付くのは最下段の石材で、それは南の列石部と連続的に揃えて置かれている。さらに、前面石垣折部までは、石垣基底部石材は、そのまま整った列を描く。つまり、石垣折部からトレンチ以南にかけて、外縁と上面を揃えた一連の石列があり、南では盛土壁面に覆われていたものが、中程で露出し石材が大きくなり、北では露出する石列上にさらに石材を重ねる格好で石垣が構築されている。

盛土の流失を考えれば、本来の列石露出部南端は、石材の大きさの変換点と一致するか若干北寄りに求められる可能性が高く、石垣と一連の露出部は計画的に大きな石材を充てたものとみられる。逆に、露出部に対して石材が断絶的に小形化して区分される列石南部は、当初から壁体内に留める意図で構築されたもので、盛土削り出しによる露出作業が予定されつつも未遂に終ったものではない可能性を示唆する。ところで、大石材による露出列石部直上は、中空となっているが、本来は版築による壁面であった可能性とともに、石積みがあり石垣面がさらに続いていた可能性もある。ただ、その場合、この部分でも南寄りでは列石上面に一定量の盛土が遺存し、本来から明らかに列石状で、むしろ露出部とはいえ徐々に盛土に覆われる傾向を持ち始めていた可能性すらある事、大石材列石南端の石材上縁のレベルは現石垣南端の上縁と一致し、しかもそれが前面石垣の現遺存部最高位となっており、現状より極端に高い石積みは考えにくい事などから、仮にそうした石材が存在していたとしても精々北寄りに1～2石程度で、盛土壁面に移行していたものとみられる。いずれにせよ、石材が外から見えるという点でこの部分も石塁に含めて考えれば、その長さは南に最大2.5m程長くなる可能性がある。

c）前面石垣（第62・65図、図版第26・27上）

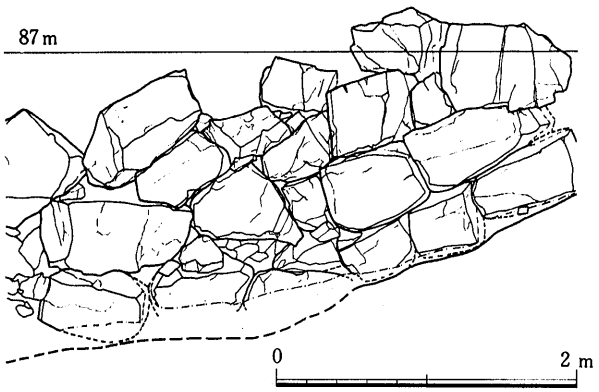
前面石垣は、折部以南の南端部と以北で本格的に谷渡りをする主要部に大別される。

全長1.7mの南端部は、現在高1.8mを測り、一辺50～60cmの直方体状石材のうち最短辺を高



第64図　一の木戸　石塁　前面石垣南端列石移行部

さにとった最大4段積みである。南の列石から連続する最下段と2段目は成層積みで、2段目上面は谷に向く傾斜面を形成するが、以上の段は積み方が変わって、山側を向いた楔形の石塊を成して、現上縁でほぼ水平面を形成する。また、この部分の北縁つまり石垣折部では、僅かに谷に傾く垂直メジが通り、築造工程上もこの部分で断絶があった事を示している。



第65図　一の木戸　石塁　前面石垣折部立面

現長21.3mの石垣主要部は、基本的には成層積みの傾向があるが、折部の北2m間はやや特徴的な積み方をみる。ここでは、最下段の3石は上面がやや不揃ながら石列状を成し、見かけ上、折部南の基底部の石列から連続するが、その傾斜は折部で変換し10程度となる。その上には、最下段上面と折部の垂直面を二辺とする直角三角形を3石で成し、さらに隙間に詰石を伴いながら三角形の底辺を拡張する格好で石材が積まれている。この石塊には、石垣他部では認められない三角形の石材や最下段あるいは水平面に対して45度程で傾く状況の石材を含んでいる。一見、落し積みの技法に近いこの部分は、後世の積み直しの可能性もあるが、折部南の急傾斜部の石垣の重さを受けるための、城跡本来の工夫とみる事もできる。この部分の石垣背後は発掘を行なっていないが、石材の隙間から純角石が充塡された状況が確認され、盛土主体の露出列石部背後と異っているが、両者の変換部は折背後に位置する模様である。

その区間の北、排水口部との間は、石垣前面に転石が著しく最下段石材の根まで十分掘り下げを行ない得なかった。各石材は、各辺10：8：8～5内外の比率の直方体で、最長辺を奥行、最短辺を高さに充てている。大きさは、最大長辺110cmで、折部付近の石材に比べて大きく、またサイコロ状の部厚いものが目立つ。基底部石材は、やはり列石状を成し引き続き緩やかに下降するが、その上面には折部以北の様に整ったメジを通すものでもない。2段目もやはり成層積みの傾向はあるが、むしろメジを塞ぐ格好の石材も見受けられる。さらに上には部分的に1～2段の石材が認められ、現存石材は最大4段といえるが、排水口部のすぐ南では5段積みの可能性もある。また、成層積みの傾向と同時に、基底部から重箱状に石材を積み重ねた部分も指摘される。なお、重箱積み状部の上部石材は、底面を外に向け石塁内側に倒れ込んでいる。これは、本来から上段ほど僅かづつ石塁内側に控えて安定を図っていた事も影響し、石垣が前面に転落するより先に、背後で重さを支えていた角石群が北へ流失した結果であろう。

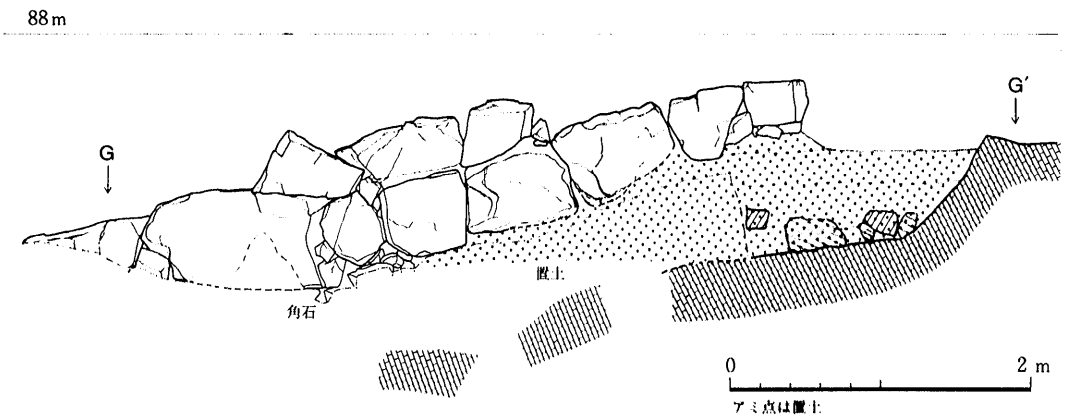
主要部中央の長さ4.5m程は、最も巨石が多用される区間というだけでなく、排水口とこれに関連して特徴的な石積みを見せ、また両縁に垂直方向のメジを形成し、築造工程上も完結した区間とみられる。この区間中央部の最下段の2つの石材は、本石垣中最も低いレベルを占め、岩盤上にほぼ水平に置かれている。両石材間には60cmの間隙が開けられ、この空間がそのまま排水口となる。排水口の北側の石材は、本石垣最下段の石材中最大で、80cmの最短辺を高さに、145cmの最長辺を石垣面での長さに充てている。両石材の上には、板状の大きな石材が跨がり、これが通水溝の天井石となる。排水口を成すこれらの三石の南北と上では、成層積みというよりは、三石を任意に包み込む様な状況の石積みで、大石材間には詰石も多用される。天井石の北に乗る石材は、各辺100～150cmを測る本石塁最大の巨石である。これは、石垣面に稜線を向けやや異質であるが、上方から転落したものがたまたまこの位置に留まったものとも考えられず、原位置から若干ずれた程度の可能性が最も強い。この石材を含む部分が石垣高2.4mで、本石垣の現存最高部となっている。なお、通水溝自体の構造は後述する。

さらに北の区間は、最大2段積みが確認されるが、10度程で昇る成層積みの傾向があり、特に区間南端では整った横メジが観察される。各石材は直方体状のもので各辺が50～80cmと比較的揃っている事もあり、南の各区間に比べ整然とした石垣である。最下段の石材は直接岩盤に置かれるが、岩盤との隙間が大きくなる部分では、長辺40cm以下の小石材が咬まされている。また、岩盤との接地部が石垣面より奥にあり、石垣面では下面が岩盤より僅かに浮く石材も指摘される。これらは、南西に下がる岩盤傾斜面において、上面を水平に保った状態で石材を固定させる事に最大の注意が払われた結果とみられる。区間北半部では最下段の石材しか認められないが、石材の形状や南からの連続性、石垣前面の転石状況や背後の角石群のレベルなどから、本来はさらに石材が乗って石垣状であったとみて間違いないであろう。この区間では石垣背後を2つのトレンチで面的に掘り下げたが、いずれも角石がぎっしりと充填されている。角石は、石垣構成石材の裏側に直に接し、石材の間隙は中空を保っている。大きさは最大級のもので長辺50cm余りの盤状であるが、主体は長辺25cm以下の盤状もしくは塊状のものである。

d）石塁北端（第62・66図、図版第29下）

石塁北端は城門が存在した可能性もある位置であるが、道に切断され改変が著しい。

確認した前面石垣の北端は、以南同様の石材が襞状の岩盤壁に迫り、隙間に棒状石を詰め込んだ状況で終っている。この岩盤襞の高さは、石垣石材の奥端付近では50cm程で、石材の高さとほぼ一致するが、石垣面では解消してしまう。その北、3.4mは薄い流土下に岩盤を検出しただけで、石垣、列石の石材は確認されない。ただ、襞を挟んで、連続して同様の石材を置くために整形されたとも思える、岩盤の窪みが2か所確認される。石垣面延長線上に列石石材が確認できるのは、北端から道を挟んで5.0mの位置以北である。



第66図　一の木戸　石塁　背面石垣北端

一方、背面石垣の北端付近は、最大２段積み、高さ2.0ｍを測り、成層積みの傾向がある。北端から７石目の最下段石材は長辺1.1ｍで、８石目のものと共に大形の部類に入る。ところが、以北の６石は長辺0.8ｍ以下と小さくなり、北端で最小となる。また、この間南の３石は上に石材が乗って２段、北の３石は１段であるが、最下段そのものが20度近い傾斜で北に高くなるため、現石垣上面のレベルは北端が最も高くなる。端部石材のすぐ北や西背後の同レベル位置には、道整備時の積み上げ土とみられる締りのない暗黄灰色土が堆積していた。なお、さらに北の石垣延長線上の道路面やそれを越えた部分でも、石垣もしくは列石を構成する様な石材は確認されない。ところで、背面石垣の最下段は直接岩盤に乗せられたものではない。石垣北端部では、緩傾斜の岩盤上に、先ず長辺40cm以下の角石群が置かれ、その上に暗黄灰褐色の置土が岩盤面から75cmの位置まで盛られ、石材設置面が造成される。この置土は、成層性をもつ石垣最下段石材のレベル調整を果たすものといえる。一方、北端から５石目以南では、石垣石材は土砂を含まない角石群に乗っている。この部分は転石に阻まれ掘り下げていないが、角石群は恐らく厚さ数十センチの層を成し、直接岩盤上に堆積する。背面石垣下の置土は、石垣面の東前方から裏側２ｍ付近にまで及ぶ。石垣の裏側では、その厚さはしだいに薄くなるが、その上には角石層が堆積する。この角石層は、原則的には両石垣間を充填するものであるが、ここでは背面石垣側に薄く、現状では背面石垣にまで到達しないのに対し、前面石垣側では、石垣の確認高もしくはそれを若干越える厚さで直接岩盤に乗っている。この石群は、見かけ上、背面石垣下岩盤上の角石に近似するが、置土や石垣との前後関係からすれば、一連のものではない。

両石垣の確認端を結ぶ線から、石垣間の角石は数十センチ、背面石垣下の置土・角石は１ｍ余り北まで確認される。いずれも、北ほど薄く遺存石材も小さく、道に削平された状況であるが、南に向けて急激に厚くなる。つまり、岩盤は道路面から南へ段状に落ち、その段差を充足

する角石・置土部分が良好に遺存する格好となっている。この岩盤段は、前面石垣の確認端の襞状態に始まるが、両石垣端を短絡して直線に延びるものではなく、不明瞭部分やジグザク部分を経て、背面石垣の北1.8mに至る。したがって、仮に両石垣の確認端に挟まれる格好で直交する石列類が構築されていたとすれば、少なくとも前面石垣寄りには遺存しているはずであるが、そうしたものは確認されない。一方、両石垣の確認端を結ぶ線から北３m程、現道路幅を含む間では、岩盤及び置土の確認面は、南北方向にはほぼ水平な状況でその幅を保っている。仮に城門を想定するとすれば、道路部となるものであるが、この面上でも、これに平行する列石類やその直接的痕跡、また柱穴などは一切確認されない。なお、現道路面とほぼ一致する幅1.6m程の岩盤面では、斜面上方にコの字に引く格好で段状に整形された部分が二、三個所ある。ちなみに、この通路状部の石畳直交方向の傾斜は平均12度を測る。

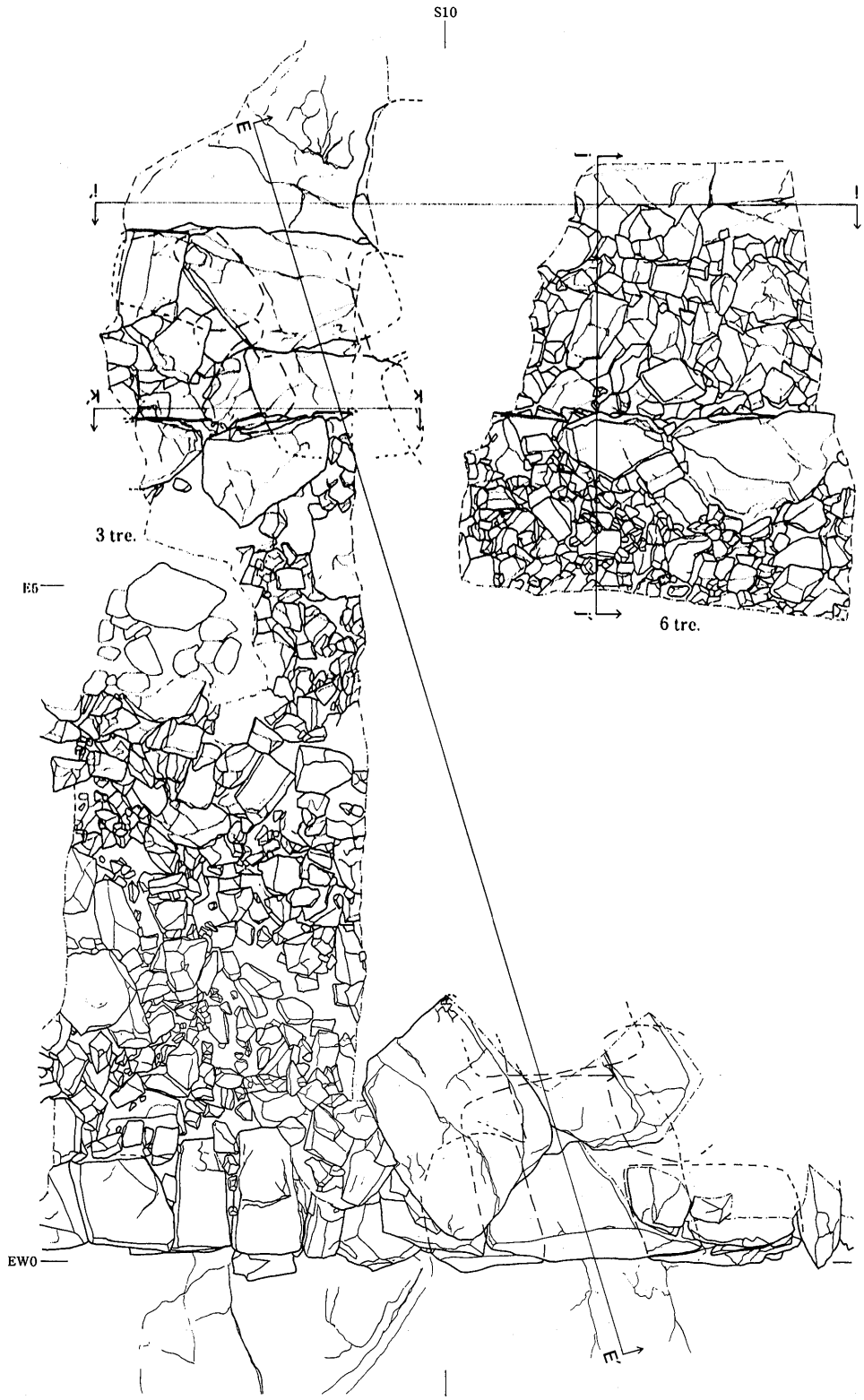
ｅ）背面石垣中央部と通水溝（第67・68・69・70図、図版第27下・28）

石畳中央部では、二つのトレンチで背面石垣を検出した。南北端から連続する石垣面を形成する石垣本体は、最大石材の長辺1.3m、確認高1.3mで、２段積み、隙間には詰石が多用され、背後にはやはり角石が充填されている。両トレンチを通じ石垣積み出し面は、ほぼ水平である。次に、石垣本体を支える下部構造について記述する。

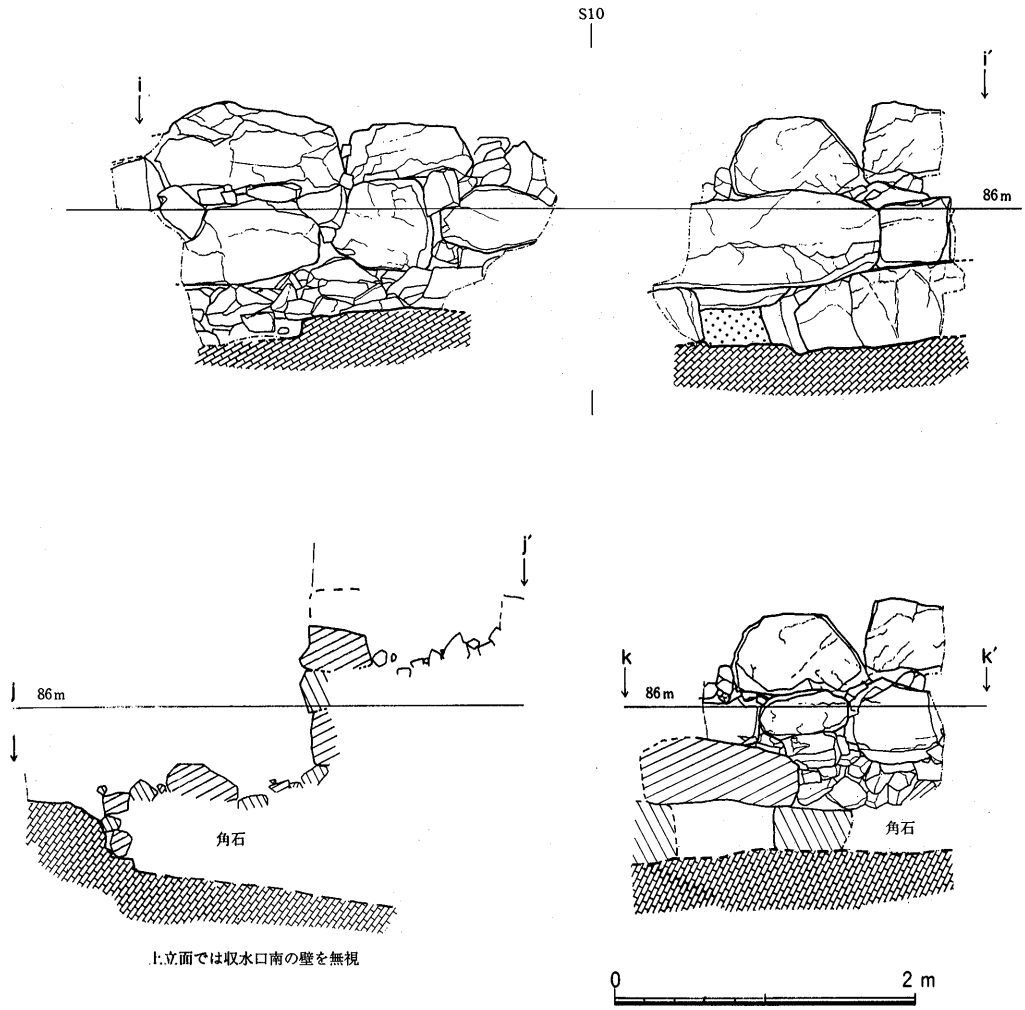
背面石垣の中央、排水口の真裏付近に設定した第６トレンチ内では、石垣面の東1.5m程の所で岩盤が段状に40cm程落ち、以西から石垣下にかけて、段を充足する格好で角石層が積まれている。これは、間隙に土砂を含まず、石垣間の角石一般よりはやや大きめで、長辺最大50cm程の盤状もしくは塊状の石材からなる。石垣保存のため掘り下げていないが、石垣直下ではその厚さは80cm程に達するみこみである。なお、石垣面の下で連続する垂直壁面を形成する事はない。また、レベルは石垣の積み出し面以下に限られ、石垣面下部を覆うような石材は確認されない。この角石層は、岩盤を伝う上方からの水を石垣手前で伏流水と成し、石垣面に水流を当てることなく石畳下に水を流すための一種の通水構造であり、同時に石垣最下段石材のレベル調整を行うものといえよう。

北寄りの第３トレンチでは、通水溝関連の石組が背面石垣より東に突き出して張出部を形成するが、石垣の積み出し面はその上面、つまり岩盤からおよそ0.8m上方位置となる。

吸水口は背面石垣面からは1.4m東にある。ここでは、通水溝の側壁石の東面と天井石の東面が揃えられるだけでなく、天井石の北側でやはり東面を合わせて大形石材が積まれ、高さ1.1mで２段積み、背面石垣と平行する石垣面を形成する。この石垣面にある吸水口は高さ0.4m、幅1.0mを測る。通水溝幅は吸水口の奥0.5m以後で0.6mとなり、水が流入し易いように開口部を広くとった構造である。また、吸水口では床となる岩盤が側壁部に比べ５cm程掘り窪められている。さらに、吸水口の南前方には、吸水口南側壁から連続し、さらに1.0m突き出して



第67図　一の木戸　石塁　中央部平面

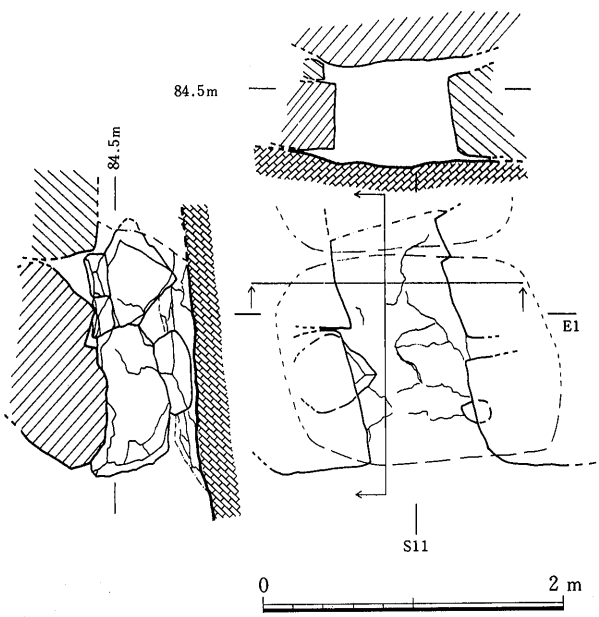


上:立面では収水口南の壁を無視

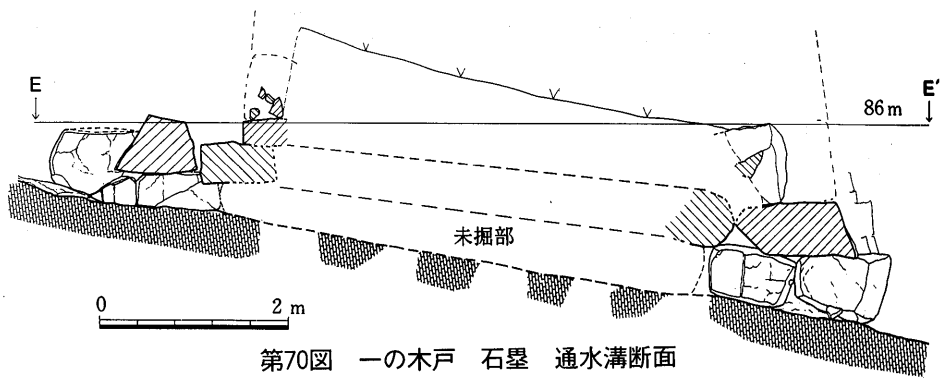
第68図　一の木戸　石塁　吸水口と中央部背面石垣

延びる壁面が、巨石一つで形成されている。この壁面は吸水口の石垣面に対し100度程を測り、上流に向かって開いている。水の流れてくる谷筋が吸水口に対して直交ではなくやや北に振った方向である事からすれば、この壁面は水流を通水溝に導く反射板として最も効果的なものといえる。この石材は、高さ65cmで他の側壁石材より遙かに大きく、側壁石と天井石に一部が被さり、一連の通水溝の石組の内で最後に置かれたものとみられる。張出部の南側面は未掘のため不確定であるが、第6トレンチから続く角石層に包まれているものとみられる。一方、吸水口の北は、側壁に連続して突き出す石材は確認されず、トレンチ一杯北に延びる石垣が続いている。この石垣面は吸水口南縁を起点に長さ1.8m以上といえるが、未検出の北端から東に突き出し南面する壁面が存在する可能性はある。吸水口の天井石は1.6mの長辺を吸水口の石垣面に向け、厚さ0.6mを測り、背面石垣本体のどの石材より大きなものであるが、その西奥の天井石は厚さ0.35m程に小形化する。背面石垣本体が乗るのはこの2番目の天井石である。張出部の内、通水溝と前面の石組以外の部分には、長辺50cm以下の角石が比較的無秩序に天井石上面のレベル付近まで充填され、背面石垣西奥にそのまま続く。なお、以上のような張出部が存在する事から、中央部での石畳幅は8.6m、吸水口前岩盤を基準とした背面石垣側の確認高は1.7mとなる。

通水溝内部は、吸水口側で天井石2枚分の長さを検出したが、以西は排土を行ないえなかった、一方、排水口側でも天井石2枚目までを検出した。前面石垣面にある排水口は、高さ0.7m、幅0.7mを測り、前面石垣主要部の正確に中央に位置する。ここでも、通水溝に沿って岩盤が深さ10cm足らず掘り窪められているが、石垣面での岩盤レベルは、排水口中軸より南側側壁石直下の方が僅かに低い。北側壁石は、石垣面では20cm程も岩盤から浮いており、北東奥部で辛うじて岩盤に接地するほか、側壁面下で長辺50cmの盤状石を介して重みを支える。また、北側壁の2石目と天井石の間などにも角石が咬まされる。



第69図　一の木戸　石畳　排水口



第70図　一の木戸　石塁　通水溝断面

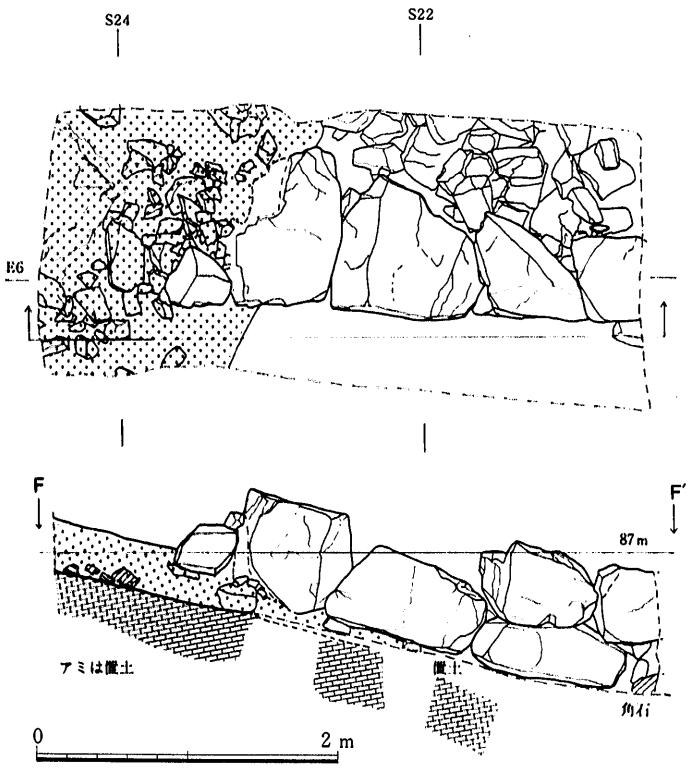
全体を通じてみれば、通水溝の調査は両端付近を検出しただけであるが、検出部の側壁の方向やレベルからして、未掘区間を挟んで両端が一直線に繋り、その主軸は石塁主軸に対して72度で斜交するものである事は明白である。一貫して岩盤を直接床とし、左右に併置された1段の側壁石と天井石によって画される内部は、小形横穴式石室の羨道状となる。トンネル部の総長は8.0m、床面の傾斜は10度程となる。また、幅はほぼ一定であるのに対して、高さは排水口側程高くなる傾向がある。総数8枚前後とみられる天井石は、側壁石間の隙間を塞ぐ様に架けられ、その重みを3個以上の側壁石で支える格好となるが、側壁石と岩盤や天井石との隙間にはしばしば盤状石が咬まされ、石組の安定化を図っている。

f）背面石垣南端（第71・61図、図版第29上）

第7トレンチでは、南部を中心に岩盤まで掘り下げた。北部では未到達であるが、北に下がっていくのは確実である。岩盤上には長辺50cm以下の角石が、南部では散在して、北端付近では層状に堆積する。その角石を覆って暗黄灰褐色の置土が堆積する。この置土はトレンチ南西角で最も厚く50cmを測るのに対し、北に薄くなる。背面石垣はその上に構築されるが、トレンチ北端では角石層に直に接する。背面石垣の最下段石材は北から4石目までは次第に高くなるが、南が1段に対し、北の2石は2段積みで、結局石垣高は0.8m前後でほぼ一定している。北から4石目の石材は、背面石垣の最高点を成し、長辺1.0mを測り、小口を石垣面に向ける。この特徴的な石材こそが南端を定めた石材とみられるが、その南になお石垣面を意識して長辺40cmの角石が付随的に続き，その南縁が背面石垣の確認端となる。石垣の裏側には石塁中央部同様の角石が充填されているが、北から3石目以北にしか認められない。3石目以南では、さらに、その角石と石垣石材の一部を覆って盛土が、薄いが確実に堆積する。土質は石垣下の置土と同じであるが区別すべきものである。

背面石垣のさらに南延長位置に第8トレンチを設定したが、周囲の山腹と同様の傾斜を示す土質の地山面を検出したのみである。

二つのトレンチの状況からして、検出した位置が本来の背面石垣の南端と判断される。つまり石垣は、急傾斜の山腹斜面直前で、見かけ上、盛土にめり込む様に終る事になる。

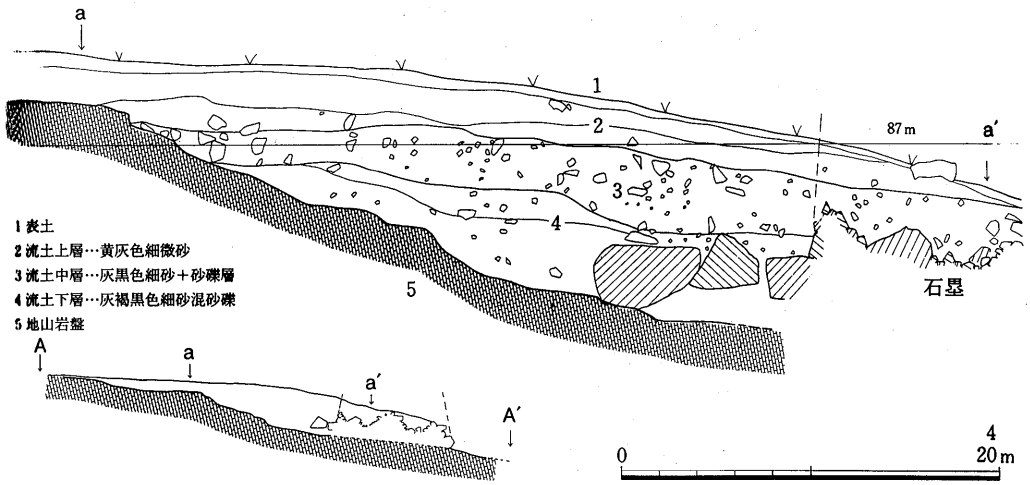


第71図　一の木戸　石塁　背面石垣南端

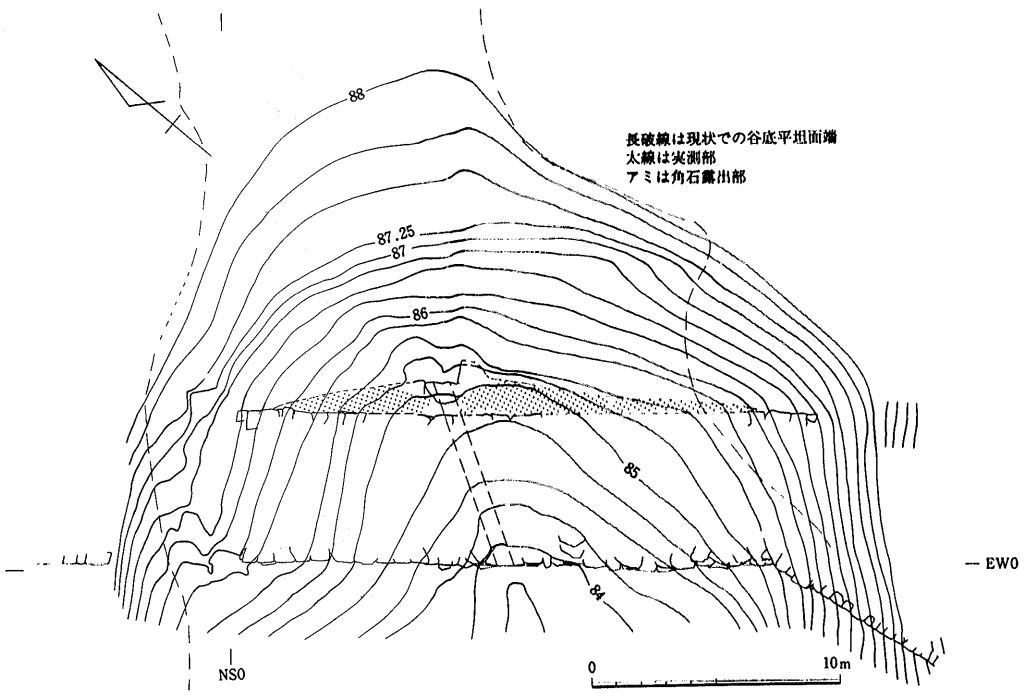
g）石塁背後の堆積と石塁下の地山地形（第72・73図）

二つの谷の合流部を堰止める様に石塁が構築されている事もあって、流土堆積は背面石垣前面で最も厚く最大2.2mに達する。第3・4・6トレンチでは、岩盤上に堆積する第4層は灰褐黒色細砂で混入石がさほど顕著でないのに対し、第3層は有機分が顕著で灰黒色を呈し長辺20cm以下の角石を多量に含み土石流的なものとみられ、上の第2層と共にそのまま石塁上に及んでいる。石垣石材とみられるものが第4層中に転落しているが少数で、多くは第4層堆積の次の段階にその上を伝う水流や土石によって西側に押し流されたものとみられる。通水溝内の第4層で土師質土器細片（第77図－21）を検出したほか、背面石垣前方の第3・4層から土師器・土師質土器・須恵器片（第77図－10～20・22・23・26・27）、第3層から鉄滓や備前焼片などを検出し、第4層は平安時代以降、第3層は中世後半以降の堆積といえる。一方、南東から延びる谷に臨む第7・9トレンチでは、流土の堆積状況は大同小異であるが、遺物は一切確認されない。なお、第9トレンチの土壙は流土上面で検出した新しいもので、岩盤までの掘り下げは南西部だけで行なった。

流土及び石塁構造下で確認した地山地形を巨視的に見るため、各部で確認したレベルをもとに作成したのが第73図である。石塁は、周囲と一様な自然の斜面ではなく、整形された岩盤平



第72図　一の木戸　石塁上方流土断面



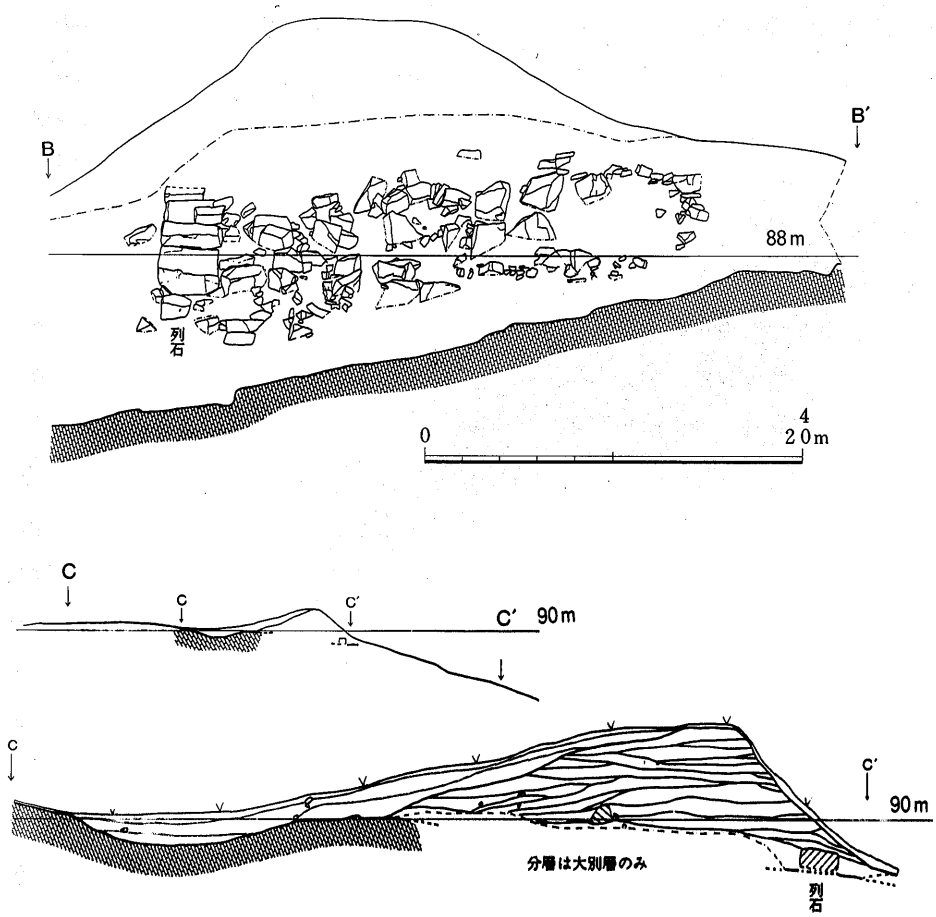
第73図　一の木戸　石塁基礎岩盤地形復原

坦部一杯に構築されているといえる。うちでも、石塁中央部は特に平坦となる。この状況を端的に示すのが石塁中央で横断方向に設定した第3トレンチで、岩盤は吸水口南の壁面端から東上方5.0m以東は平坦であるのに対し、そこから同じく東方1.2mの位置までは20度程の急角度で落ち、以後石塁下は再び緩やかとなる。さらに石塁構造と地山地形の関係をみると、第3トレンチの岩盤肩部のレベルである87.25mの等高線は、石塁背後で弧を描き、背面石垣の両確認端からほぼ等距離の地点を通過し、石塁を完全に取り囲む。しかも、そのレベルは、前面石垣北端を除く各石垣端の上面つまり石塁の最高位点とほぼ一致する。つまり、確認できた石塁構造は石塁背後からみればこのレベル以下の深さ2.5mの窪みにすっぽり納まることになる。また通水溝は北東から延びる岩盤上の谷筋に構築されているといえるが、石塁下の岩盤最深部は厳密には背面石垣中央から石塁を直交する。つまり岩盤整形は、石塁直交軸に対しての対称性が意識され、さらに地山と石塁各部とのレベル関係をも意図した可能性がある計画的なものとみられる。なお、石塁背後からの流水は、通水溝をそのまま抜けるもののほか、86.0m以下のレベルにみられる石垣下の角石層を受け口とし、石塁下を通過しつつ前面石垣側の排水口に集まったものとみられる。もっとも、特に増水時は現況同様、排水口のすぐ南を始めとした前面石垣一般部の基底からも自由に排水されていたはずである。

h）北側土塁（第61・74図、図版第30上）

前面石垣現北端からその延長線上5.0mで確認された石材は、岩盤上の厚さ50cm程とみられる置土上にある。少なくとも現状では前面を中心に露出しているが、背後の一部が盛土に覆われる事と形状から、本来的に一段の列石部を構成するものである。列石はここから、第5トレンチに向けて20度程の傾斜で上る。露出部端の石材長が1.0mであるのに対し、盛土に完全に覆われる第5トレンチでは石材長が0.5m程と小形化しまた平均化する。

土塁状地形を切断する道路の北法面では、垂直に切り直すと崩落の危険があるため、現法面のままでの流土除去に留めて、観察を行なった。ここでは、東に高い岩盤傾斜に沿って、角石を若干含む暗黄灰褐色の盛土が確認される。この盛土は、そのまま列石下の置土としてその前面にもおよんでいる。その上には、角石を多量に含む盛土層が認められる。この層は列石背後だけに認められ、垂直面に換算した列石直後での厚さは60cm程とみられるが、背後に向けて次第に薄くなり、結果的に層の上面は水平に近くなる。含まれる石材は、長辺40cm以下の肉厚の角石で、列石石材に接するものがあるが、特に上面レベルや配置を揃えるものではなく、全体的には層状とはいえ個々は無秩序に混入された状況である。なお、この層の石材はあくまでも盛土の強度を増すために土砂と併用されたもので、通水を意図した石塁石垣間の純角石層とは、道路を隔て一見連続的とはいえ、別のものである。その層の上にはさらに版築盛土が乗っている。ちなみに、この法面での土塁基底部幅は、石塁幅とほぼ等しく6m余りといえる。土塁の



第74図　一の木戸　北側土塁

上　道路北法面　　下　第5トレンチ

城内側裾の流土からは、土器細片(第77図－24)が出土している。

一方、北の第5トレンチでは、盛土による高まりに対し、背後の岩盤が掘り窪められ、土塁の城内側高は盛土高0.9mから1.2mに強調された格好となる。城外側の土塁高は1.6m。岩盤窪みの底を背面石垣延長線が通過し、これを測点とすれば、ここでも土塁幅は南の石垣幅とほぼ等しい。ただし、盛土部幅は4.8mで、見かけ上の土塁は石塁幅延長の中央ではなく城外側に片寄り、また城外側の傾斜の方が急となる。列石下は地山まで掘り下げていないので不明であるが、確認した盛土は総て版築で、先述の混角石盛土はここまで及んでいない。版築の素材や単位の厚さは第1トレンチ南壁とほぼ同様で、横断方向で見た場合、傾斜する大別層もあるが、水平面を繰り返し形成しながら盛られている。縦断方向は列石上面に平行した傾斜をみる。

ｉ）第10トレンチ（第61図、図版第30下）

石塁背後の山腹中の平坦部に設定した。薄い流土下の全面で、一部で岩盤露出の地山を検出した。盛土類は確認されない。遺構は、未埋積の最近の穴以外に、地山上面で直径50cm以下の焚火跡を３基検出した。いずれも掘り方を伴うものではなく、炭や焼土層は薄く、共伴遺物もない。平坦部の造成時期や性格は特定できなかった。

ｊ）石塁の復原像（第62図参照）

立面構造、城門の可能性を含めた北部の構造、築造工程について整理する。

本来の石垣高を復原する場合、注目すべきは、前面石垣の北端を除く石垣端頂部の確認レベル３点が30cm未満の幅内で共通し、それが石垣の遺存最高位となっている事である。このレベルは、南列石大形石材部の端頂や石塁背後の岩盤段とも一致し、崩落後の遺存面の偶然の一致とするよりは、石塁全体を貫く計画によって意図的に形成された可能性が指摘できる。さらに、前面石垣南部がこのレベルで初めて水平面を造りだしたり、背面石垣の確認端はいずれも、最下段石材の上面が端部に向かって急激に高まり、谷筋寄りの２段積み部頂のレベルを僅かに越えて問題のレベルに達する、という様な完結的な積み方からすれば、検出部上に石材列を無理に復原しない方が自然にも思える。つまり、これら石垣端３点は本来の高さを保っている可能性が指摘できる。なお、仮に背面石垣の現北端に続く石材を若干想定しても、北の岩盤レベルなどからして、予想端部頂が問題のレベルから大きく逸脱する事はない。

以上の可能性を踏まえ、谷中央部での石垣高について２通りの考え方ができる。第１案は、成層性を保ちつつ積まれた石垣の上縁は、地山傾斜に沿うレベルの減少を石材の厚さの増加で補いながらも、中央部が下る場合である。この際、前面石垣は一貫して４～５段程度、高さは確認高と大差ない2.5～2.8m程、背面石垣は通水溝石材を含めて４段、高さ2.0m弱に見積もれる。第二案は、前面石垣南部の様な積み方をとって、地山傾斜に関係なく石垣上縁が水平であった場合で、前面石垣の高さは最大3.5m（６、７段積み）、背面石垣は2.7m程となる。なお、いずれの場合でも、各石塁横断面で、両石垣の頂部レベルは常に等しい可能性がある。

両石垣間に確認した角石群の上には、背面石垣南縁付近を除いて盛土類は一切確認されなかったが、石塁頂部が未処理のままであったとは考えにくい。例えば板石などが敷つめられていた可能性も考えられなくはないが、北側土塁への連続性や鬼ノ城など他遺跡での例から、土塁状の盛土が存在した可能性が多分に考えられる。したがって、復原される石塁高は、その厚さ、つまり数十センチないしは２m程を、先に考えた石垣高に加えたものになる。

石塁の北で確認した状況は、積極的に城門を肯定するものではない。第一の要点は、前面の石垣列石線の途切れが本来的なものと断定できない。第二に通路部を南北で画す石列その他の

護岸構造も確認できない。第三に通路面に城門上屋を示す柱穴類なども確認できない。

以上の様な事から、先ず単純に、城門は存在せず外郭線の途切れは後世のものとみた場合について復原を試みる。前面石垣最下段から列石への移行部では、石垣確認端から2.5m程は、二つの岩盤窪みにはめ込む様に確認部と同大の石材が4、5石続き、さらに石材の厚さを減じながら列石確認部にスムーズに続いていたとみられる。列石は石垣に対して急傾斜であるため、一連の石列は傾斜変換点を含む事になるが、その候補としては確認列石の傾斜からして、二つの岩盤窪みの間が有力である他、北側窪みの北縁などが考えられる。石垣確認端は、1段のみであるが、石垣端部間のレベルの共通性や南からの連続性から、本来は4段積み高さ1.8m程になる可能性がある。また、同様の大石材が予想できるその北2.5m程も、複数段であったものとみられる。こうした復原像は、およその絶対高を含め石塁南側の状況と対称し、岩盤窪み上に復原される石垣は前面石垣南部に、確認列石部は南の大形石材部に相当する部分といえる。また、石垣確認端は南の折部に対応し、ここでは同一面で続く石垣中とはいえ、工程上の区切りであるからこそ、岩盤裏に石材を当てるといった状況が生じたものと評価できる。確認端が強く意識された位置である事は、南の折部との正確な中間点に排水口がある事によっても窺われる。一方、前面石垣確認端の正確に背面にある背面石垣確認端は、本来からの端部であっても良いが、前面で石垣が復原される長さだけ北に一段積みで延びていた可能性もある。いずれにせよ、本来の石塁長は露出列石部を別にして26m程であったことになる。石塁推定延長部の内側岩盤上には、南から土砂を混じえない角石層が若干延びていたとみられるが薄く、道路の北法面でみた盛土群が恐らく角石層を覆う様な関係で延びていたものとみられる。石塁南側と同様、背面石垣は、この盛土による山側壁面にめり込む様に終っていた事になる。

次に、強いて城門を想定してみる。先ず道路の南側では、前面石垣端が本来一段で、現状の様な状況で通路となっていたとすれば、石垣間の大半の盛土や角石は岩盤の低い部分にうまく納まって、両石垣を結ぶ石列は必ずしも必要ない。しかし、前面石垣確認端は前述の様に本来から一段とは考えにくい。そうすると、少なくとも前面石垣寄りでは背後の角石が通路に転落するのを防ぐために、通路に平行する護岸構造が必要となる。両石垣の確認端石材に挟まれる状況での石列は存在しない。したがって、前面石垣確認端の2段目から始まって角石上に乗る石列を考えない限り、石列は確認端以北に想定せざるをえない。つまり、前面石垣確認端の北にもう一つ石材があり、これを起点として背面石垣の延長に至る石列が想定される。その際、通路側の石壁面は石垣確認端の80cm程の所となり、高さは前面側で1.8m、背面側で0.4m程になろう。さらに盛土壁が乗っている可能性がある。一方、通路北は現状でも道に沿った高い壁面となっているが、列石が切断状況にある事、盛土内の角石の露出状況からして、本来の壁面が存在したとすれば、北に後退している。その後退した空間に整美な盛土壁面や、場合によっ

てはその基底部に列石から直交して続く石列を想定する事は不可能ではない。想定できる壁面の裾は、盛土の遺存南端より北には求めにくく、復原可能な城門通路の最大幅は2.5m程で、位置規模とも現在の道と一致する。この通路は、石塁が構築される南に対し、岩盤が高い位置でテラス状となる位置にあたり、床となる岩盤が、後世の改変の可能性もあるとはいえ、コの字の段状に整形されている点は注目される。ただ、入口部となる岩盤窪みは石垣石材一段分もの段差がある。通路面は置土などによって均されていた状況も考える必要があろう。この他、上屋構造の問題や、復原される通路の規模や傾斜について他遺跡と比較した場合の問題もある。

以上、城門存否2案を示した。実体としての肯定要素が乏しい状況下では、否定案が有利とも思えるが、確定的状況とも言い難く、直ちに決着はつけ難い。

最後に、石塁各部で確認した諸関係をもとに築造工程を整理する。第一に行なわれたのは谷底堆積物の除去とこれに続く岩盤整形である。岩盤整形は、予定される石塁構造の位置やレベルを念頭に置きながら、かなり計画的に行なわれたもので、範囲は少なく見積もっても200㎡に及ぶ。石塁構築は、通水溝の側壁と天井石からなる石組列が最も先行する。続いて、背面石垣側では、通水溝部を除いた石垣予定位置付近の岩盤上に無数の角石が積まれる。これは、中央では厚く、予定される石垣両端部に向かって薄くなるが、端部を越えても若干広がる。その端部付近に限って、角石を覆って中寄りに薄い置土が施され、初めて石垣本体の積み上げが開始される。背面石垣の積み上げと恐らく軌を一にして、前面石垣も岩盤上で積み上げられる。両石垣の構築開始に一歩遅れながらも、並行した作業として石垣間に角石の充塡が行なわれ、石垣と角石は計画レベルにまで到達する。また、平面的には石垣は一定の区間を単位に構築されていく。その後、石垣石材や背後の角石の上には、少なくとも端部付近で盛土が盛られる。先に石塁上に復原した土塁は、これに続く工程であろう。石塁部と両側の列石部との構築順序は必ずしも確定的ではないが、少なくとも列石の大形石材部は前面石垣最下段と一連の工程とみられ、列石背後の版築盛土は石塁石垣の構築よりも後とみられる。　（乗岡　実）

Ⅲ 外郭線構造とその特徴

1．外郭線の延長

東に標高200ｍ程の大廻山と小廻山、西と南に３つの谷を取り込む外郭線は、その全周を確認できる。多くの部分では、中央が擂鉢状に低くなった高原状地形の外縁の傾斜変換点を巧みに縫い、ほぼ10度未満の傾斜を伝うが、石塁のある三つの谷などへは10～25度の傾斜で一気に降りる。ただし、等高線に完全に直交する部位はない。外郭線基底部の最高位は小廻山南東の標高193.5ｍ、最低位は一の木戸の84ｍで、高低差は109.5ｍとなる。石塁石垣と列石の施された壁面の上角を測点として、総長は3192ｍ、取り込み面積は約38.6haを測る。これは平面上の数値であり、地山傾斜などを勘案すれば、実際の列石石垣線の長さは3.3～3.4kmとなる。

本城跡の外郭線の大きな特徴として、直線と折で構成され曲線区間を全く含んでいない点がある。この折は、後述する類の極微妙なものを別として、現地表面からでも明確に確認できるものが、89個所ある。この内53個所が外折れ、残りが内折れである。最も急な折は、Ｌ地点の103度で、鋭角になる事はない。折間の直線部は、地形が単調な部分では最長100ｍ内外の区間も指摘できるが、走行を大きく変える大廻山の東ピーク付近などでは、急な折れを避けて、地形に合わせながら小刻みに方向を変える傾向が顕著で、数メートルから十数メートルの区間が続く。以上の平面的な折に対し、立面的にも、一定の傾斜で続く直線部と明確な点としての傾斜変換点から構成されているといえる。平面的な折と立面での傾斜変換点が一致する事が多いほか、平面的には直線部でも内に傾斜変換点を含む事もしばしばあり、いわば立面での折の数は平面での折より遙かに多くなる。

少なくとも平面的な折れ線構造は、鬼ノ城、永納山、城山などの近接する瀬戸内の神籠石や九州の雷山のほか、御所ケ谷や石城山の少なくとも一部でも確認される特徴で、基本的に曲線から成る九州のおつぼ山、帯隈山、高良山、女山、杷木、鹿毛馬とは対照的といえる。

2．外郭線一般部の平面・立面的構造

外郭線は、谷部３か所の石塁部と、列石や版築盛土などで構築された一般部からなるが、巨石が多用されるのは前者のみで、全体とすれば土塁の趣を示す。土築の一般部は、城内側にも壁を持った断面台形の土塁部と、城外側にしか壁を持たず断面階段状の土段部に大別される。

土塁は各石塁の取り付き部で確認されるほか、かつては三の木戸東方の鞍部でも確認できた。また、Ｌ地点の西と南でもその可能性が指摘できる。しかし、これ以上の地点は可能性を含め指摘し難く、また各確認部とも区間が30ｍ未満と短いことから、城跡全体を通じれば要衝の小区間にのみ認められる形態といえる。高まりの主体を盛土で成し、城外側壁面は高さが1.2ｍ程から２ｍ程で列石を内包するが、城内側では高さは数十センチから１ｍで、窪みでさらに強調される格好となるが、列石は施されない。特にＬ地点では、土塁としてもかなり山寄せである。

土塁部のいわゆる夾築構造に対し、内托[1]構造の土段部は、普遍的な形態である。その内の大半の部分では、上下二段構造として捉えることができる。列石を有する下段壁面の確認高は、尾根稜線などで1.0m程の部分や、L地点で例外的に3.2mの部分もあるが、基本的には2.0m内外で一定している。壁面前面には、急斜面部を除き幅2～4m程の犬走状平坦部が認められる。下段壁面上には幅1.5～22mの下段平坦部があり、その城内側には他さ0.5～2.0mの上段壁面、その上に上段平坦部が続いている。下段平坦部の総てまたは城外寄りは盛土で造成されているのに対し、上段は地山の削平である。なお、本来は一段で上段平坦部のレベルまで盛土があったものが、盛土の流失により埋め込まれていた地山段が露われ、上段壁面として認識されるという可能性については、二段構造が付近の傾斜の緩急を問わず普遍性を持ち、しかも整った形状である事、仮にそうであるとした場合、盛土の流失は厚さにして最大3m程に見積もれるが、下段平坦部は、それほどの土砂が流失した結果形成された面にしては、谷側端線のシャープさを含め面として整い過ぎ、壁面の残高も一定し過ぎているといえる事などから、否定的である。別な言い方をすれば、下段壁面の高さは流失により本来から大幅に減少しているとは考えにくいことになる。ただし、壁面頂部の平面的位置は流失により確実に後退している。

ところで、土段部は上段構造によって3形態に細別される、第1は、E地点北方、K地点西方、石塁付近といった、外郭線が急傾斜を伝う部分にみられる。上段平坦部は、明確な幅を持って山腹斜面を削る事によって造りだされる。下段平坦部、上段壁面、上段平坦部は下段壁面つまり列石に対し平面的にも傾斜の上でも総て平行し、各部の幅や高さは一定し、断面は整った階段状となる。下段ならびに上段の平坦部幅は、1.5～4mで、第2の形態に比べ狭い。第2は、外郭線が高原状地形端を伝う部分にみられる。上段壁面までは明らかに人為的な造成であるのに対し、上段平坦部は明確な幅を持つというより稜線付近の自然の平坦地としての色彩が強いものである。遺存が良好なD地点やH地点などでは、列石に対し、上段平坦部肩部以下は平行するが、上段壁面は隅角を持って突出と後退を周期的に繰り返す状況が観察される。このため、下段平坦部の幅は数メートルから二十メートル余りに急激に変化する。上段壁面上の平坦部は人為的な造成でないにせよ、戦術上は意識された面とみれるであろう。第3の形態は、第1第2の形態を基本としつつ、上段平坦部のさらに上に段や平坦部が認められ、全体として複雑な段構造となるものである。ただし、城跡との共存関係について若干問題を残す。戦略上の要衝とみられる小廻山やL地点に認められるほか、改変が著しいが大廻山東ピークや三の木戸南東のピークなどでその可能性がある。城外を向く段とそれに画される各平坦部が交互にみられながらも、要所で平坦部どうしが通路状に連なり、中世山城の郭構造に近似したあり方を示す。とはいえ、段や平坦部は、山頂や尾根先といった点に絡みながらも、そこへ求心的に延びるのではなく、あくまでも外郭線全周に沿う線的な伸展の一部としてみられる事はいうまでもない。

次に、外郭線一般部の総幅と総高について整理してみる。この場合の測点とし、外縁を下段壁面裾、内縁を、土塁部の場合はその城内側窪みの山側肩、土段部第１形態の場合は上段平坦部山側端、第２・３形態の場合は最上段壁面の頂部肩をとる。内縁はどこまで地山削平行為が及んでいるかという視点に基づく。この点からいえば外縁についても、下段壁面前面の平坦部幅２～４ｍを含める必要があるが、確認できない部分もあり一応除外する。また、測点は比較の便宜のため現地表で確認できる位置としたため、本来の下段壁面裾や列石外縁を厳密に意図すれば、この計測幅からおよそ１～２ｍ差し引く必要があるが、高さの点では結果的に大差ない。総高については、第一義的な城壁たる盛土壁は一貫して高さ２ｍ前後に過ぎないというものの、外郭線を防御帯とみて、突破のため克服すべき高低差として捉える視点による。

以上の前提のもと、先ず土段第１形態をみると、Ｅ地点北東、Ｋ地点西、Ｌ地点から一の木戸南は、いずれも幅がほぼ12ｍで見事に一致している。また一の木戸からＡ地点南にかけてもこれに近い幅10ｍ程とみられる。総高はいずれも４～5.5ｍ。次に、それに続く石塁側方土塁部での幅は、土段部での幅と一致する。土段第２・３の形態のＤ地点や小廻山では幅25ｍ前後となるが、高さは2.5～8.0ｍと地点内でもばらつきがある。三の木戸東南のピークなどは、これとほぼ同様の幅の持つ可能性が指摘できるが、第２形態の多くの部分では幅20ｍ前後となる。また第２形態でもＡ～Ｃ地点などでは15ｍ程の可能性がある。つまり、外郭線幅は、かなりの計画性が窺われ、その構造の変化に応じて、石塁部の幅6.3ｍ程を含めれば５段階程に類別できそうである。こうした構造や幅の変化は、石塁を除き、例えば鬼ノ城における南側の高石垣部と北側の土塁主体部の様に、特定の方向への顕著な指向性を示す事はない。

城壁面の低さや土段部が主体を占める点は、鬼ノ城を除く他の神籠石系山城でもしばしば認められることであるが、石塁を含めても夾築部が全周の５％程にしか過ぎない点は、本城跡の外郭線の特徴として特筆すべきであろう。また、土段の二段構造や郭状構造は、第２形態に近いものを除き、他の古代山城では管見の限り確認できず、国内では[(2)]本城跡独自の大きな特徴といえる。段と通路状平坦部が複数階段状に認められる状況は、中世山城にも通じた防衛戦術上の要求によるものと評価できるが、特に第１形態などは、急斜面部において、盛土と地山削平の量を抑えつつ、外郭線幅を広く取るための技術上の工夫としての側面もあろう。

３．列石と盛土

列石は外郭線一般部分の外縁盛土壁にあり、壁の延長状況から、未知の城門部と後世の破壊部を除いて全周に欠落なく施されている模様である。石材は、長さが20～100cm（平均45cm程）、厚さ15～50cm（平均30cm程）の薄い直方体の荒割材を、基本的に一段一列に寝かせ置いたものである。石材の大きさ、形状、最長辺を長さに取るか幅に取るか、石種などは、場所により個性的であるが、隣の石材と上面及び外側面が一貫して丁寧に揃えられ、その外縁上角こそが、

平面的にも立面的にも整った直線と折を描く事になる。石材の隙間には詰石が施される場所もある。また、折部などでは、本体石材の奥に控えの石材が置かれる事もあるが、上面は本体と揃えられる。こうした列石は、土質または岩盤の地山に掘られ列石に沿う溝の内にしばしば構築される。列石石材は地山に直に置かれる事もあるが、下に置土を伴う事も多い。置土は厚さ数十センチに達する所もあり、本体石材に接する置石を含む所もあるが、本体と同様の石材が重なって2段積みになる事はない。総括的には石材上面のレベルを、地山の削平、置土の厚さ、石材の厚さの3者で調整しているといえる。一旦計画された列石の平面的立面的位置が、万難を排して貫徹されていった状況は特にL地点でみた通りである。

こうした列石の状況からすれば、築城に際し、外郭線の外縁予定位置の地表付近に水糸状のものが連続的に張られ、これに石材の外縁上角を沿わせて置いた結果が直線部であり、折部は異なる走行の糸間の交点で必然的に形成されるものではないかと考えつく。明確な折の間隔は長距離に渡るものもあるが、余角が数度未満で極めて微妙であるが確実な折れを含んでいる。これは、そうした糸を地表付近に長距離に渡って張る事は傾斜の変化に富む地形の下では困難なため、短距離に分断する必要があり、その結果恐らく折れとしての意識なしに作業誤差的に生じたものと理解する事が可能である。もっとも、この視点で、糸を張った杭などの痕跡を折付近の予想位置で探したが、確認はできなかった。なお、この外縁の縄張りに平行し、外郭線幅の項でみた内縁位置を定める縄張りも予想される。また、列石の築造工程に関して、初期に置かれた基準的な石材も指摘できる。

列石の上には、盛土が乗る。各トレンチで精査したが，いずれでも列石は盛土に完全に覆い隠され、壁面に露出する事はない。壁面裾は、列石外面の10～50cm外方に求められる。列石横断方向では、奥部の盛土端付近などでは版築によらない盛土が施されることもあるが、列石を包み込むのは総て版築盛土である。列石接地部の版築単位の傾斜は、列石上面に平行。版築単位の厚さは2～7cmで、素材は下層に有機分を含むものが目立つが、基本的には周囲の地山と同質である。盛土の幅は5～10mで、谷頭や平坦地で広く、尾根部や急斜面部で狭い。また盛土の厚い部分や急斜面部の一部では、盛土に多量の石材を含みいわゆる土石混築となる。壁面の遺存傾斜は45度内外から最大80度程の部分がある。横断方向でも、版築単位の傾斜は列石上面に平行する。意図的に精査したが、百済の木川土城[3]や蛇山城[4]のような盛土工程上の区間を示す不整合や柱跡は確認されない。列石前面には、壁面裾の位置に長辺30cm以下の石材が置かれる事があるが、他遺跡で確認され版築時の堰板を留めたとされる柱穴[5]は存在しない。

本城跡の列石・盛土の特徴は、荒割りで薄い小形の石材を寝かせ置く、列石が壁面に露出しない、前面に柱穴列を持たない点に要約される。このことは、切石または面取りされた直方体の大石材の高い面を、基壇化粧状に壁面に露出させ、前面に等間隔の柱穴を伴う九州のおつぼ

山、帯隈山、女山、鹿毛馬などといった斉一性を持つ一連の神籠石と極めて対照的といえる。本城跡では列石が地山溝に納まってしまう部分がある事などからすれば、盛土の削り出しによる露出を予定しながら未遂に終ったのではなく、必ずしも露出を意図していなかったと考えて良いのではなかろうか。先の遺跡では露出面を意図してその上縁以上を削り込む状況まであるのに対し、石材の面・大きさ・形状・積み方にみる対照的な特徴も、露出を意図しない事と象徴的に対応する様にも思える。ところで、列石が盛土に隠れる例としては、山口の石城山が知られる。ただ、それは背後の版築とは分離される外皮版築による点でやや様相を異にするほか、列石自体の特徴は先の九州のものに近く、前面に柱穴も確認される。本城跡に近似した状況は愛媛の永納山で認められる。その列石は、石材の大きさ、形状、積み方などがほぼ共通している上、少なくとも一部では版築盛土に同様の位置関係で覆われるほか、前面で等間隔で並ぶ状況の柱穴列も今のところ報告されていない。また、岡山の鬼ノ城の城内側列石も、近似した大きさ積み方を取る部分があり、盛土に覆い隠される可能性が強い。つまり、本城跡で確認された列石・盛土の特徴は、九州に対して偏差が大きいが、瀬戸内ではある程度普遍化できる内容といえそうである。特に永納山は折れ線構造や概括的特徴をも含めて最も共通する要素が大きく、注目される。

本城跡の列石は、九州での諸例の様に例えば城壁の目印または威嚇といった視覚的効果をも果たすものではなく、恐らく列石の本来的機能である版築盛土の根固め、また城壁の位置を定める築城時の基準線としての機能に徹したものといえる。その意味では、詰石や背後の控え石まで施して列石帯として上に整った面を造りだし、それに平行した整合面を造りながら版築が行なわれる事、盛土の重さを外方に逃がす危険のある貼石状ではなく、下方で最もがっちりと受け止めうる積み方を取ることなどは、総て壁面の強度を高める事に結び付く。

列石前面に認められる置石は、おつぼ山や帯隈山で確認されたものとの関連が気がかりであるが、大きさや形状から上に柱を想定[6]できる状況ではなく、等間隔に確認できるというものでもない。壁面裾位置にある事から、おそらく版築作業に関わるものであろう。列石前面の柱穴列が存在しない事から、堰板を必要としない盛り方が取られたと考える事も可能である。その場合は壁面の本来の傾斜が問題となるが、置石は単に壁面裾の予定位置を示す目印と評価できる。一方、やはり堰板は施されたとすれば、置石は堰板の位置決めの目印または当て石的なもので、置石の外に板が立てられ、板の外に仮設的に土砂を置いたり、縄で城内側に引っ張ったという復原案もありうる。確認状況は、いずれとも決し難いものであり、結論は将来の調査に委ねなければならない。ただ、下部構造の痕跡を残さない版築法が存在するとすれば、逆に、他遺跡で確認される極めて整った柱穴について、その機能を改めて検討する余地もあるのかもしれない。

4．外郭線上の遺構

調査の視点として、外郭線の遮断効果を高めるため、各平坦部や段に防柵や建物が構築されたのではないかと考え、繰り返し精査したが、そうしたまとまりを持った遺構は確認されない。各部の大幅な流失は考えにくく、太い柱を埋め込む形での構築物は存在しなかったとせざるを得ないが、こうした上部構造物は予定されつつも未遂に終ったと考える事は可能であろう。

具体的に確認された遺構の内、ある程度普遍性を持つものとして、溝と捨石土壙がある。

溝は、遺物や個別状況からは城との共存関係を確定できないが、一貫して盛土部の流失を防ぐため、その上方の地山面で雨水を受け止める様な配置を取り、その可能性を多分にはらむ。特に断面階段状の外郭線にあっては、雨水対策は重要課題にあったに違いなく、演繹的に予想される遺構ともいえる。おつぼ山や鬼ノ城では近似した溝や窪地が確認されている。

捨石土壙も、遺物や個別状況からは、時期や機能を特定できない。3基とも、埋土に炭灰焼土と多くの石材を含み、外郭線上でも最も内寄りに位置し、しかも平坦部端の奥まった位置にある点で共通している。軌を一にして、その付近で火を使う事によって形成された遺構とみられ、城跡との関連も十分に予想できる。なお、時期はいよいよ特定できないが、外郭線上には掘り方を伴わない小規模な焚火跡が数多く認められる。

5．谷部の石塁

3基の石塁の内、2個所を調査した。ここは、唯一の石築部であり、外壁も一面の壁としては最も高く、外郭線の内では最も堅牢な部分といえる。列石に続く前面石垣に対し、背面石垣は城内を向く外郭線石材としても唯一のものである。

両石垣によって画される石塁は、上に土塁が復原できる事を含め、基本的には他の神籠石系山城の水門石塁と共通の構造を持つ。例えば、石垣間に角石が充填される点は、おつぼ山や杷木の水門で認められる。鬼ノ城の第2水門ではその角石は未検出であるが、一の木戸と比較して、折れの存在を含めた平面形や両側の列石への移行部の状況など共通する要素が多い。

本城石塁の特徴として、石垣の積み方では成層積みの傾向があり、整形された地山の岩盤を含め立面的に左右の均整がとれている点が指摘されるが、より整美な例としておつぼ山の例がある。石塁の幅6.3m程という数値は、例えば鬼ノ城の第2水門7.2m、おつぼ山第1水門9mに比べて狭く、現在確認できる神籠石系山城の石塁の内で最も狭いものであろう。

石塁の調査成果で注目すべきは、排水構造に関する特徴である。先ず、背面石垣が角石上に構築される事がある。これによって、二の木戸では通水溝が欠如した状況を可能にしているといえる。一の木戸の通水溝は、終始石塁基底部にあり床を地山岩盤とするが、神籠石系山城の通水溝の構造として、この他に、終始基底部にありながら敷石床とするもの、吸水口は基底付近にありながら排水口は前面石垣中もしくは上にあり必然的に石材床とするものなどに分類で

きる。鬼ノ城の各通水溝は最後者に属するが、結果的に床面の傾斜は本城の通水溝と近似する。つまり、敷石の有無は別の次元としても、排水口位置の差は、鬼ノ城では地山傾斜に沿う急水流を石塁の保安上避けた結果とみれないだろうか[7]。また、両者ともに通水溝や谷筋が石塁主軸と斜交する事や、吸水口が背面石垣から上方に突き出た位置にある事も石塁保安の観点で評価できる。鬼ノ城第２水門では通水溝側壁は背面石組から80cm程ハ字状に突き出すが、天井石まではない。一方、鹿毛馬の水門第１暗渠では、吸水口は背後列石の後方4.5ｍの位置にあり、後端1.0ｍは無蓋で側壁はやはりハ字状に広がる。つまり、その無蓋部に相当する部分が、本城では広くて完結した部位となり、有蓋部端に本城でいう吸水口と石組壁が位置する関係といえる。無蓋部の左右背後に裏込め状の石積みが施され、背後列石が天井石の上面に構築されるという構造も共通する。ただ、ここでは裏込め状の石積みは独立した存在で背後列石下には及ばず、排水は専ら通水溝に負っているといえる。また、排水口は前面の列石面ではなく、さらに外方にある。

一の木戸、二の木戸石塁は、石塁の保安を考慮しながら城内の流水をスムーズに城外に排水する事を一貫して意図した構造といえる。背後に窪地は形成されるものの、石塁をダムの堤防として貯水機能を期待するといった構造的要素は浮かんでこない。また、石塁下部に納まっている排水構造に石塁構築の主体的要因があるのであれば、外郭線一般部分に近い高さで構築する事は、技術的に十分可能であったはずである。つまり、石塁構築の第一義的な要因は、あくまでも強固な城壁線をその位置に築く事にあったとみなしうる。排水構造はそれを実現するための課題の一つであり、そうであるからこそ、この課題が解決できるのであれば、二の木戸に示される様に、水門という用語に直結する通水溝すら、必要条件ではなかったのであろう。

水門石塁の側部に城門が設置される例は、おつぼ山や御所ケ谷で知られる。本城跡では、現状では一の木戸、二の木戸ともに石垣列石線が途切れ注目されるが、調査によって存在を確認する事はできなかった。とはいえ、城門が一切確定できない現状では、少なくとも一の木戸は、なおその候補地として保留した上で、城門位置の探索にあたる必要があろう。

６．使用尺度の問題

神籠石系古代山城の使用尺度の問題は、おつぼ山で唐尺使用が説かれ[8]、また最近鬼ノ城でも同じく唐尺使用の可能性が指摘されている[9]。次ページの表は、本城跡で確認された各部の計測値を各尺長で割ってみた結果である。商の内、切りの良い値に近いものはゴチで示した。上段の７例は、測点が石材端部として明瞭で、かつ本来的に意味を持って築造時に意識されていた可能性のある部分の長さである。中段の４例は、測点は確認点としては明瞭であるが、こうした分析の対象としての有効性に疑問が残るものである。下段は、測点の精度が現地表での平板測量次元で、流失による測点の移動が予想され、見えない列石をあえて推定して測点とした個

計　測　部	実測値(m)	和銅小尺 0.253	唐尺・曲尺 0.303	唐　尺 0.311	高麗尺 0.355	大宝令大尺 0.364
L地点列石折間	28.1	111.07	92.74	**90.35**	**79.15**	77.20
(　〃　斜	28.4	112.25	93.73	91.32	80.00	78.02)
二の木戸石塁幅	6.5	25.69	21.45	• 20.90	18.31	17.86
一の木戸石塁幅	6.2	24.51	20.46	**19.94**	17.46	17.03
前面石垣主要部長	21.3	84.19	**70.30**	68.49	**60.00**	58.52
吸水口張り出し長	1.4	5.53	4.62	**4.50**	**3.94**	3.85
中央部総幅	8.6	33.99	28.38	27.65	24.23	23.63
通水溝幅	0.7	2.77	2.31	2.25	**1.97**	1.92
前面石垣区間長	4.4	17.39	14.52	14.15	12.39	12.09
〃	8.5	33.60	28.05	27.33	23.94	23.35
〃	8.3	32.81	27.39	26.69	23.38	22.80
背面石垣確認長	23.3	92.09	76.90	74.92	65.63	64.01
D地点列石折間	32.5	128.46	107.26	• 104.50	91.55	**89.29**
〃	15	**59.29**	• **49.50**	48.23	42.25	41.21
H地点列石折間	43.5	171.94	143.56	• **139.87**	122.54	**119.51**
K地点列石上段肩間	22.3	88.14	73.60	• 71.70	62.82	61.26
(　〃　斜	23.4	92.49	77.23	75.24	65.92	64.29)
L地点列石上段肩間	10	**39.53**	33.00	32.15	• 28.17	27.47
(　〃　斜	11.4	45.06	37.62	36.66	32.11	31.32)
二の木戸列石折間	20	**79.05**	66.01	64.31	56.34	54.95
一の木戸列石折間	15	**59.29**	• **49.50**	48.23	42.25	41.21

※斜は斜距離、他は総て平面距離

所もあり、測点とする事の有効性はあったとしても、数十センチ程度の誤差が予想される。下段の実測値の意図は、外郭線の築造時に認識されたであろう区間長と幅で、測点を列石ではなく壁面裾とすべきかも知れない。

上段の内でも、分析に最も有効とみられるものは、L地点の折間長と二つの石塁幅である。先ず、L地点では、31.1cmの唐尺で90尺、高麗尺で80尺に近いという興味深い結果が得られる。一方、一の木戸石塁幅は、31.1cmの唐尺で20尺に近い。二の木戸石塁幅は、うまく行かないが、同様の構造物での相当部という点をあえて重視すれば、31.1cmの唐尺で正に21尺とみれるし、逆に20尺をとるなら高麗尺よりは31.1cmの唐尺が近い。上段の内、一の木戸石塁のその他の部分では、ゴチは高麗尺が3に対して、31.1cmの唐尺と30.3cmの唐尺が各1となる。

上段では、中の3尺が注目されるが、その観点から中・下段をみる。中段ではいずれも十尺

単位で割切れる事はなく、混沌としている。下段は、ゴチは和銅小尺が多いが、中三つの尺の周辺で探しうる切りの良い尺数を抽出すると上から100、50、140、70、30、？、50尺という数値が浮かび上がる。これに最も近いものにドットを記すと、30.3cmの唐尺が2、31.1cmの唐尺が3、高麗尺が1となる。逆に、？の一例を除いたこの尺数を理想値として、各々の尺で総てを解釈しようとした場合、実測値に見積もらなければならない誤差の平均をとると、30.3cmの唐尺で0.93m、31.1cmの唐尺で0.62m、高麗尺で2.98mとなる。また、高麗尺の場合、理想尺数を上から、90、40、120、60、30、？、40とすると、誤差平均は0.78mとなる。

以上の事からすれば、最も有望な候補は、この表の内では31.1cmの唐尺といえそうである。ところで、おつぼ山などで問題になったのは30.3cmの唐尺またはこれを若干下回る29.6cm付近の数値である。その点からすれば、最も重視すべき上段での状況は、これに完全に符合するというよりは、やや長いものであった可能性が強くなる。このことは、先行的な要素として評価ができる可能性を含め重大な問題に展開しうる。しかし、表の総てが1尺31.1cmで解釈できるわけでもなく、上段での高麗尺の存在もなお気掛りであるし、特に外郭線幅などは同じ測点でも斜距離や下段壁面裾をとると事情も異なってくる事もあり、有効な計測値の量的な保証に乏しい現状では、こうした制度的意味での尺度の使用の有無そのものを含め、明確な結論を下せる段階ではない。

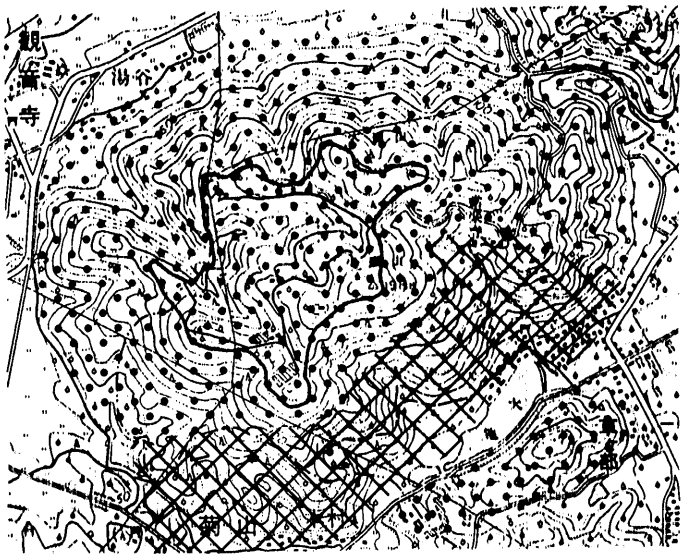
7．石材の採集地

本城跡の外郭線の調査で確認された石材の種類は、基本的に砂質ホルンフェルスと花崗斑岩からなる[00]。比率の内では、全体を通じ砂質ホルンフェルスが優勢である。花崗斑岩はF・G・H・K地点といった小廻山周辺の列石において認められ、H地点でのみ主体的になるが統一される事はない。他地点では、一つの木戸石裏の一部でしかも詰め石状の小形のものが僅か5石程指摘できるに過ぎない。

石材として用いられている砂質ホルンフェルスは、比較的一様に淡緑青色を呈するが、小廻山の各地点では黒色のものも目立つ。花崗斑岩は生地が黒く暗黄色の斑晶構造をみるものもあるが、全体的に風化が進行し、生地が白くなって別種ではないかとの印象を受けるものも確認される。石材面は、荒割面に混じって古い風化面を残すものも多く、小石材の内には全面が古い風化面というものもある。このような状況からすれば、石材は基本的に地表付近から採集されたものとみられる。

一方、城跡内外の地表でみられる自然の露岩・転石のみを対象に作成した分布図が第75図である。石材に用いられた両種ともに確認でき、逆にその他の石種を見いだす事はできない。砂質ホルンフェルスは、城内全域を含めその周辺地域にも広範に及んでいる。花崗斑岩は、城内域では確認できないが、城跡の東と南方向、外郭線から平面距離で100m程下がった位置以下

に認められる[11]。内にはかなり風化が進み白色を呈するものもある。また黒い砂質ホルンフェルスは、分布域に満遍に存在することはなく、小廻山東の花崗斑岩との境界付近で確認される。



第75図　石材分布図S=1/25000

このような状況からすれば、石材は基本的に、外郭線上の岩盤削平部を含めた城内域及び山城の隣接地で採集されたとみて間違いないであろう。さらに、列石で花崗斑岩や黒い砂質ホルンフェルスが使われるのは、本来の分布域に近い小廻山周辺に限定され、他部には及ばないという点に注目すれば、例えば特定の集積地があるという形で、城跡全体規模で一元的にまた広範に石材が移動するのではなく、列石の構築場所に即応したなにがしかの単位ごとに、専らその周辺を対象に随意的な石材収集が図られた可能性が指摘できる。つまり、ここから窺えるのは、原石の形状や大きさは重要課題であっても石種にはこだわらず、列石構築場所の最寄りから使用可能な原石をかき集めた状況で、遠隔地での石の切りだし・運搬・加工といった過程に、汎城跡規模での供給体制が想定できる状況とはやや異なっているといえよう。

8．外郭線に使用された石材と盛土の量

極大雑把な試算を行なってみる。便宜上、石材は列石と石塁石材に限定し、盛土中の混石は盛土に含めて考える。

＊列石石材について。数は、石材の平均長を0.45m、列石延長を3300mとすると［3300÷0.45］で7333個となる。総容積は、列石の隙間を見越した平均幅を0.40m、厚さを0.30mとすると［3300×0.40×0.30］で396m³となる。総重量は、石の比重を2.54（実測値）として［396×2.54］で1006t。

＊石塁石材について。総容積は、3つの石塁合計長を55m、平均幅6.3m、平均高2.3m、隙間を勘案した容積率を0.8として［55×6.3×2.3×0.8］で638m³で、長さでは遙かに長い列石部の1.6倍となる。総重量は、［638×2.54］で1620tとなる。

＊盛土について。外郭線一般部分の盛土断面積を平均5.5㎡として［5.5×3300］で18150㎥、総重量は、基本的に版築で良く締まっている事から比重を1.5と見積もれば［18150×1.5］で27225ｔとなる。

以上、石材の総量は2626ｔ、盛土総量は18150㎥で、この量は４ｔトラック7500台分程となる。

外郭線構築で想定される作業には、石塁・列石の構築、盛土のほか、地山の削平がある。地山の削平量は、直接的には算出し難いが、一般部分では単純に盛土量と同じとし、別に石塁部での削平量を［(200＋200＋100) ×0.5］から250㎥と見積もると、［18150＋250］で18400㎥になる。

今仮に、一日に一人が、地山を１㎥掘って土砂を所定の場所に運ぶか、素材の選別・調合やタタキその他の盛土作業[12]を１㎥分行なうか、石塁・列石石材を0.75㎥分組むか積むとすれば、作業の延人数は［(18400＋18150) ÷１＋ (396＋638) ÷0.75］で37929人となる。

ここに至る試算の過程には、特に一日一人の仕事量など見積もり違いも多分に予想されるが、別に、石材の探索・加工・運搬、樹木の伐採、縄張り、測量、監督作業、雑務使役なども考える必要があり、さらに城内施設の構築も考えれば、築城に際し延数万人規模の人員が動員された事は疑いない。

（乗岡　実）

註(1)　全栄来「古代山城の発生と変遷」『東アジアと日本』考古美術編　1987など『華城城役儀軌』の用語例による。なお、全氏は土段とは「斜面を削りだして廻廊だけ設け」たものとしている。本報告書で土段としたものは総て版築盛土を伴っているので、ここで言う「内托土塁」に相当する。

(2)　亀田修一氏、高正龍氏の御教示によれば、韓国の山城には階段構造のものが認められるという。

(3)　尹武炳『木川土城発掘調査報告書』忠南大学校博物館　1984

(4)　成周鐸　車勇杰『機山蛇山城発掘調査中間報告書―1985年度第１次発掘―』忠南大学校百済研究所

(5)　小野忠熙「大陸系山城の考古地理学的考察―神籠石式山城の残された３つの問題―」『地表空間の組織』1981など

(6)　鏡山猛他『おつぼ山神籠石』佐賀県武雄市史跡調査報告　武雄市　1965

(7)　河本清「諸施設の概要」『鬼ノ城』　鬼ノ城学術調査委員会　1980　において既に地形から来る技法上の特徴としている。また、葛原克人氏も斜交の問題を含め保安上の観点で評価されている。

(8)　(6)に同じ。

(9)　葛原克人「温羅の鬼ノ城」『えとのす』第25号　1985

(10)　岡山大学理学部光野千春先生の肉眼・顕微鏡薄片観察による。

(11)　光野千春先生の御教示によると、地質学的には両岩石は無関係でなく、砂質ホルンフェルスは、古生代の砂岩が中生代白亜紀の花崗斑岩の貫入によって熱変性したものとみられる。

(12)　阿部義平「古代の城柵跡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　1982　に引用されている『延喜式』木工寮の築垣の制にもとづき「築工」「上土夫」の別なく計算すれば，１人の築垣容積は1.0～1.5㎥となる。

また、文中で例示した他の神籠石山城の事実関係については、そのつど註を付さなかったが、以下の通り。

おつぼ山

鏡山猛他『おつぼ山神籠石』佐賀県武雄市史跡調査報告　武雄市　1965

原田保則他『史跡おつぼ山神籠石』武雄市教育委員会　1979

および1988年踏査時の知見による。

帯隈山

鏡山猛・小田富士雄「帯隈山神籠石とその周辺」『佐賀県文化財調査報告書』第十六集　1967

および1988.11.踏査時の知見による。

雷山

島田寅次郎「雷山神籠石」『福岡県史蹟跡名勝天然紀念物調査報告書』第二輯　1926（小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』　1983）

および1988.11.踏査時の知見による。

女山

石松好雄「女山神籠石」『考古学ジャーナル』No.117　1976

石松好雄・伊崎利秋他『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会　1982

高良山

武藤直治・石野義助「高良山神籠石」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第五輯1930　（再録次文献）

樋口一成・塚本直次「史跡高良山神籠石保存管理計画策定報告書」『久留米市文化財調査報告書』第15集　久留米市教育委員会　1977

杷木

宮小路賀宏・前川威洋・栗原和彦「杷木神籠石」『杷木町文化財調査報告書』第1集　杷木町教育委員会　1970

鹿毛馬

井上裕弘・宮小路賀宏「鹿毛馬神籠石」『頴田町文化財調査報告書』　第1集　頴田町教育委員会　1984

新原正典「鹿毛馬神籠石Ⅱ」『頴田町文化財調査報告書』第2集　頴田町教育委員会　1988

および1988.11.踏査時の知見による。

御所ケ谷

定村責二「御所ケ谷神籠石」　小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』　1983

および1986.11.踏査時の知見による。

石城山

文化財保護委員会『石城山神籠石第二次調査概要』　1964

小野忠熙「石城山神籠石」　小田富士雄編『北九州瀬戸内の古代山城』　1983

および1987.1.踏査時の知見による。

永納山

今井信太郎・坂本安光『永納山城遺跡調査報告書』　愛媛県東予市教育委員会　1980

および1986.10.踏査時の知見による。

城山

松本豊胤「城山」『考古学ジャーナル』No.117　1976

および、踏査時の知見による。

鬼ノ城

坪井清足・葛原克人・河本清ほか『鬼ノ城』　鬼ノ城学術調査委員会　1980

および、踏査時の知見による。

第4章　　遺　　物

発掘調査によって検出された遺物は、整理用コンテナ1箱に納ってしまうほどの少量で、しかも遺構に直接伴うものはほとんどないが、その時期は古代から近世におよぶ。ただ比率の上では古代のものが多く、本城跡の年代を考えるうえでも重要な位置を占める。

1．北西谷頭部の遺物

・須恵器短頸壺（第76図－1、図版第31下）

B地点第6トレンチの段上平坦部で検出されたもので、同一個体と判断される口縁部付近の全周の1／4部分片と、長さ8cmの胴下半部がある。したがって図の胴部傾斜の復原には不確定要素が残る。復原径11.5cmを測る口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁の内外端は緩い角を持つ。肩から胴部への移行部の状況は、明確ではないが、張って、緩い稜線を持っている。口縁部付近片は内外面とも回転ナデで、その外面の一部では弱いカキメ風に観察される個所もある。底部付近の外面は、ナデの後、回転台によらないヘラケズリを行っている。胎土の発色はやや暗い淡灰色、砂粒はほとんど観察されない。焼成は良好で、良く締まっている。ただ、口縁外面や肩部の一部では、気膨れし、破裂しているものもある。また、底部付近には、2.5cm大の別個体片が溶着している。上部の破片の全外面と下部破片の全内面には、いわゆるアメ釉に近い暗緑灰色の釉がかかっている。肩部には、あたかも把手剝落痕状の8×5mmの露胎突起が3cm間隔で横に二つ並ぶが、焼成時の異物付着の可能性の方が高いと思われる。時期については、類例に乏しく断定し難い。器形などは後述の須恵器壺（5）に近似しこれに近い年代とみられるが、口縁形態や肩の張りは僅かに後出的な印象も受ける。

・その他

第6トレンチでは、素焼土器の細片も1点出土している。厚さ8mm程で、黒斑を有し1.5mm大以下の砂粒を多く含み、外面はナデを行なう。弥生土器の可能性を含めて、詳細不明。

2．北谷頭部の遺物

・須恵質土器碗（第76図－2、図版第32下の左上）

E地点第3トレンチの土壙4から検出された碗底部と見られる破片である。糸切り痕を残す底面は高台風に突出し、側部外面のナデによる稜はシャープである。内面も回転ナデ。淡灰色を呈し、焼成良好。時期は平安後期、およそ11世紀後半頃とみられる。

・その他

E地点第3トレンチの集石を覆う混灰土からは素焼土器の細片が20片ほど出土した。いずれも胎土は1.5㎜以下の砂粒を含み、淡明褐色を呈す。外面はハケ、内面はナデを行ない、甕鍋の類と見られるが時期その他の詳細は不明。また、D地点第14トレンチの土壙2からは鉄滓が1点出土した。こぶし大、重さ250gで気泡痕はほとんどない。鉄滓分類用の標準磁石は、4段階で反応し、鍛冶滓の可能性が考えられる。時期不明。

3．小廻山の遺物

・須恵質土器小皿（第76図－3、図版第32下の左中）

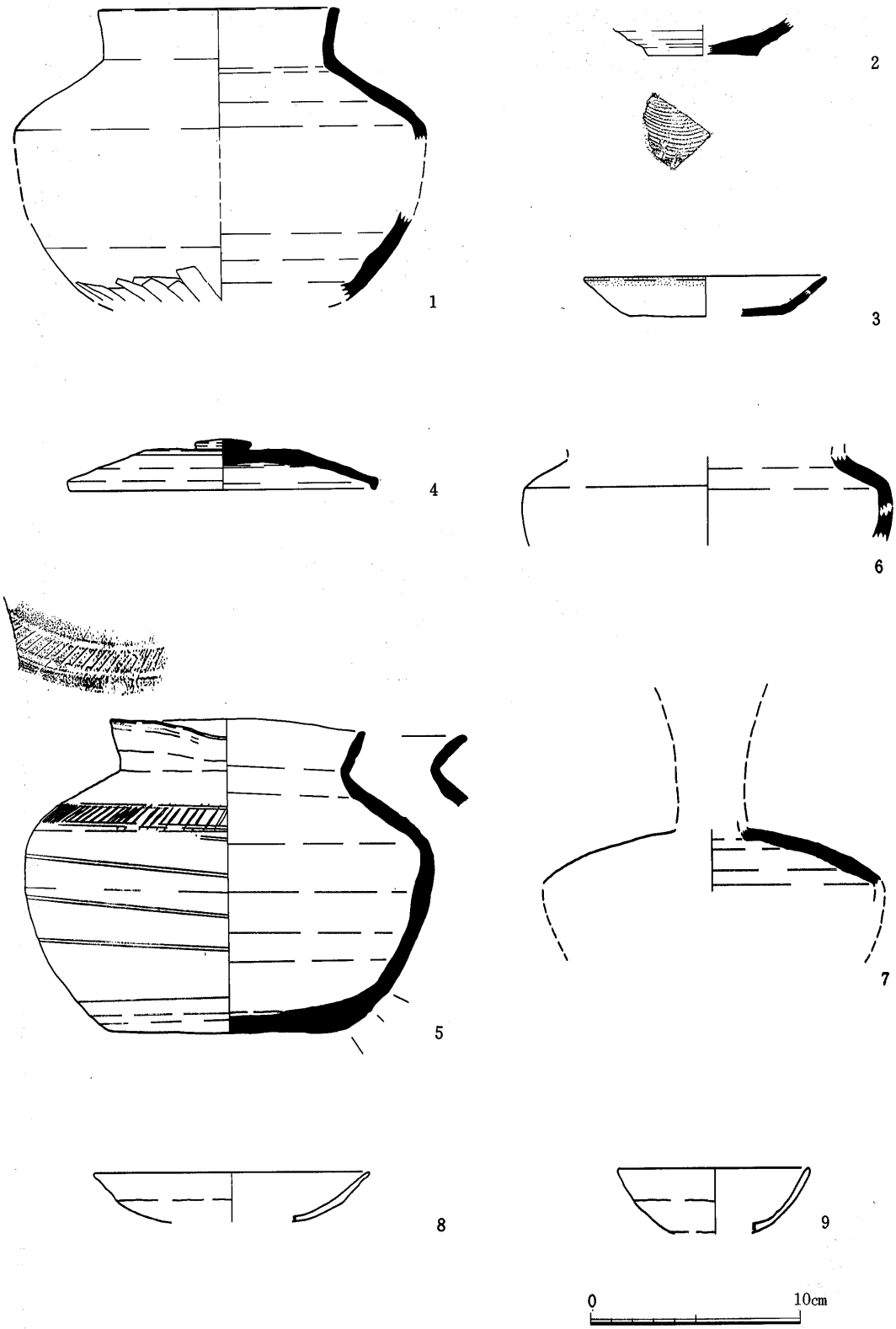
I地点第2トレンチの最上段平坦部から出土した。底部片と口縁片が出土したが、直接接合せず、図の深さの復原はやや不確定である。底部には糸切り痕を残し、やや丸みを持ちながら側部に移行する。胎土は淡灰色に発色し砂粒をほとんど含まないが、焼成はやや甘い。口端には黒灰色に炭素が吸着している。時期は、平安時代後期、およそ12世紀頃とみられる。

・須恵器杯蓋（第76図－4、図版第31下）

I地点第2・3トレンチの最上段平坦部から出土した。細片7点が全体の1／4にまで接合し、図上復原が可能である。復原径は14.6㎝、高さは2.4㎝内外を測る。つまみは扁平で碁石状を呈するが、頂部はわずかに山形を呈し、蓋身との接合部のくびれも明瞭である。天井部は、右回転の状態でヘラ削りが行なわれ、形態的にも水平に近い天井部と下半部との境界は比較的明瞭である。下半部は直線的に伸び口縁付近をいったん上に折る傾向はほとんどない。口端は鍵状に下方に折り、口縁外縁は内傾する。胎土は、やや黄色がかった淡灰白色を呈し、砂粒をほとんど含まない。焼成は器面保存状況の悪さも手伝って、やや甘い感を受ける。時期は、寒風三式[1]、畿内ではMT21式[2]、また飛鳥V期[3]にほぼ併行する7世紀最終末から8世紀初頭頃とみられる。出土須恵器中最も年代の限定し易い個体である。

・須恵器短頸壺（第76図－5、図版第31上）

I地点第2トレンチの最上段平坦部から出土した。その大半の破片が出土し、完形復原できる唯一の遺物である。口径12.1㎝、器高15.0㎝、肩部にある最大径19.5㎝、底径11.6㎝を測る。口縁は、急角度でハの字形に立ち上がるが、やや内湾傾向にある。口縁部の回転ナデは強く、口縁直下の一部では浅い凹線をつくりだしている。また、口縁は一方向に1㎝程張り出し、焼け歪みの可能性もあるが、意識的に片口を作り出した結果の可能性も残る。肩部は直線的に延び、弱い稜を経て、内湾しながら急角度で立ち上がる胴部に移行するが、肩の張りはさほど顕著でない。なお図左の外形は比較的稜の緩い部分で、いますこし明確な稜を持つ部分もある。肩部稜の直上には1.3㎝間隔の二条の浅い凹線が廻らされるが、かすれる部分もある。この凹線間には、その後1.5㎝幅の板状工具を右手に持ち、小口角を器面に当てながら相対的に左回



第76図　B・E・I・J地点　出土遺物

りに押し引きを繰り返した結果とみられる刻み紋様が施されている。刻み目は右に傾き、その間隔は3から6㎜である。肩部直下から胴下部1／3の位置までは、1.5㎜間隔の一対の沈線が、3回転余りの螺旋を切っている。しかも、どの位置でも沈線一対の間隔は約1.8㎝とほぼ一定である。浅く弱い沈線ではあるが、偶然砂粒を引きずった跡とも思えず、意識的な施紋である可能性が強い。成形は、板起こしとみられ、底部断面で、円盤から粘土を積みあげていった状況が観察される。また、体部外面の2次調整は行なわれず、2.8㎝間隔のゲタ痕が観察される。その内面は、不正方向のナデで、胴部内面の回転ナデに切られている。ロクロ回転は右回り。外面底部付近のヘラケズリはその上部と下部で方向が異なる。上部は、弱く、ロクロ上でそのまま行なわれたものとみられるのに対し、下部は倒立させて施されたものとみられる。その下部のヘラケズリは、底角に限定されるが、整ったもので回転によっている可能性がある。全体的に、丁寧な作りである。胎土は、淡灰（青）色で、砂粒をほとんど含まない。焼成は良好で、口縁外面の一部などには、暗灰色に発色する火襷状の圧痕が観察される。

時期は、類例に乏しく断定できない。ただ、口縁形態や紋様、発色を無視して体部の器形に限った場合、古い所では飛鳥Ⅲ期相当とみられる蓋坏類と伴出した神戸市宅原遺跡の大溝内下層の例[4]、新しい所では、やや小形ではあるが中村編年のⅣ型式1段階の例[5]、また平城宮Ⅱ期相当の遺物と共伴した岡山県長船町西谷遺跡No.14土壙の例[6]などが上げられ、大まかに7世紀後半から8世紀前半の年代観が指摘される。そのうちでも、口縁形態などはやや新しそうな印象を受ける反面、紋様の存在は7世紀代の内に求められそうな要素である。頸部に凹線を廻らしその間に施紋を施す例はほぼ飛鳥Ⅴ期に相当する寒風三式の長頸壺[7]に認められる。また、この期にあっては壺類の肩の張りが次第に強くなるという一般的傾向や、本例が出土状況からして、先述の坏蓋を蓋としていた可能性がある事などを勘案すれば、漠と7世紀末頃の年代が浮かび上がってくる。ただ、寒風古窯址のものとは全体的なニュアンスがやや異なり、ここでは先の広い年代幅の内で捉え、類例の出現を待ちたい。

・須恵器広口壺（第76図－6、図版第31下）

Ⅰ地点第2トレンチ下方の窪みから出土したもので、同一個体と見られる長さ5㎝の肩部片と、その直下部の2㎝大の細片である。肩部の復原径は一応17.2㎝を測るが不確定である。短い肩部からの立ち上がりが認められるが、口縁の形状については短頸であるのか大きくハの字に開くのか断定できない。肩の稜は明確で、以下の体部は内湾する。胎土は灰白色に発色し、大きな砂粒は含まず、焼成良好である。時期は、およそ予想される器形や肩の稜、また焼成や発色から、8世紀前半の可能性が考えられる。

・須恵器長頸壺（第78図－7、図版第31下）

Ⅰ地点第2トレンチの最上段部から出土したもので細片5点が肩部全周の1／8大に接合し

た。内面には、頸部の立ち上がり端が辛うじて認められる。器形は、ラッパ状に開く長頸を持ち、底部は外に開く高台が付くものと見られる。胎土は、やや黄色がかった淡灰色に発色し砂粒をほとんど含まない。外面には、薄い釉斑が認められる。時期は、肩の稜線の状態が不明確であるが、およそ復原される肩部の傾斜や内湾傾向などから、飛鳥Ⅳ、Ⅴ[8]期、つまり7世紀の第4四半期から8世紀初頭頃とみられる。

・土師質土器皿（第76図－8）

Ⅰ地点第4トレンチの最上段部から出土した。胎土は淡明黄褐色で1㎜大以下の砂粒を含むがきめは細かい。内面は丁寧なナデに対し、外面は無調整に近い。中世後半であろう。

・土師質土器碗（第76図－9　図版第32下の中上）

J地点第2トレンチの最上段平坦部から出土した。胎土は淡明褐色で、内面はナデ、外面は無調整に近い。中世後半、15世紀頃のものとみられる。

・その他（図版第32図下の左下、同右）

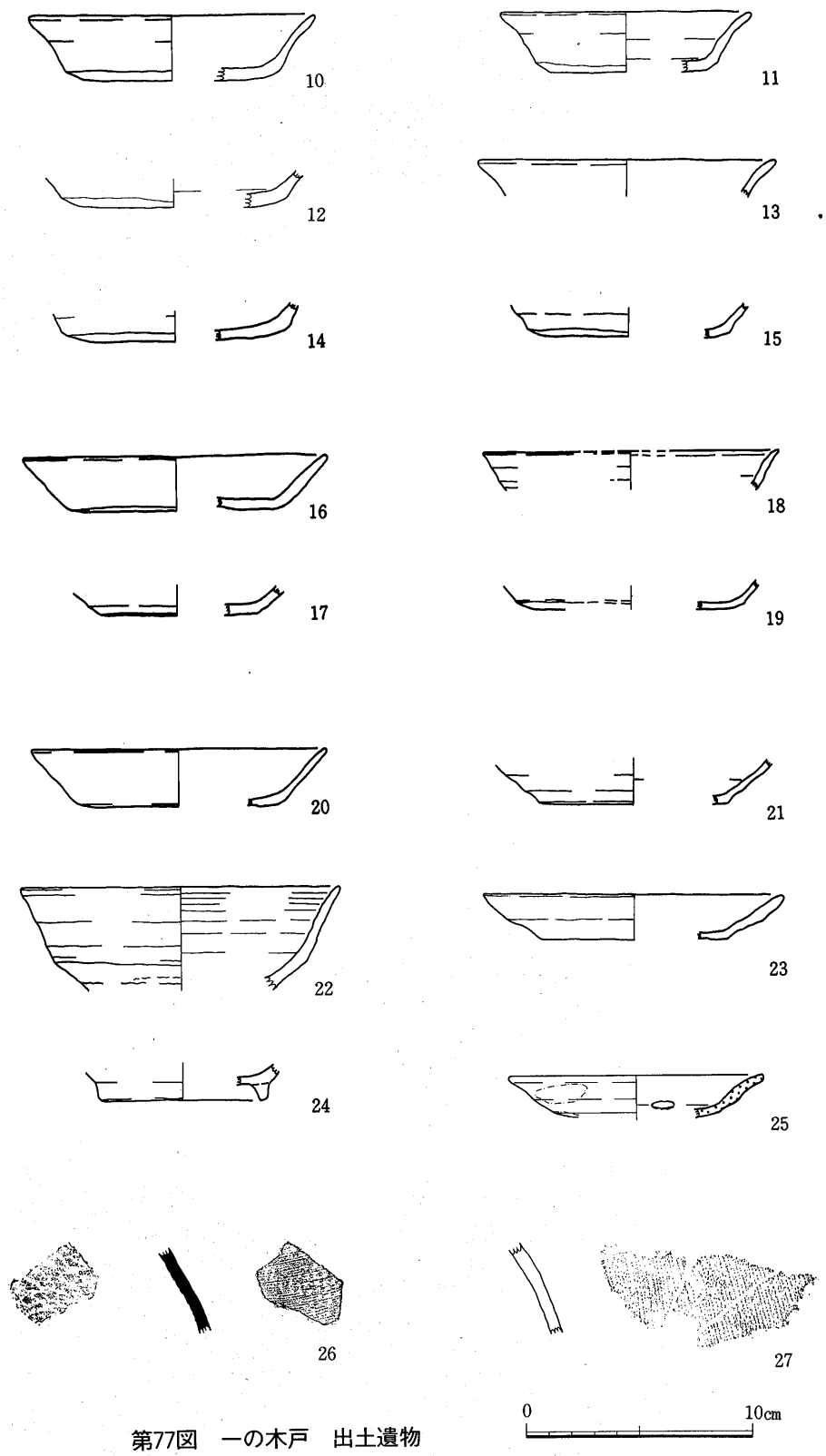
Ⅰ地点第2トレンチ下方の窪みでは素焼き土器細片が10点ほど出土した。いずれも、胎土は淡褐赤色で1.5㎜大以下の砂粒を含み、外面に比較的細かい刷毛目調整を施し、すべて同一個体とも思われるものである。おそらく古代の枠の内に入る鍋・甕の類であるが詳細不明。Ⅰ地点の2・3・4トレンチの最上段の平坦部でも、平安時代と見られる内黒土器細片1点、江戸中後期の土師質と備前焼の灯明皿片3・京焼系灰釉陶片3・ほぼ一個体分の伊万里染付の波状口縁皿片・大原焼系陶片、時期不明の素焼き土器片数点などが出土した。またK地点の土壙1の下方平坦部では、近世のものとみられる素焼土器3片と鉄釘2本が出土している。

4．一の木戸の遺物

・土師器・土師質土器杯（第77図－10～21、図版第32上の中下と右上以外）

総て3・4・6トレンチの石塁背後の流土中から出土したもので大きく二群に分けられる。

10～19は、口径11～13.2㎝、器高2.9～2.4㎝で、内外面とも横ナデを施し、底部外面は不定方向のヘラケズリを行っている。また、そのケズリ部を含めて全面に丹を施している。そのうち、10～11は体部の立ち上がりが急で、外反するもので、底部のヘラケズリは、底角の接地点よりやや上まで及びここに稜を持つ。胎土はいずれも淡褐色で、0.3㎜大以下のキラキラ光る黒色鉱物粒を含んでいるのが特徴的である。12～14はこれと同様と見られ、15もこれに類すると見られるが、胎土は色調が似るものの黒色鉱物は顕著でない。16は、胎土の特徴は10以下のものに似るが、体部の立ち上がりは弱く、直線的に延びる。また、底部のヘラケズリも接地面にとどまっている。17も同様の特徴を持つと見られるが、胎土は淡赤褐色で、黒色鉱物その他の砂粒はほとんど含まない。18・19は器壁が薄いものである。18の体部は直線的で口縁は僅か



第77図　一の木戸　出土遺物

に外に折り、端部は比較的シャープである。胎土は淡明褐色で、砂粒をほとんど含まない。19は底部付近で、ヘラケズリは底部接地面からやや浮いた位置まで及んでいる。胎土は砂粒を含まずきめが細かく、器面付近は淡黄褐色を呈する。この2点は、いずれも細片で径の復原などは不確定である。

20・21は、法量の点では先の一群に似るが、底部外面にヘラ起こしの痕跡をとどめ、ヘラケズリは認められず、器厚は18・19を除く先の一群より薄く、胎土は淡明褐色、焼成の良好さなどの点で異質である。20は体部が直線的に延び、丹は確認されない。21は底部脇に回転ナデによる段を持ち、内外面に丹が認められる。21は、吸水口内の流土下層中からの出土である。

これらの坏は、白鳳期や奈良時代前半の土師器坏一般とは、胎土の特徴や器形、作りの点で明らかに後出的であり、比較的内容の判明しつつある当地域の平安時代後期の組合せには先行的である。また、須恵器を含めた坏類全般の器高や体部の立ち上がりの変化などからすれば、およそ平安時代の前・中期を中心とする時期と見られる。当地方では、この時期の土器は矢掛町毎戸遺跡[9]などの他まとまった資料に乏しく編年研究が進んでいないのが現状である。本資料の中でいえば、技法や器形の変化の流れからして、10に代表されるものが最も古く、次に16、最新が20という序列が考えられる。特に、最後者は胎土・焼成・技法などの点で、後述する高台付と見られる碗と共存する可能性があり、平安時代中頃の年代が考えられる。[00]

・**土師質土器碗**（第77図－22、図版第32上の右上）

第3トレンチの石塁背後の流土中から出土した。口径や体部の傾斜はやや不確定であるが見込みは深い。おそらく底部には高台が付く。内面全面と外面の高台脇以上は回転ナデを行ない、特に口縁付近はそれが強く器面が波打っている。高台脇はヘラ起こし痕をのこし、高台付根と見られる部分は、張り付け時と見られるナデが観察される。胎土はやや砂粒が目立つが18・19に近似し、焼成も良好で、内外面に丹が認められる。平安時代中頃のものとみられる。

・**土師質土器皿**（第77図－23）

第3トレンチの石塁背後の流土中から出土した。口径9㎝ほどの皿で、内面と体部外面はナデを行なうが、底部外面はヘラ起こし痕をとどめる。丹ははっきりしないが、胎土焼成は22と同じである。ほぼ同じ頃のものであろう。

・**土師質土器碗**（第77図－24）

第4トレンチの北側土塁の山側裾の流土中から出土した。高台の断面は台形に近いが、畳付の面をほとんど持たない部分もある。胎土は淡明褐色で1㎜以下の砂粒を含み、焼成良好。やはり平安時代中頃のものであろう。

・**美濃灰釉皿**（第79図－25、図版第32下の中下）

第4トレンチの石塁石垣間角石を覆う流土から出土。復原口径11.2㎝で、見込には重焼時の

ピン痕が認められる。口縁は外反気味、高台脇はヘラケズリ。胎土は美濃特有の白土で、外面体部は一部露胎、灰釉は淡緑黄色を呈する。近接して、ほぼ同様の特徴を持つ別個体の口縁、削出高台（露胎）部片が出土した。大窯期[11]の内でも古い16世紀前半のものであろうか。

・須恵器片（第77図－26）

石塁背後の流土から出土。小形甕類の破片とみられる。外面は格子風のおそらく平行タタキ後カキメ、内面は青海波の当具痕を軽くナデる。胎土は砂粒を若干含み、白鳳時代以前に通有な青灰色を呈している。焼成良好。細かな限定は出来ないが、一の木戸出土の最古の遺物であろう。

・土師器片（第77図－27　図版第32上の中下）

第3トレンチの石塁背後の流土から出土。厚さ5㎜程で、甕鍋類の破片と見られる。外面は荒いハケ。内面はナデで、工具による押え痕と見られる窪みが観察される別破片もある。胎土は、器面が茶褐色を呈して1㎜以下の砂粒を含む。古代のものであろうが詳細は不明。

・その他

第3・4・6トレンチの石塁背後の流土からは、先述の坏碗類と同様の特徴を持つ細片がさらに数点、むしろ中世の館域に入ると見られる碗皿類の細片が2、3点、厚手のものを含む時期不明の素焼土器片が約20片、中世後半とみられる備前焼の甕類の胴部片（図版第32下の中央）が3点のほか、比較的その土層から鉄滓が20点余り出土した。鉄滓は最大手のひら大で、気泡痕が顕著で、植物繊維痕や焼土を付着するものもある。標準磁石にはおおむね3段階で反応する流出滓が中心であるが、純度が高く6段階で反応するものもある。製鉄に伴うものであろう。また、第4トレンチの北土塁山側付け根では、24と同一個体とみられるものを含めて素焼土器の極細片が、手のひら一杯分出土したが詳細は不明。

以上が今回の調査で出土した遺物の総てであるが、城跡の年代を決定づける状況の遺物はない。ただ、およそ7世紀後半から8世紀前半にかけての須恵器が、小廻山で4個体分、B地点で1個体、一の木戸でその時期の可能性を持つものが1個体出土した。器種は壺類が中心で、特に蓋坏との組み合わせは一見骨蔵器を思わせる。その可否は決定できないが、埋納壙が確認されず出土状況からは骨蔵器と確定できるものでもない事、壺が複数地点に及び墓地が広範に分布したと考えるのもやや無理がある事、時期に不確定要素を残しつつもおよそ骨蔵器の盛行年代よりはやや古そうな事から、城跡とより積極的に関わる遺物の可能性も考えられる。

さらに、出土した須恵器をトータルで見た場合、他の神籠石系山城でも、本例と同じく城との共存関係に問題が残るとはいえ、鬼ノ城では水門背後で甕が出土した他、各所で壺・平瓶・坏などが採集されており[12]、また鹿毛馬ではやはり水門背後で甕が単独で出土し[13]、組成に共通性

が指摘できなくもない。つまり、一般集落や官衙とはやや異なるこうした組合せが古代山城、あるいは居住空間ではないその外郭線上の遺物としての類型の内にあり、符合するではないかといった事も考えられる。仮に城跡に伴う遺物とした場合、存続年代の１点を示すものとしても、築城年代を決定する資料性はむろんないが、とりあえずこれらの遺物だけから言えば、その年代観が大野城の造営が記される665年よりおよそ新しい事は注意しておく必要がある。また、遺物の組み合わせから言えば、散見する鍋甕片の帰属年代が気掛かりである。次に、平安時代前半頃の遺物が、石塁背後からまとまって出土した。城の存続年代との関係で注目すべき遺物であるが、石塁上からではなく城内谷上方からの流込である。その組み合わせは、墓祭を含めた祭祀を彷彿させるが、帰属は不明である。吸水口内で出土した一点は、少なくとも平安時代中頃までは通水溝が埋まらずに機能していた事を示している。平安時代後期の遺物も少量ながら外郭線の各所に散在し、城跡域が何らかの形で利用されていた状況が窺える。常楽寺の起源に関わってくる資料であろうか。中世後半は、かつて城内に文英様石仏が配されていたことに示される様に城跡域が信仰対象になっていたとみられる時期で、特に常楽寺の盛興期で城内にも坊院の存在が予想される。小廻山や一の木戸で遺物が出土し、こうした見通しに合致するが、その量は予想外に少ないと言える。小廻山山頂の近世遺物は、江戸中期の八大龍王の碑が現存する事から、その信仰に関わる遺物であろうか。なお，一の木戸背後の鉄滓については、城跡周辺にも鉄滓散布地が数多く知られ、ただちに山城と結びつけるには問題が多い。

（乗岡　実）

註(1)　伊藤　晃「窯業」『岡山県の考古学』　吉川弘文館　1987
(2)　田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981
(3)　西　弘海「七世紀の土器の時期区分と型式変化」『土器様式の成立とその背景』　真陽社　1986
(4)　神戸市教育委員会「24宅原遺跡（岡下地区）」『昭和60年度　神戸市埋蔵文化財年報』　1988
(5)　中村　浩「出土須恵器の編年的考察」『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981
(6)　福田正継他『西谷遺跡』　岡山県長船町教育委員会　1985
(7)　(1)に同じ。山磨康平『寒風古窯址群』　岡山県教育委員会　1978
(8)　(3)に同じ。
(9)　岡山県教育委員会『国鉄井原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　1974　資料の実見に際しては、岡山県古代吉備文化財センターの河本　清、下沢公明、島崎　東の各氏にお世話になった。
(10)　武田恭彰氏から、その編年案によると、10～19の年代観はおよそ９世紀前半で、内でも10は８世紀末まで遡る可能性もあり、20・21は須恵系土師質土器というべきもので10世紀前半に位置づけられるとの御教示を受けた。
(11)　田口昭二『美濃焼』　ニューサイエンス社　1983
(12)　葛原克人・高橋　護・春成秀爾・河本　清他「出土遺物」『鬼ノ城』　鬼ノ城学術調査委員会　1980
(13)　宮小路賀宏・井上裕弘『鹿毛馬神籠石』　嶺田町教育委員会　1984

第5章　結　語

大廻小廻山城跡は分布調査での外郭線全周の確認に基づく神籠石系山城としての認知以来、土木工事に伴う神籠石状列石の発見を経て、此度の発掘調査に依る城郭遺構の検出の運びに至ったものである。第3章と第4章に詳述している城郭遺構や関連遺物にしても、城跡全体からみればその一部を明らかにしたに過ぎず、その片鱗に触れたというのが実情であって未解明の部分を多く残しており、これまでの古代山城遺跡の発掘調査成果に較べても追求の至りえていない点も多々あるであろう。しかし、此度の発掘調査の成果は大廻小廻山城跡が古代山城遺跡の一つであることを実証するとともに、微少なりといえど、この城跡固有の事実と古代山城遺跡の普遍的要素を提供し、謎に包まれた神籠石系山城の解明に資すると思われる。また、同時にこの遺跡の保存に必ずや役立つものであろう。さらに、此度の成果を基にした当城郭遺跡の検討の試みは、古代山城の研究の一助になることも間違いないであろう。

Ⅰ　城郭遺跡の考察

1．時期的検討

此度の発掘調査では築城時期を確定しうる遺物の検出状態に恵まれておらず、古代山城の想定時期に該当する遺物は6個体の須恵器と約十数個体分の土師器坏の破片だけであった。これらは第4章に詳述しているように、小廻山山頂から出土した3点とB地点から出土した1点の須恵器の壺は、飛鳥Ⅲ～Ⅴ式に対応する編年観が得られ、白鳳時代に想定され、同じく小廻山山頂から出土した須恵器の坏蓋は、飛鳥Ⅴ式、当地方では寒風3式の編年観が得られ、白鳳時代末期から奈良時代初期に想定される。一方、土師器の坏は平安時代前期を前後する編年観が得られ、城郭廃止後の転用時期に対応するものであろう。従って、検出した遺物の内で従来の観点に該当する年代観は白鳳時代から奈良時代初期ということになるが、これらの須恵器はいずれも遺構共伴の生きた出土状態になく、さらに、検出地点が城郭全体から見れば、城郭の経常的使用域と特定しかねる位置にあり、この年代観をストレートに城跡に結び付ける訳にはいかない。須恵器はその年代観の振幅から、廃城期までの一定期間を反映する資料と評価するのが穏当である。このため、大廻小廻山城跡の機能時期の下限が奈辺にあるかは大局的に上記の年代観の枠内から動かないとしても、築城時期についてはなお未確定の現状に止まっていると認識せざるを得なく、今後に残した大きな課題の一つである。

従って、神籠石系山城の築城期が築城の主体者及び目的と相俟って主要な争点となっている現状において、此度の発掘調査成果はその検討の直接的効力のある資料を必ずしも提示するも

のではなかった。このため、これまでに提起されている大廻小廻山城跡の築城に直接関する坪井清足[1]・高橋　護[2]・西川　宏[3]・李　進熙[4]・葛原克人[5]・門脇禎二[6]・阿部義平[7]の各氏、さらには神籠石系山城ということで関連性の濃い斉藤　忠[8]・鏡山　猛[9]・小田富士雄[10]・樋口一成[11]・佐田　茂[12]・田辺昭三[13]・渡辺正気[14]並びに拙稿[15]等の諸説との検討と整合には遙かな隔たりがあり、諸説のこの山城跡に対する観点の優劣を決しがたい状態のままにある。

しかし、強いて言えば、須恵器の示す年代観からの遡及の範囲には自ずと限界があるのではなかろうか。

2．城郭構造的検討

神籠石系山城の城郭構造的検討は、城郭の指向する平地側を防御正面と規定し、この側に谷を取り入れて水門石塁や城門施設を構えるとした坪井氏の視点[16]が基本的には踏襲されており、この視点に依ると大廻小廻山城跡の防御正面は北西側になり、城郭としての指向する対象平地が北側の低丘陵を隔てた旧赤坂郡南西部の盆地となる。その後、同氏はこの視点を山頂から平野に向けて斜めに構築される九州型と、山頂を鉢巻状にとりまく瀬戸内型に型式分類し、大廻小廻山城跡は当然に後者の部類に入れている[17]。一方、関野　貞の古代山城の分類法である「鉢巻型」と「包谷型」の観点[18]を、継承的発展をさせた葛原克人氏は後者を「傾斜囲繞型」とし、前者と「傾斜囲繞型」を各々２型式に細分[19]するが、この山城跡はこの観点では傾斜囲繞型Ａと同Ｂとの移行段階となる。型式分類は別にして、これまでの所、大廻小廻山城跡に対する城郭配置性は、坪井氏の視点が継承されて水門構築方向が防御正面とする見解が採られて以来、内陸部へ指向する山城と評価されている。

しかし、此度の発掘調査に伴う発掘調査対策委員会（Ｓ63年度）において、坪井氏から従来の配置性に関する評価に対し、視点を変更し防御正面を南東側とする観点の提起を頂いている。この観点は、前掲の視点の提起時に、もう一つの形式とした防御正面が急峻な背稜側を利用し、背後に谷を取り入れて、平面形態が神籠石系山城と逆になる天智朝の山城形式の枠を越えて、山城としての機能に重点を置いて大廻小廻山城跡の外郭線囲繞状態を全体的に検討し、立地する山塊の地形状態からみれば、小廻山から大廻山の峰伝いの側の方が山麓との比高が高く、山腹の傾斜も急であるので、山城としての防御面からは有効性が高く、防御正面に適合するとする戦術的な評価である。従って、坪井氏の新しい観点に依れば、この山城跡は南東側の砂川中流域の盆地から吉井川下流右岸域の平野、つまり砂川と吉井川の下流から河口を指向する城郭配置であり、北西側の谷筋から旧赤坂郡南西部の盆地が背後として守るべき対象地域となる。従って、同氏のこの山城跡に対する見解は、内陸部を防御する軍事施設であり、こうした恒久的軍事施設を構えてまで対応する政治的・社会的要因は、古代史を通して吉備政権と大和政権

の拮抗以外にないと分析し、所謂吉備の反乱伝承との関連性を強く想定するもので、従来の[20]説の補強的再確認である。

また、横山浩一氏は今年度の発掘調査対策委員会において、古代山城の評価の底流となっている頂部鉢巻型と傾斜面囲繞型との2大形態分類に対し、これらの形態は築城の占地に基づく結果の現象であり、形態による古代山城の検討評価よりも、結果としてこのような共通的形態となる山塊地形を占地した築城観に、古代山城の築城目的を見出すべきだとする新たな論点をご提言下さった。この論点は、従来の視点からの180度の転回であり、軍事施設である城郭の用地選定が築城目的をストレートに反映するとする基本的観点へ立ち帰ったうえで、占地の必然性の検討と論証を経た後、古代山城の歴史的評価を行なおうとするものである。従って、横山氏の新提言の論点で大廻小廻山城跡を展望すれば、結果としての傾斜囲繞型の型式分類よりも、この山塊に軍事施設を構える社会的、政治的必然性の析出が、築城目的ひいては時期を解く前提作業となる。つまり、小廻山山塊の持つ山城用地としての戦術的要素よりも、戦略的要素の方が築城の要因であったことであり、山城とすれば峻嶮さを欠くこの城郭の構築状態が山城としての難攻性を犠牲にしても、敢えてこのなだらかな丘陵を占地したことに城郭の存在意義を析出しようとする考えである。

いずれにしても、大廻小廻山城跡は純然たる山城の城郭構造の面からみれば、所謂有事籠城型の占地の基本的条件を逸落していることは明白であり、その要因が築城のウェートを大幅に占めるものではないと評価される。

3．城郭機能性の検討

大廻小廻山城跡の山城機能を検討すると、山城の本質ともいうべき天然の嶮を活用しての防御構造の構成に適合する占地状況とは必ずしも評価しがたい。外郭線の最降下位置である一の木戸水門石塁の構築箇所は標高85m付近の高度にあり、この谷筋の谷尻が標高25mであるので、両者の比高が僅か65mしかなく、両者の谷筋径路の水平距離が500mなので、谷筋径路の傾斜度が60/500＝0.12≒7度となり、なだらかな谷筋に城郭主要防御施設を配備した縄張りといわざるを得ない。この石塁の復原高を3m、石塁上の土塁の復原高を2mと想定し、谷筋横断箇所に垂直高約5mの外壁が構築されていたとしても、上記の谷筋傾斜の緩やかさと石塁両側取付き部分の土塁の低高度並びに緩斜面から、この石塁箇所は物理的に対外的遮蔽性の構成が充分に図られていたと評価しがたい。

城郭外郭線北側の谷頭（D地点）では、土段築成位置が標高147m付近にあり、谷尻が標高15mであるので、両者の比高が132mとなり、両者の谷筋径路の水平距離が500mなので、この径路の傾斜度が147/500＝0.294≒16度となる。城郭外郭線東側の大廻山と小廻山の鞍部では、土段

築成位置が標高165m付近にあり、その直下の谷筋の谷尻が標高15mであるので、両者の比高が150mとなり、両者の谷筋径路の水平距離が800mなので、この径路の傾斜角が150/800＝0.1875≒11度となる。小廻山南西側の三の木戸石塁の背後稜線にあたる鞍部では、土段築成位置が145m付近にあり、その直下谷筋の谷尻が標高15mであるので、両者の比高が130mとなり、両者の谷筋径路の水平距離が580mなので、この径路の傾斜角が130/580≒0.22≒13度となる。三の木戸石塁の構築箇所は標高125m付近にあり、この谷筋の谷尻が標高30mなので、両者の比高が95mとなり、両者の谷筋径路の水平距離が680mなので、この径路の傾斜角が95/680≒0.14≒8度となる。山麓平地から大廻小廻山城跡に至る経跡は北側が最も急であり、北西（一の木戸水門石塁）側が最も緩やかであるが、全体的にみると城郭外郭線の全周はいずれも緩斜面上に立地しており、明らかに峻嶮性に欠けている。さらに、二の木戸石塁の西南西に延びる尾根（L地点）では、稜線を横断する土段築成位置が13/130という極めてゆるやかな舌状尾根上にあり、山地の斜面を利用した防御用外郭線の設定には程遠い城郭外郭施設の設置状態にある。

以上の様に大廻小廻山城跡の城郭としての占地は、天然の嶮の利用に欠け、山城の山城たる由縁に乏しい山塊の選定と評価せざるを得ない。峻嶮性を有効な防御機能として活用し、争乱時に隔離避難を目的にして発達した山城としては、その目的性に大幅に欠けており、この城跡は有事の逃げ込み用山城としての機能性に著しく劣ると判断される。従って、この城跡の城郭構造の防御面における機能性は、大野城跡や鬼城山城跡に代表される典型的な有事籠城型の古代山城とは異質な城郭の所在性を提起するものである。この提起は山城即逃げ込み防御用施設と、一元的に解釈しようとする現状の観点に、再検討の必要性を訴えるものでもあろう。西日本各地に所在する古代山城を総体的に展望すれば、有事籠城に即応する占地と構造性を具備した嶮山城と、逃げ込み防御に不適格な占地と城郭構造しか形成していない緩山城に大別でき、神籠石系山城と朝鮮式山城との分類や、頂部鉢巻型と傾斜囲繞型の型式分類よりも、純粋に軍事施設である城郭の有効性や機能性で分類を検討する時期に来ているのではなかろうか。

4．城郭施設の検討

此度の大廻小廻山城跡発掘調査の結果、この山城の外郭施設は基本的には外側裾部に列石（所謂神籠石）を埋設した築成土段だけであって、城郭防備構造物とすれば下部基礎地形（ちぎょう）部分だけの造成であり、その外側前面や上部平坦面外縁への柵、板塀等の上部構築物の全く設置されていないことが判明している。従って、この城跡が城郭として機能するための基本的防御施設ともいうべき囲周の上部構築物の設置に欠けていることであり、こうした城郭施設の整備状態がこの山城に限った特例であるのか、他の神籠石系山城にも普遍的に認められる城郭構造として

の特徴なのか、今後の調査成果に負う所が大であるが、この城跡に関していえば土部防御施設を未装備のままに城郭造成が終了したということになる。大廻小廻山城跡の外部の防御面についてみれば、土段外側が仮に垂直に近い壁面の形成を図られていたとしても、比高は土部平坦面の遺存状態と裾部の列石位置から3m前後と判断でき、この土段の高さだけをもって対外的遮蔽機能の全てとするのであれば、あまりにも脆弱な防御ラインの形成であり、城郭全体の土木工事量を勘案すれば極めて不均衡な直接的防御施設の構築であって、工事量に較べて非効率的な軍事施設の造営ということになる。この山城が城郭として機能するためには、土段上部平坦面外縁に柵・坂塀・垣等の対人的直接防御施設を構えなければ防備力が半減し、当然にこれらの施設の設置が軍事施設としては不可欠の条件となる。しかし、大廻小廻山城跡でこれらに該当する痕跡の検出されなかったのは事実であり、城郭の機能性と事実を勘案すると、この山城の外郭施設は基礎地形部分だけの構築を図ったうえで、防御の上部構築物に関しては平時に設置せず、有事に際して可動式の構造物を展開設置する形態が考察される。つまり、城郭外郭構造は築成土段による外側面と上部平坦面の恒常的な形成と確保に主たる目的があったと評価され、この山城はこの程度の防御内容で事足りる城郭であったことであり、築城の目的や意図が奈辺にあるかを物語っていよう。

また、観点を変えれば、版築造成の土段箇所に木製の構築物を埋込んで設置したとしても、根腐れで数年間も持たないことは明白であり、もし、根腐れの生じた木材毎に建替えを随時行なえば、版築層を都度々々掘削することになり、結果として版築層内に不整合土塊を多箇所に亙って混在させることになり、雨水等の浸透を容易にし、版築造成層の強度を弱めるとともに根腐れをも、より増進させることになると考えられる。従って、恒常的軍事施設である城郭の周囲3.5kmに及ぶ長大な外郭に木製構築物を設置することは、極めて非効率な施設の設置となり、こうした点を勘案すれば、外郭下部基礎地形部分だけの造成をもって城郭施設の形成と評価できないこともない。以上のように、この山城の外郭防御施設を評価するならば、この山城の城郭機能が必ずしも逃げ込み専用施設としての築城になかったとの観点も導き出されよう。つまり、恒常的防備施設の完備した難攻の籠城用軍事施設（山城）の形成とは趣を異にする軍事施設の形成という観点が抽出でき、この観点の方が大廻小廻山城跡の占地状況及び城郭構造の特徴により適合すると考えられる。さらにこの観点を拡大解釈して強弁すれば、この山城の城郭施設としては間延びした囲繞面積の広大さの必然性は、城内へ収容する籠城人員数や駐屯兵力員数に由来するのでなく、上記の外郭防御施設の用材である木資源の恒久的確保に要因があるのではなかろうか。周囲3.5kmの外郭線を防御できる兵力は、仮りに敵方兵力の攻撃が防御正面側の半周としても、当面1.5～2kmの兵力の展開が必要であり、素人目にみても、その兵員数は1m当たりに1人としても2000名を越える大部隊の集結が必要である。外郭線の長大

さは戦術的要因以外にあるのではなかろうか。

なお、外郭施設の上部構築物以外の城郭施設については、此度の発掘調査では遺構を全く検出しておらず、不詳の状態のままにある。他の古代山城遺跡における倉庫跡や城門跡、さらには望楼跡等の城郭施設の確認及び発掘調査での検出の状態を参考にすれば、当然にこの山城跡にもこうした施設を伴っていたと考えるべきである。第3章に述べているように、城門施設については遺構面からは全く不明であり、倉庫や居住棟については一の木戸水門石塁の城内側谷筋の背後、小廻山から西北西に延びた台地状の尾根頂部で礎石状の石の並びのあったとの伝承もあり、現況で未確認ながらもこの一帯に所在していた可能性が高い。また、望楼や櫓等の戦闘用施設についても、構築の最適地である小廻山山頂部で検出できなかったが、あるいは外周の上部構築物と同様な構造体の可能性が強い。いずれにしても、城郭施設たる上部構築物の検証は城跡内想定地の面的な発掘調査を施こして、柱穴や礎石の抜跡等の検出以外にはなく、今後の課題である。

5．城郭配置性の検討

大廻小廻山城跡の配置、すなわち防御正面をどの方向に認定するかによって、この山城跡の評価が規定される。この山城跡は先に掲げた従来の坪井氏の神籠石系山城の配置観に依れば、水門石塁を備えて平地に接する側である北西側の渓谷部分が防御正面となり、この谷筋は先に述べているように旧赤坂郡南西部（現山陽町）の盆地に繋がる地形にあり、この方向への指向性となる。坪井氏の視点が継承発展的に受け継がれ、外郭施策の内で最も厳重な石塁を構えた箇所及び方向を防御正面側とする見解が大勢を占めており、大廻小廻山城跡に関しても一の木戸水門石塁・二の木戸石塁・三の木戸石塁を構えた北西側の谷筋を防御正面とする見解が支配的である。北西側谷筋を防御正面とする観点に立てば、その方向性からこの山城は旧赤坂郡南西部の盆地の地域を主たる対象地にした内陸指向の城郭と評価される。この地域は古墳時代に吉備地方でも有数な高月遺跡群の形成と展開を示し、吉備勢力の有力構成員の本拠地に見立てられており、その後裔の国造層及び郡司層等の在地勢力の本貫地に想定でき、大廻小廻山城跡指向性はそれに対応する軍事施設の設定と解される。従来の説の一部に見られるように、この山城跡を在地勢力が有事に備えて築城したと見立てるのであれば、上記の盆地の北西側背後に鬼城山城跡の立地する山塊に匹敵する急峻な山塊が広範囲に亘って横たわっているので、この山塊に逃げ込み用城郭の構築を求めるのが論旨や類例に沿うものである。地理的感覚でもこの盆地の在地勢力が緊急避難する施設としては隔りがあり、また各地域において城郭を構える社会的・政治要因の普遍性が古墳時代から奈良時代に認められない以上、そうした大廻小廻山城跡に対する観点は受け入れ難い。従って、この山城は上記盆地勢力への軍事対応の拠点の形成

と評価でき、こうした軍事的押圧、ひいては抑止力の設定を図った築城主体者は非在地勢力、即ち汎西日本的勢力の掌握者以外には考えが及ばない。吉備地方有力在地勢力に軍事施設を導入し、抑止力を背景にして支配大系に押え込む必然性のある非在地勢力は、古くは畿内中央政権、下れば律令政府以外にはなく、大廻小廻山城跡の築城主体は当然にこれらと判断される。此度の発掘調査では築城時期の限定ができなかったため、上記の政権の段階なのか、政府の次元なのかは判然としない状態にある。

一方、大廻小廻山城跡は平野地帯の低い半独立山塊の中央部に占地するため、城郭の対応機能が全方位に及び、城郭構成の面では一重の外郭防御施設が単純に用地を囲繞するだけの単郭式の城郭構造である。このため、こうした城郭構造の特徴において、渓谷部の確保のために谷筋を横断する必要が生じた際に、純土木技術的要素からその箇所に石塁工法を採用した結果とも見れないことはなく、この山城の場合厳重な石塁箇所即ち防御正面と評価してよいのかどうかの疑問が残る。さらに、この山城の場合低位置まで谷を取り込んでいるので谷筋側を防御正面とすれば、指向する平地側つまり敵対側から城内が容易に見透かされ、城郭（軍事施設）としては致命的欠点を内在させている。この欠点は、多くの神籠石系山城に対しても指摘できる事項である。この点からも防御正面の再検討が必要であり、従来の観点どおり水門石塁箇所を防御正面と認定するのであれば、城郭としての上記の欠点を克服できる城郭理論の設定が必要となって来るであろう。

従って、以上のように従来の防御正面観の疑問点を提起したうえで、先に掲げた坪井氏の新観点を援用すれば、大廻小廻山城跡で自然地形を利用して難攻性の効用を図っている箇所は北側から東側であり、この方向を防御正面と認定することは城郭の機能面からみれば当然の帰納的到達点である。大廻小廻山城跡の防御正面を南東側に設定すると、この方面は山麓部の平地の前面が古代以前においては砂川の氾濫原の湿地帯が広がり、中世的城郭観からいえば天然の堀を前面に拠した天然の要害地・難攻の城地となる。そうすると、この山城を守る側は内陸側の旧赤坂郡南西部の盆地における在地勢力となり、対応する外敵側が瀬戸内海から吉井川、砂川を経由して進行して来る畿内中央政権（大和政権）となる。

しかし、大廻小廻山城跡の防御正面を山塊主峰側に求める観点は、城郭の平面形態や他の神籠石系山城から析出される水門石塁構築箇所と防御正面との相関性から、必ずしも首肯されるものではなく、従来の水門石塁構築側を防御正面とする観点が有効と判断される。そう判断したうえで、前掲のこの山城の城郭としての不適格な諸々の状況を再検討するならば、それはこの山城を山城即有事籠城とする一元的見解に由来すると考えられる。この山城を専守防御の山城と考えるから城郭としての不適合な要素が抽出されるのであって、逆に攻撃用前衛基地たる山城と考えるならば、防備に不適合な点も支障がなくなる。大廻小廻山城跡を吉備地方東部に



第78図　大廻小廻山城跡周辺要図

おける内陸部への進行の軍事拠点、つまり前衛基地的山城と評価すればその指向性や背後の水運を利用した兵站線の確保等の戦術面と戦略面の両面に亙る必然性が析出できるのではないであろうか。

現在の古代山城に対する観点は、学史的経緯があるとはいえ、史書記載の山城を朝鮮式山城に、そうでない山城遺跡を神籠石系山城に分類して扱う趨勢にあり、また形態的には此度横山氏から批判の寄せられている形状に基づく分類法が主流を占めている。朝鮮式山城の築城が国家的危機感の要因にあったとはいえ、西日本の汎地域的に展開する古代山城の築城の要因を全てこの「危機」対応への機能性に適応させ、あるいは掩用的に有事籠城（専守防衛）型と先入観的に見做してよいのか、城郭の原点に立ち返って検討する必要があるように思われる。少なくとも神籠石系山城に関しては史書への非記載をもっと積極的に評価し、史書記載の山城との対比や掩用とは異なる次元で検討する必要があるのではなかろうか。神籠石系山城遺跡を「城郭遺跡」と認知する以上、その評価にあたっては城郭本来の軍事的機能に立脚した検討と評価が必要であり、先に掲げた横山氏の指摘のとおり、各山城跡の戦略的・戦術的要因の必然性の析出からの再検討を迫られる時期に立ち至っていると思われてしかたない。

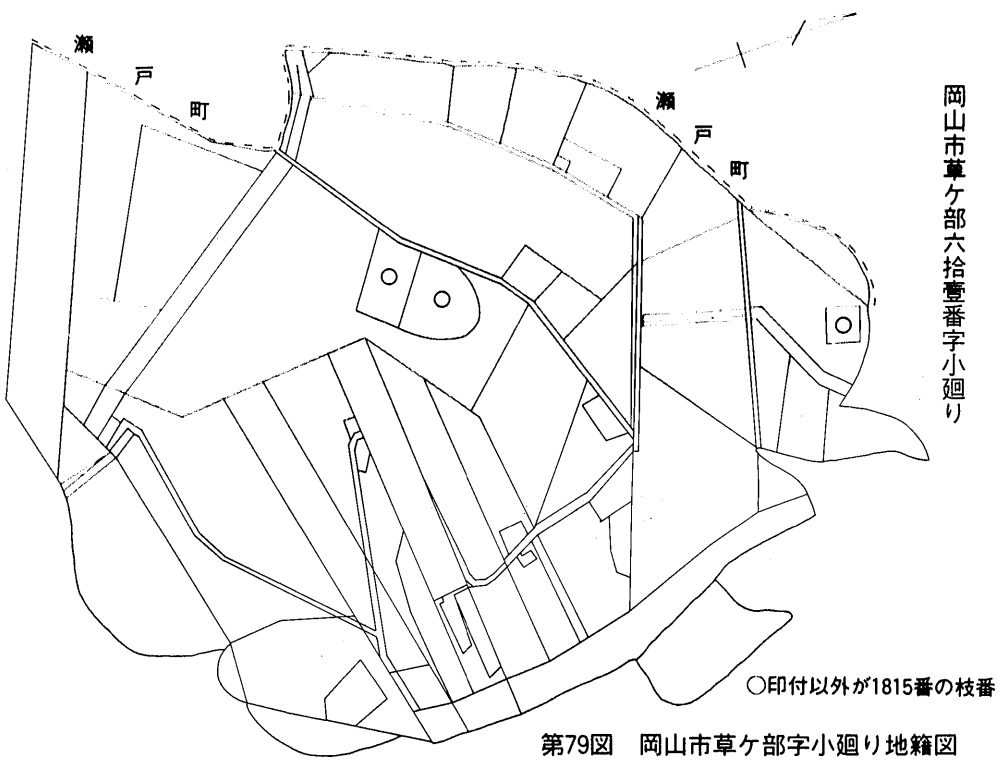
Ⅱ 大廻小廻山城跡の保存と整備

1．史跡指定

大廻小廻山城跡は此度の発掘調査の結果、神籠石系山城遺跡の一つであることが判明した。此度の調査自体がこの城跡の遺跡保存の問題を前提とした確認調査であった以上、今後、この城跡の保存対策が重要な行政的課題として新たな段階へ踏み出したものである。現在までに遺跡の確認のなされている13ケ所の神籠石系山城と７ケ所の朝鮮式山城の、計20ケ所の古代山城遺跡の内で国指定史跡でない遺跡は、城跡の全貌の確認にまで至っていない高安城跡と鞠智城跡、最近に確認された大廻小廻山城跡と永納山城跡の４カ所だけである。城跡の全貌の確認を見ている遺跡で史跡の未指定なのは２カ所だけということになり、この種の遺跡が全国的に国の史跡に指定されている文化財保護行政の状況の内にあっては、大廻小廻山城跡も国指定史跡にされて当然である。大廻小廻山城跡の保存は、全国的に数少ない古代山城の１例として同種の城跡の取扱いに準じて、国の史跡指定を図り、この種の遺跡の全国的な保存状況の一環に則って保護保存を図って行くのが望ましい施策である。従って、此度の発掘調査の成果を踏まえて、国の史跡指定の方針が文化庁サイドから早急に出されるように行政的努力をすることは勿論であるが、指定へ向けての地権者・地元市民・関係者等々の方々のコンセンサスを得る努力や、さらに遺跡が岡山市域から隣りの赤磐郡瀬戸町域に延びていることに対する行政的整合等々の、諸々の準備や前提作業が当面の課題となって来るであろう。

大廻小廻山城跡の史跡指定を図る場合、まず指定範囲の設定が問題となり、外郭施設（築成土段）の囲繞内側は城郭本体として当然に指定対象域となるが、その周辺を城山としての立地的要素観からどの程度取り込むべきかが議論のある所となる。発掘調査対策委員会の席上においてもこの点が一つの論点となり、仮りに周辺部に開発の及んだ場合に城跡間際まで削平されると山城の歴史的景観が喪失するので、理想的な指定範囲は占地する山塊全域を、少なくとも外郭施設の所在する山腹の山麓までとする発想も出されている。また、現実論として外郭線の外側の中腹付近までとか、外側数十mとする観点も出されている。実際問題として、地籍の境界が土段上部平坦面の外縁（肩部）に位置するため、城跡の内部である岡山市草ケ部字小廻りとその隣接部分をも含み込んだ指定域とならざるを得なく、城跡の北側から西側にかけては赤磐郡瀬戸町域に指定域が及ぶことになる。従って、大廻小廻山城跡の史跡指定域は二つの市・町に亙ることになり、指定に際しては該当地区の地籍の地番（筆）状態を考慮して範囲の設定にあたる必要があるであろう。ちなみに、岡山市草ケ部六拾壹番字小廻として登記されている地籍の総面積は429,725㎡であり、この内で土段の囲繞以内（城跡範囲）が約389,360㎡である。瀬戸町域に関しては未詳である。

いずれにせよ、大廻小廻山城跡の望ましい史跡指定は、山城の占地する景観保全を図ったうえでの城郭全域の保存が図られることにあり、従来の史跡指定域によく見られる遺跡の末端部即指定境界の状態から、より積極的に占地的環境を取り入れる必要があるであろう。



第79図　岡山市草ケ部字小廻り地籍図

2．史　跡　整　備

史跡指定の図られた後の大廻小廻山城跡の保存と活用は、当然に史跡整備を伴うものであるが、戦後の土地政策に基づく現状の土地使用状況を尊重する必要があり、現況の農地使用に伴う生活権が優先することは言うまでもないことである。こうした条件を踏まえたうえで、公有化の図れる箇所は公有化を図り、全体としてこの城跡を訪れる人々に古代山城、就中神籠石系山城のイメージを視覚的に訴えることのできる史跡整備の内容にする必要があるであろう。そのためには、城郭の様相と内容を的確に把握するため、整備に向けての本格的な発掘調査が不可欠の前提作業となるであろう。こうした史跡整備作業の前提条件の整備と準備を経た後に、本格的な整備作業への着手となるが、大廻小廻山城跡の象徴的遺構は一の木戸水門石塁であるので、この遺構の完全復原を図って顕示資料とすることが望ましい。また、広範囲な城郭内を有効に見学できる複数の周回径路の設定と利便施設の設置、また、一部の遺構の発掘検出状態のままでの展示、さらに復原やレプリカによる再構成に基づく城郭施設の展示等が現段階で整備の目安に提言される。特に城郭の本質とも言うべき城門施設・居住棟・備貯施設については此度の発掘調査では全く未検出なので、将来是非とも検出し、復原と再構成を図る必要があると思われ、さらに可能性とすれば資料館の併設も提言しておきたい。

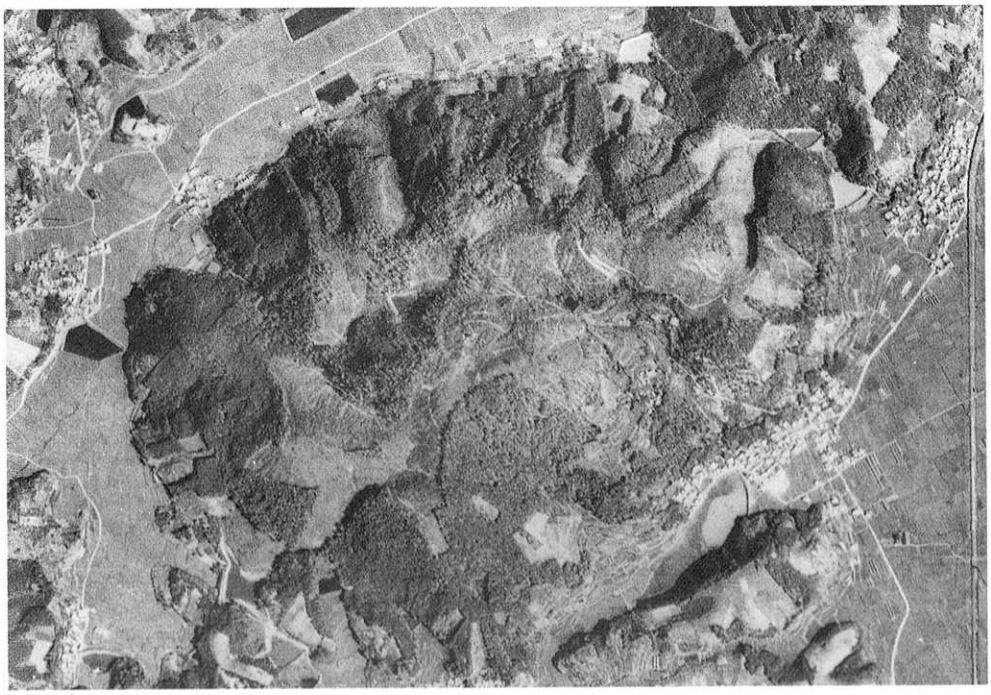
いずれにしても、大廻小廻山城跡の保存はこの種の遺跡の全国的な保存施策に則って、一日も早い国の史跡指定が待たれ、その後の史跡整備が期待される所であり、こうした方向への行政的前進がこの国家的といえる巨大遺跡の全体的保存には不可欠の施策である。そして、この遺跡が一般市民の文化財と古代史への関心の高揚の糧となり、さらには生きた教材としての学習や活用の場となることを念願して止まない。

最後にあたり、本報告書を作成するに際して、発掘調査対策委員の先生方から多くのご教示とご指導を頂き、列石等の石材の鑑定については岡山大学理学部の光野千春教授のご助成を頂いている。また、築地山の古絵図の解読には岡山県史編纂室の在間宣久主幹のご教示を頂き、岡山理科大学の亀田修一講師には古代山城に関し諸々のご示唆を頂いた。記して深謝の意を表する次第である。さらに、行政資料の取得や原稿の校正等にご助力下さった方々にも、感謝致したい。

（出宮徳尚）

註(1)　坪井清足「神籠石」『古代史発掘』6　1975　及び「神籠石について」『考古学ジャーナル』117　1976
(2)　高橋　護「鬼城山・築地山」『考古学ジャーナル』117　1976
(3)　西川　宏「瀬戸内地方の古代山城」『城』　1977
(4)　李　進熙「朝鮮と日本の山城」『城』　1977

(5) 葛原克人「鬼ノ城と小廻り山城」『吉備の考古学』 1987
(6) 門脇禎二「鬼ノ城をめぐる覚書」『鬼ノ城』 1980
(7) 阿部義平「古代城柵跡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』1 1982
(8) 斎藤 忠「神籠石雑考」『考古学ジャーナル』117 1976
(9) 鏡山 猛「神籠石調査の回顧」『考古学ジャーナル』117 1976
(10) 小田富士雄「朝鮮式山城と神籠石」『ゼミナール日本古代史』下巻 1980
(11) 樋口一成「高良山神籠石」『久留米市史』1 1981
(12) 佐田 茂「神籠石系山城の再検討」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
(13) 田辺昭三『よみがえる湖都』 1983
(14) 渡辺正気「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中巻 1988
(15) 拙稿「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』 1984
(16) 坪井清足「城柵の設置」『世界考古学大系』4 1961
(17) 註(1)
(18) 関野 貞「朝鮮美術史」『朝鮮の建築と芸術』 1941
(19) 葛原克人「古代山城の特色」『日本城郭大系』別巻1 1981
(20) 註(1)

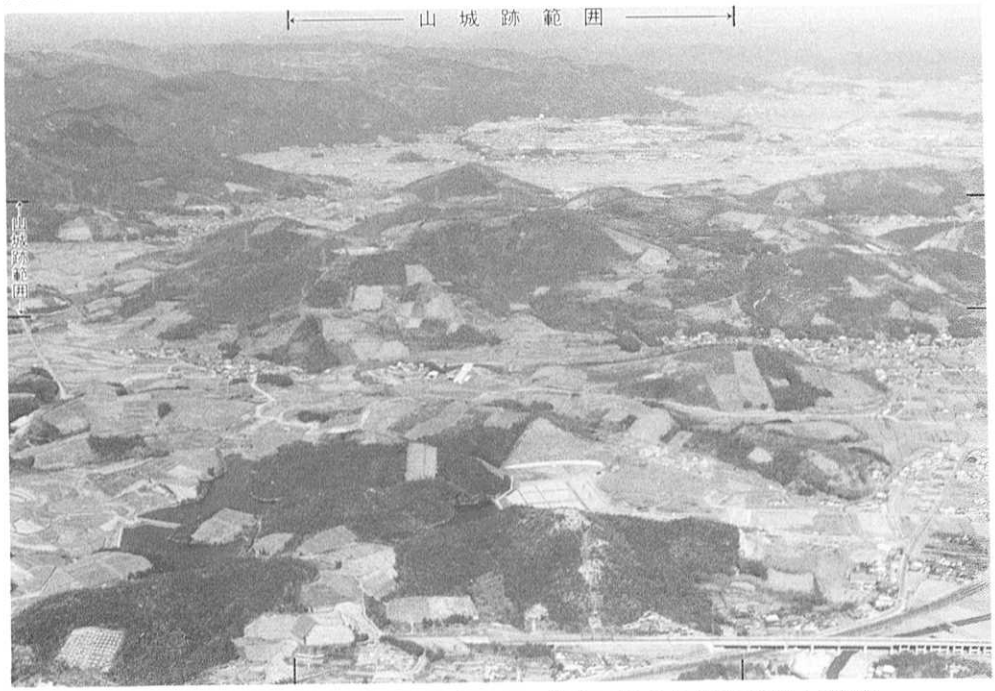


大廻小廻山城跡空中写真（1947年）



同　　上　（1984年）

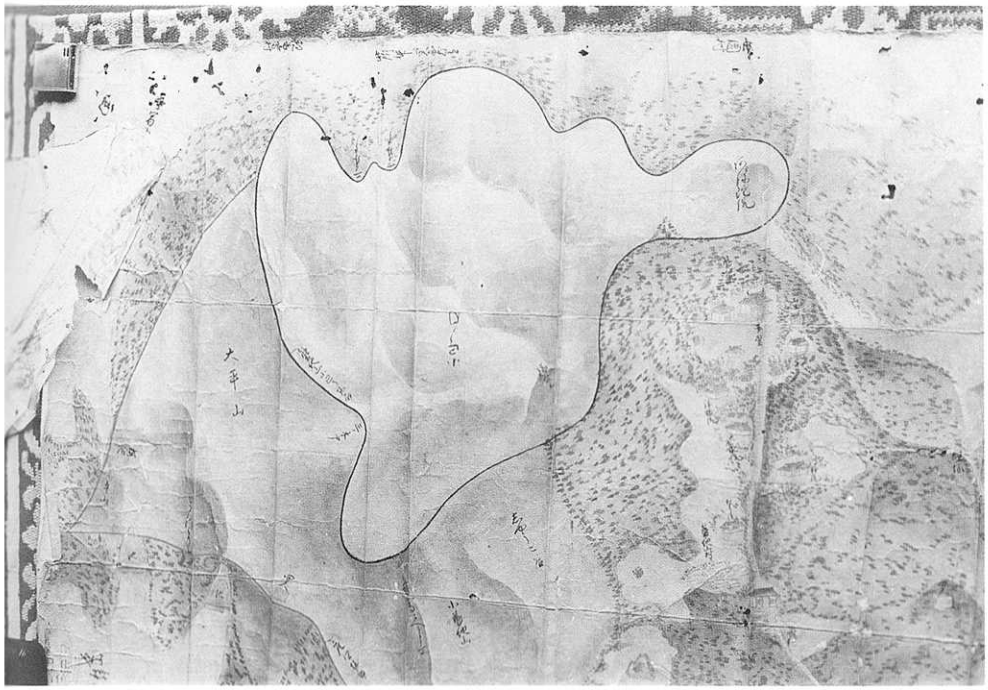
図版第２



大廻小廻山城跡遠望（南側上空から、背後は旧赤坂郡南西部の盆地）



同　　上　（西側上空から）



築地山古絵図



一の木戸石塁確認状態（1973年）

図版第 4



三の木戸石塁北側土塁（1974年）



同　　上



三の木戸石塁（1974年）



東谷側県道法面列石（F 地点）発見状態（1981年）

図版第 6



A 地点　段上平坦部のトレンチ



B 地点　版築盛土内の石群



Ｂ地点　段上平坦部のトレンチ群



Ｃ地点　段上平坦部のトレンチ（右奥に折部）

図版第８



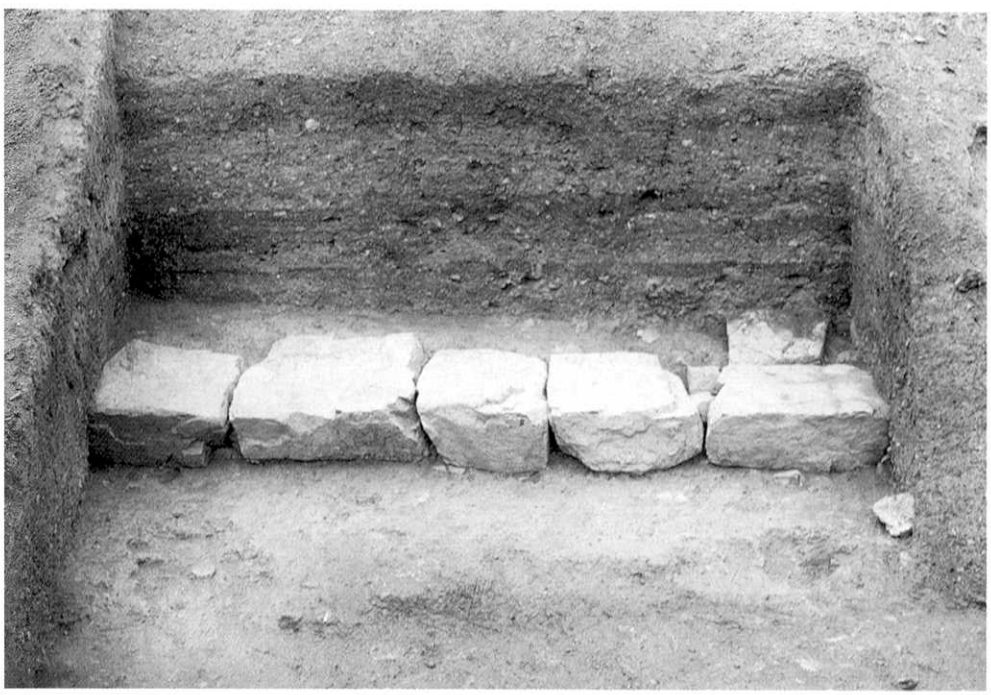
Ｃ・Ｄ地点間の外郭線折れ（左奥の突出部がＣ地点）



Ｄ地点　下段壁面の検出状況（右）と内部の列石（左）



D地点　第 2 トレンチ　列石と版築盛土



D地点　第 3 トレンチ　列石と版築盛土

図版第10



D地点　第１トレンチ　列石折部



D地点　第１トレンチ　列石を覆う版築盛土



D地点　上段のトレンチ群



D地点　第13トレンチ　鞍部へ向う上段裾の溝

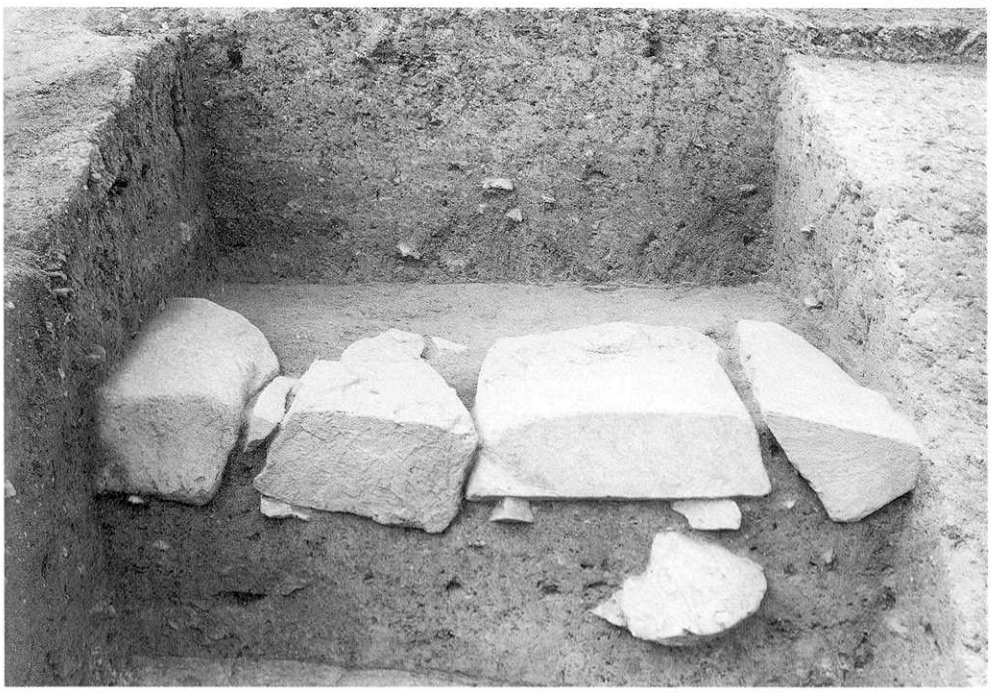
図版第12



E地点　第3トレンチ　集石



G地点　露出列石

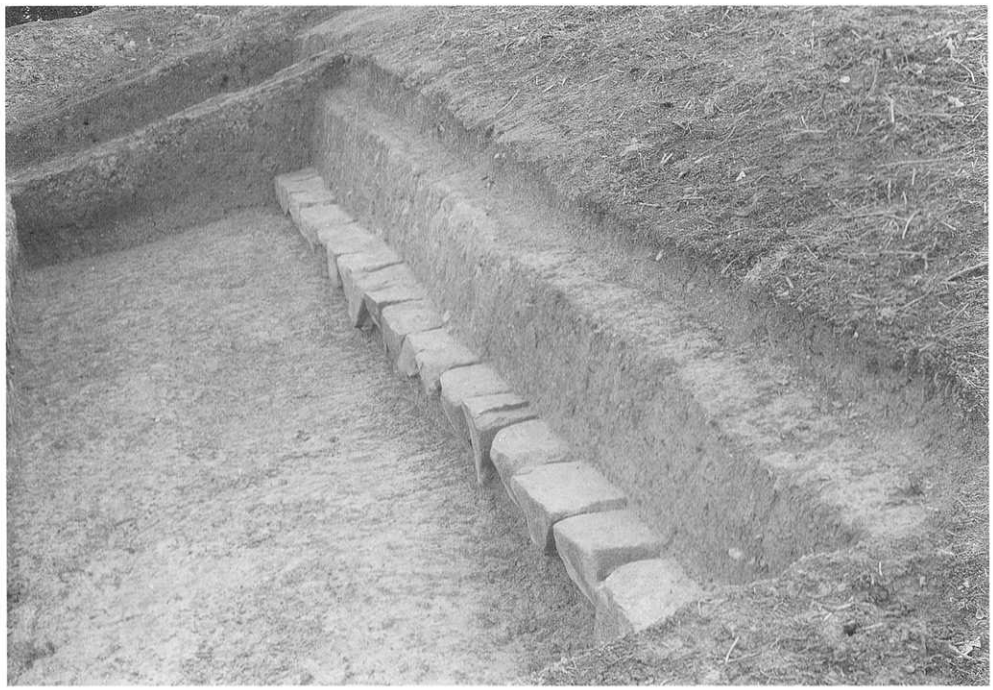


H地点　第１トレンチ　列石と版築盛土



H地点　第２トレンチ　列石を覆う版築盛土

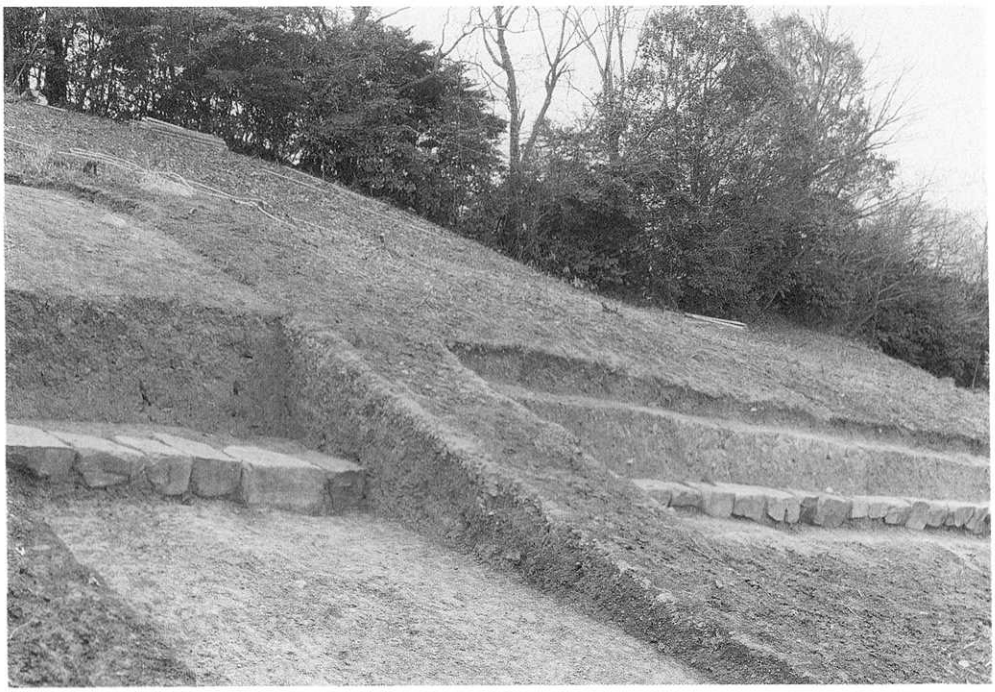
図版第14



H地点　第3トレンチ　列石



H地点　第4トレンチ　列石

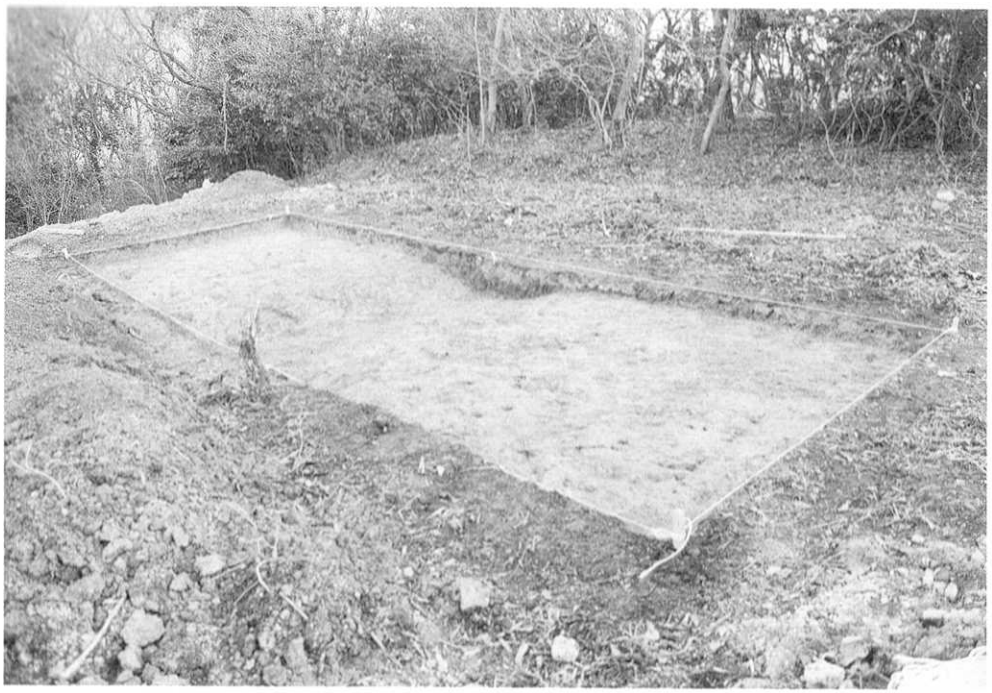


H地点　列石を内蔵する下段と背後の上段（防風林背後）



H地点　下段平坦部（手前）と角を描く上段（裾に溝）

図版第16



H地点　第８トレンチ　下段平坦部の溝



I 地点　第１トレンチ　地山削出しの上段壁面

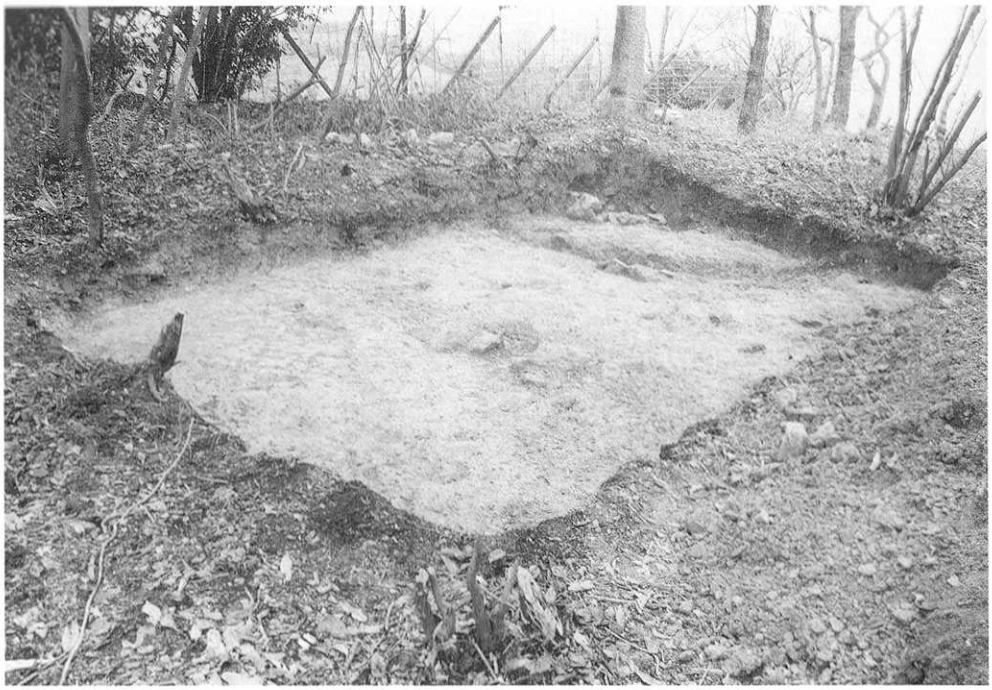


Ⅰ地点　第２トレンチ　段状部間の窪み（左手前）と地山削出の頂上平坦部



Ⅰ地点　第３トレンチ　頂上平坦部と土壙１

図版第18



J地点　第１トレンチ　頂上平坦部と弧状溝



K地点　第１トレンチ　石組

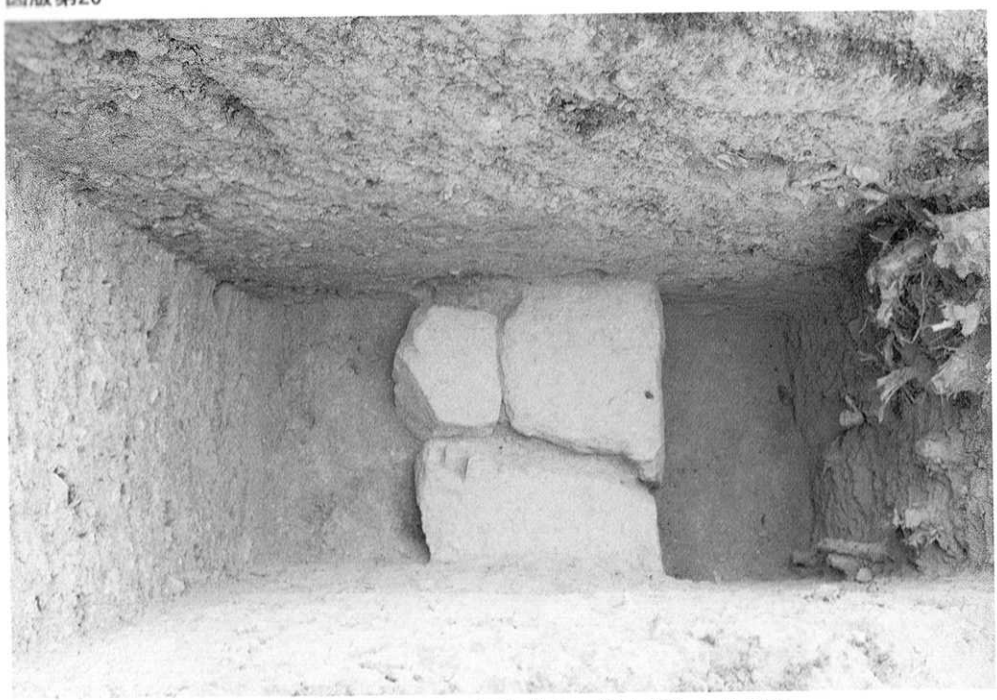


K地点　第1トレンチ　土壙1



L地点　西南部の下段壁面

図版第20



L地点　第1トレンチ　版築盛土に深く覆われた列石



L地点　第2トレンチ　列石折れ角とこれを覆う版築



L地点　第2トレンチ　列石折れ角と盛土端の置石



L地点　第6トレンチ　尾根稜線で岩盤を貫く列石

図版第22



L地点　第9トレンチ　列石折れ角とこれを覆う版築盛土（西から）



L地点　第9トレンチ　同　　上（北から）



二の木戸　石塁全景（東から）



二の木戸　背面石垣（基礎と背後に角石、西から）

図版第24



二の木戸　前面石垣西半部



N地点　段上平坦部トレンチ（右奥に折れ部）



一の木戸　石塁全景（左奥に列石、南から）



一の木戸　石塁全景（手前中央に列石、北から）

図版第26



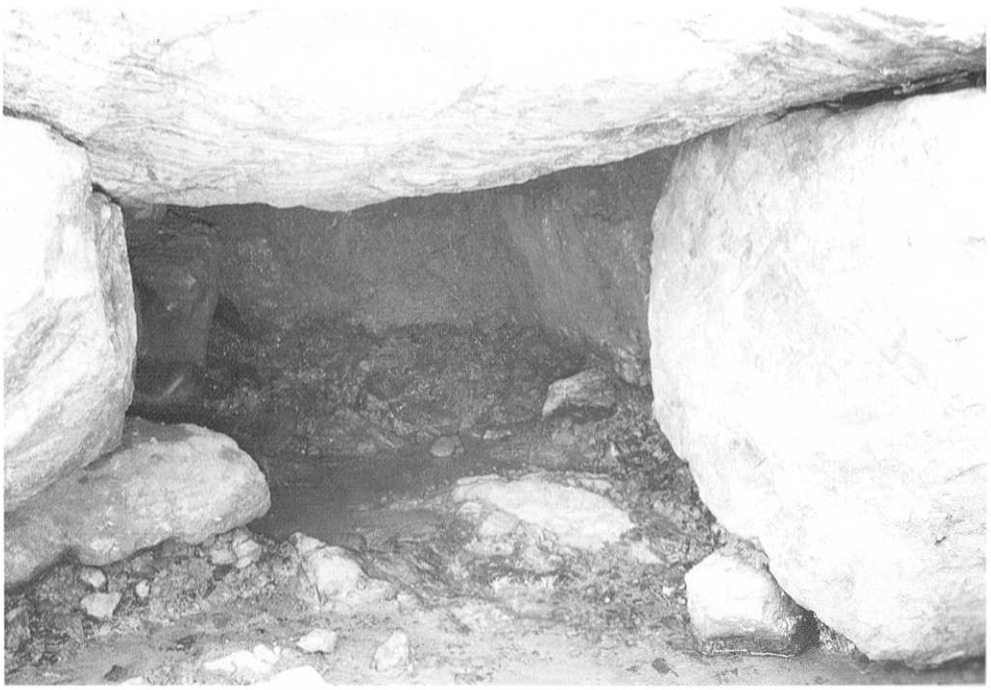
一の木戸　石塁前面石垣（中央に排水口）



一の木戸　石塁前面石垣の折部立面



一の木戸　石塁前面石垣の成層積み（左）と排水口（右）



一の木戸　石塁排水口内部

図版第28



一の木戸　石塁中央部背面石垣と吸水口（右手前）



一の木戸　石塁吸水口



一の木戸　石塁背面石垣の南端



一の木戸　石塁背面石垣の北端付近

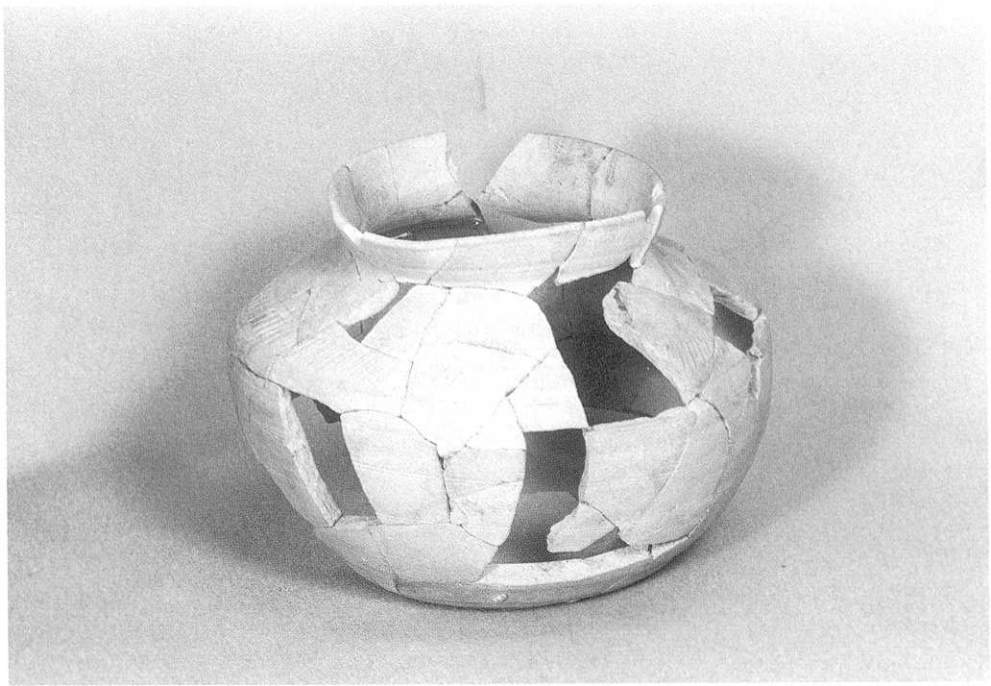
図版第30



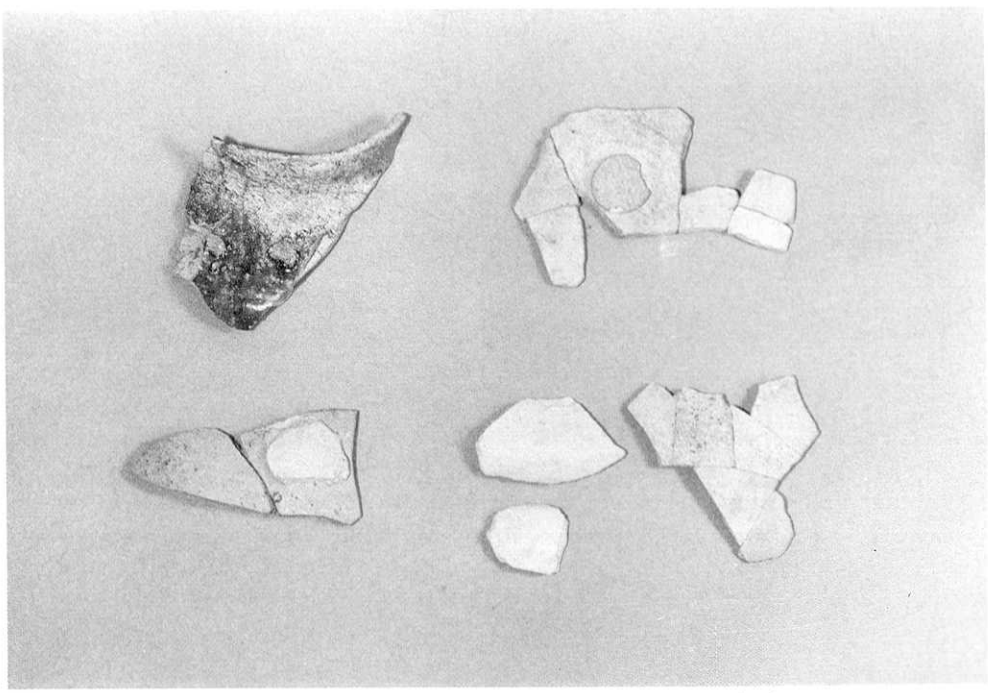
一の木戸　北側土塁部の列石と盛土内混石



一の木戸　第10トレンチ（手前）と石塁背面

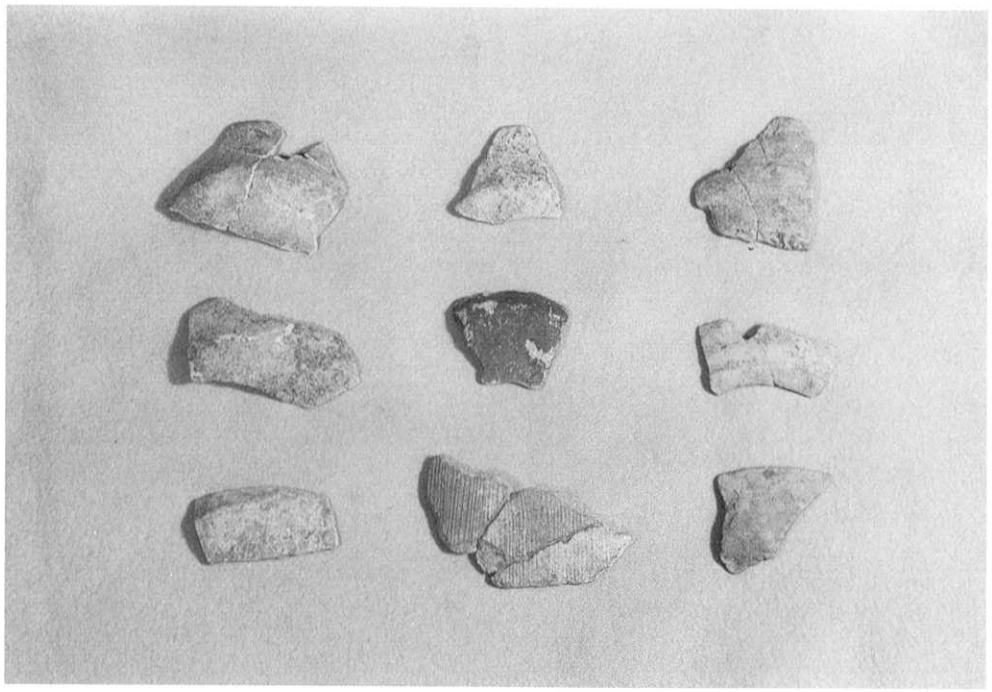


Ⅰ地点　最上段部出土の須恵器壺（５）

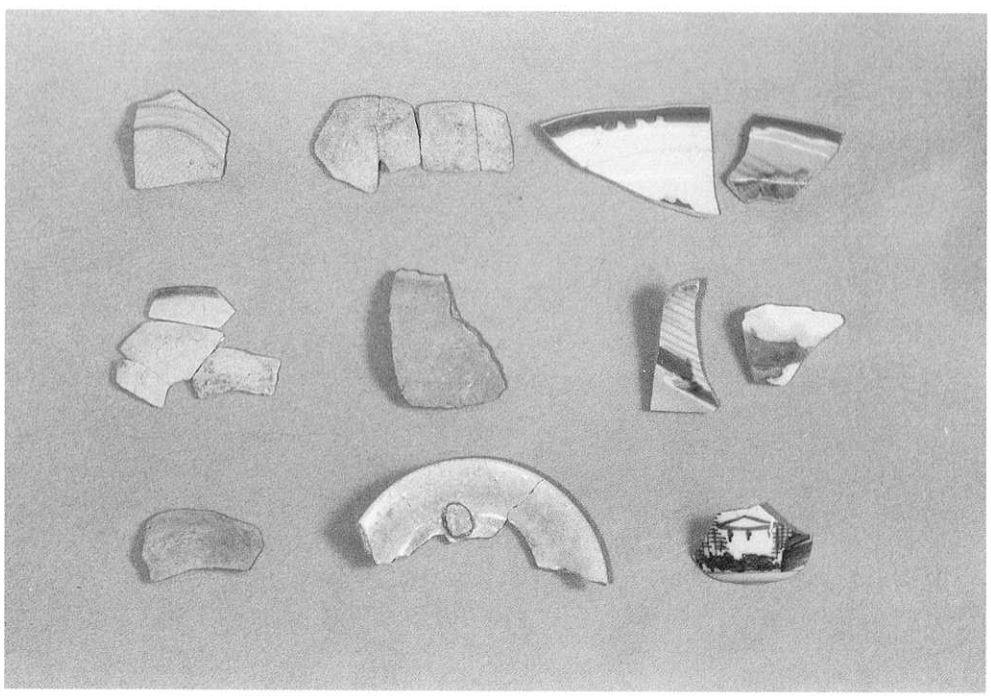


出土須恵器　左（１）.右上（４）.右下左（６）.同右（７）

図版第32



一の木戸　石塁背後の流土から出土した平安時代土器片



古代末以降の遺物

あ　と　が　き

大廻小廻山城跡は約20年前に確認された新知見の神籠石系山城であり、謎に包まれたこの種の山城の解明が此度の発掘に期待されていましたが、明確に判明したこともあれば、さらに謎の深まった事項もあるようです。

私は、各種の発掘現場に立つ都度にその奥行きの深さを痛感させられるとともに、文化財保護行政の任務の重要性を胆に銘じるところです。

此度の発掘調査は対策委員の先生方並びに国・県のご指導と、地権者各位のご理解さらには直接作業に携わって下さった方々などの、多くの関係者の皆様方のご協力により無事終了しました。風雪の中での作業を思い出しながら、ここに感謝申し上げます。

発掘調査の成果はこの報告書にまとめましたが、大廻小廻山城跡の今後の保存のために、また謎多き古代山城遺跡の調査研究、さらには我々の共有財産ともいうべき郷土の文化財に対する理解と認識を深める一助となることを願うものです。

最後に、此度の発掘調査並びに報告書作成に精力的なとりくみをされた文化課の関係職員の労を多とします。

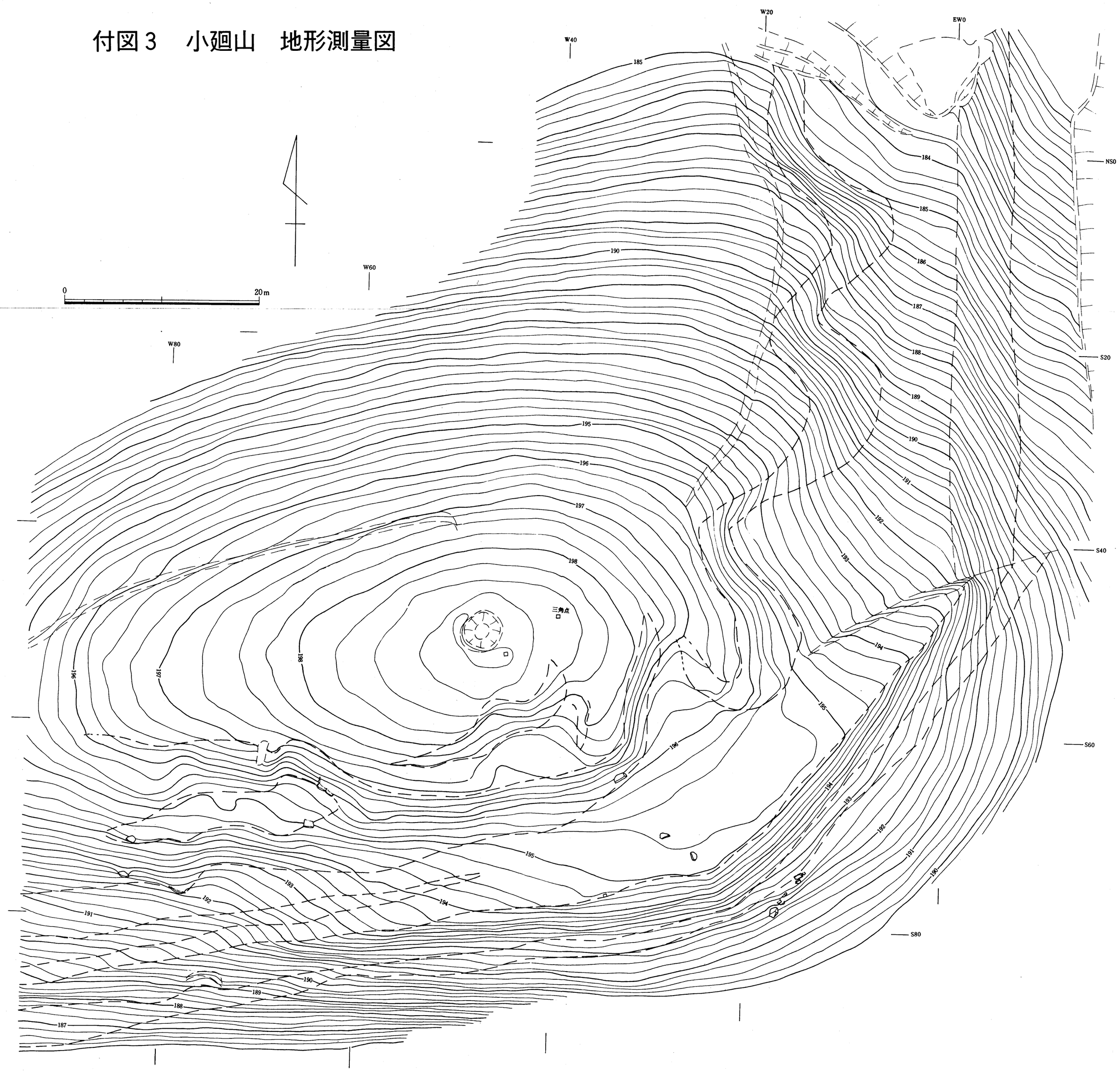
平成元年３月31日

岡山市教育委員会社会教育部
文化課長　八　木　正　春

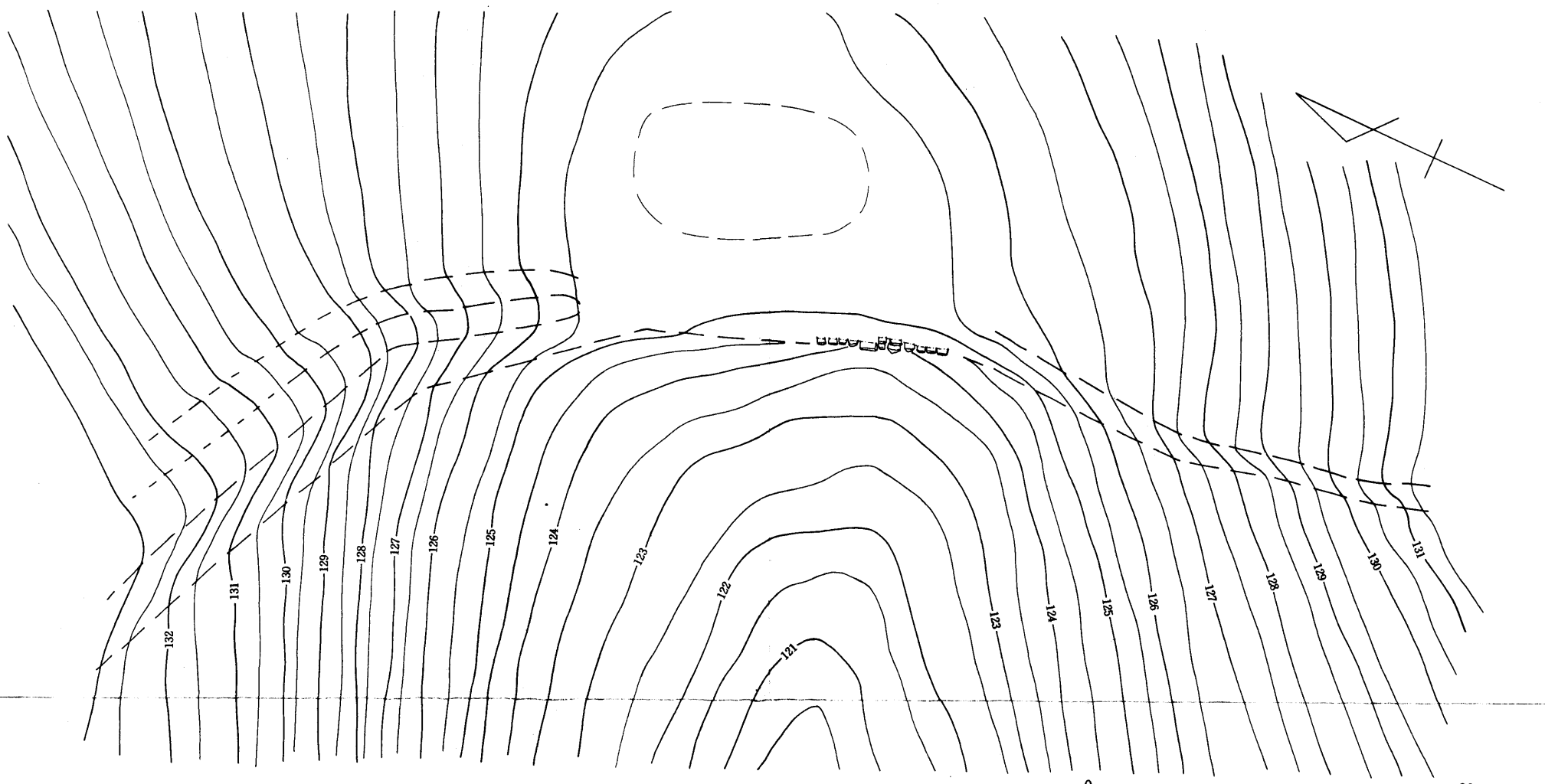
付図２　北谷頭　地形測量図



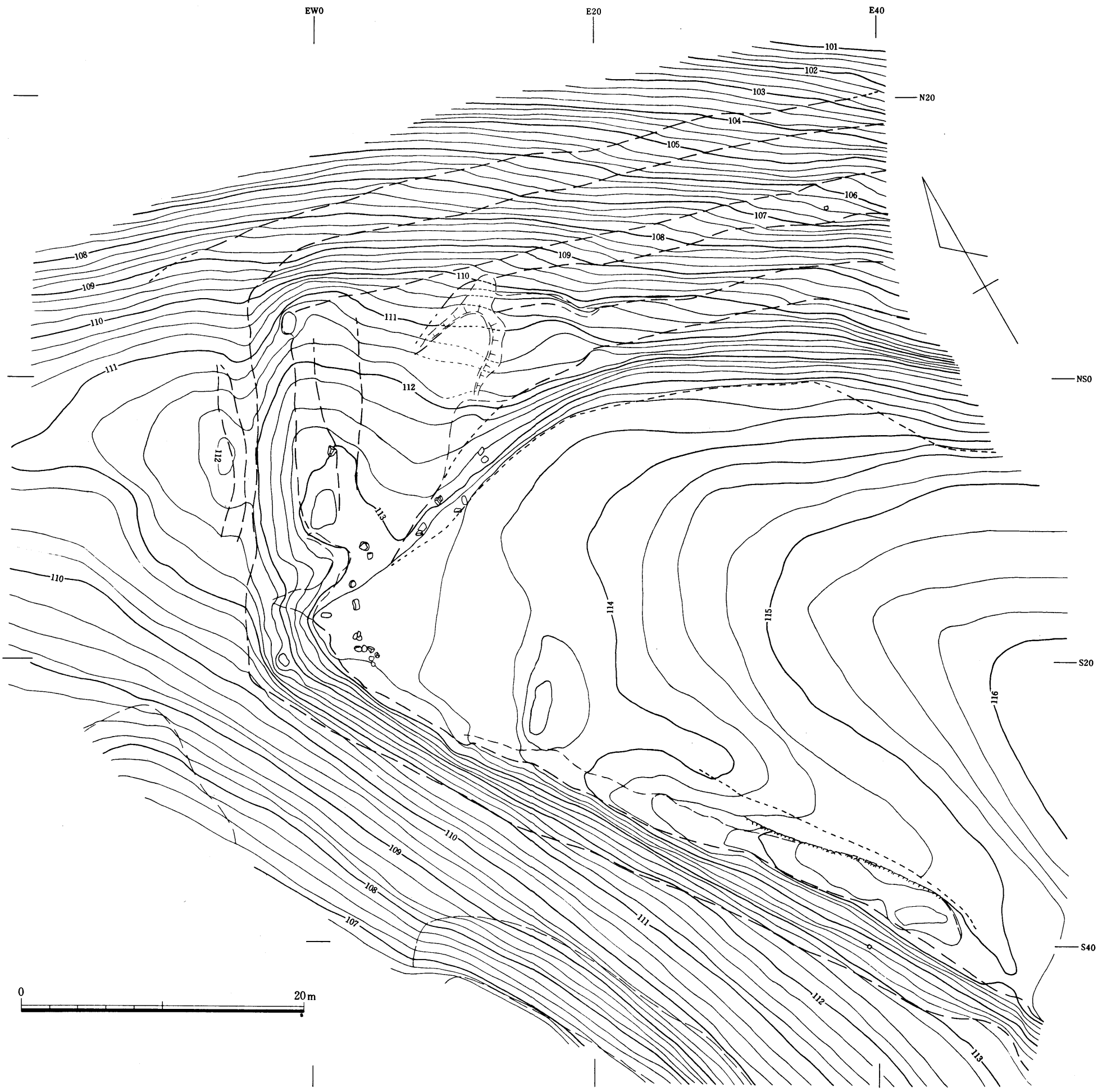
付図３　小廻山　地形測量図



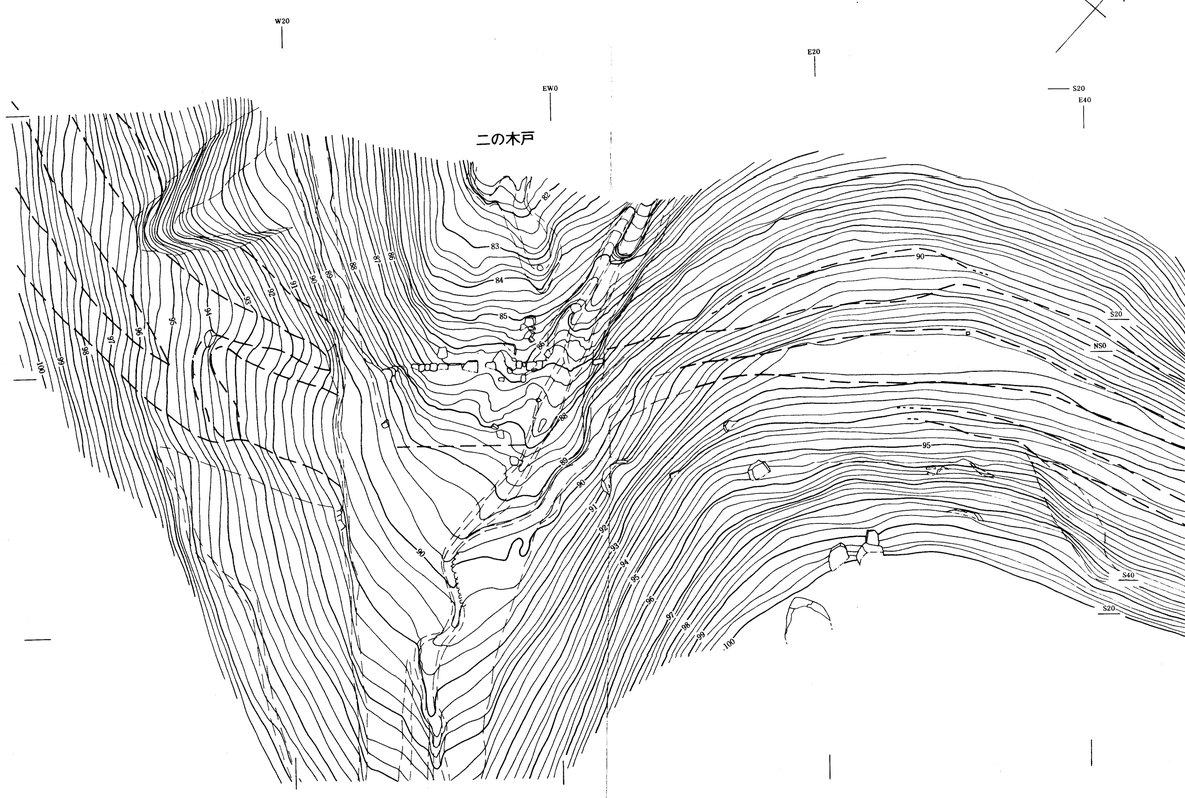
付図４　三の木戸　地形測量図 （国際航業作成１/200図を一部補正）

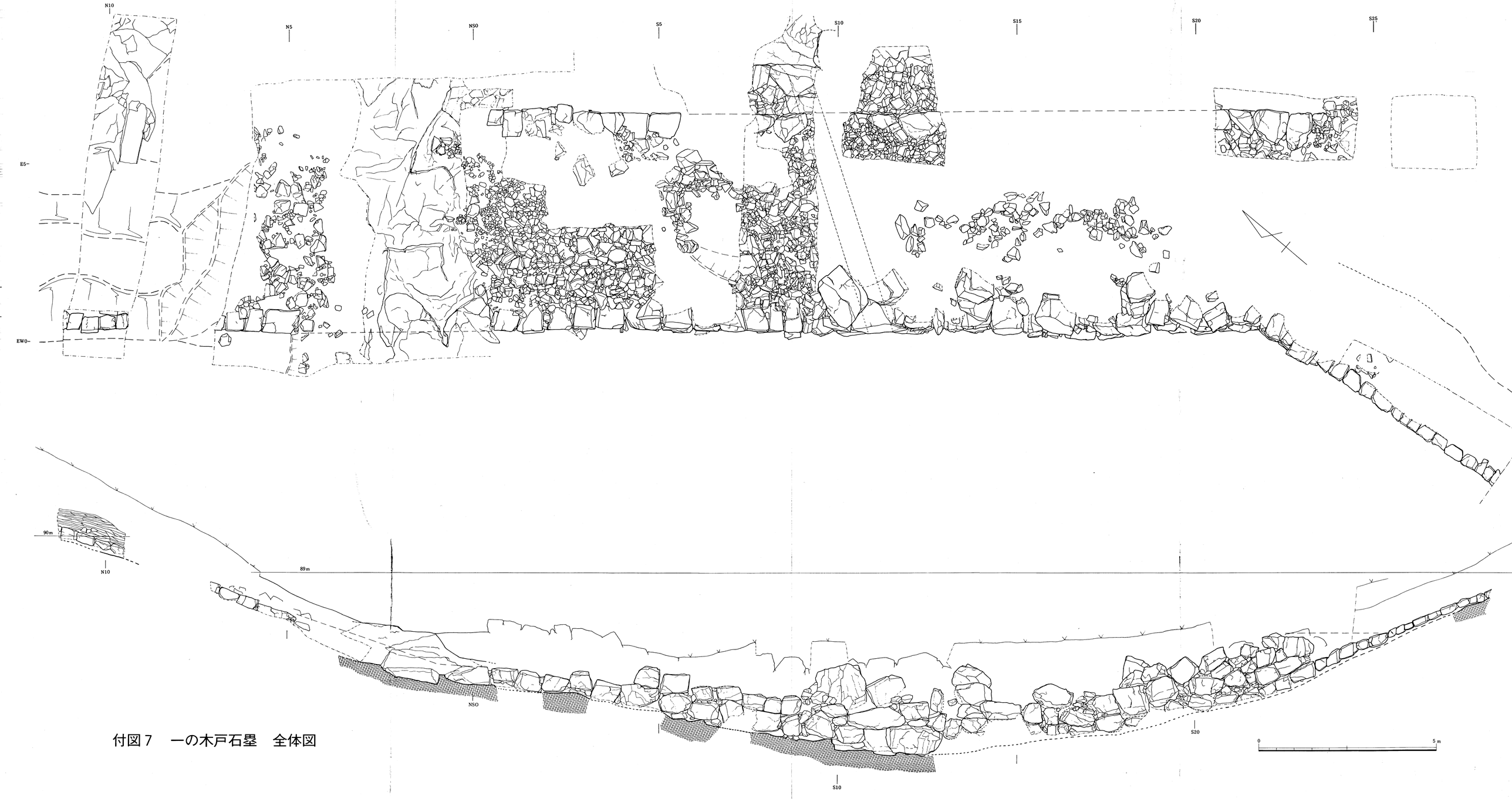


付図５　西中央尾根先　地形測量図



付図６　一の木戸・二の木戸　地形測量図





付図７　一の木戸石塁　全体図

大廻小廻山城跡発掘調査報告

平成元年３月31日発行

製作・編集　岡山市教育委員会文化課
発　　行　岡山市教育委員会
　　岡山市大供１－１－１
印　　刷　広和印刷株式会社